135.48-z-0 II
*00298814 *
0 II

J.J.ルソオ

懺悔錄

大井征譯

CONFESSIONS

三笠書房

5480

懺悔錄★

ジャン・ジャック・ルソオ

懺　悔　録

上　卷

大井征譯

三笠書房

The Title:
"CONFESSIONS"
The Author:
Jean Jacques Rousseau
The Date:
1766～1770

138.487 OII

上卷目次

第一部
第一卷……二
第二卷……四三
第三卷……八六
第四卷……一三二
第五卷……一七九
第六卷……二三八
註……二八〇
解説……二八六

298814

懺悔錄

上卷

Intus et in cute.

（底の底まで、皮膚の中まで）

――ペルシウス「諷詩」第三篇第三十節。

第一部

第一卷

（一七一二年――一七一九年）

私は今までに例のなかった、また將來も眞似手のないだろうような企てを抱いている。自然のままの、眞の姿の一個の人間を、私の同類諸君に示したいと思う。そして、その人間は、この私である。

私だけである。私は自分の心を感じている。そして、人間というものを識っている。私は自分の見て來た人間たちのうちの誰とも同じように作られていない。今まで實在した人間たちのうちの誰とも同じように作られていない、と敢て信じている。一層優れてはいないかもしれないが、少くとも異っている。造化の神が、私を投げ入れた鑄型を毀してしまったことが、好かったか悪かったか、それはこの書を讀み終った後でないと判斷がつかないことである。

最後の審判の喇叭はいつ鳴り響いても構わない。私はその時、この書を手にして、至高の審判者の前にまかり出よう。そして、昂然としてこう言おう。

「これが私のやった事です。考えた事です。過去の姿です。私は善も悪も同じく率直に語りました。悪いことは一つも隱しませんでした。善いことは一つも附け足しませんでした。そして、何か一寸した文飾を用いたところがあっても、それは記憶を失ったためにできた空隙を充たすためより他では決してありません。たしかに眞實だと分っていることは、これを眞實と堆量できましたが、虚僞だと分っているのに、それを眞實として推量したことは絶對にありません。私は自分の過去のありのままの姿を示しました。輕蔑すべき、下劣な人間であった時は、その通りに。善良で、寛仁で、崇高な人間であった時も、やはりその通りに示しました。永遠の存在たる神よ、私は自分の内部を、あなた自身がごらんになった通

りにさらけ出したのです。私の周圍に無數の同じ人間の群を集めしめたまえ。その人間どもをして私の懺悔を聽かしめ、私の卑劣さに嘆息せしめ、私の淺ましさに顔を赫らめしめたまえ。そして、次には人間たちの一人一人をして私と同じ正直さをもって、あなたの御座のもとに、その心をうち明けしめたまえ。また、ただの一人でも、あなたに向って『私はあの男よりも立派でした』と、敢て言い得るものがあれば、言わしめたまえ」と。

私は一七一二年、公民イザーク・ルソオと、女子公民シュザンヌ・ベルナールとの間に、ジュネーヴで生れた。[註1] 極めて僅少な資産を十五人[*1]の子女の間で分け、そのため、私の父の受取分はほとんど皆無に等しかったから、時計職で生計を立てるよりほかなかった。實を言うと、父はこの仕事では非常な腕利きであった。母は新教の宣教師ベルナールの娘で、[*2]父よりも豐かだった。利發でもあり美しくもあった。私の父が母と一緒になるまでには、なかなかの苦勞がいった。二人の戀愛はほとんど生れるとすぐからはじまっていた。八つか九つの頃から、毎晩連れだってラ・トレイユあたりを散歩した。十歳になると、もう互に離れられなくなった。古い馴染から生ずる感情は、共感・魂の一致によって、二人の胸の中に固められた。生れつき愛情深く、物に感じ易い二人は、相手の中に自分と同じ意向が見出せる時機を待っていただけだった。いや、むしろこの時機が二人を待っていたと言うべきであろう。こうして、二人は、意氣投合した。運命は二人の情熱に背くように見えたが、却ってそれを益々唆るばかりであった。戀に惱む若者は、愛する女を手に入れることができず、悲しみのために寳れ果てた。女は私を忘れてくれと、男に旅をすすめた。男は旅に出たが利目がなく、前よりも一層戀に燃えて歸って來た。戀しい女は相變らず優しく忠實だった。この試煉があってから後は、一生をお互に愛し合うことしか殘されなかった。二人はそれを誓った。そして、天は二人の誓約を祝福したのである。[*3]

母の弟ガブリエル・ベルナールは、父の姉妹の一人を戀した。しかし、女は自分の兄弟がガブリエルの姉妹と結婚するという條件でなければ結婚を承諾しなかった。戀が萬事を解決し、二組の結婚が同じ日に行われた。[註2] こうして、私の叔父は

*1 十五人でなく十四人。
*2 娘でなく姪。
*3 結婚式は一七〇四年六月二日。夫三十三歳、妻三十一歳。

私の叔母の夫となった。だから、二人の間の子は二重の意味で私の從兄弟に當るわけである。一年の後には兩家に一人ずつ子供が生れた。それから、また別居しなければならなくなった。

叔父ベルナールは技師だった。ユージェーヌ[*1]大公の下に仕えて、オーストリヤ帝國とハンガリーに行った。ベルグラードの攻圍戰[*2]で名を揚げた。父は、私のただ一人の兄が生れた後、前から呼ばれていたコンスタンチノープルへ行き、その地の宮廷の時計師となった。父の不在中、母の美貌と氣性と才能[註3]は人々の尊敬をひきよせた。フランス公使ラ・クロジュール氏[*3]は、母に最も熱烈な尊敬を捧げた人々のうちの一人であった。氏の情熱は非常に激しかったようである。というのは、それから三十年も經った後に、氏が母のことを私に話しながら、いかにも沁々した樣子をしたのを、私は見て知っているからである。母は身を守るためには、貞操に優るものを持っていた。つまり、夫を心から愛していたのである。母は夫の歸りをしきりに促した。父はすべてを棄てて歸って來た。[*4] 私はこの歸國の痛ましい結實であった。十ヵ月後に虛弱で病身な私が生れた。私は母の生命を犧牲にした。[註4] そして、私の誕生は私の不幸のうちの最初の不幸であった。

父がこの死をどういう風に堪えたかは私の知るところではないが、しかし、これをどうしても諦めきれなかったことはよく知っている。父は私のうちに亡き妻を見るような心持がしていた。しかも、私が父から母を奪ったことは忘れられなかったのである。父が私を抱いてくれるたびに、その吐息や痙攣的な接吻を通じて、何かやるせない哀惜の情が、その愛撫にまじっているのを私は感じないことはなかった。このために、父の愛撫には益々情愛がこもる一方であった。私に向って、

「ジャン・ジャック、お母さんの話をしようよ」と、言うと、私は、

「うん。じゃアまた泣くんだね、お父さん」と答えるのであった。この言葉だけで、父の眼には涙が溢れた。

「あゝ！」と、父は呻きながら、「お母さんを返しておくれ。おれを慰めておくれ。お母さんがおれの心にあけた穴を埋めておくれ。お前がおれ一人だけの子だったら、こんなに可愛がりゃしない」と、言うのであった。父は母を失ってから四十年後に、二度目の妻の腕に抱かれて死んだ。しかし、その時でも、最初の妻の名を口にし、その面影を心の底に秘めていた。

こういう人々が私の生みの親であった。二人が天から受けたあらゆる授り物のうち、ただ一つ私に遺してくれたもの

は、感じ易い心である。しかし、この心は父母の幸福を作り、私の生涯のあらゆる不幸を作ったのである。

私はほとんど死にかかって生れた。丈夫になる望みはとてもなかった。その上、或る疾患の崩しをもっていた。[註5] それは年と共に昂じ、今では時々弛むことはあっても、ただほかの苦しみ方でもっとひどく苦しむために弛むようなものである。父の姉妹の一人で、氣だての優しい、よく氣のつく老孃[註6]がいて、この人が面倒をよく見てくれたので、私の生命は助かったのであった。今、これを書いている時も、この人はまだ存命している。八十歳にもなって、年下の、酒に身體をそこねた夫の世話を見ているのである。親愛な叔母よ、私はあなたが私を生かしてくれたことを赦して上げよう。そして、私の生れたてに、あなたが惜しみなく與えてくれた手厚いお世話の返禮を、あなたの生涯の終り頃になっても、まだ私にすることができないのを、沁々情なく思います。私の乳母だったジャック・クリーヌも、まだ無病息災で存命している。生れた時に私の眼を明けてくれた手は、死ぬ時にもそれを閉じてくれるかも知れない。

私は考える前にまず感じた。それは人間の通性である。私はこのことを他人よりも一層多く經驗した。五六歳の頃までは、どんなことをしたか憶えていない。どうして字が讀めるようになったかも知らない。ただ憶えているのは、初めの頃の讀書と、それが自分に及ぼした影響だけである。この時期以後、自分のことは中斷なく意識している。母は小說類を遺していた。父と私は、夕食後に小說を讀むようになった。最初はただ面白い本によって字を讀む練習をするということだけが目的だった。ところが、やがて、段々興味が強くなるにつれて、二人は代る代る立てつづけに讀み、終にはこの仕事で幾晩も過ごすようになった。一册の終りに來ないと、やめることができなかった。時には、朝になって、燕の聲を耳にした父が、いかにも照れくさそうに、

「さァ、もう寢ようや。お父さんはお前より子供だな」なぞと言うことがあった。

私は、こんな亂暴な方法で、僅かの間に、自由自在に讀んだり理解したりすることができるようになったばかりでな

*1 サヴォアの勇將。フランスに背き、オーストリヤ軍と共に歷戰し屢々武勳を樹てた（一六六三年―一七三六年）。
*2 大公がトルコ軍を破った戰。一七一七年。
*3 この人のことは後に第五卷、第七卷に出て來る。
*4 一七一一年九月。

く、情慾ということについても、年齢にしては比べものがない程の知識を得た。物事の理窟は少しも分らないくせに、人の感情のことなら何でももう識っていた。何一つ理解はできないのに、すべてを感じとっていた。[*1]

このような取りとめのない情緒を、次から次へと經驗したが、それは、まだ私の持っていなかった理性に惡影響を與える筈もなかった。しかし、そのような情緒は全く別種の理性を形作り、人生についての奇異な、ロマネスクな觀念を私に與え、經驗も省察も決してこれを矯正できなかったのである。

（一七一九年――一七二三年）

小說は一七一九年の夏と共に終った。次の冬は別の物になった。母の圖書は盡きてしまったから、母の父の圖書で、われわれに讓られていた分を賴みとした。幸いなことに、その中には何册かの良書があった。それもその筈で、いやしくも新教の宣教師、しかも當時の風として、學者でもありまた趣味と才智の人でもあった者によって蒐められた圖書だったのである。ル・シュウール著[*2]「教會及び帝國の歷史」、ボッシュエ著[*3]「世界史論」、プルタルコス著[*4]「英雄傳」、ナニ著[*5]「ヴェネチヤ史」、オヴィディウス著[*6]「變形譚」、ラ・ブリュイエールの諸著[*7]、フォントネル著[*8]「世界」と「死者の對話」、その他モリエール[*9]のもの數卷、以上のような本が父の居間に運びこまれた。そして、私は毎日、父が仕事をしている間、これらを父のために讀み聞かせた。私はこの事に年齢にしては稀有な、また恐らく例を見ないくらいの興味を持った。とりわけ、プルタルコスは私の愛讀書となった。これを絶えず讀みかえす樂しみは、小說熱を少し醒ました。そして、やがてオロンダートやアルタメーヌやジュバ[*10]なぞよりも、アゲシラスやブルトゥスやアリスティデス[*11]なぞの方が好きになった。このような興味深い讀書、それに關して父子の間に交される會話、そうしたものから、あの自由と共和の精神が、束縛と屈從を辛抱していられないあの端倪すべからざる高潔な性格が、形作られたのである。そして、私は一生の間、この高潔な性格を發揮するに最も不適當な境遇にあって、絶えず懊惱を續けたのである。始終ローマやアテネのことに氣を取られ、その地の偉人たちとまるで一緒に生活しているような氣分になり、また私自身も、一共和國の公民として生れ、祖國愛を最大の熱情としていた父の子であったから、父に倣ってそういうものに心を燃やし、ギリシヤ人かローマ人になったつもりでいた。自分の讀んだ傳記中の人物になった。不撓不屈・大膽不敵の事蹟に心を打たれ、それを朗讀する時に

は、眼は輝き、聲は激した。或る日、食卓でスカエヴォラの冒險の話をした時、[註7] 私がスカエヴォラの動作を見せようとして、煖爐の方へ進みより、片手を差し上げたのにはみんなびっくりしたものである。

私には七つ年上の兄があった。[註8] 兄は父の職を習っていた。みんなが極端に私だけを可愛がるので、兄の方は自然と疎略にされた。これはよくないことと思う。兄の教育にもこの疎略の跡が見えた。まだ本當の放蕩者になる年齢でもないのに、放蕩の味を覺えた。兄は別の親方の家に預けられたが、父のところに居たときと同じように度々拔け遊びをやった。私はほとんど兄の顏を見たことがない。兄に親炙したなぞとはとても言えない。それでも、兄を心から慕っていたし、兄の方も、不良少年にしては精一杯のところ私を可愛がってくれた。ある時、父が怒って、手ひどく兄を懲らしめたことのあったのを憶えている。私はいきなり二人の間に分けて入って、兄を固く抱きしめた。こうして自分の身體で兄を庇い、兄の受ける折檻を私が受けた。私がこの姿勢でいつまでも頑張ったために、父はとうとう兄を赦してくれた。私が喚いたり泣いたりしたために父が閉口したのか、兄より私の方をひどい目に遭わしたくないと思ったのか、それは分らない。兄は、とうとう非常な不良になってしまって、家出をし、やがて全然行方をくらました。その後しばらくして、ドイツにいることが分った。ただの一度も手紙をくれたことがなかった。それからはもう消息も分らなくなった。このために私は一人息子に

*1 異本。「…すべてを感じとっていた。そして小說の中の主人公たちの架空の不幸が、幼年時代の私から搾った涙は、私自身の不幸が私に流させた涙よりも、百層倍も多かったのである」。

*2 フランスの畫家（一六一六年―一六五五年）。

*3 フランスの宗教家。「世界史論」はその代表作（一六二七年―一七〇四年）。

*4 ギリシヤの傳記作者。「英雄傳」はルソオ生涯の愛讀書であった（五〇年?―一二〇年?）

*5 イタリヤの歷史家、外交官（一六一六年―一六七八年）

*6 ローマの代表的詩人。「變形譚」は神話傳說のあらゆる變形轉身の物語を蒐めたもの（前四三年―一八年）。

*7 フランスの作家。「人さまざま」は人間の種々の性格を別抉した書として人口に膾炙している（一六四五年―一六九六年）。

*8 フランスの文學者、哲學、科學の通俗化に資する書を多く公にした。

*9 フランス最大の喜劇作家（一六二二年―一六七三年）。

*10 いずれも小說の主人公の名。

*11 いずれも古代歷史上の著名人物の名。

なったわけである。

この可哀そうな少年は疎略に育てられたが、その弟はなかなかそうではなかった。周圍のものからは偶像のように大切にされ、また、これは更に珍しいことだが、決して甘やかされた子としてでなく、鐘愛された子として常に扱われた私は、幼時を通じて、王子も及ばないほど、心をこめて育てられた。父の家を離れるようになるまでの間、ただの一度でも、一人で戸外に出て、他の子供たちと往來で遊ぶことを許されなかった。また、氣まぐれな氣質というものは、往々にして生れつきに歸せられるが、實はそのすべてはただ教育のみから來るものである。從って、私にあっては、そのような氣まぐれな氣質のどれ一つとして、人から抑制されたり、滿足させられたりする必要はなかったのである。私には年齡相應に色々な缺點があった。おしゃべりで食いしんぼうで、時にはまた嘘もついた。果物や飴玉や食べ物を盜んだこともあったかもしれない。しかし、惡事を働いたり、損害を與えたり、他人に迷惑をかけたり、哀れな動物を虐待して面白がったりしたことは決してなかった。尤も、ただ一度だけ、近所のおかみさんの一人で、クロさんというのが說教を聽きに行った留守に、そこの鍋の中へ小便をしたことを覺えている。實を言うと、今でもこれを思い出すと吹きだしてしまうのである。というのは、このお婆さん、根は人が好いのだが、この上もない口やかましい女であったのだ。以上で私の幼時の惡戲の全部を簡單に正直に物語ったことになる。

眼に見るものと言ったら優しいお手本ばかり、自分のまわりはと言えば世にも善良な人々ばかりという工合であったから、どうして私が惡い人間になるようなことがあったろうか。父・叔母・乳母・親戚・友達・隣人、すべてまわりにいるものは、實を言うと私の言うことはなかなか聽いてはくれなかったが、しかし、可愛がってくれた。そして私の方も同じように皆を愛した。私は意慾を唆られることも、これを拒まれることもほとんどなかったため、ことさらに意慾を持つ氣も起らなかった。誓って言うことができるが、私は、或る親方のところへ奉公に行くようになるまでは、氣まぐれというものがどんなことであるか、全く知らなかったのである。父の傍にいて讀んだり書いたりして過ごした時間と、乳母が散歩につれて行ってくれた時間のほかは、いつも叔母と一緒にいて、叔母の傍に立つか坐るかして、刺繍するのを見たり、歌を歌うのを聞いたりしていた。私にはそれがうれしかったのである。叔母の朗かさ、優しさ、氣持のいい顏つきなぞが、強い印象を殘していて、今でもその樣子、眼つき、物腰なぞ、眼の前に見るようである。情愛のこもった言葉の端々

まで憶えている。どんな衣服を着て、どんな髮形だったかも言えるし、黑い髮が、その頃の流行で、兩方のこめかみのところで卷毛になっていたことも忘れていないのである。

音樂に對する趣味、と言うよりむしろ熱情は、この叔母に負うものと確信している。尤も、これはずっと後年にならなければ、私のうちに發達しなかった。叔母は歌謠や小唄を驚くほど澤山知っていて、とても甘い細い聲でそれを歌った。この人竝すぐれた獨身婦人の魂の朗かさは、夢想とか哀愁とかいうものを、この人からも、またこの人をとりまくすべてのものからも、遠ざけていた。その歌う歌の魅力は、私にとって非常なものであったから、そういう小唄の多くのものがいつまでも記憶に殘っていたばかりでなく、その記憶を失った今日でもなお、私の心に浮んで來る。子供の頃から全く忘れ果てていたものも、年を取るに從って、名狀もできぬ魅力をもって、思い浮べられるほどである。心痛と苦難に蝕まれたこの老いぼれの私が、嗄れた顫え聲でこのような歌謠を呟きながら、時々、子供のように思わず涙を流してしまうようなことがあろうとは……とりわけ一つの歌で、節の方はすっかり憶えているのがある。ところが、後半の歌詞は、尾韻だけはどうやら思い出せるが、ほかのところは、いかに努力しても、今にいたるまで、どうしても思い出せない。その最初の部分と、殘りの分で覺えているだけを書いてみると、次のようである。

Tircis, je n'ose　　（わたしゃ、いやだよ）
Ecouter ton chalumeau　　（その笛聞くのがさ）
Sous l'ormeau:　　（楡の木蔭でさ）
Car on en cause　　（噂をしてるよ）
Déjà dans notre hameau.　　（村の衆がさ）
……　　（何とかが、何とかよ）
…… un berger　　（何とかアン・ベルジェ）
…… s'engager　　（何とかでサンガジェ）
……sans danger;　　（何とかサン・ダンジェ）註9
Et toujours l'épine est sous la rose.　　（薔薇には棘があるからよ）

私はこの歌の何處に私の心を動かす魅力があるのか探してみる。それは、自分にはわけの分らない一つの氣まぐれであろう。しかし、涙で遮られることなしにこの歌を最後まで歌うことは、私にはどうしてもできないのである。この歌の歌詞の殘りを誰かがまだ知っているかも知れないと考えて、私は何度となくパリへ問い合せの手紙を書こうとした。しかし、この歌を思い出すことの樂しみは、なつかしい叔母シュゾン以外の人がこれを歌ったという證據が出れば、その幾分かはきっと消え去ってしまっただろうと思われる。

以上が、私が人生へ踏み出した頃の最初の感情であった。このようにして、非常に氣位が高いと共に非常に愛情深いこの心が・懦弱ではあるがしかも不屈なこの性格が、私のうちに形作られ、あるいは現われはじめたのであった。このような性格は、常に弱氣と強氣の間を・放逸と德行の間を往復し、どこまでも私を自己撞著させ、私を禁慾と享樂と、快樂と節制と、そのどっちつかずの人間にしてしまったのである。

このような教育の進行は、或る一つの出來事によって中斷された。そして、その出來事の結果は、それから後の私の生涯に影響を與えることになった。父が、フランスの陸軍大尉で、國會議員に緣者を持っていたゴーチエ氏という男と喧嘩をしたのである。横著で卑怯未練なこのゴーチエは、鼻から血を出した。そこで、その仕返しに、父が町なかで劍を拔いたと言って告訴したのである。監獄に入ることになった父は、告訴人も、法律通りに自分と同樣監獄へ入れてもらいたいと頑張った。これが容れられなかった父は、名譽と自由が危くされるまで讓歩するよりも、むしろジュネーヴを去って、生涯を他國に亡命する方を好んだのである。[註10]

私は當時ジュネーヴの築城工事に雇われていた叔父ベルナールに後見されて、後に殘った。叔父の長女は亡くなっていたが私と同じ年の息子が一人あった。[*1] 私たちはボセー[*2]の新教宣教師ランベルシエ[*3]の家に一緒に寄宿させられ、ラテン語と、教育の名の下にそれに附隨する色々な下らない事を教えられた。

村で過した二カ年は、ローマかぶれのした私の武骨さを少し和らげ、私を子供らしい狀態に引き戻してくれた。ジュネーヴにいた時は、人から强いられることがなかったので、勉强や讀書が好きだった。ほとんど唯一の樂しみであった。ところが、ボセーでは、課業があるために、その息拔きになる遊びが好きになった。私に取って、田舍は全く目新しいものだったから、遊びごとは倦むことがなかった。田園趣味は非常に强くなって、いつまでも消えることがなくなった程である。此處で過した樂しい日日の思い出は、幾つになっても、あの時の滯在と快樂を懷しく偲ばせ、果ては私を再びその地に立ち戻らせるまでになったのである。ランベルシエ氏はよく物の分った人で、私たちの訓育は疎かにはしなかったが、そうかと言って度を過ごした勉强を課するようなことはなかった。氏の遣り方の上手だった證據には、窮屈なことの大嫌いな私でも、勉强時間のことには厭な思い出を決して持っていなかったし、また、多くのことは學び取らなかったにしても、習ったことだけは樂に覺えこみ、何一つ忘れなかったことでも分る。

この質朴な田園生活は、私の心を友情に目ざめさせたことで、量り知れぬ利益を齎したと言える。それまでの私は高尙なことは高尙だが、ただ空想上だけの感情を知っていただけだった。靜かな境涯で共同生活をするという習慣が、私を從兄のベルナールに愛情深く結びつけた。いくらも經たないうちに、私は實の兄に對して持っていた愛情よりもなお深いものをベルナールに持つようになった。そして、これはいつまでも消えることがなかった。ベルナールはひどく痩せた、非常にひよろ長い少年で、身體が弱いように心も柔和であって、私の後見人の息子として家では特に可愛がられていたが、それをかさに着るようなことはあまりなかった。二人は勉强も娯樂も趣味も同じだった。二人とも獨りっ子で、年齡も同じ、互に友達が必要だったのである。だから、二人が離ればなれになるのは、言わば死ぬのも同然だった。互に愛情を示し合うような機會はあまりなかったけれども、その愛情は大變なものだった。一瞬間も離ればなれに暮すことができなかったどころではない、いつかは離ればなれになることがあるなぞとは想像もしなかった。二人とも人からちやほやされれば、すぐ好い氣になるたちで、相手がそうしろと强制しない限りは相手に懇篤でいられるから、何事につけても常に意見は一致した。監督する人たちの身びいきから、ベルナールの方が私に威勢をふるったが、それも人前だけのことで、二人きりになると、私の方が威勢をふるうこともあり、それで平均が保てたのである。勉强の時に、ベルナールがまごついているような時には、私がこっそり傍から教えてやった。こっちの作文が出來上ってしまうと、向うの分を助けもやった。そして、遊びの時でも、私の好き嫌いが物を言って、いつも私がお先棒になるのであった。とにかく、二人の性格は

*1 アブラハム・ベルナール。一七一一年十二月三十一日生。
*2 ジュネーヴの南十キロ。スイス國境サレーヴ山麓にある一寒村で、當時はジュネーヴ共和國領だった。
*3 ジャン・ジャック・ランベルシエ。ジュネーヴのアカデミーに學び、一七〇八年にボセーの宣教師となる。一七三八年沒。

實によく一致し、二人を結びつける友情はまこと眞劍であったから、ボセーやジュネーヴでほとんど離れずにいた五年以上もの間、實を言えば度々取組合の喧嘩もやったが、しかし、二人を引きはなす必要は決してなく、また、どんな喧嘩も十五分と續いたことがなかった。そして、ただの一度も人に告げ口をすることはなかった。こんな事をわざわざ言うのは子供じみた話だと思うかも知れないが、しかし、これは子供というものがこの世に存在しはじめてから、恐らく滅多にない例となるものである。

ボセーで送ったこのような生活狀態は私に非常によく適していた。ただ、殘念なことに、それがもう少し永續きしてくれなかったから、私の性格を完全に固めてしまうに至らなかった。もともと私の性格は、情愛のこもった、優しく靜かな感情がその根柢となっていたのである。私は信じているが、人間のうちのどんな者も、生れつき、私より虛榮心の少いものはなかったであろう。私は衝動的に崇高な感動にまで高まることはあったが、すぐまた元の因循無氣力に陷るのであった。自分に近づくものからは、誰からも愛されたい、というのが慾望の中でも最も強いものだった。私はおとなしかった。從兄もそうだった。二人を監督していた人々もまたそうだった。まる二年の間、荒々しい感情に出會ったこともなく、その犧牲になったこともなかった。私の心が自然から受けた色々な性向*を、あらゆるものがはぐくみ育てた。すべての人が私に滿足し、また他の何にでも滿足するのを見るほど、うれしいことを他に知らなかった。教會堂の教理問答の時に、答に詰ってしまうようなことがあると、ランベルシエ孃の顏に不安と苦痛の色が現われた。それを見るのが何よりつらかったことは、いつまでも忘れられない。私の心は會衆の前でへまをやる恥かしさよりもひどく痛められた。しかも、へまをやることだって私には極度につらいのであった。というのは、私は賞讃にはあまり敏感ではなかったが、恥辱には常に甚だしく敏感であったからである。それに、ランベルシエ孃から叱られるかも知れないという心配よりも、この人を悲しませやしないかという恐れの方が、ずっと氣がかりだったのである。

しかし、ランベルシエ孃が必要に際して嚴格を缺くことのなかったのはその兄と同樣であった。そして、この嚴格さは、ほとんど常に正當であり、決して過激なものではなかったから、それに心を痛めることはあったが、反抗心を起すことはなかった。自分が罪せられるよりも、相手に不快な思いをさせることの方が厭だった。不滿が眼に見えるのは、自分がお仕置を受けるよりもつらかった。自分のこの氣持をもっと旨く說明するのは、少し困るけれど、しかし、そうせずに

はおれない。常に無差別に、また屢々無遠慮に行使される懲罰の方法の、遠い先に現われる結果が、もっとよく人々に分れば、青少年に對する方法も大いに改められることになるであろう。痛ましくまたよく有り勝ちな事例から、大きい教訓が引き出せるのであるから、次に自分の例を述べる決心をしたのである。

ランベルシエ孃はわれわれに對して母のような情愛を持っていたから、同時にまた母親の權威も持っていた。そして、二人が懲罰に値するようなことをすると、時にはその權威をふるって、われわれにお仕置をすることがあった。かなり長い間、ただ嚇かすだけだったが、お仕置というものは初めてのことだっただけに、この嚇かしはひどく恐ろしく思われた。ところが、實際に受けてみると、豫想していたほどこわくないように思えた。しかも、もっと奇妙なことに、このような懲罰を受けると、それを課した人に對して、前よりも一層の愛情を抱くようになった。處罰に値することをして、同じお仕置をまた何度か受けてみたい氣持を起さなかったのは、實にこの愛情が純眞であり、私の生れつきがおとなしかったからであった。同じ處罰を受けたくなるのはなぜかというと、その時の苦痛やまた羞恥の中にすら、一種の肉感が混っているのに氣がついたし、また、その肉感は、同じ人の手でまたお仕置を受ける恐怖よりも、むしろその慾望を私の心に殘したからである。疑いもなくこのことには何か早熟な性本能が混っていたのであるから、ランベルシエ孃の兄から同じ處罰を受けたのでは、全く快感を味わうことがなかっただろうことは事實である。尤も、ランベルシエ氏が妹に代っておお仕置をやっても、氏の氣質からして、それはほとんど恐れるに當らなかった。だから、罰せられるようなことを私がしなかったのは、ひとえにランベルシエ孃の機嫌をそこねるのを恐れたからに他ならなかったのである。つまり、凡そ思いやりの心持は、肉感から生れる思いやりの心持ですら、私のうちには非常な領分を占めていたから、それが常に心の中の肉感を制御していたわけである。

このように、私は別に恐れたからでもなく罪を遠ざけていたが、或る時また悪いことをやった。それは私の過失から、卽ち意志からではなかった。そして、私はこれを、言うならば、良心に恥じることなく、うまく利用したのであった。ところがこの二度目が同時に最後となった。なぜなら、ランベルシエ孃は、このお仕置が目的を達していないことを恐らく

＊1　異本。「色々な傾向を」

＊2　ガブリエル・ランベルシエ（一六八三年―一七五三年）。

何かの樣子から感づいたものらしく、もうこんな罰はやめる、くたびれるばかりだから、と言い渡したからである。それまで、われわれはランベルシエ孃の部屋に寢ていたし、冬なぞは時にはその寢臺に寢たこともあった。それが、二日後には別の部屋に寢かされるようになり、それから後は、大きな子供として待遇されるという、あまり有難くない光榮を持つこととなったのである。

八歳の時に、三十歳の未婚婦人から受けたこのような子供の懲罰が、趣味や願望や慾求や、また私というものを、その後の生涯にわたって決定してしまった、しかも、自然にそうなるべきものとは全く正反對の方向に決定してしまった、ということを誰が信じてくれるだろうか。肉感に火が點じられると同時に、慾望にもまた非常な變化をきたした。そして、私の慾望はすでに經驗したものの範圍を出ないから、他のものを求める氣にはならなかった。ほとんど生れながらにして、肉感に燃える血を持っていながら、私は、最も冷たい最も遲れた體質の人でも發達する年齡に達するまで、どんな汚瀆からもわが身を純潔に保った。私は長い間何とはなしに惱ましい思いに苦しみ、燃えるような眼で美しい人々を貪り眺めた。私の想像は絶えずそのような美しい人々を私に思い出させた。それも、單に私流儀にその人々を細工して、幾人ものランベルシエ孃を作り出すために他ならなかったのである。

年頃になってから後も、この奇妙な趣味はいつまでも續き、やがて變態・狂氣にまでなったが、それが却って、とうに失われているように思われる童貞を、私に保たせたのであった。純良な節度ある教育というものが若しあるとすれば、私の受けた教育は間違いなくそれである。三人の叔母は節度ある模範的な人々であったばかりでなく、すでに久しく世の女たちの識らなくなっている慎しみというものを具えた人たちであった。父は遊び好きな人だったが、昔風な粹人で、何よりも好きな女たちの傍にいる時に、處女が顔を赫くするような話なぞ決して口に出さなかった。そして、子供たちに拂うべき注意が、私の家庭ほど、また私の前ほど、行きとどいたところはなかった。この點に關しては、ランベルシエ氏の家でも、同じく注意が拂われていた。ごく善良な下女が、私たちの前でうっかりみだらな言葉を口に出したばかりに、暇を出されたこともあった。私は青年期に達するまで、兩性の結合については少しもはっきりした知識を持っていなかったばかりでなく、その漠然とした觀念は、厭な不快な姿として眼に映った。賣笑婦に對しては、いつまでも消すことのできない嫌惡の情を持っていた。放蕩者を見ると、輕蔑と、恐怖すら感じないわけにいかなかった。放蕩をそんなにいやらしいも

のように思いだしたのは、或る日、プチ・サコネ[*1]へ行った時からのことである。その時、窪んだ道を通りながら、兩側の土に掘った穴の中を見ると、「あの連中はさかっているのだ」と人から教えられた。人間の交接のことを考えると、いつも、犬のさかるのを見たことが心に浮んだ。そしてそれを思い出しただけでも胸が悪くなるのであった。

このような教育上の先入主は、それ自身すでに、激し易い氣質の最初の爆發を遲らせるに適したものであるが、それが、前に言ったように、性慾の最初の目覺めが私の氣を他に轉じたために、更に助長されたのであった。私の血は不都合にも非常に沸騰していたが、それにも拘らず、前に感じたものしか想像できなかった私は、すでに知った一種の悅樂の方に慾情を向けることしか知らず、人から嫌惡の情を與えられたもう一方の悅樂の方までは決して立ち入らなかった。しかも、その悅樂が自分の好んだ悅樂とごく近いところにあることに全く氣づいていなかった。愚かしい妄想や、色情の昂奮や、時としてそれらのために引入れられた不自然な行爲なぞに於て、私は空想の中に異性の力を借りた。しかし、この力が、そこから引出そうと熱中した用途より他の用途にも適當しているとは決して考えてはいなかったのである。

このようにして、私は、非常に激しい、非常に放縱な、また非常に早熟な性質を持ちながら、ランベルシエ孃から極めて無邪氣に教わった肉感の悅樂より他の悅樂を望みもせず、また知りもしないで、思春期を過したのであった。のみならず、年が經ち、成人してからでも、私を破滅さすべき筈のものが、却って私の身を安全にしてくれたのであった。私の子供の頃の舊い嗜好は消え失せるどころか、成人してからの嗜好と結びついて、肉感に呼び起される色々な慾望からそれを區別することが決してできない程になってしまった。そして、この風變りな性質は、生れつきの臆病と合體して、言いたいことも思い切って言えず、したいこともすることができないため、また、この種の享樂——一方のものは私には最後の段階にすぎなかった——が、これを熱望する男には與えられず、これを與え得る女には察知されなかったために、私はいつも女性に對しては非常に積極性のない人間になってしまった。このように、私は最も愛する女性の傍にいても、戀しい思いをしながらただ默っているだけで生涯を過ごした。自分の好き嫌いを打明けることは敢てせず、その思いを保ってくれる交わりだけで、わずかに自分の氣持を紛らしていた。横柄な愛人の前に跪き、その命令に服し、色々と宥しを求めるというようなことが、私にとっては非常に甘美な享樂であった。そして、激しい想像に血が燃え上れば上るほど、私は内氣

*1 ジュネーヴ市郊外の小村。

な戀人のようになった。このような戀の仕方が、手取り早い發展を齎さず、また、その戀の對象となった女性の貞操に大して危險を及ぼさないことは、誰にも分る。從って、私はほとんど相手をわが物にしたことはなかったのであるが、しかし、私流儀に、卽ち想像によつて、享樂することは結構できたのである。以上のように、内氣な性質と空想的な精神とに結びついた私の肉感は、もう少し厚顔であったならば恐らく最も狂暴な淫樂に私を陷れたかも知れなかった嗜好と同じ嗜好によって、却って純潔な感情と正しい德操とを保有させてくれたのであった。

私は自分の懺悔の、暗い泥だらけな迷路の中に、最も困難な第一歩を踏み入れた。告白するのに最も辛いのは、罪惡的な事柄ではなく、馬鹿げた恥かしい事柄である。これから先は、もう大丈夫である。今まで思い切つて告白したのであるから、これから後は、もはや私を制止できる何物もない。私は生涯を通じて、幾度か愛する女たちに對して情熱の昂奮に驅られ、眼も見えず耳も聞えず、感覺を失い、全身は痙攣を起して顚えるようなことがあったが、それでも、女たちに自分の狂戀を訴えたり、また、どんなに深い馴染の間柄*1でも、他の男には與えない好意を自分だけに與えてくれと賴んだりする氣には決してなれなかった。このことによっても、前のような告白が私にはどんなに辛いものであったかが判斷して貰えると思う。尤も、自分の思いを相手に訴えたことは、少年時代にただ一度あっただけである。それも、相手が私と同じ年頃の少女で、しかも、最初に口を切ったのは女の方であった。

このように、自分の感情生活の最初の痕跡に遡ってみると、そこには色々な要素があり、それらは時として相容れないように見えるが、結局はみな互に結合して、一つの同形單純な結果を力强く生み出していることが分る。そして、またそれ以外の要素もあって、これらは一見したところ同じものでありながら、或る情況の力が加わって、非常に異った組合せを呈している。そのために、それらの要素が相互に關係があるとは思いもつかないほどである。例えば、私の心の最も旺盛な活動力の一つが、淫亂と放逸を私の血に注いでいる源泉と同じ源泉の洗禮を受けているとは誰に信じられようか。上に述べた問題から離れず、そこから非常に異った印象を與えるものが出て來ることは、次に述べる話で分って貰えると思う。

或る日、私は一人で、臺所の次の間で、課業を勉强していた。下女がランベルシェ孃の櫛を何本か、煖爐の板金の上に乾かしておいたが、取りに來てみると、一枚の櫛の齒が片側すっかり折れていた。この損害の責任は誰にあったのだろう。私より他の者は一人も部屋に入ったことはなかった。私は櫛に觸ったことを否認した。ランベ

ルシェ兄妹は二人一緒に私を訓戒する、私につめよって脅かす。私は强情に言い張る。兄妹は私がこんなに大膽な嘘をつくのは初めてだと思ったけれど、最初からそう强く思いこんでいるので、いくら抗辯しても駄目だった。事態は重大になった。また、それだけの事はあった。惡心・虛言・强情、いずれも懲罰に値するもののように思われた。しかし、その懲罰を課したのは、今度はランベルシェ孃ではなかった。叔父のベルナールに手紙が書かれた。叔父が來た。私の從兄も、私に劣らぬ別の不都合をやって、罪を問われていた。二人は同じ處罰を受けた。それは恐ろしい罰だった。若し皆が苦痛そのものの中に矯正法を求めて、私の荒んだ感情を永久に鎭めようと望んでいたのならば、これ以上の手段はなかったであろう。事實、皆のおかげで私は長い間落著いた氣持でいられたのである。

皆の望むような自白を私から無理に引き出すことはできなかった。何度か呼びつけられ、最もみじめな立場に立たされたけれど、私の心は決して搖がなかった。私は死ぬほどの苦しみも堪えたであろうし、また、そう決心もしていた。この不屈な態度を惡魔のような强情と皆は呼んだが、さすがの暴力もこの少年の惡魔のような强情には敵わなかった。終に私はこの殘酷な試煉から脫した。さんざんな目に遭ったが、しかし勝ち誇って脫したのであった。

この出來事から今はすでに五十年近く經っている。そして、今はその事で再び罰せられる恐れはなくなっている。そこで、玆に天に誓って明言する。私はあの事に關しては全く無罪であった、櫛を壞しもしなかったし、それに觸れもしなかった、煖爐の板金に近寄りもしなかった、そして、そんなことを考えさえしなかった、と。それではどうしてあの櫛が折れたのであろうと私に訊いて貰いたくない。私は知らないし、また、私にはわけが分らないのである。非常に確實に知っていることは、私がそのことについて全く罪がないということである。

ふだんは内氣で柔順だが、激情に驅られると烈しく、尊大で、手がつけられなくなる一つの性格を想像して貰いたい。常に理性によって支配され、常に柔和と公正と親切をもって取り扱われ、不公正ということについてはその觀念すら持たない一少年が、人もあろうにその最も敬愛する者から生れて初めてあのように恐ろしい不公正を受けたと想像して貰いたい。何という觀念の逆轉だろう。何という感情の混亂だろう。その少年の心・頭腦・知的また道德的小存在は何と顚倒した

*1　異本。「どんなに親しい間柄でも」

ことだろう。このようなことを、若しできたらすべて想像してみて貰いたいというのである。というのは、私には、その時自分の心のうちに起ったことのどんな微細な跡も、今、これを判別したり、それを辿ったりすることが不可能のように感じられるからである。

私はまだ十分に物の道理が分っていなかったから、どれほど外觀が私を罪していたかも感じなかったし、また、他人の立場に自分を置くこともしなかった。自分の立場だけに立っていた。そして、私の感じたものは、犯しもしない罪に對する恐ろしく苛酷な懲罰だけであった。肉體の苦痛は、どんなに激しくとも、それほど感じなかった。私は憤激と忿怒と絶望しか感じなかった。從兄も同じような事があって、知らずに犯した過失を故意の行爲のように罰せられ、私同樣非常に憤慨した。そして、言わば私と合唱するように、大いに激昂したのである。二人は同じ寢臺に入り、身體を硬直させ、夢中で抱きついて、互に息を塞ぎ合った。やがて二人の幼い心が少し落著いて、忿怒を洩らすことができるようになると、床の上に起き直って、力のかぎり何度も何度も、「畜生！　畜生！　畜生！」と、聲を揃えて叫びだした。

これを書きながら、私は今でも動悸が高ぶるのを感ずる。たとえ十萬年生き續けようとも、あの時のことだけはいつもありありと心に浮ぶことであろう。暴力と不公正とについてのこの最初の感情は、心に深く刻み込まれ、これに關聯のあるあらゆる觀念は、當時の私の最初の感動を呼び戻す。しかも、もともと私一個に關したこの感情は、そのまますっかり固まってしまい、凡そ個人の利害から全く離れたものとなってしまったから、何か不公正な行爲を見たり、或いはその話を聞いたりすると、その行爲の對象が何であろうと、それが何處で行われようと、まるで自分の上にその結果がふりかかって來るかのように、私の心は火のように燃え上るのである。兇惡な暴君の殘虐とか、惡辣な宣教師の巧妙な陰險さとかを本なぞで讀むと、自分は何べん死んでも構わない、出かけて行ってこれら惡人どもを刺し殺してやりたいという氣になる。鶏とか牛とか犬とか、そのほかどんな動物でも、己れが一番強いと意識し、ただそれだけの理由で、仲間いじめをするのを見たりすると、私は大汗をかいてそいつを追いかけたり、石を投げつけたりすることが度々あった。このような衝動は私の生れつきかもしれない。また、生れつきだと信じている。しかし、自分が受けた最初の不公正の深い記憶が、自分の生れつきに長い間強く結合され、これを甚だしく強めたのであった。

私の幼年期の明朗さはここで終りとなった。その時以來、純粹の幸福を樂しむことはなくなった。そして、今日でもな

お幼時の魅力の思い出はそこでぷっつり斷たれていると感ずるのである。二人はその後數カ月はまだボセーに留っていた。人の話に聞いた人類の始祖が、地上の樂園にいながらその樂しみを失ったというのと全く同じような姿でボセーにいたのである。見たところは前と變らない狀態であったが、事實は全然別な生き方であった。愛著・尊敬・親愛・信頼といったものは、もはや師弟の間を結んでいなかった。ベルナールも私もランベルシエ兄姉を、心の中まで讀み取ってくれる神々としてはもはや見なくなっていた。惡い事をしても前ほど恥かしいと思わず、叱られることを前よりも恐れるようになった。人目をかすめたり、拗ねたり、嘘をついたりするようになった。その年頃によくあるあらゆる惡業が、無邪氣さを腐敗させ、遊び事を卑しくした。二人の目からは、田園さえも、心にしみ入るようなあの和やかさと純朴さの魅力が失われた。もの淋しく陰氣に思われた。ヴェールに覆われていて、その美しさが隱れているようだった。自分たちの小さい庭や、草や花をいじることもやめた。地面をそっと掻いて、蒔いておいた種から芽が出ているのを見つけて、狂喜の叫びを上げることもなくなった。こんな生活が厭になった。ランベルシエ兄妹もわれわれが厭になった。叔父は二人を引取ることになった。こうして、ランベルシエ兄妹と別れることになったが、互に飽きが來ていたので、大して名殘惜しいとも思わなかった。

私がボセーを出てから、およそ三十年が經ったが、その地の滯在を、これに多少の關聯がある追憶によって思い出すことはあっても、それは愉快ではなかった。しかし、壯年期を過ぎて、老境に入りかけて來ると、他の思い出は消えて行くのに、この同じ思い出が新に甦り、强い調子で記憶の中に刻みつけられる。そして、その魅力と美しさが日毎に增大して行くのである。それはまるで、過ぎ行く人生をすでに感じ取った私が、もう一度人生の發端をつかまえようとしているかのようである。あの頃のどんな些細な事柄も、それがただあの頃の事というだけで、私には樂しいのである。場所・人物・時間なぞのあらゆる有樣を想起する。部屋を行ったり來たりする下女や下男の姿、窓から飛び込む燕、課業を諳誦している時、手の上にとまった蠅なぞ、すべて眼に見るようである。二人のいた部屋の模樣も眼に浮ぶ。右手にランベルシエ氏の居間がある。歷代の法王の姿を描いた一枚の版画、晴雨計、大きな暦、それからエゾ苺の樹。この樹は、家の背面、かぐいと喰いこんでいる小高い庭に生えていて、窓に蔭をつくり、時には、窓から家の中に這いこんで來た。こんな事を一々讀者に知って貰う必要のないことは私もよく心得ている。しかし、私の方にはそれを話す必要があるのである。思い

出すたびに今でも樂しさに身顫いのつきそうなあの幸福な頃のさまざまな小さな逸話を、どうして物語らずにいられようか。とりわけ、五つか六つの逸話は……しかし、協定しよう。五つとは言わない。一つ、ただ一つだけ話させて貰おう。尤も、私の樂しみを長くするために、できるだけ長々と話させて貰いたいと思うのだが。

讀者の樂しみだけのことを考えれば、私はランベルシエ孃のお臀の話を選ぶこともできよう。牧場の下へ、運悪くもんどり打って轉がり落ち、丁度そこを通りかかったサルジニヤ王のお眼の前に、お臀が丸出しになったのである。しかし、高臺の胡桃の樹の話の方が、私としては一層面白いのである。もんどりの時の私は見物人にすぎなかったが、胡桃の樹の話では立役者を演じたからである。しかも、實を言えば、母の如く、また恐らく母以上にも愛していた人のことで自分がびっくりしたような出來事は、たとえそれ自體は滑稽であっても、その時は私としてそれを笑い話にする氣は全く出なかったのである。

高臺の胡桃物語を待ちうけている讀者諸君よ。その恐ろしい悲劇に耳を藉したまえ。そして、できたら身顫いをしないでいてみたまえ。

庭の門の外の、入りかけて左手のところに、一つの高臺があった。此處には、午後にはよくみんなで休みに行ったが、樹蔭が一つもなかった。その樹蔭を拵えるために、ランベルシエ氏が一本の胡桃の樹を植えさせた。植樹式が嚴肅に行われた。二人の寄宿生は立會人になった。そして、穴を埋めている間、二人はそれぞれ片手で樹を支え、お祝の歌を歌った。樹に水を與えるために根元の周圍に水溜のようなものが作られた。從兄と私は、毎日この灌水作業を熱心に見物しているうちに、高臺に樹を植えることは、壁穴に旗を突込むよりも立派な仕事だという考えを固めるに至った。そこで、この名譽を誰にも頒たず、二人だけで得ようと心に決めた。

このために、二人は柳の若樹から挿木の枝を一本切って、これを高臺のいとも尊き胡桃の樹から八九尺はなれた所へ植えた。この樹の周圍にも溝を掘ることを忘れなかった。ただこの溝を滿たす水をどうして手に入れるかが困難な問題であった。というのは、水のある所はかなり遠くて、汲みに行くことは許されていなかったからである。しかし、われわれの柳には水が絶對必要であった。數日の間は、柳に水をやるためあらゆる種類の策略をめぐらした。そして、それが旨く成功して、やがて柳は芽をふき、小さい葉を出した。まだ樹は一尺にも足りなかったが、やがて間もなくわれわれに樹蔭を

與えてくれるだろうと確信して、その小さい葉の伸びを一時間おきに測ったものである。

この樹のために、われわれはすっかり氣を取られ、仕事も勉强もまるで手につかなくなり、まるで魔物にでも憑かれたようになってしまった。家の人たちは、二人がどうしたのかわけが分らないままに、前よりも嚴しく取り締った。このため、水が切れる一大事の瞬間がわれわれの眼に浮び、今に水がれのためにあの樹が枯れるのを見なければならないと考えて大いに心痛した。遂に、必要という發明の母は、われわれと樹とを確實な死から救う一つの工夫を暗示してくれた。それは、地下に排水溝を拵えて、胡桃の樹に與えた水を、こっそり柳まで引いて來ることであった。この計畫は熱心に實施されたが、しかし、初めは旨く行かなかった。傾斜のつけかたがまずかったので、水が流れてくれない。土が崩れて、排水溝を塞ぐ。溝の口は芥で詰まる。何もかもいすかの嘴と食いちがった。しかし、何物も二人を失望させなかった。Labor omnia vincit improbus.[*1] である。水はけをよくするため、更に土を掘り溝を穿った。箱の底板を切って小さい細板を作り、これを平に一列に竝べ、その上へ他の幾枚かの板を兩側から屋根形に置いた。これで三角形の水道ができたわけである。入口には細い木片を柵のように植え竝べると、格子か芥止めのようなものができて、水の流通を妨げずに、泥土や小石の流れ込むのが防げた。それからこの工事に注意深く土をかぶせ、その上を踏み固めた。全部でき上つた日になると、灌水の時間の來るのを、希望と心配とでわくわくしながら待ち受けた。何百年も待つ思いをした後に、その時刻がとうとうやって來た。ランベルシエ氏は、いつものようにこの仕事を見に來た。われわれは、この仕事の間じゅう、二人ともランベルシエ氏の背後に立つて、自分たちの樹を隱していたが、幸いなことに氏は柳の方に背中を向けていた。

最初の桶の水を注ぎ終るか終らないかのうちに、その水がわれわれの水溜の方へ流れて行くのが見えた。それを見ただけで、今までの用心もけし飛んだ。二人は思わず歡喜の叫び聲を立てたのである。ランベルシエ氏がこちらを振向いた。大變なことになってしまった。氏は、胡桃の樹の地質が良くて、貪るように水を飲むのを見るのを大いに樂しみにしていたのである。その水が、二つの水溜に分けられるのを見たのだからたまらない。びっくりして、今度は向うが叫び聲を立てる始末である。調べる。惡戯を見つけだす。急いで鶴嘴を持って來さす。一擊をくれる。板が二三枚ふっ飛ぶ。そして、大聲を立てて、「水道だ！　水道だ！」と怒鳴る。なさけ容赦もなく、あたり一面掘り返す。その一擊一擊がわれわ

＊1　「たゆまざる努力は一切に克つ」。ラテン詩人ウエルギリウスの言葉。

れの心臟のまん中に打ち下ろされるのである。忽ちのうちに、板も溝も水溜も柳も、何もかもぶち壞され、掴り起されたが、この恐ろしい征伐の間、ランベルシエ氏は一言も口を利かず、ただ絶えず「水道だ！　水道だ！　水道だ！」と、その邊のものをぶち壞しながら、大聲にわめくばかりであった。

この出來事は小建築家たちに取っては、さぞ後の祟りが大變だったろう、と思う人があったら、それは間違いである。何もかもそのままで濟んだのであった。ランベルシエ氏は一言もわれわれを咎めず、悪い顏もせず、その事については口も利かなかった。しばらく經った後では、妹を相手に大笑いをしているのが、われわれに聞えた程である。ランベルシエ氏の笑いは、ずいぶん遠くからも聞えたものであった。また、更に驚くべきことは、われわれが、最初のひどい落膽がすぎてしまうと、あとはそれほどがっかりしていなかったことである。二人はまた別の所へ他の樹を植えた。そして、二人だけで、こっそり「水道だ！　水道だ！」というのを、大げさに繰返しながら、はじめの樹の最後を度々思い出すのであった。それまでにも、アリスティデスやブルトゥス[*1]を氣取って、時々は不意に自惚れ心が頭をもたげることはあったが、今度こそ、非常にはっきりした虚榮心の最初の動きが現われた。自分たちの手で水道を拵らえることができたということと、大きな樹の向うを張って挿木をしたということ、これが私には名譽の最上の段階のように思われた。十歳の私は三十歳のカエサル[*2]よりも、名譽の如何なるものであるかをよく辨えたのであった。

この胡桃の樹のことと、それにまつわるささやかな物語とは、私の心にいつまでも殘り、また思い出されたので、一七五四年のジュネーヴ旅行の最も樂しい計畫の一つは、ボセーに行って自分の幼時の遊戯の色々な記念物、とりわけ、その頃すでに三分の一世紀を經ていた筈のなつかしい胡桃の樹に再び對面することであった。ところが、私は斷え間なく人の邪魔を受け、自分で自分の身體が自由にならず、ために、終にその望みを達することができなかった。そのような機會は、もう二度とおとずれるようにも思われない。しかし、私はその希望と共にその願望をも失ったことはない。そして、萬が一あの愛する地へ歸ることができ、あの懐しい胡桃が健在でいるのを見たならば、私は必ず自分の涙であの樹に水をそそぐに違いないと思っているのである。

ジュネーヴへ歸った私は、自分の身の振り方のきまるまで、叔父の家で二三年[註11]すごした。叔父は息子に工學をやらせるつもりで、製圖を少し習わせ、ユークリッドの「幾何學原論」を教えた。私も一緒にみんな習い、大いに興味を持った

が、殊に製圖が好きになった。その間にも、私を時計師にするか、代訴人にするか、宣教師にするかと、家の人は色々に論議した。私としては、宣教師になる方を好んだ。說教することが非常に立派なことだと思っていたからである。しかし、兄と私の間で分けるべき母の遺産から來る收入はごく僅少であって、私の勉學を進めるには十分でなかった。それに、私の年齡では、どれにきめるかまだ急ぐこともなかったので、當分の間は叔父の家に厄介になっていた。そして、ほとんど何もせずに時間を空費し、また、當然なことではあったが、相當に高い賄費も拂ったわけであった。

叔父は私の父と同樣に快樂の人であって、義務のために身を縛られることの嫌いなのも父と同じであった。それで、われわれの面倒はほとんど見てくれなかったのである。叔母は少し祇虔派[ピエチスム][*3]がかった信心家で、われわれの教育を監視するよりも、聖歌を歌っている方が好きだった。こんなわけで、われわれはほとんど完全に自由放任されていたが、しかし、ちらとしてはこの自由の度をすごすようなことはしなかった。二人はいつも一緒にいて、互に滿足し合っていたし、同じ年頃の惡童たちと交わる氣にもならなかったから、暇のあるにまかせて陷り勝ちなふしだらな習慣の何一つにも染まらなかった。いや、自分たちに暇があったと考えるのは間違いである。なぜなら、一生のうちでその頃ほど暇のないことはなかったからである。しかも、幸いなことに、二人が次から次へと熱中した色々な娯樂は、どれも二人を一緒に家の中に釘づけにして、街へ出て行こうという氣さえ起させなかった。鳥籠とか、笛とか、凧とか、太鼓とか、家とか、突鐵砲とか、大弓とか、色々なものを拵えた。優しい年寄りの祖父[*4]の眞似をして、懐中時計を作ると言って、祖父の商賣道具を毀したりした。とりわけ好きだったのは、紙にいたずら書きをしたり、圖を引いたり、薄い色や濃い色を塗りたくったりして、繪具を無駄にすることだった。或る時、ジュネーヴにガンバ・コルタという名のイタリヤ人の香具師が來たことがあった。一度見に行ったきり、もう二度と見る氣にはならなかったが、この香具師が操人形を持っていたのを見て、自分たちも人形を拵えはじめた。向うの操人形は喜劇の所作事をやったから、こっちもこっちで喜劇を作った。この樂しい喜劇

*1　前出。六頁*11參照。
*2　ローマの英雄。シーザーとも言う。
*3　新教の革新的一宗派。この頃特にドイツやスイスで流行していた。嚴格主義をもって鳴る。
*4　父イザークの實父ダヴィッド・ルソオ。時計職。一七三八年九十七歳の高齡で歿。

を演ずるのに、生憎と笛がないので、ポリシネル[*1]の聲は自分たちの咽喉でやった。家の人たちは氣の毒にもこの芝居を辛抱して見物したのである。しかし、或る日、ベルナール叔父がひどく美しい說教を、獨特の名調子でみんなに讀み聞かせたので、今度は喜劇を捨てて、說教文を作りはじめた。こんなことを細かく話しても大して面白くないことは分っている。しかし、そんなにいとけない年頃で、自分の時間や自分というものがほとんど自由でありながら、その自由を濫用する氣を起さなかったのには、われわれの最初の教育が如何によく行き屆いていたかということが、これらの話で示されるわけである。われわれには友達をこしらえる必要がほとんどなかったから、そんな機會を進んでとらえようともしなかった。散歩に出た時でも、通りがかりに友達たちの遊びを見て羨しいと思わず、仲間に入れて貰いたいとも考えなかった。二人の心は友愛に滿たされていたから、ただ一緒にいさえすれば、それだけで、どんな詰らないことでもこの上もない樂しみになったのである。

二人がいつも離れずにいるので、しまいには人目につくようになった。それというのが、從兄は非常に脊が高いのに、私は小さかったから、なかなか面白い相棒だったのである。從兄のひよろ長い恰好、燒林檎のような小さな顏、もっそりした樣子、間の抜けた擧動なぞが、惡童連中の惡戲心を唆った。

その地方の訛りで「バルナー・ブレダンナ[*2]」という綽名をつけた。そして二人が一歩戸外へ出ると、四方八方から「バルナー・ブレダンナ」とはやし立てる聲が聞えるばかりだった。從兄の方は私より平氣でこれを我慢した。私は腹を立てて、喧嘩してやろうと思った。喧嘩は惡童連中の思う壺である。こっちが毆ると向うでも毆った。從兄も可哀そうに一所懸命に加勢した。しかし、弱虫だから拳骨を一つ喰うと忽ちひっくり返った。そうなると、私も死物狂いになった。ところが、私もひどくぶん毆られはしたものの、向うが目ざす喧嘩の相手は私ではなく、「バルナー・ブレダンナ」なのである。とにかく、私がむやみに腹を立てるために、事態は益々險惡の度を增した。このため、子供たちから毒づかれたり追っかけられたりするのが厭さに、とうとう、みんなが學校へ行っている時でしか戸外へ出ないようになった。

私はまるで中世紀の義俠の武士といったところだった。ちゃんとした武者修業者と言われるためには、ただ一つ意中の婦人が缺けているだけである。ところが、意中の婦人を二人も持つことになった。私の父はヴォー州の小都會ニヨンに定住していたが、私は時々そこへ出かけて父に會った。父は氣受けがよく、息子の私も世間の好意を身に感じた。父の傍に

しばらく滯在していた間には、誰からもちやほやされた。とりわけ、ヴュルソン夫人という人が非常によく可愛がってくれたが、かてて加えて、夫人の娘さんも私を愛人にしてくれた。二十二歳の娘さんに對する十一歳の愛人と言っただけで、どんなものだったか想像がつくと思う。しかし、このような浮氣娘というものは、誰でも、こんな工合に、小さい人形を表看板にして、その裏にもっと大きい代物を隱しておく。或いは、人の氣を惹くような遊びを小さいのとやって見せて、大きい奴を誘惑しようとするのが常套の手段である。私の方では、娘さんと自分の間に少しも不釣合を認めていないので、大眞面目である。私は心の全體をこれに打ちこんだ、否、頭の全部をうちこんだ。つまり、私は氣の狂うほどの戀をし、その有頂天は、その惱みは、その激情は、まことは滑稽極まるものではあったが、この戀はただ頭の中でした戀にすぎなかったのである。

私は二種の戀愛を知っている。非常にはっきり區別され、共に眞劍なものであるが、兩者とも極めて熱烈であるに拘らずほとんど共通點がない。しかも、この二つは可憐な友愛とも異る。私の一生はこのように非常に相異った性質の二種の戀愛の間に分たれ、また、これらを同時に體驗したことすらあるのである。例えば、今私が話している頃にも、ヴュルソン孃を公然と、しかも暴君的に獨占し、どんな男もこの人に接近することを許さなかった反面に、もう一人、ゴトン孃という少女があって、この子とは短いがかなり熱烈な密會をやったのであった。密會といっても、その時にはゴトン孃が學校の先生になるのであって、ただそれだけのことだったが、そのただそれだけのこととというのが私にはまったくすべてであって、これが最上の幸福のように思われた。そして、すでに祕密というものの價値を感じ取っていた私は、それを子供流に用いる術しか知らなかったけれども、私の祕密にはほとんど氣づいていなかったヴュルソン孃が、私をだしにして他の戀愛を隱そうとするやり方に對して、こちらもその仕返しをしたわけであった。しかし、頗る殘念なことには、この祕密が露見した。というより、私の方よりも小さい女の先生の方であまりよく祕密を守らなかった。それで、やがで間もなく二人は仲を割かれてしまったのである。[註12]

このゴトン孃というのは實に風變りな女の子だった。美しくはなかったが、なかなか忘れ難い顏つきをしていた。そし

*1 操人形芝居の主役の名。人形使は特殊な小笛をもってその聲を表現する。

*2 サヴォア地方の訛語。「ベルナールの頓馬」ぐらいの意。

て、今でも、この老いぼれの變屈男には、少々過ぎるぐらいに度々、その顏つきが思い出されるのである。とりわけゴトン嬢の眼は、年齡にも、脊丈にも、容貌にも甚だ似つかわしくないものだった。一寸高慢ちきで威壓するような樣子をしていたから、學校の女の先生という役割には持って來いだったし、またそのために二人の間にまっさきにこの思いつきが浮んだわけでもあった。しかし、更にその風變りな點は、大膽なところと控え目なところとがなかなか見分けにくいほど入り混っていたことである。私に對すると、この上もなく馴々しくする癖に、こちらから馴々しくするのは決して許さない。こちらを全くの子供扱いにしていたから、向うはもう子供ではなくなっているのか、それとも、その反對に、まだしんからの子供だから、こんな危い遊びをして少しも危險を感じないのか、と私は思わないわけにいかなかった。

私はこの二人の女性のどちらにも、言わば首ったけという有樣だった。しかも、まったくの首ったけだったという證據には、片一方と一緒にいる時には、もう一方のことは決して頭に浮んで來ることがなかったのである。それでいて、この二人から受ける感じには、全然似通ったものがなかった。ヴュルソン嬢とだったら、一生を共にしても決して別れようという氣にはならなかったであろう。しかし、この人のそばへ近寄ると、私のよろこびは靜かになって、決して激情に奔らなかった。殊にこの人とは大勢と一緒の時の方が好きだった。冗談を言ったり、焦れたり、燒いたりすることでさえ、私の心を惹き、興味をそそった。ヴュルソン嬢から冷遇されているように思える大人の戀敵たちのそばにいて、自分だけが特別に贔屓されているのが大得意であった。惱みもあったが、その惱みが好もしかった。喝采や激勵や哄笑が私を熱し、元氣づけた。憤激したり興奮したりした。一座の中でだったら戀に陶醉した。二人だけだったら、窮屈で、冷靜で、恐らく退屈もしたであろう。とは言っても、ヴュルソン嬢には愛情こめて惹きつけられていた。この人が病氣の時は、私は苦しんだ。この人の健康を恢復するためだったら、自分の健康を捧げてもいいと思った。しかも、注意しなければならないのは、私がすでに經驗によって、病氣とは何か、健康とは何かということを、よく辨えていたという點である。ヴュルソン嬢がいない時は、そのことを考え、物足りない思いをした。目の前にいれば、その愛撫は、私の官能にとってではなく、私の心にとって、甘美なものとなった。この人と馴々しくしていても、少しもやましいことがなかった。私の空想は向うがこちらに與えてくれるものしか求めなかった。しかし、若し他の者たちにも同じように與えられるのを見たら、とても我慢がならなかったであろう。私は弟のようにこの人を愛していたが、戀人のように嫉妬していたわけである。

ゴトン嬢に對しては、自分に與えると同じ扱いを他の者にも與えるかも知れないと考えただけでも、トルコ人のように、暴れん坊のように、虎のように嫉妬したことであろう。というのは、この少女が私に與えた扱いは、跪いて賴まなければならない一つの恩惠であったからである。ヴュルソン嬢に話しかける時には、非常に激しいが、しかし不安のない快樂を感じた。ところが、ゴトン嬢には、一寸會っただけで、もう私の眼には何も見えず、全感覺は顚倒してしまうのである。ヴュルソン嬢とは、隔てはあったけれど馴々しくしていた。これに反して、ゴトン嬢の前では、この上もなく馴々しくしている最中でも、心は動搖し、身體は顫えた。この少女とあまり長く一緒にいたら、とても生きてはいられまい、動悸のために息が塞ってしまったろう、と考えるのである。機嫌を損じやしないかという恐れは、二人に對して同じように抱いた。しかし、一方には一層歡心を求め、他方には一層服從的だった。どんなことがあっても、ヴュルソン嬢を怒らせるようなことはしたくなかった。しかし、若しゴトン嬢が火の中へ飛びこめと命じたら、私は即座に服從しただろうと思う。

ゴトン嬢との戀愛、否、むしろこの少女との密會は、向うに取ってもこちらに取っても非常に仕合せだったことには、あまり長く續かなかった。ヴュルソン嬢との關係には、これと同じ危險はなかったにしても、これより少し長く續いたあとで、やはり最後の破局を持った。このような事柄の結末というものは、常に少々ロマネスクな風を帶び、愁歎場を現わすものである。ヴュルソン嬢と私との交渉は、ひどく激烈なものではなかったけれど、それでも、恐らく一層心惹くものであった。二人の別れは決して涙なしでは行われなかった。そして、この人と別れた後で私がどのような切ない空虛の中に沈みこんだ氣でいたかは、まことに奇妙なほどである。この人のことしか口にせず、この人のことしか考えなかった。私の哀惜の情は眞劍であり、しかも强烈だった。しかし、このような悲壯な哀惜の情も、底を割ってみれば、すべてがヴュルソン嬢だけについてのものではなく、自分では氣づかなかったが、實はこの人を中心とする色々な愉樂を哀惜する氣持が、相當の部分を占めていたように思う。二人は互に會わずにいる悲しさをまぎらすために、岩をも貫かんばかりの悲痛な調子の手紙を書き合った。とうとう向うは矢も盾もたまらなくなって、私に會いにジュネーヴへ來るという大變ことになった。そうすると、こちらは頭が少々變になってしまった。ヴュルソン嬢がジュネーヴへ來ていた二日間は、まるで醉っ拂いの氣違いのようになっていた。ヴュルソン嬢が發って行くと、私はそのあとを慕って湖水に飛びこみたいと思った。そして、私の泣き聲は長い間空にこだましたのであった。八日ばかり後に、ヴュルソン嬢から飴玉と手袋が送られて

來た。それと同時に、この人が結婚したこと、私のためにわざわざ旅行したのは、實は婚禮衣裳を買うためだったことなぞを私は知った。これを知らないでいたら、向うの贈物も甚だ有難いものに思えたかもしれなかった。私の怒りを此處に述べるまでもあるまい。察して貰えると思う。私は氣高い憤怒の中に、あんな不實な女には二度と會わないと誓った。それ以上の刑罰は思いつかなかった。しかし、向うではそのために死にはしなかった。というのは、それから二十年後、父に會いに行った時、父と一緒に湖水に遊んだことがあった。われわれの船からあまり遠くないところの船にいた婦人たちを見て、あれは誰ですかと父に訊くと、父は微笑しながら私に向って、

「何だって。思い出せないのかい、あれが。お前の昔の戀人じゃないか。クリスタン夫人、つまりヴュルソン孃だよ」

と、言った。私はほとんど忘れていたその名を聞いて、思わずはっとした。しかし、私は船頭に船の方向を變えるように命じた。復讐するには絶好の機會ではあったが、今さら四十女を相手に二十年前の喧嘩をむし返して、心の誓を破るまでのことはあるまい、と判斷したのであった。

（一七二三年――一七二八年）

みんなが身の振り方をきめてくれるまで、私の幼年時代の最も貴重な時間は、右に述べたように、とりとめのない事にすぎて行った。私の天性に從うために、長い論議を盡した後で、みんなは最後の決定をしたけれども、それは私に最も不向きなものであった。こうして、私は市の公證人マスロン氏のところへ預けられて、ベルナール氏の言うところの「三百代言」という有利な職を習うことになった。この俗稱は甚だ私の氣に入らなかった。卑劣な手段でしこたま金を儲けるというような希望は、氣位の高い私の性分にはしっくり來なかった。仕事は退屈で、とても堪えきれないように思えた。精勤と束縛がいよいよこの仕事を厭なものにした。私は日ましに募る嫌悪の情をもって事務所へ入るのであった。マスロン氏の方でも、あまり私に滿足せず、絶えず私のことを愚圖だとか頓馬だとか小言を言って粗略に扱った。また、叔父さんが、あれも知っている、これも知ってる、と請合った癖に、實際は何一つ知っていないではないかとか、叔父さんの約束だとなかなか利口な子だということだったが、その實、まるで驢馬のような奴をよこしたとか、毎日のように私へ繰返すのであった。とうとう私は無能だということで、恥かしくも事務所から暇を出された。そして、マスロン氏の書記たちから

らは、あの子は鑢仕事でもやるより他には能のない奴だ、なぞと極めつけられた。

自分の天分をこのように定められた私は、今度は徒弟に出された。尤も、時計屋へ徒弟に行ったのではなく、或る彫刻師の家へ行ったのである。公證人のところでさんざん頓馬扱いされた私は、ひどく卑屈になってしまっていたから、不平も言えず人の言いなりになった。親方のデュコマンさん[*1]は粗暴で手荒な若者だったから、いくらも經たないうちに、私の少年期の輝きはすっかり曇らされ、愛らしく生々した性格を愚鈍にされ、精神上からも境遇上からも紛れのない全くの徒弟に成り下った。ラテン語も、古典學も、歴史も、何もかも長い間忘れ去られた。この世にローマ人が存在したということすら、もう思い出さなくなった。父は、私が會いに行くと、もはや私のうちに以前のような父の偶像を見出さなくなった。貴婦人たちに取っても、もういとしいジャン・ジャックさんではなくなった。そして、ランベルシエ兄妹に會っても、きっと二人は私のうちに昔の教え子の面影を認めることはあるまいということは、自分にもよく分っていたから、この人たちと顔を合すのが恥かしく、その後は、もう二度と會わなくなった。この上もなく卑しい趣味や、この上もなく下等な悪戯が、以前の愛すべき娯樂に代り、以前のような考えは全く跡形さえ殘らなかった。私という人間は、最も立派な教育を受けたに拘らず、生れつき墮落の傾向を大いに持っていたに違いないのである。なぜなら、墮落は非常に速かに、何の苦もなく行われたからである。あれ程早熟なセザールでも、これほど急速にラリドンには成り下らなかったのである。[*2]

仕事そのものは別に厭ではなかった。製圖は大好きだったし、鑿を弄るのもなかなか樂しいものだった。それに、時計彫刻師の技術なぞというものは極めて奥行の淺いものであるから、自分にはその完成の域に達せられる見込がついていた。親方の亂暴と極端な拘束のためにこの仕事に厭氣がささなかったならば、恐らくそこまで到達できただろうと思う。私は親方の眼を盜んで、同じ種類の仕事でも、自由に樂しくやれる仕事ばかりに時間を費した。自分や友達が使うためのメダルの類、騎士の勳章なぞをせっせと彫った。ところが、この内證の仕事をしているところを親方に見つかった。親方

＊1　金銀彫刻師。當時二十歳。ルソオは此處へ五年の約束で徒弟に住みこんだ。一七二五年四月。

＊2　セザールもラリドンも、フランスの有名な寓話作家ラ・フォンテーヌの書いた「教育」という寓話詩の中に出て來る兄弟犬の名。立派な祖先を持つているこの兄弟犬のうち、セザールは勇猛で祖先の名を辱しめないが、ラリドンは悪い教育を受けて墮落する。この寓話詩の最後の「おゝ、いかほどのセザールがラリドンに成り下ることよ」は有名な句となっている。

は、そのメダルにジュネーヴ共和國の紋章がついているから、お前は贋金作りをやっているのだと言って、私をさんざんに毆った。贋金というようなことは全く頭になかったし、本物の金というものさえまるで頭になかったことはここに誓って言うことができる。現行の三スー銅貨の形より、ローマのアス貨の形の方を私はよく知っていたのである。

親方の横暴は、自分が好きになったかも知れない仕事を、たまらなく厭なものにしてしまい、嘘とか自墮落とか盗みとか、自分が憎んだ筈の悪德を、この身につけてしまった。當時、自分の身の上に行われた變化を思い出すと、それは何よりも子としての服從と奉公人としての隷屬との差異を、私によく教えてくれたのであった。生れつき内氣で恥かしがりやの私は、どんな缺點よりも、圖々しさということほど自分とかけへだてのある缺點はなかつた。そして、今までは、正當な自由を樂しんでいたものが、次第に拘束されて來ていただけだったのが、茲に至ってその自由が全く消滅したわけだった。父のもとにあっては野放圖であり、ランベルシエ氏のところでは自由であり、叔父の家では控え目だった私は、親方のところへ來てからは臆病になった。そして、その後の私は全く救うべからざる少年となったのである。日日の生活の中でも、目上の人々とは完全に平等であり、自分に叶えられない樂しみはなく、自分が分配に與らない御馳走はなく、自分がおもてに表わさない慾望もない。要するに、心に思うことはすべて口に出して言うように慣らされていたから、遠慮して口も利けず、食事が半分も濟まないうちに食卓を離れ、用がなくなれば直ぐ部屋を出て行かなければならないような家に來た私が、どんな者になってしまったかは、諸君の判斷に任せる。この家では、絶えず仕事に縛られていて、眼にするものと言ったら、他人に取っては樂しみなこと、自分に取っては不足なことばかりであった。ここでは、親方や朋輩の自由を見るにつけ、つくづく自分の不自由の重さが加わって來る。自分が一番よく知っている色々な事についての議論があっても、自分からは敢て口出しもできない。とにかく、眼に見るすべてはそれが自分にだけは與えられないというだけの理由で、私の心に取って羨望の的となるのであつた。安樂よ、さらば、快活よ、さらば。昔は、失策をやっても、うまい輕口を叩いて、度々懲罰をまぬかれることができたが、そのような氣の利いた言葉も、今はおさらばである。それにつけても、父のもとにいた頃の或る晩のことを思い出すと、笑い出さずにはいられない。それは、何か悪戯をやって、その罰として、夕食を食べずに寢に行かされることになったのである。私は哀れにも一片のパンを手に持って、臺所を通りかかると、丁度烙り肉が鐵串に刺されてぐるぐる廻っているのが目について、いい匂いがした。みんな火のまわりに集って

いた。通りがかりに、一同に挨拶をしなければならなかった。ひとまわり挨拶を濟ますと、いかにも旨そうにぷんぷんいい匂いのする燒肉を横目に睨みながら、私はそれにも同じく敬意を表さないではいられなくなって、思わず知らず哀れっぽい調子で、「おやすみなさい、燒肉さん」と言ってしまった。この無邪氣な頓智はひどく面白がられて、このために、私は夕食に殘してもらえたのであった。このような頓智は、親方の家ででも恐らく同じ幸福を齎したであろう。しかし、こんな頓智が浮ぶようなことはなかったろうし、浮んだとしても、それで自分がいい氣になれる筈もなかったことは確かである。

こうして、私はだんまりのまま物をほしがり、人目を避け、物を隱し、嘘をつき、やがて盗みを働くことも覺えた。これは、その時まで頭に浮んだこともなかった出來心だったが、その後はなかなか治りきらない悪癖となった。羨望と不能とは常に人をそこへ導くものである。この故に、あらゆる下僕は盗人となり、あらゆる徒弟もそうならざるを得ないのである。しかし、徒弟というものは、眼に映るものすべてが自分の手の屆くところにあるという、平等で氣樂な境遇になれば、成長するに從ってこの恥ずべき傾向を失うものである。私はこれと同じ好機を得なかったために、そこから同じ效果を得ることができなかった。

少年が悪への第一歩を踏み出すのは、ほとんど常に善良な感情の導き方が悪いからである。私は絶え間のない不足と誘惑があったにも拘らず、親方の家へ來てから一年以上もの間は、何一つ、食べ物でさえも、盗もうという氣には成りきれなかった。最初の盗みは人をよろこばせようとしてやった仕事だった。ところが、これが、あまり賞められない目的を持つ他の盗みへのきっかけとなったのである。

親方のところに、ヴェラという職人がいたが、近所にあるその男の家から少し離れたところに、非常に見事なアスパラガスのできている菜園があった。ヴェラはお金に困っていたから、おふくろの畑からこの初物のアスパラガスを盗み出し、それを賣り拂って何か旨いものでも食いたいものだと思った。しかし、自分で危い目を見るのは厭でもあり、また大して身輕な方でもなかったので、この冒險に私を選んだ。下心があっての甘言も、その目的が分らなかっただけに、私はまんまと抱きこまれた。そうなってから、ヴェラは不意に思いついたことのように、この冒險の話を持ち出した。私はひどく反對した。ヴェラはあくまで固執した。甘い言葉にはどうしても勝てなかった。私は負けた。そして、毎朝、一

番見事なアスパラガスを取りに出かけた。これをモラールのところへ持って行った。モラールのところには、おかみさんのような女がいて、こちらが盗んで來たことを知っているから、これは盜品だろうと言って、安く買上げようとした。私はびくびくして、おかみさんのくれるものだけを受取った。それをヴェラのところへ持って行った。すると、その金が忽ち御馳走に變った。しかし、その御馳走を生み出したのは私であったのに、分け前にあずかったのは他の朋輩だった。というのは、私はいくらかの殘り物を頂戴するだけで大滿足であって、連中の酒にさえ手を觸れなかったからである。

このこそ泥は數日ほど續いたが、その間、泥棒の上前をはねてやろうとか、ヴェラからアスパラガスの儲けのかすりを取ろうとかいうようなことは頭に浮びもしなかった。この上もなく忠實に泥棒を働いたわけである。この盜みを自分にやらせる男の歡心を買おうというのが、ただ一つの目的であった。ところが、若し私が捕まりでもしたら、どんなに毆られ、どんなに罵倒され、どんなひどい取扱いを受けたであろう。それに反して、あの惡者は、自分が職人であり私が徒弟であるということから、私の言い分を否認して自分の言葉を信じさせることができたであろうし、私は私でヴェラに罪をなすりつけようとしたと言われて、二重に罰せられたことであろう。このように、どんな場合でも、罪ある强者は罪なき弱者を犧牲にして、わが身の安全を計るものである。

こうして私は盜みということが、思ったほど恐ろしいものでないと覺った。そして、やがて、この技術を大いに活用するようになったから、ほしいと思うもののうちどんなものも、確實に自分の手に入らないものは一つもなくなったほどであった。親方の家では、一概にひどい食物ばかりあてがわれていたわけでもなかった。そして、節制ということも、親方がそれをよく守っていないのを眼にしない限りは、それほど辛いことでもなかった。幼い者が一番ほしがるものが食卓に出ているのに、そこから追い出すというやり方が、幼い者をいやしくもさせ、泥棒根性にもさせるのは當然だと私には思われる。私は、間もなく、その兩方になってしまった。そして、ふだんはそれで旨くやったが、時に見つかることがあると、ひどい目に遭わされた。

今でも、身の毛のよだつような、また同時に笑い出したくなるような思い出は、林檎を盜んだ時のことで、これはずいぶん高くついた。その林檎というのは、納屋の奥の方に藏ってあった。納屋には高い格子窓があって、臺所から明りを採

るようになっていた。或る日、一人で家にいた時、ヘスペルスの仙園にある禁斷の果實を眺めようと、*1 私はパンの煉盤の上に登った。それから、金串を持って來て、屆くかどうか試してみた。短かすぎた。別の小さい串をこれに繼ぎ足した。親方が獵好きで、小さい獲物を燒くのに使う串である。何度か突き刺そうとしたが成功しなかった。とうとう林檎が刺さって、ついて來る手ごたえを感ずると、胸がわくわくした。ごく靜かに手もとへ引いた。やがて林檎は格子窓までとどき、さて手に摑もうとした。ところが、何と殘念なことであろう。林檎は大きすぎて、格子の間を通れないのである。これを引出すために、どれほどの工夫をしたことだろう。串をそのまま留めておくための支え、林檎を割るための長い小刀、割ったのを受けるための小さい板切れなぞを探し出さなければならなかった。手を盡し、時間をかけて、漸くのことで林檎を二つに割ることができた。これを一きれずつ引出すつもりだったのである。ところが、林檎は二つに割れた途端に、二切れとも、納屋の中へすとんと落ちてしまったではないか。情深い讀者諸君、私の失望落膽を推量して頂きたい。

私は少しも勇氣を失わなかったが、しかし、時間をひどく空費してしまった。見つかる恐れがあった。そこでもっと旨くやるのは明日のことに延ばし、何もしなかったような涼しい顏で仕事にとりかかった。納屋の中に、自分に不利な證言をする二つの怪しからぬ證人のいることは、その時少しも考えていなかった。

あくる日、また好機を見つけて、新たな試みをやる。例の脚臺に登り、金串を延ばし、狙いを定める。いよいよ突き刺すばかりとなった……生憎なことに、龍は眠っていなかった。納屋の扉が不意に開いた。親方がそこからぬっと姿を現わし、腕を組み、こっちを睨みつけて、「やい、この野郎！」と言った。……ペンが手から落ちる。

そのうち、度々ひどい仕打を受けている間に、段々と神經が鈍って來た。しまいには、ひどい仕打を受けるのは、盜みに對する一種の賠償をしたようなものだから、こちらには盜みを續ける權利があるように思われて來た。振返って罰を見る代りに、前を向いて復讐を見た。盜人として自分を毆るのは、盜人たることを自分に許すのだと判斷した。盜むことと毆られることとは形影相伴うものであって、二にして一の狀態を成している。自分としては、この狀態の受持ちの分を果たせば、あとの役目は親方に委せておけばいい、と考えた。こう考えて、私は前より平氣で盜みをはじめた。「それからどうなるって？毆られるかも知れないって？　いいさ。おれは毆られるようにできてるんだから」と、自分に言うのであっ

*1　傳說にある話で、ヘスペルスの仙園には黃金の林檎の實る樹があって、これを百の頭を持つラドンという龍が護っているという。

た。

私は貪食ではないが、食うことは好きである。旨いものも好きだが、貪ることはない。他に好きなことが澤山あるので、この慾が紛れるのである。口が可愛くなるのは、心が暇の時に限る。そして、私の生涯には滅多に心の暇がなかったから、御馳走のことを考える折は、ほとんどなかった。私が自分の盗みをいつまでも食物だけに限らず、やがて氣を惹かれるあらゆる物にこれを擴げたのも、右の理由によるのである。しかも、私が本物の泥棒にならなかったのは、決して金にひどく氣を惹かれることがなかったからである。親方は、共同の仕事部屋の中に、別に一室を持っていて、鍵がかかるようになっていた。私はその扉を誰にも氣づかれずに開閉する方法を發見した。そして、其處へ入りこんで、親方の上等な道具や、優秀な圖面や、極印なぞ、それから、私が欲しがり、親方がわざと隱しているような品物を、手あたり次第に持ち出した。こういう盗みは、つまるところ罪のないものであった。なぜなら、親方の仕事に役立てるためにした盗みだったからである。ただ、私はそうした下らないものを手に入れるのが、うれしくてたまらなかった。技術の生んだものを盗めば、技術まで盗んだような氣がしていたのであった。ところが、箱の中にはほかにも金や銀の切屑、小さい寶石類、賞牌や貨幣なぞが入っていたのである。ポケットに四五スーもあればせいぜいのところだった私が、そういうものには何一つ手を觸れなかったどころか、欲しそうな眼つきさえしたことを憶えていない。そういうものは樂しいというよりも、恐ろしいもののように見えていたのである。このように、金錢とか金目なものを盗むことを恐れたのは、多くは教育から來たのだと信じている。そして、その恐れの中には、破廉恥とか牢獄とか刑罰とか絞首臺とかいう觀念が秘かに混っていたから、萬一そんな悪心を起したとしても、それは私を顫え上らしたことであろう。だから、自分の仕業は單なる悪戯としか自分には思われていなかった。そして、實際にまたそれ以外のものではなかった。これぐらいの事なら、親方からひどい目に遭わされる程度のことであって、その覺悟は豫め自分にもできていたのである。

しかし、もう一度言うが、私はそれほど物を欲しがったわけではないので、自制をするほどのことはなかったのである。心中の葛藤を感じたことは少しもなかった。たった一枚の畫用紙が、その二十帖を買えるほどの金錢よりも強く私を誘惑したのであった。このような奇妙な癖は、私の特異な性格の一面から由來していろ。これは私の行爲に非常な影響を及ぼしているので、玆で説明しておく必要がある。

私は極めて激しい熱情の持主である。これに動かされているときの私の傍若無人さには比べるものがない。遠慮も顧慮を恐怖も作法もあったものではない。破廉恥で、圖々しくて、亂暴で、不敵である。どんな恥辱も私をとどめず、どんな危險も私を恐れさせない。思いつめた唯一つの目的より他には、宇宙とてもはや何物でもない。ところが、これが、ただ一瞬間しか續かないのである。次の瞬間には茫然自失の狀態に投げこまれる。平靜な時の私は無氣力と臆病そのものである。あらゆる事が私を怖氣づかせ、厭氣を起させる。蠅の飛ぶのも恐ろしい。言うべき一つの言葉、爲すべき一つの動作も、私の怠惰心を脅やかす。恐怖と羞恥に抑えつけられて、あらゆる人々の眼からわが身をかき消したいと思うほどである。動かなければならないとしても、どうしていいか自分には分らない。口を利かなければならないとしても、何と言っていいか自分には分らない。人から顔を見られると、どぎまぎしてしまう。熱中している時には、言うべき言葉を時には見出せないこともないが、普通の座談では、何も、全然何も見出せない。座談というものは、自分が喋るのを強いられるという唯一つの理由のために、私には全くの苦手である。

これに加えて言いたいのは、私の主要な嗜好は、どれ一つとして、金で買える物事にはなかったということである。私には純粹の快樂だけが必要なのであつて、金錢はそれらのすべてを毒する。例えば、私は食事の樂しみが好きだ。しかし、上流社會の窮屈も、料理屋のどんちゃん騒ぎも、我慢のならない私は、友達一人ぐらいと一緒でないと、食事の樂しみを味わうことができない。自分一人だけでは駄目である。一人でいると、想像が他の事に占められて、食事の樂しみを持つことがない。血が燃え上れば、女もほしくなるが、心が沸き立てば、もっと戀がしたくなる。だから、金錢で買える女は、どんな魅力も失われてしまう。そんなものを自分の役に立てる氣があるかどうかも疑わしい。自分の手の屆くところにある快樂はすべてこの通りである。快樂は無償でなければ、その趣きがないように思われる。本當に味わうことのできる人にしか與えられない幸福、私はそういう幸福のみを好んでいる。金錢というものは、人々が思っているほど貴重な物とは決して私に考えられなかった。それどころか、ひどく便利なものとさえ思えなかった。金錢はそれ自体では何の役にも立たぬ。それを樂しむためには、何かに變えなければならない。買ったり、値切ったり、度々だまされたり、ぼられたり、喰わされたりしなければならない。上等の品物をほしいと思う。自分のお金で買うと、必ず悪い品物を握らされてしまう。生みたて卵を高値で買うと、きっと古い卵だ。見事な果物だと思うと、きっと未熟である。生娘かと思うと、と

んでもないあばずれ女であったりする。私は良い葡萄酒が好きだ。しかし、何處でそれを手に入れようか。酒屋で？　どんなに手を盡したって、酒屋はきっと毒を飲ませるにきまっている。どうしても、上等の御馳走がほしいと思う。その心配、その面倒なことはどうだろう。友達がある、文通をする、頼む、書く、行ったり、來たり、待たされたりする。そして、その擧句が大抵はやっぱりだまされることになる。金錢のために何という苦勞なことだろう。良い葡萄酒が好きなよりも、この苦勞の方がよほど恐ろしい。

私の徒弟時代、それから、その後を通じても、何回となく私は何か旨いものを買うつもりで戸外へ出ることがあった。菓子屋の店へ近づくと、賣場のところに女たちの姿が見える。するともう、その連中がこの小さな食いしんぼうのことを仲間同志で笑ったり、馬鹿にしたりしているように見えるのである。果物屋の前を通りかかって、見事な梨を横目で睨む。いい匂いが私を誘惑する。そのすぐそばに若い人が二三人いて、こっちを見ている。自分の顔を見知っている男が店先にいる。遠くから娘が一人やって來るのが見える。あれは家の下女ではあるまいか。近眼の私は色々な錯覺を抱く。通りすがりの人々は、みんな知り人のように思い違える。どこへ行っても尻ごみをする。何か邪魔が入る。慾望は羞恥と共に增大する。そして、ポケットには慾望を滿足させるだけのものを持ちながら、何も思い切って買うことができず、とどのつまりは、慾望に身をさいなまれ、まるで阿呆のようになって歸って來るのである。

自分のお金を、自分が費う場合でも人が費う場合でも、その時いつも私の體驗した困惑・羞恥・不快・不便、あらゆる種類の嫌惡なぞのことを一々話したら、興味索然たる詳細に立入ることになるであろう。讀者は、私の自傳が進み、私の氣質を識るようになるにつれて、こちらからわざわざ言うまでもなく、こういうことは察しがつくようになるであろう。

この事が分って貰えれば、私のいわゆる矛盾の一つ、つまり、ほとんど卑劣とも言えるほどの吝嗇と、金錢に對するこの上もない輕蔑とが一緒になっているという矛盾も、容易に分って貰えるであろう。金錢は私にとってあまり便利なものではないから、無くても別にほしいとも思わないし、また、持っていれば、長いこと費わずに藏っておく。お金を好きなように使うことを知らないからである。しかし、好ましい、適當な機會が到來しさえすれば、私は直ちにこれに乘じ、氣のつかないうちに財布は空になっている。とは言っても、見榮で札びらを切るという、吝嗇漢によくある變な癖が、私にもあると思って貰っては困る。私の場合は、その反對に、祕密のうちに、自分の樂しみのために、散財するのであって、

金を費うのを見せびらかすどころか、かくれてこっそりやるのである。金錢は自分に用のないものであることをよく知っているから、お金を持っていることはほとんど恥かしいし、お金を役立てることなぞ一層恥かしいのである。若し樂に暮せるだけの收入があったら、けちけちする氣には決してならなかったであろう。私はこれを確信している。收入を增やそうなぞとは思わず、みんな費消してしまうであろう。ところが、今のような不安定な狀態では、始終心配ばかりしていなければならぬ。私は自由を熱愛する。束縛や苦勞や屈從を憎惡する。財布の中のお金の續く間は、これが私の自主を保證してくれる。何處かでお金を見つけなければならない苦勞を、しなくても濟む。この苦勞が一番嫌いだ。だから、お金がなくなるのが怖いから、大切にするのである。所持する金錢は自由の具である。追求する金錢は奴隷の具である。私がお金を握りこみ、しかも、何物も欲しがらないのは、右の理由による。

從って、私の無慾は怠惰に他ならない。金錢を持つ樂しみは、わざわざ苦勞して手に入れるほどのことではない。また、私の浪費もまたさらに怠惰に他ならない。氣持よく散財のできる折が到來したら、いくらでもそれに乘ずる。私は金錢よりも物に惹かれる。なぜなら、金錢と所望の物との間には常に何か仲介物があるのに、物とその享樂との間には仲介物なぞないからである。物が見えると、氣を惹かれる。物を手に入れる手段だけが目に映ると、氣を惹かれない。だから私は下らない小泥棒だったのだ。今でも、詰らないものがほしくなって、頼むよりも取った方がいいと思うと、やはりこの小泥棒をやる。しかし、子供の頃でも大人になってからでも、誰からも鐚一文お金を掠めたことは憶えていない。ただ、一度だけ、まだ十五年とは經たないが、昔、七リーヴル十スーのお金をごまかしたことがあった。この事件は物語るだけの値打がある。というのは、そこには厚顏と愚鈍が見事にせり合っていて、自分以外の人のことだったら、私自身にも一寸信じられないほどの話だからである。

パリであったことだった。私は丁度五時頃にパレ・ロワイヤルを、フランクイユ氏[*1]と一緒に散歩していた。氏は時計を出して見てから「オペラ座へ行こうじゃありませんか」と、言った。私も望むところだった。二人は出かけて行った。フランクイユ氏は正面棧敷の切符を二枚買い、一枚を私に渡し、別の一枚を持って先に立った。私はあとについた。氏は入った。その後から入ると、入口は大變な混雜である。見ると、みんな立っている。この人ごみでは紛れてしまう、少くも、向う

*1　ルソオの知己、本書第七卷以後に出る。

には私と紛れたと思いこませることができる、と判斷した。そこで、私は外へ出て、合札を貰い、それから切符代を拂戻して貰った。そして、そのまま立去ったのであるが、この時、自分が戸口を出るか出ないかのうちに、みんなが腰を下ろし、フランクイユ氏が私のいないことをはっきり見て取ったとは思いもしなかったのであった。

このような行いほど今までの私の性質から遠いものはなかったから、人間をその行爲の上から判斷してはいけない一種の無我の境とでもいった瞬間があるものだということを示すために、私はこれを述べたのである。この場合、私はその金を盜んだのでないことは明白である。金の用途を盜んだのである。しかし、盜みは盜みであった。盜み以上のものだった。破廉恥であった。

私が徒弟時代を通じて、崇高な英雄主義から陋劣な碌でなし根性に移った筋道を一々話そうとしたら、その詳細はいつ果てるとも思われない。ただ、自分の境遇なみの惡德は色々とやったけれども、それが全く自分の嗜好となりきることはできなかった。朋輩のやる娯樂は詰らないと思った。そして、あまりにひどい束縛のために仕事に厭氣がさして來ると、もう何もかも詰らなくなった。このことが、永らく失っていた讀書の嗜好を甦らせた。このような讀書は、仕事をそっちのけにするために、さらに新しい罪となって、新しい罰を招いたのである。この嗜好は、拘束のために刺戟され、情熱となり、やがて激情となった。ラ・トリビューという評判の貸本屋のおかみさんが、あらゆる種類の本を貸してくれた。良いものでも、惡いものでも、何でもよかった。選り好みはしなかった。何でも同じように貪り讀んだ。仕事臺のところでも讀んだ。お使いに行きながらでも讀んだ。便所でも讀んだ。そして、時間をすっかり忘れてしまった。讀書のために頭がくらくらした。それでも本を讀むことしかしなかった。親方は私を監視し、現場を見つけ、私を毆って、本を取り上げた。何册の本が破かれ、燒かれ、窓から投げ捨てられたことだろう。ラ・トリビューの店には半端になった本がどれほど殘されたことだろう。おかみさんに拂うお金がなくなると、シャツやネクタイや衣類まで渡した。日曜ごとの三スーの給金は、きちんきちんとおかみさんのところへ持って行かれた。

そら、お金が要るようになったではないか、と、人々は言うかも知れない。それはその通りである。しかし、その時には、讀書が私からあらゆる活動性を奪ってしまっていた。新しい嗜好に全身を打ちこんでいたから、もう讀むことしかせず盜みはしなくなっていたのである。ここにもまた私の特異な性格の一面がある。習慣的な生活をしているうちに、何か

一寸したことが心を奪い、氣分を變え、私を惹きつけ、終には夢中にさせてしまう。そうすると、何もかも忘れる。もう自分を占める新しい對象のことしか思わない。ポケットに入れた新しい本を早くめくりたいと思って、胸がわくわくした。一人になると、さっそく本を取り出した。そして、もう親方の仕事部屋をかきまわすようなことは考えなくなった。もっとお金のかかる情熱にとらわれたとしても、盜みをしただろうとは自分には考えられない。心の中は現在のことだけに限られていたから、將來に備えるために盜みをしようという氣はなかったのである。ラ・トリビューは信用貸しをしてくれた。前金は少額だった。そして、私は本さえポケットに入れてしまえば、あとはもう何も考えなかった。お金は自然に私の手に入り、自然におかみさんの手に渡った。そして、向うがお金を催促するようになると、自分の持物にまっさきに手をつけた。前もって盜んでおくという先見の明はなかったし、拂うために盜むという氣になったことさえなかった。

喧嘩・毆打・手當り次第の盜み讀み、そういうものが度重なって、私の氣質は寡默で交際嫌いになった。頭は變性しはじめた。そして、まったく狷介孤獨な少年として日を送った。しかし、私の趣味は、低俗卑近な書物を私に避けさせてはくれなかったにしても、私の幸運は、淫猥放縱な書物から私を守ってくれたのであった。ラ・トリビューは、何事につけても非常に融通の利く女だったが、そういう本を貸すことだけは氣がさしたというわけではない。それどころか、そういう本に勿體をつけるために、何か意味ありげな樣子で本の名を言うので、こちらは嫌惡と羞恥とから、それを斷らなければならなくなったことは確かである。そして、この恥かしがりの性質に偶然がうまく手傳って、社交界の美しい婦人が內證でなければ讀めないので不便だと思うような危險な書物は、三十歲になるまでは、一册も眼にしたことがなかったのである。

一年足らずのうちに、ラ・トリビューの小さい店の本は殘らず讀みつくした。そうすると、暇のときはたまらなく無聊に苦しんだ。讀書の趣味と、また讀書そのものによって、腕白な子供らしい趣味は治ってしまった。私の讀書は、手當り次第な、屢々不良なものではあったが、それでも自分の境遇から受ける感情よりは遙かに高尙な感情に、私の心を引きもどしたのであった。自分の手のとどくところにあるすべてのものに嫌惡を感じ、自分の心を惹きそうなすべてのものが餘りに遠くにあるように思われて、もはやわが心を悅ばせ得るものは何物も眼に映らなくなった。だいぶ以前から蠢いてい

た肉感は、何か享樂を求めていたが、その對象が何であるかは自分にも想像がつかなかった。私はまるで性のない者のように、現實の對象から遠ざかっていた。そして、すでに多感な年頃になっていた私は、時には自分の變質的な行爲のことを思うのであるが、それより先のことは何も分らなかった。このような奇妙な狀態の中で、私の不安定な想像は一つの手段を採り、これが私を私自身から救い、萠しつつあった性慾を鎭めたのであった。その手段というのは、讀書中に興味を抱いた色々な境遇をわが身の糧とし、それらを回想し、變形し、結合して、これを自分に適應させることであった。これがため、私は自分の想像する人物の一人と成り、好むままに常に最も樂しい地位に自分自身の姿を見、終には、わが身を置くことのできた架空の狀態によって、自分の最も不滿に思う現實の狀態を忘れることができるようになったのであった。このような想像上の事物への愛と、それに耽ることの容易さが、終には自分を取りまくすべての物を嫌惡させるようになり、その時以後ずっと殘っているあの孤獨を好む性癖を決定してしまったのである。この性向は一見するところ甚だ嫌人的であり陰氣であるが、その實は、餘りに情愛深く、餘りに慈愛深い心が、己れに似たものを現實に見出し得ないため、止むを得ず架空のものをわが身の糧とするところから來るものであって、この後の物語には、一度ならず、この性向の奇妙な結果を見ることとなろう。今のところは、あらゆる私の熱情を調節し、熱情を熱情自身で抑制しつつ、慾望の强すぎる餘り却って常に實行を鈍らせるようになった一つの傾向、その根源とその第一因を玆に指摘しただけで滿足しておく。

かくして、私は十六歲の春を迎えた。不安で、あらゆることに、自分自身に、不滿であり、境遇相應の嗜好もなく、年齡相應の愉樂もなく、目的の分らない慾望に身をさいなまれ、わけもないのに涙を流して泣き、何とは知らず歎息し、終には、自分の妄想に勝る何物も周圍に見出せないために、心をこめて妄想を愛撫するのであった。日曜日には、說敎の後で、友達たちが私のところへ來て、一緒に遊ぼうと誘った。私は若しできたらこの連中からよろこんで逃げだしたに違いない。ところが、一度仲間の遊びに入ってしまうと、私は誰よりも熱中し、度をすごした。動かすことも、引きとめることも難かしい。これがいつでも變らない私の性向だった。郊外の散步に出ても、他のものが注意してくれなければ、いつでも歸りのことなぞ考えず、先頭を步いた。これで二度ほど失敗した。行き著かないうちに市門が閉まったのである。あくる日は御察しの通りの待遇を受けた。そして、二度目の時には、もう一ぺんやったらどんなひどい目に遭うか知れないぞと脅かされたので、これからは決して危いことはやるまいと決心した。ところが、それほどこわがっていた三度目が來た

のである。私の用心は、ミニュトリという名の憎むべき隊長のために、まんまと裏をかかれた。この隊長は自分が警備している市門を、いつも他の市門より三十分も早く閉めるのであった。私は二人の友達と歸り道にあった。市から半里のところまで來ると、歸營の喇叭の鳴るのが聞える。足を速めた。太鼓の音が聞える。一目散にかけ出す、汗ぐっしょりになり、息を切らして歸って來る。動悸が打つ。番兵が哨所に立っているのが遠方から見える。馳けつける。息もきれぎれに怒鳴る。もう遲すぎた。市門の外側の哨所から二十步ばかりのところまで來ると、第一の跳橋の上るのが見える。空中に上るあの恐ろしい橋桁の角を見て、思わずぞっとする。それこそ、その瞬間からこの身に起りはじめた避けがたい運命の、不吉な因果な前兆であった。

最初は悲しみのあまり無我夢中で斜堤に身を投げ出し、地面に嚙みついた。友達たちは不運を笑って、すぐに決心をきめた。私もまた決するところがあった。しかし、その決し方は友達たちとちがっていた。もう決して親方のところへは戻るまい、とその場で心に誓ったのである。こうして、あくる日の開門の時に、友達たちは市へ歸ることになった。私は皆に永久の別れを述べ、從兄のベルナールに自分の採った決心と、もう一度私に會える場所をこっそり敎えてやるように、一同に賴んだだけだった。[註13]

徒弟に入ってからは、從兄とは前より一層離れてしまって、あまり會わなくなっていた。それでも、しばらくの間は、日曜のたびに二人で寄り合った。しかし、いつとはなしに二人はそれぞれ異った習慣を持っようになり、會うことも減多になくなった。この變化には、從兄の母親が大いに干與していたように信じている。從兄はいわゆる「山の手」の子であり、私は、しがない徒弟であって、「サン・ジェルヴェ」[*1]の子にすぎなかった。二人は生れこそ同じだが、もう平等ではなくなっていた。私と附き合うことは沽券にかかわるのであった。とは言いながら、二人の關係が全く切れていたわけではなかった。それに、從兄は生れつき優しい少年だったから、母親の誠めよりも自分の心の命ずるところに從うことが時々あったのである。私の決心を知らされた從兄は、さっそくやって來た。しかし、それは私の決心を飜えさせるとか、私と決心を與にするとかのためではなく、ささやかな餞別をくれて、この出奔にいくらか力を添えようとするためだった。

*1 ジュネーヴ市の一部は丘陵地帶であり、この山の手は上流階級の住宅地域であった。下町は一般庶民の住宅地域で、殊にローヌ河に沿うサン・ジェルヴェ區はそうであった。

私の持っていたものだけでは、それほど遠くまで行くことができなかったからであった。従兄のくれたものの中に、取り分け一ふりの短劍があって、私はこれが非常に氣に入った。この短劍は後にトリノまで持って行き、そこで必要に迫られて手離したのであるが、その時はまったく身を切られるような心持がしたものである。後になって、この危機に臨んで、従兄が私に對して採った行動を考えてみればみるほど、それは、母親の、また恐らくは父親の指圖に従ったに違いないと思いこんだ。というのは、従兄だけだったら、私を止めようと骨を折るとか、私について來るとか、しないわけがないのである。ところが、そうしなかった。こちらの計畫を思いとまらせるどころか、却って勵ました。それに、こちらがすっかり腹を決めているのを見てとると、あまり涙を流さずに、別れて行ったのである。その後、われわれは一度も文通せず、會いもしなかった。殘念なことである。従兄はもともと善良な性質であった。二人は互に愛し合うようにできていたのであったのに。

これから私は因果な宿命に身を委ねることになるが、その前に、若し自分がもっと良い親方の手に落ちていたならば、どのような自然な宿命が私を待っていただろうかということに、しばらく眼を轉じさせて頂きたいと思う。善良な職人の、とりわけ、例えば、ジュネーヴに於ける彫刻師と言ったような、或る種の階級に屬する職人の、靜かな、目立たない職業ほど、私の氣質に合った、また私を幸福にするに適したものは他になかった。この職業は、安樂な生活を與えるに十分なほど利益があり、一かどの財産をこしらえるほど十分には利益がないから、その後の餘生に、私の野心を抑えつけてくれたであろう。そして、適當な趣味を養うための、まともな餘暇もあることだから、自分の世界にとどまって、その外へ出ようという氣にはなれなかったであろう。どんな境遇でもその空想で飾ることのできるほど豐かな想像力、言わば好むままに一の境遇から他の境遇へと自分を運び去ることのできるほど力强い想像力を持っていた私は、實際にどんな境遇にいようと、それは大して問題にならなかった。自分の居場所から手近な空中樓閣まで、さほどの距離がある筈もなかったから、それに安住することも容易であった。このことからだけでも、最も單純な職業、勞力や心配の最も少い、精神を最も自由にしておいてくれる職業が、最も適當したものであったということが言える。そして、私の職業が正にそれであったのである。私は自分の宗教、祖國、家族、友人たちの中に安住して、自分の好みに合った仕事と、自分の心にかなった社交との一致の中に、自分の性格が必要とする通りの平和な安穩な生活を送ったであったろう。善良なキリスト教徒、

善良な公民、善良な一家の父、善良な友、善良な勤勞者、仕事につけても善良な人間となったであろう。自分の職業を愛し、恐らくはこれを尊重もしたであろう。そして、地味で人目には立たないが、平穩で靜かな生涯を送った後に、家人の胸に抱かれて安らかに死んだであろう。そして、やがて必ず忘れられるにしても、しかし、少くも憶えていてくれる間は、人々から惜しまれるであろう。

ところが、それどころか……これから私はどのような光景を描こうとするのであろう！　あゝ、みじめな自分の生涯を前もって言うことはやめよう。この痛ましい主題については、これから讀者諸君を、いやと言うほど煩わすことになるからである。

第二卷

（一七二八年――一七三一年）

恐れのために出奔を企てる氣になった時は、悲しく思ったが、これを實行した時は、またそれだけに樂しく思われた。まだ子供でありながら、國を棄て、親戚や賴りや力となるものを棄てる。一本立ちのできるほど自分の職をまだ習い覺えないのに、中途で徒弟をやめる。そこから拔け出す術も知らないのに恐ろしいみじめさの中に自ら飛びこんでいく。世間知らずのか弱い年頃の身で、惡德や絶望のあらゆる誘惑の危險を冒す。自分に辛抱できなかった首枷よりも、さらに一層頑丈な首枷をかけられて、不幸・過誤・陷穽・束縛・死なぞを遠方に求めに行く。これこそ、私のしようとしていたことであった。これこそ、これから自分の直面する筈の前途であった。私の描いていた前途は何と異ったものだったろう。私は獨立を獲得したつもりだった。そして、この獨立こそ私の心を動かす唯一の感情だった。今まで自由で自分の思いのままのできた私は、何でもでき、何にでも到達できると思った。大空に昇って天翔けるためには、ただ飛び立ちさえすればよい。廣々とした世界へ堂々と入って行くのだ。自分の才能が世界を充たすのだ。一足進むごとに、饗宴・財寶・冒險・いつでも自分のために盡してくれる友人たち、私にとり入ろうとしてちやほやする婦人たちを見出すのだ。自分が姿を現わせば、宇宙は自分だけで占めてしまう。いや、宇宙全體ではない。宇宙全體は勘辨してやろう。そんなに澤山は必要ない。愉快な社交界一つだけで澤山だ。あとは却って邪魔になる。謙遜して、狹いがしかし選り拔きの世界に入ることにし

よう。そこでは自分の君臨が保證されているのだ。私の野心はただ一つの城館だけに限られていた。城主と奥方の寵臣となり、姫君の愛人となり、その兄弟の友となり、隣人たちの保護者となれば、それで私は滿足だった。それ以上は必要なかった。

このようなささやかな未來を期待しながら、私は數日の間、市の周邊を放浪して、知合いの農家に泊めて貰った。農夫たちはみな、市の人たちよりもずっと親切にもてなしてくれた。ごく率直に私を迎え、泊らせ、食事を供してくれて、少しも恩著せがましいところがなかった。それは施與と呼ばれ得るものではなかった。それほど優越の風を示さなかったからである。

こうして世間をほっつき歩いた擧句に、ジュネーヴから二里のところにあるサヴォア領のコンフィニョンまで來た。ここの司祭はポンヴェールという名だった。ジュネーヴ共和國史に有名なこの名は、私の心を非常に打った。あの「匙の貴族」[註1]の子孫がどのような人間であるのか知りたくなった。そこでポンヴェール氏に會いに行った。氏は私を優しく迎え、ジュネーヴの邪教のこと、神聖な母なる「教會」のことなぞを話して聞かせ、それから御馳走してくれた。このような結末に終ったお説教に對して、私は殆んど答えることを見出せなかった。そして、こんな御馳走をしてくれる司祭は、少くもわが國の宣教師と同じほど立派であると判斷した。ポンヴェール氏は貴族かも知れないが、私の方が遙かに物識りだった。しかし、樂しく食事を共にした私は、神學者ぶるどころではなかった。しかも、そこに出されたフランジ葡萄酒は實に素晴らしく思われ、これですっかり參ってしまった。だから、こんな親切な主人を言い負かしたり、却ってこちらが恥かしくなるほどだった。そんなわけで讓歩したのである。少くも眞正面からは抗辯しなかった。私がこんな斟酌をしたと言えば、阿諛佞辯の徒のように思う人があるかも知れない。あったら、それは間違いである。私が禮儀正しくしていたことは確かであった。追從、或いはむしろ謙讓というものは必ずしも惡德ではない。むしろ、とりわけ若年の者にあっては、屢々美德となるものである。われわれが厚意をもって遇せられれば、そのために相手に惹きつけられる。相手に讓歩するのは、欺くためではなく、いやな思いをさせないためである。善に對して惡を報いないためである。ポンヴェール氏が私を迎え、歡待し、說得しようとしたのは、誰のためであったろうか。私のために他ならない。私の若い心はこのことを自分自身に言ったのである。私はこの善良な司祭への感謝と尊敬に心を打たれた。自分の優越は感じていたが、相手の

手厚いもてなしの返禮に、それを振りまわそうとは思わなかった。この行爲には僞善的な動機は少しもなかった。私は自分の信教を改めようとも思わなかった。そのような考えとは手輕に馴々しくなるどころか、一種の恐怖の情をもってでしかこれに對しなかった。この恐怖の情が、その後長い間、私をこの考えから遠ざけることになるのである。私はただ、そのような見解の下に自分を可愛がってくれた人々の氣を惡くしたくないと思っただけであった。相手の厚意を無にせず、こちらが實際よりも頑固でないように見せかけて、相手に成功の希望を持たせておきたいと願ったのである。この點に於ける私の過失は、身持のいい婦人の媚態にも似たものである。というのは、そういう婦人は時として、その目的を達するために、相手に何も許さず何も約束しないのに、法外の希望を相手に抱かせる術を知っているものだからである。

理性と憐憫と、秩序を愛する心からすれば、私の無鐵砲な行動に迎合せず、私を家へ送り歸すことによって、私の陷ろうとしている破滅から私を遠ざけるべきであったことは言うまでもない。それこそ、眞に有德の人なら、誰でもしたであろうし、また、しようと努めたことである。ところで、ポンヴェール氏は、善人ではあったけれど、確かに有德の人ではなかった。それどころか、氏は聖像を崇拜し、祈禱を唱えることより他の德を識らぬ盲信の徒であった。ジュネーヴの新教宣教師たちに對する誹毀文書を作ることが、信仰のための最善事だと考えている一種の布教師であった。ポンヴェール氏は私を家へ送り歸そうと考えるどころか、家から離れたいという私の願望に乗じて、もう歸りたいと思う時にも歸れないような狀態に私をしてしまったのであった。送り歸されたにしても、私はみじめな死に方をするか、ならず者に成るかしたに違いなかった。しかし、ポンヴェール氏がそんなことを見て取っていたというのではない。氏の見ていたのは、邪教から脫し、公教に歸依する一つの魂であった。私がミサにさえ行けば、正しい人間であろうとならず者であろうと、そんなことは構うことではない。尤も、このような考え方が、カトリック教徒に特有なものだと考えてはいけない。それは、行いでなく信ずることを主眼とするすべての獨斷的な宗教の考え方である。

「神さまがあんたをお呼びだ」と、ポンヴェール氏は私に言った。「アヌシーへ行きなさい。[*1] そこには大變に情深い或る婦人がいらっしゃる。その方は、王樣からのお惠みを受けておられるから、他の人々の魂を過ちから救い出すことのおできになる身分でいらしゃる。御自分もやはり過ちをお改めになった方なのです」

*1 ジュネーヴの南三十キロ。

それは近頃改宗したヴァラン夫人のことだった。夫人は、實際に、サルジニヤ王から受けていた二千フランの年金を、信仰を賣った卑劣漢にも頒けるようにと、牧師たちから强制されていたのである。私は大變に情深い親切な婦人なぞに賴ることは非常な恥辱のように感じた。必要なものを人から貰うことはとても好きだったが、人の慈悲を受けるのは好むところではない。それに、女の信心家なぞ私にはあまり魅力がなかった。しかし、ポンヴェール氏にせき立てられ、迫り來る飢にせめ立てられ、一方では旅行すること、目的を持つことが樂しく、私は澁々ながら心をきめ、アヌシーへ向けて出發した。アヌシーへ行こうと思えば一日で樂に行けた。しかし、私は急がずに、三日かけた。右や左に城館を見ると、必ず何か夢のような出來事が自分を待っているに違いないと思えて、一々そこへ行ってみた。内氣なたちだったから、城館に入ったり、扉を叩いたりはしなかったが、ここぞと思う窓の下へ行って歌を歌った。歌は友達たちから教わってすばらしいのを知っていたし、歌い方もなかなか見事なものだったのに、胸の痛くなるまでさんざん歌いまくっても、この美聲や歌の味に惹きつけられて姿を現わす奥方も姫君もいないのには、まことに意外な氣持がした。

とうとう行き著いて、私はヴァラン夫人に會う。生涯のこの時期が私の性格を決定したのである。私はこの時期を輕々しく見逃す氣にはなれない。十六歳の丁度半ばであった。いわゆる美少年ではないが、均齊のとれた小柄な體軀であり、美しい足、細い脛、輕快な樣子、生々とした顏つき、可愛らしい口もと[*1]、黑々とした眉毛と髪の毛、眼は小さくて窪んでさえいたが、それは、血を燃え立たせる焰を力强く放っていた。ところが、不幸なことに、自分ではこれを少しも知らないでいた。そして、もう役に立たない頃になって、私は初めて自分の容姿を考えるようになったのである。だから、私は、その年頃にありがちな内氣さに加えて、人なつこい癖に相手に嫌われやしないかと恐れて惱む内氣さをも具えていた。その上、智能こそ相當に進んではいたが、まだ世間をよく知らないので、禮儀作法が全く分っていなかった。しかも、私の知識は、その缺を補うどころか、自分に缺けたところがいかに多いかを自身に感じさせて、却って益々自分を内氣にさせることにしか役立たなかったのである。

從って、最初のお目見得が先方の好意を得ないと困ると考えた私は、自分の長所の發揮の仕方を變えて、演說口調の立派な手紙をしたためることにした。その手紙は、本の中で見た文句と、徒弟の使う用語とを綴り合せたようなもので、これをもってヴァラン夫人の好意を獲得しようと、有りったけの雄辯を開陳したのであった。この手紙の中にポンヴェール

氏の紹介狀を同封し、いよいよこの畏れ多い拜謁へと出かけて行った。ヴァラン夫人はいなかった。たった今、教會へ行くといって出かけたばかりのところだと教えられた。それは一七二八年の「枝の祭[*2]」の日のことだった。私はあとを追って走る。夫人の姿を認め、追いつき、話しかける……あの場所のことを思い出さずにはいられない。後になって、私はその場所を屢々涙でうるおし、接吻で蔽ったのである。あの幸福の地に、黃金の柵をめぐらすことができないものだろうか。人類救濟の記念物を尊敬することを好むものは誰でも、あの地に、全世界の讚仰を蒐めることができないものだろうか。

跪くことなしには、その地に近寄ることは許されないであろう。

そこは夫人の家の背後にある細道であった。細道の右手には庭園と境を接して小川が流れ、左手には塀があって、くぐり戸から、聖フランシス教會へ行けるようになっていた。ヴァラン夫人は、丁度その戸を入りかけたところで、私の聲に振りかえった。一目見た私は、どんな氣持がしたことだったろう！　私は、難かしい顏の、信心に凝りかたまったお婆さんを想像していた。ポンヴェール氏の言う親切な婦人ならば、そういうものより他のものではあり得ないと考えていた。ところが、私の見たものは、愛嬌の漲った顏、優しさの溢れた靑い美しい眼、目のくらむような顏色、妖艶な乳房のふくらみであった。何ものも、若い改宗者のすばやい一瞥からは遁れなかった。若い改宗者というわけは、私が忽ち夫人のものとなってしまったからである。このような布教者に說かれる宗教ならば、人を天國に導かない筈はないと確信したのである。夫人は私が顚える手で差出す手紙を、にこにこしながら受取り、開封して、ポンヴェール氏の紹介狀を一寸讀んでから、今度は私の手紙に戻って、それを全部讀み下す。若し夫人の從僕が、お勤めの時間の迫っていることをそばから注意しなかったら、もう一度讀み直したかもしれなかった。

「まあ！　あんた」と、夫人は顚いつきたいような調子で言った。「まだ年も行かないのに、そこいらを渡り歩いているんですって。本當に、可哀そうだわね」

それから、私の返事も待たずに、

「わたしの家へ行って待っていらっしゃい。何か食べるものを出すようにおっしゃいよ。わたしは、ミサを濟ませてか

*1　異本。「齒なみはひどく惡いが、可愛らしい口もと」。

*2　復活祭の前の日曜日。通常三月中旬にあたる。

ら、歸ってお話ししましょう」と、言い添えた。

ルイーズ・エレオノール・ド・ヴァランは、[*1]ヴォー州の都會ヴヴェーの舊い家柄の貴族ラ・トゥール・ド・ピル家の令嬢であった。ごく若い頃、ローザンヌのヴィラルダン氏の長子、ロア家のヴァラン氏のもとへお輿入れしたが、この結婚からは子供が一人も生れず、その上、あまりうまく行かなかった。ヴァラン夫人は、色々と家庭内の心痛もあって、そのため、丁度ヴィットリオ・アメデオ王が[*2]エヴィアン[*3]に居たのを幸いに、湖水を渡ってこの君主の足下に身を投じた。こうして、私と似たような輕はずみから、夫や家や國を棄てたのであるが、この輕はずみは後々まで夫人の嘆きの種となっていた。王は熱心なカトリック教徒を氣取るのが好きだったので、さっそく夫人を庇護して、ピエモンテの金で千五百リーヴルの年金を與えることにしたが、これはあまり氣前のいい方でもない君主の身にしてみれば大した額であった。しかし、このような厚遇から、夫人に野心があるように思われていることに氣づいた王は、一分隊の親兵を夫人につけて、アヌシーへ送りとどけた。夫人はアヌシーへ來てから、ジュネーヴの名儀司教ミシェル・ガブリエル・ド・ベルネー[*4]の指導の下に、聖母訪問會の修道院でカトリックに改宗したのであった。[註15]

私がアヌシーへ來た時、夫人はすでにこの地に六年住んでいた。[註16]そして、夫人はこの世紀と共に生れた人であったから、當時は丁度二十八歳であった。その美しさは、一つ一つの眼鼻立ちにあるのではなく、全體の顏立ちにあった。從って、その容色はいつまでも衰えないたちのものだったから、その頃もなお若い頃の輝きを今を盛りと放っていた。愛撫するような物優しい容姿、この上もなく和やかな眼差し、天使のような微笑、私と同じぐらいの口もと、比類なく美しい銀灰色の髪の毛、それを無造作に整えた工合が夫人の美しさを非常に目立たせていた。身體つきは小柄で、ずんぐりと、胴體の寸が少々詰っていたが、不恰好ではなかった。これほど美しい頭、美しい胸、美しい手、美しい腕はほかに見ることはできなかった。

夫人の受けた教育はまことに雜駁なものだった。夫人は私と同じように、生れると同時に母を亡った。そして、折にふれて出っくわす知識をそのまま無造作に受入れながら、家庭教師から少し、父親から少し、學校の先生から少し、戀人たちから、殊にタヴェル[*5]氏とかいう戀人から多くのものを學び取った。この人は、趣味もあり知識もあって、それをもって己れの愛人を飾ったのである。しかし、多くの異種の知識が互に妨げ合う上に、それを整頓しようともしなかったため

に、その種々雜多な學問は夫人の精神の生來の正しさを伸ばすことにならなかった。このように、夫人は哲學上や理學上の原理をいくらか身につけてはいたが、父親譲りの素人醫學や錬金術に對する趣味も持っていて、不老不死の靈藥とか、さまざまな仙丹類・清凉劑・仙藥なぞを作っていた。そして、これらの藥を拵らえる祕傳を知っていると稱していた。いかさま師たちが、この弱點につけこんで、夫人に取り入り、つきまとい、その身代をつぶさせて、上流社會の花となり得べき夫人の才智・才能・魅力を、あたら寵や藥品の間にくすぶらせてしまったのである。

しかし、たとえ卑劣な惡人どもが、誤った方向に向けられた夫人の素養を惡用して、理性の光を曇らせたかもしれないが、夫人の優れた心情はその試煉にたえて、常に變らずにいた。人なつこい柔和な性格、不幸な人への同情心、汲めども盡きぬ親切な心、陽氣な、開け放しな、淡白な氣質、そうしたものは決して少しも變らなかった。そして、老齡が近づき、不如意と不幸とさまざまな災厄の中にあっても、夫人の美しい魂の晴朗さは、生涯の終りまで、最も多幸な頃の陽氣さを持ちつづけたのであった。

夫人の過失は、たえず仕事を求める持前の不滅な活動性から來ていた。夫人の必要としたものは、女らしい手練手管ではなく、計畫したり指揮したりする事業であった。大事業をするように生れついていたのであった。夫人の地位にあれば、ロングヴィル夫人[*6]でさえも單なるあくせく屋にすぎなかったろうし、ロングヴィル夫人の地位に夫人があれば、一國を支配したかも知れなかった。夫人の才能は、その處を得なかったのである。そして、一層高い地位にあったならば名を擧げたであろうものが、實際生活に於てその破滅を齎したのであった。夫人は自分の手の屆く範圍にある事柄の中で、常に心中に計畫をめぐらし、常にその目的を大きく描いていた。このために、實力相應というよりも、目算に相應した手段を用いるので、實力の不足で失敗をする。だから、一たん思惑が外れるとなると、他の人ならほとんど何物も失わない場

*1 ルイーズ・エレオノール・ド・ヴァラン。ルソオの前半生に非常な影響を與えた女性として有名になった。
*2 當時のサルヂニヤ王。サヴォア公であったが一七二〇年以來サルジニヤ島を併有し、サルジニヤ王を稱した。
*3 エヴィアン・レ・バンと言って、ジュネーヴ湖の南岸、ローザンヌの對岸にある。
*4 一六九七年以來のジュネーヴ司教。一七三四年歿。
*5 エティエンヌ・シジスモン・ド・タヴェル。
*6 美貌をもつて鳴り、政治上に非常な權力を振ったことで有名である。ルソオと同年代の人。

合でも、夫人の場合は大損害を蒙るのであった。このような事業慾は、夫人に多くの不幸を齎したが、その反面に修道の隱れ家に餘生を留りたいという氣持を阻んだのであるから、その意味では少くも却って夫人の身のためにはなった、と言うことができる。修道尼の單調で簡素な生活、談話室の詰らない無駄話、そのようなものはすべて、日毎に新しい計畫を立て、それに打込むための自由を必要とする常に活動的な精神を滿足させることはできなかった。善良なベルネー司教は、フランソワ・ド・サル[*1]ほどの才氣はなかったが、多くの點でサルに似通ったところがあった。そして、ベルネー司教から「私の娘」と呼ばれていたヴァラン夫人も、また多くの點でシャンタル夫人に似ていたが、若し事業慾のために修道院の無聊を棄てなかったら、その隱遁生活の中では一層シャンタル夫人に似て來たことであろう。この愛すべき女性が、司教の監督下に生活する新改宗者に相應しいこまこました信仰上の務めに沒頭しなかったとしても、それは熱意が缺けていたからではなかった。夫人が信教を變えた動機が何であったろうと、一たん信奉した宗教には誠實であった。過失を犯したことを後悔したかも知れないが、再び元の信教に戻ろうと思うことはなかった。ヴァラン夫人は善良なカトリック教徒として死んだばかりでなく、心からのカトリック教徒として生活した。そして、夫人の魂の奥底までも讀み取ったと思っているこの私は、敢て玆に斷言するが、夫人が表面上信心家を氣取らなかったのは、ひとえに虛飾を嫌ったからにほかならない。信心を衒うためには餘りに堅固な信仰を持っていたのである。しかし、ここは夫人の宗教心について筆をのばす場合ではない。それについては、他に話す機會があると思う。

魂の交感ということを否定する人々に、できたら次のことを說明して貰いたいものである。どうして、ヴァラン夫人が、最初の會見、最初の言葉、最初の一瞥で、私の心に、最も强烈な愛著心のみならず、完全なまたその後も決して裏切られることのなかった信賴感をも抱かせたのであろうか。假に、私が夫人に感じたものが、本當に戀愛だったとしてみよう——われわれの關係についての物語をこれから讀む人には少くもこのことは疑わしく思えるであらうが——それならばどうして、その情熱は、それとは最も緣の遠い心の平和・落著・明朗・安靜・安心なぞという感情を、それが生ずると共に伴ったのであろうか。愛らしく、上品で、眩しいほどの女性に——今までそれに類する人には近寄ったこともない身分の高い貴婦人に——また、向うの抱いてくれる關心の大小に、いわば自分の運命がかかっているといったような女性に、生れて初めて近づきながら、どうして私は、向うの氣に入ることを完全に自信していたかのように、すぐその場で、全く

自由に、全く氣樂でいられたのであろうか。どうして私は、一瞬も當惑や羞恥や束縛を感じなかったのであろうか。生れつき恥かしがりやで、すぐどぎまぎして、全く世間知らずの私が、十年の後に初めて深い關係を結んで自然に身についたあの寛いだ態度、情愛のこもった言葉、親しい口調を、どうして、最初の日から、最初の刹那から、相手に向って採ったのであろうか。戀は、慾情なしに、とは私も言わない。自分にもその經驗がある。しかし、戀は、不安なしに、嫉妬なしに、できるものだろうか。少くも、愛する相手から、自分を愛しているかどうかを知りたいと思うものではなかろうか。ところが、そんな問は、自分が相手を愛しているだろうかと自分自身に訊く問以上に、生涯にただの一度も、ヴァラン夫人にしてみようなぞと心に浮んだことのなかった問である。そして、夫人の方も、私の氣持について決して知りたがらなかった。この魅力に富む女性に對する私の感情の中には、確かに何か一風變ったものがあった。後になって、讀者諸君は豫期しない奇妙なことを見出すであろう。

私の身の振り方が問題であった。そして、そのことについては、ゆっくり話し合わなければならないので、夫人は晝食まで私を引留めた。生れて初めての食慾のない食事であった。そして、給仕の小間使も、私の年頃や私のような身の上の旅の者で、食慾のないのを見たのはこれが初めてだと言った。というのは、その男は一人でたっぷり六人前の食事を平げに食事をしていた肥った田舍者にとっては少々耳が痛かった。この言葉は女主人の心に私を惡くは思わせなかったが、一緒ていたからである。私の方は一種恍惚の狀態にあったから、食べるどころではなかった。自分の全身を占めていた全く新しい感情を、私の心が食べていた。この感情が心の他の働きをすっかり止めてしまっていた。

ヴァラン夫人は私の身の上話の詳細を知りたがった。私はそれを話しているうちに、親方の家ですっかり失っていた熱情を再び見出した。このすぐれた魂の持主は、私への同情を唆られれば唆られるほど、これから私が陷ろうとしている運命を益々悲しんだ。優しい同情の念はその樣子にも、目つきにも、また素振りにも現われていた。夫人はジュネーヴへ歸れとは强いて勸めなかった。それは、夫人の立場からすれば、カトリック教の教えに背く罪となったであろう。また、夫人は、自分がどれほど一般から監視されているか、自分の言動がどれほど重視されているかを知らないではいなかった。しかし、私の父の懊惱については、非常に同情した口調で話していたから、私が父を慰めに行くことには贊成していたこ

*1 ジュネーヴの司教、シャンタル夫人と共に聖母訪問會の創始者(一五六七年—一六二二年)。

とはよく見て取れた。夫人はそれと知らず、いかほど自分の心と反對のことを言っていたかに氣づいていなかったのである。前にも言ったと思うが、私はすでに腹をきめてはいたけれども、それとは別に、夫人が言葉を盡して說得すればするほど、またその言葉が心に沁みれば沁みるほど、私は夫人から離れる決心が益々つかなくなるのであった。ジュネーヴへ歸ることは、前に採ったような手段をまた採らない限りは、夫人との間に越え難い障壁を置くことである。そんなことをする位なら、ひと思いに、この手段を採りっぱなしにしておいた方がましである、と私は感じた。そこで私はそうした。ヴァラン夫人は、努力が無駄なことを知ったが、自分の立場を危くしてまで骨を折ろうとはしなかった。ただ同情のこもった眼で私を見ながら、

「困った子ね。それなら自分の好きな所へ行ったがいいでしょう。でも、大きくなったら、きっとわたしのことを思い出すわ」と、言った。この豫言があれほど痛ましく實現されようとは、夫人自身も考えていなかったと私は思っている。

困難はそのまま殘った。若い身空で國を棄て、どうして食って行くか。徒弟生活を中途でよした私は、職を習い覺えているどころではなかった。習い覺えていたとしても、美術を持つためには餘りに貧しいサヴォアの國では、この職で生活して行けはしなかったであろう。一緒に食事をしていた例の田舍者は、顎を休めるために一寸休止をとる必要から、一つの意見を持出した。天來の妙案だと自分で言っていたが、その結果から判斷すると、むしろ天よりも反對の方から來た妙案であったようだ。その意見というのは、トリノへ行って、その地の洗禮志願者を教育するために設けられた救護所に入り、その男の言葉通りに言えば、靈肉兩方面の生活をする。そして、最後には公教のふところに入り、善良な人々の慈悲によって、何か適當な職が見つかるだろう、というのである。

「旅費の點は」と、その男は續けて、「それは、奥さんの方からこの神聖な仕事のことをお申し出になれば、司教猊下もお慈悲によって調達をなすって下さるに違いありません。それに、お惠み深い男爵夫人も」と、皿の上で頭を下げながら、「きっとよろこんで應分の喜捨をなさいましょう」と言った。

私にはそんなお慈悲は有難くなかった。しかし、胸がつかえて何も言えなかった。すると、ヴァラン夫人は、この計畫をその提案者ほどの熱心さでは採上げず、ただ、人それぞれその力に應じて善事には喜捨すべきものです、この事は私から司教猊下にお話しましょう、と、答えたばかりであった。ところが、この怪しからぬ男は、自分の思う通りに夫人が猊

下に話さないのではないかと氣を廻し、また、この仕事に少しばかり役得があったから、方々の牧師たちのところを馳け廻って下話をしたり、善良な坊さんたちをうまく抱きこんだりした。このために、私の身を思って旅行を案じてくれたヴァラン夫人が、このことを司教に話そうとした時には、もう話は前からきまっていて、司教は私のささやかな路用のためにと言って即座にお金を渡してくれたのだった。夫人は強いて私を引留めるわけにもいかなかった。その年頃の女性として、若い男を傍に引きつけておきたいと思うのは世間に憚りがあるものだが、私も、そろそろその年頃に近づいていたのであった。

こうして、私が旅に出ることは、私の世話をしてくれた人々によってきめられたのであるから、こちらとしてはどうしても從わないわけにいかなかった。それに、私自身も大して厭な氣もなく從ったのであった。トリノは[*1]ジュネーヴよりも遠かったが、首府であるから、政府や宗教を異にするジュネーヴ市よりも、アヌシー市との關係は一層緊密だろうと私は判斷した。その上、ヴァラン夫人の言いつけに從って出發するのだから、自分はやはり夫人の監督下に生活すると同じだと思った。それなら夫人の隣で生活する以上であった。また、大旅行をするという考えが、すでに現われはじめていた私の放浪癖を悅ばせた。この年頃で、多くの山河を越え、アルプス山脈の絶頂から友達たちを眼下にするのは、實にすばらしいことのようにも思われた。旅はジュネーヴ人のほとんど抑え難い魅惑である。こんなわけで私は承諾したのである。例の田舍者も二日後に細君と一緒に出發することになっていた。私の身柄は二人に託された。ヴァラン夫人は私の財布を補充してくれて、それを二人に預けた。なお、その上に、詳かな注意に添えて少しばかりのお金をこっそり手渡してくれた。こうして一同は復活祭前の水曜日に出發した。

私がアヌシーを出發したあくる日、父は友人のリヴァル氏と二人で私の跡を追い、アヌシーまでやって來た。リヴァル氏は父と同じ時計職で、才智もあり、文才さえあって、詩はラ・モット[*2]よりも上手に作り、辯舌もラ・モットと同じぐらいであった。その上、申し分のない結構人だったけれど、その文學は處を得ず、息子の一人を喜劇役者にしたにとどまったのであった。

*1 サルジニヤ王國の首府。アヌシーからアルプスを越えて南東に一五〇キロ。

*2 フランスの文学者(一六七二年—一七三一年)。

この人たちはヴァラン夫人に會った。そして、私の跡を追い、私に追いつこうとする代りに、夫人と共に私の運命を悲しむだけで滿足した。二人は乘馬であり、私は徒歩だったから、そうしようと思えば容易にできた筈であった。これと同じことが、叔父のベルナールにもあった。叔父はコンフィニョンへ來ていた。此處で、私がアヌシーにいることを知りながら、そのままジュネーヴへ引返したのである。私の近親者たちは、まるで運命の星と共謀して、私を待っている宿命に私を引渡したように思われる。兄もこれと同じ怠慢から行方知れずになり、その後、どうなったか全く分らなくなったのである。

父は廉直な人であったばかりでなく、確かに誠實な人でもあった。そして、偉大な德行を行う強い信念を持った人だった。その上、一家の善良な父であり、殊に私に對してそうだった。父は非常な情愛をこめて私を可愛がった。しかし、また色々な快樂をも好んだから、私が離れて暮すようになってからは、他の種々な道樂のために父親としての愛情が多少薄らいでいた。父はニョンで再婚した。[註17] そして、後妻はもう私の弟を生む年齢ではなかったけれど、やはり身内があった。このために、別の家庭ができ、別の目的が生じ、新しい世帶ができたから、私のこともそれほど度々は思い出されなくなった。それに、父も段々と年を取り、老後を支える財產とて全くなかった。兄と私とは、母の遺產がいくらかあって、それからの所得はわれわれが父と離れている間は、父のものとなる筈だった。この考えが父へ直接働きかけたわけでもなく、父が義務を果す妨げをしたわけでもない。しかし、自分ではそれと氣づかないが、暗默のうちにこの考えが父に働いて、そうでなければもっと強く發揮したかも知れない熱意を、時として弱めることになった。思うに、初め私を追ってアヌシーまで來た父が、當然追いつける筈のシャンベリーまで足を伸ばさなかったのは、以上のようなわけからであった。また、私は、出奔してからも度々父に會いに行ったが、いつも父は父親らしい愛撫を與えたのに、私を引止めようという努力は大してしなかった理由も、そこにあったのである。

愛情も深く、德も高いことは私がよく知っているが、その父親が、こういう行爲をしたということは、私に色々な自己反省をさせてくれた。そして、この反省は常に心を健全に保つ上に大きい寄與をしたのである。私はそこから一つの偉大な道德訓、恐らく實生活に適用できる唯一の教訓を得た。それは、義務を利益と對立させるような立場を避けること、他人の不幸の中にわれわれの幸福を見出せるような立場を避けること、である。そういう立場にあると、德に對してどんな

に眞摯な愛を抱いていても、自分では氣のつかないうちに、遲かれ早かれこの愛が弱って來て、心の中では正しく善良であることをやめないのに、實行に於ては不正不善となるものである、と私は確信している。

この教訓は心の奥に強く刻みこまれ、また、少し後ではあったが、私のあらゆる行爲に適用された。そして、これが、一般の人々の間、殊に知人の間に、私をこの上もない風變りな、狂人じみた人間に思わせた原因となった私の處世訓の一つである。彼奴は自分から變人ぶっている、天邪鬼(あまのじゃく)なことをしたがっている、と人から言われた。實際のところは、私は他人の眞似をしようとも、その反對に出ようとも考えたことはほとんどない。善事をしようと眞劍に望んでいたのである。他人の利益に反する利益を生ずる立場、從って、たとえ無意識にせよ他人の不幸をひそかに希う氣持を生ずる立場を、極力さけようとしたのであった。

今から二年前に、元帥卿[*1]が私の名を遺言書の中に書き入れようとした。私は力を盡してこれに反對した。誰の遺言書であろうと、私はその中に名を書かれたくはない、まして卿の遺言書の中なぞとは思いもよらぬ、と私は卿に言った。元帥卿は承知した。今また卿は私に終身年金を與えようとし、私はこれに反對していない。それではまるで私がこの變更に利益を見出しているように思われる。そう言われれば、そうかも知れない。しかし、わが恩人にして父なる元帥卿よ、若し不幸にも私があなたより死に後れることがあれば、私としては、あなたを失うことによってすべてを失うのであり、何ものも得る所がないということを、私はよく知っているのです。

それこそ、私の考えからすれば、人間の心に眞に適した唯一の善き哲學である。私は日毎にこの哲學の深い根强さを益益身にしみて感じ、最近の私のあらゆる著作の中ではこれを色々と形を變えて繰返した。しかし、世間は輕薄であって、これに注意することを知らなかった。若し私に、この仕事を成就した後で他の仕事に取りかかれるだけの餘命があれば、「エミール」[*2]の續篇の中に、讀者がどうしても注意を拂わざるを得ないほど、右の教訓の美しく感動的な一例を書いてみたいと思っている。しかし、旅の者には、これぐらいで反省はもう澤山である。さあ、また旅路をたどることにしよう。

私は思ったよりも愉快に旅をした。しかも、例の田舍者も見かけほどの氣むずかしやでなかった。この男は中年で、半

*1 ジョージ・キース元帥のことを言う。ルソオ晩年の擁護者であって、詳細は第十二卷以後に出る。

*2 一七六二年公刊のルソオの著作。兒童教育を論じた名著。本書第十一卷參照。

白の髪を辮髪にし、擲弾兵のような様子をしていた。辭は大きく、氣分はかなり快活で、歩くことも達者だが、食うことはなお達者、身についた職が一つもないから、どんな種類の職でもやった。確かアヌシーへよくは分らないが何かの工場を建てる提案をしていたようだった。ヴァラン夫人はさっそくこの計畫に贊成した。そして、この男が十分のお金を預かってトリノまで旅に出たのは、大臣の認可を得る運動をするためだった。しょっちゅう牧師連中の間にもぐりこんで策を弄することが旨く、お役に立とうとあくせく御機嫌をとるような顔をしては、牧師の學校で何か宗教上の用語を聞きかじり、これをたえず用いては、偉い說教師を氣取っていた。また、聖書にあるラテン語の一節を覺えていて、これを日には千回も繰返すので、まるでそういう文句を千も知っているようであった。その上、他人の財布に金のあることを知っている限りは、滅多に金に不自由することはなかった。しかし、陰險というよりむしろ利口なのであって、客引きのような口調で陳腐な說教をやっているところなぞは、まるで隱者ペテロ[*1]が劍を帶びて十字軍を勸說している有樣にそっくりだった。

細君のサブラン夫人というのは、割合に人の善い女で、夜よりも晝の方がおとなしかった。私はいつも二人と同室で寢たから、この細君が眠れないと言って騷ぐのによく目を覺まされた。この不眠の原因が分っていたら、私はもっと目がさめただろうと思う。ところが、私はそんなことがあろうとは思いも寄らなかったし、あのことについては全く無知だったので、ただ自然の力によって教育されるまで待たなければならなかった。

私はこの信心家ぶった案内者とその快活な細君と一緒に陽氣な旅を續けた。道中何の障りもなく、身心ともこれほど絶好な狀態にあったことは今までになかった。若々しく、精氣潑剌、健康と、安心と、自他に對する信頼とに滿ちていたから、溢れ出る生の充滿が、あらゆる感覺によって、言わばわれわれの存在を擴大し、われわれの生存の魅力によって全自然を美しく見せてくれる、そう言ったような、短いが貴重なあの人生の瞬間にいたのであった。甘美な不安は一つの目的を持つことによって、前よりも不定でなくなり、空想を落著かせてくれた。私は自分をヴァラン夫人の生みの子、教え子、○友達、あるいは殆んど戀人のように考えていた。私に言った色々と親切な言葉、私にしてくれた一寸した愛撫、私のために持ってくれたように思えるあんなに優しい關心、私の戀心を唆ったために戀心に滿ちているように見えたあの魅惑的な眼つき、それらすべてのものが、歩いて行く間の私の思念の養いとなり、甘い夢を見させてくれた。自分のこれから

の成り行きについての、どんな恐れも、どんな疑いも、このような夢を援すことがなかった。私をトリノへ遣るのは、思うに、私をそこで生活させ、適當な職につかせてくれることを請合ったわけなのだ。もう自分自身について心配することはない。他の人たちがその心配を引受けてくれているのだ。このように、私は重荷を下して、身も輕く歩いた。若々しい慾望、うっとりするような希望、輝かしい計畫なぞが心を滿たした。目に見るあらゆる物は、自分の間近い至福を保證しているように思えた。家々を見れば田園の饗宴を想像し、牧場を見れば樂しい遊戯を、流れに沿えば水浴や散歩や魚捕りを、樹々の上にはおいしい果實を、その樹陰には甘い逢引きを、山に登ればミルクやクリームの桶を、そのほか、うっとりするような無爲を、平和を、單純を、行方定めず歩きまわる樂しみを、想像するのであった。要するに、眼に觸れるものは、すべて私の心に何か樂しみの魅力を齎らさないものとてなかったのである。風物の雄大さ、變化、眞の美しさが、この魅力を當然なものとした。そこにはまた虛榮心ですら少し混っていた。こんなに若い身空で、イタリヤへ行く、多くの國々を見る、山々を越えてハンニバル[*2]の先例に倣う、そんなことが自分の年齡に過ぎた名譽のように思われた。これに加えて、度々の樂しい宿泊。旺盛な食慾と、それを滿足させるに足る食物。實を言うと、この旺盛な食慾を我慢する必要は一つもなかった。サブラン氏の食事に比べれば、私のなぞは少しも目立たなかったからである。[註18]

この旅行に費した七八日の間ほど、何の心配も苦勞も全くなかった時期は、私の生涯の全行程の中に、他にあったことを憶えていない。七八日を費したというのは、サブラン夫人の歩調が、まるで長い散歩をしているような工合で、こちらはそれに合わせて歩かなければならなかったからである。この思い出は、それに關するあらゆることについて、とりわけ山と徒歩旅行について、最も熾烈な趣味を私に遺した。徒歩で旅行したのは、若い時分だけのことだったが、いつも樂しく歩いた。その後は、義務とか用件とか持ち歩く荷物とかのために、紳士氣取りで馬車を用いなくてはならなくなった。いらいらするような心配、氣兼ね、束縛なぞが私と一緒に馬車へ乘りこんだ。さて、そうなると、今までの旅行では、ただ歩く樂しみだけを感じていたものが、今度は、ただ向うへ著くことだけの必要しか思わなくなった。パリにいた頃、一人前五十ルイのお金と一年の日子を出し合い、荷物持ちのボーイ一人だけを伴に連れて、徒歩でイタリヤ巡りを一緒にし

*1 第一十字軍を勸說してこの壯擧の實現に當與したと傳えられる(一〇五〇年―一一一五年)。
*2 カルタゴの勇將。手兵十萬を率いてアルプス越えをしたことは史上に有名である(前二四一年―前一八四年)。

てくれる同好の士を二人探したことがある。多くの人々が名乗を上げて現われたが、みんなこの計畫の外觀に釣られたのであって、内心では、こんな計畫は話の種にはなるが實行はしたくない全く夢のような話だ、と思っていたようだった。今でも思い出すが、この計畫をディドロとグリム[*1]に熱心に話して聞かせ、とうとう二人をその氣にならせた。一度は話がまとまったと思ったが、結局は旅行は旅行記で濟まそうということになってしまった。そして、この旅行記の中で、ディドロに色々な背信行爲をさせ、私がその身代りに宗教裁判にかけられることにしたら、こんな面白いことはあるまいというのがグリムの考えであった。

トリノへあまり早く著いた物足りなさは、大都會を見物する樂しみと、ここで自分に相應しい地位がやがて見つかるという希望とにいくらか慰められた。そういう希望を持ったというのは、すでに私の頭に野心の火の手が上っていたからであり、また、自分は以前の徒弟の身分よりもはるかに上にあるものと思いこみ、間もなくずっとその下に落ちようとしていることには、遠く思い及ばなかったからであった。

話を進める前に、右に述べ、またこれからも述べる色々な些末な事柄は、讀者の眼には全く興味がないのであるが、このことについて諒解を求め、或いは申し開きをしなければならない。自分のことを餘すところなく世間に露呈しようとするこの企ての中では、私についてのことは何一つ世間に對し曖昧にしておいたり、隱しておいたりしてはならない。私は世間の眼前に絶えず立っていなければならない。世間は私の心のあらゆる迷妄、私の生活のあらゆる隅々にまでもついて來なければならない。一瞬間も私を見失って貰いたくない。それというのも、この記述の中に、一寸した脱漏、一寸した空隙を見つけて、「あの時にはどうしていたんだろう」なぞと不審がり、私にすべてを話す氣がなかったのだろうなぞと非難されるのを恐れるからだ。私は自分の記述によって人々の惡意に十分の手がかりを與えるわけであって、この上、沈默によって更にそれ以上の手がかりを與えようとは思わないのである。

僅かばかりの私の小遣はどこかへ行ってしまった。うっかり口をすべらしたのである。すると、この失言は案内の二人にとってはもっけの幸となった。サブラン夫人は、ヴァラン夫人が私の小さい劍に附けなさいと言ってくれた可愛らしい銀光りのするリボンまで私からうまく卷上げてしまった。これは他の何よりも惜しい品物だった。しかし、私がもう少し頑張らなかったら、その劍でさえ二人の手に渡ったかも分らなかったのである。二人は道中の費用は忠實に支拂ってくれ

た。しかし、私には一物も殘してくれなかったのである。トリノへ著くと、着物も金も下着類もなくなっていた。これからの運命は正に自分の腕一つで開かなければならないようにしてくれたのである。

私は紹介狀を貰っていたので、それを持って行った。すると、直ぐに洗禮志願者救護所へ連れて行かれた。[註19] ここでわが身の生活の糧となるべき宗教を教育されるわけだった。入口に鐵格子の大きい扉があった。そこを通りすぎると、扉はすぐ後ろに閉まって、二重に錠がかけられた。この第一印象は嬉しいというより、いかにも物々しかったので、私は何か考えこんでいると、今度はかなり廣い一室に入らされた。見ると、部屋の奥には大きな十字架像を立てた木製の祭壇と、その周圍に同じく木製の四五脚の椅子、それも、蠟でも塗ってあるように見えるが實はたださんざん使い古したために、擦れて光っているだけのものであった。それより他には家具らしいものは一つもなかった。この集會室には私の教友である人相の惡い男が四五人いた。皆、神の子の志願者というより、むしろ惡魔の弓卒のようであった。これらのならず者のうちの二人はスラヴォニヤ人であったが、自分ではユダヤ人とかモール人とか稱していた。その打明け話によると、二人はキリスト教を信奉し、何か利得さえあれば何處ででも洗禮を受けながら、イスパニヤとイタリヤを流れ歩いて世渡りをしていたのだそうであった。前庭に面する廣い露臺を二つに仕切ったもう一つ別の鐵の扉が開いた。その扉から、洗禮志願者の女たちが入って來た。われわれの姉妹である。この女たちも私と同じように、洗禮によってではなく、嚴かな誓絶によって、再生しようとしていたのであって、神の羊小屋を瀆したもののうちでは、この上もなく穢らわしい淫賣婦であり、この上もなく下等な賣女でもあった。その中でただ一人だけ、美しく、一寸目につく女がいた。一つ二つは年上だったかも知れないが、大體私と同じぐらいの年頃だった。狡そうな目つきをして、それが時々こちらの目とかち合った。これで、その子と知合いになりたい氣持を唆られた。しかし、三ヵ月前から救護所に來ていたその女は、それから後も二ヵ月近くとめられていたが、その二ヵ月の間、私にはこの女に近づくことが絶對に不可能だった。看守の老婆は嚴しくその旨を命ぜられていたし、傳道師も熱心以上の熱意をこめて女の改宗に從事し、いつもこの女に附きまとっていたからである。見かけはそうでもなかったが、極度な白痴だったに違いなかった。なぜといって、これほど長くかかった教育は今までになかったからである。傳道師はいつまでたってもこの女が誓絶のできる域に達していないと思った。しかし、女は圍

*1 ディドロもグリムも當時の哲學者で、後年のルソオの知己。後にルソオと仲違えした條は第八卷以後に詳しい。

いの中の生活がいやになって、キリスト信者になれようとなれまいと、もう出て行くと言いだした。そこで、まだ信者になる氣のある間に、その言葉を承知してやる必要があった。反抗心を起して、信者になりたくなくなったら大變だと思ったからである。

小人數の教團は新入者を歡迎するために集合を催した。一同に短い訓戒があった。私には、神樣から下される恩寵に應えるように勸奬された。他の者には、私のために祈禱をするように、模範を示して私を教化するように說かれた。それが濟んで、例の處女たちが圍いの中へ引下ってしまうと、私は初めて、自分のいる圍いの中のことを考えて、つくづく意外な思いをしたのであった。

翌朝もまたみんな集められて訓示された。その時初めて、これから自分の進もうとしている道のこと、自分をこの道に導いた經路のことを反省しはじめた。

私が日毎にしみじみと深く感ずる一事は、前にも言い、ここでも繰返し、恐らくこれから先も繰返すであろうが、凡そ正當で健全な教育を受けた少年というものがあれば、それは正しく自分であった、ということである。一般民衆と格段の相違がある品性高い家庭に生れた私は、身よりの者誰からも從順の教示と德義の模範ばかりを授けられた。父は快樂の人だったけれど、しっかりした誠心を具えていたばかりでなく、宗教心も多分に持っていた。世間に出ればなかなかの粹人であり、内にあってはキリスト信者であった父は、自分が深く抱いていた物の考え方を夙くから私の心に移しこんだ。三人の叔母はみな聰明で德も高かったが、その中の年上の二人は信仰心が厚かった。そして、三番目の叔母は、優雅と才知と感性に滿ちた未婚の人で、前の二人ほど素振りには出さなかったが、恐らく信仰心は一番深かったと思われる。このような立派な家庭のふところから、ランベルシエ氏のところへ移されたのであるが、この人は聖職者であり說教師であったとは言え、心の底からの信仰家であって、その說くところと實行とはほとんど相伴っていた。ランベルシエ氏とその妹とは、私の心の中に見出した宗教心を、優しく明敏な教育によって啓發した。このために、この立派な人々は、非常に眞實な、愼重な、また正當な方法を用いたので、私は說教を退屈がるどころか、說教が濟むと、いつも深く心を動かされ、正しく生きる決心をしなかった時はなかった程だった。この決心のことを思って、滅多に心をゆるめることはなかったのである。叔母のベルナールの家では、信心ということが少し鼻について來た。というのは、叔母は信心を自分の仕事に

していたからである。親方のところへ行くようになってからは、別に考えが變ったというのではないが、信仰のことはほとんど考えなくなった。しかし、私を墮落させるような若者は一人もいなかった。惡戲小僧にはなったが、放蕩者にはならなかった。

從って、その頃の私は同じ年頃の少年が持つぐらいの宗教心は持っていたわけである。いや、自分の考えを僞りなく言えば、人並以上の宗教心さえ持っていたのである。私の少年期は當り前の少年とは異っていた。常に大人として感じ、考えていた。段々成人するに從って普通の人間に戻ったのであって、生れた時はすでに人並の域を脫していたのである。こんな風に、尤もらしく神童ぶっているのを見て人々は笑うだろう。笑ってもかまわない。だが、笑った後で、こちらからお願いするが、たった六歲で小說が好きになり、面白くて、熱い涙を流すほどに熱中するような子供があったら、見つけてもらいたいものである。そういう子が見つかったら、私は自分の自惚れを滑稽だと感ずるだろうし、自分が間違いだったことを認めるであろう。

だから、子供たちにいつか宗教心を持たせたいと思うならば、宗教の話をしてはならない。子供たちが神を知る、しかもわれわれのように神を知る、なぞということは不可能だ、と私が言ったにしても、これは自分の考えを觀察から引出したのであって、經驗から引出したのではないのである。自分の經驗の說くところが、他人には全く當てはまらないことを私は知っている。六歲の頃のジャン・ジャック・ルソオのような子供を見つけ出して、それが七歲になったら、神の話をしてやって見たまえ。少しも危險のないことを私は請合う。

子供にとって、また大人にとってでさえ、宗教心を持つということは、生れた時の宗教に從うということである、と誰しも感じていると私は思う。時にはその宗教から何かを取除くことはあっても、滅多に加えるものはない。教理上の信仰は教育の結果である。この一般原則によって、私は父祖の宗教に結びつけられていたわけだが、それを別としても、私にはわれわれの都市のカトリックに對する特殊な反感があった。カトリックは恐ろしい偶像教であると教えこまれていたし、カトリックの聖職者は最も暗黑な色彩の下に描き出されていたのである。この考え方は私の心に深く滲透し、そのため、初めのうちは、教會の内部を覗いてみても、白衣の牧師に出會っても、行列の鐘の音を耳にしても、恐怖と畏怖の戰慄を感じないことはなかった程である。そういう戰慄も、やがて都會では感じなくなったが、しかし、初めてそういう氣

持を經驗した田舍の教區に似た教區なぞでは、度々これに襲われることがあった。このような印象が、ジュネーヴ近郊の司祭たちが市の子供たちによろこんで與える愛撫の思い出と、奇妙な對照をしていたことは事實である。臨終の聖餐に鳴らす鐘の音が恐怖を與えたと同時に、ミサや晩禱の鐘が、食事や間食やバターや果實や牛乳のことを思い出させた。ポンヴェール氏の家の御馳走も大きい影響を及ぼしていた。こうして、私はそのようなものに他愛なく目が眩んだのである。ローマ公教を娯樂と美食との關係に於てしか見なかった私は、その中で生活しようという考えに容易に慣れた。しかし、正式にこの教に歸依する考えは、時々ちらっと浮んだだけで、よほど後になってでないと、本當には現われて來なかったのである。今の場合、もう取りかえしはつかなかった。自分のした詰らない約束と、その避けがたい結果を、この上もない強い恐怖をもって見るのだった。自分の周圍にいる未來の新信徒たちは、範を垂れて私を激勵する柄ではなかったし、また、これから自分のしようとする神聖な仕事は、要するにならず者の所業にすぎないということを認めないわけにいかなかった。まだ年端は行かなかったけれど、私は、どんな宗教が眞であるにせよ、自分は自分の信教を賣ろうとしているのだ、どんなに善い選擇をしたにせよ、心の底では聖靈に背き、人間の輕蔑に値しようとしているのだ、と感じた。これを考えれば考えるほど、自分自身に對して腹立たしくなった。そして、まるでそれが自分の仕業ではなかったかのように、私をそこまで導いた運命を嘆いたのである。時には、この反省がひどく強くなって、若し一寸でも扉の開いているのを見たらきっと脫走したかも知れない程の心持だった。しかし、脫走なぞということは私にはできなかった。また、その決心もそれほど強いものではなかった。

内心の慾望が餘りに多く、それが私の決心と戰ってこれを征服した。その上、ジュネーヴには歸らないという頑固な考え、再び山を越える恥かしさ、またその困難、友もなく資力もなく國を離れている心細さ、そうしたものが寄ってたかって、自分の良心の苛責を、手遲れな悔恨のように思わせた。これからしようとすることを辯解するために、今までにしたことを自責しているように裝った。過去の過ちを重くすることによって、未來をその必然的な繼續のように眺めたのであった。「まだ何もしてはいない。お前は潔白でいようと思えば潔白でいられる」と、自分自身には言わずに、「お前の犯した罪を歎け。罪を終りまで仕遂げなければならなくなったことを歎け」と、自分自身に言うのであった。

實際、その時まで私が自分から約束し、或いは他人にそう思わせていたすべてを取消すとか、自分で自分を繋いでいた

鎖を斷ち切るとか、父祖の宗教にとどまっていたいと勇敢に宣言するとか、こういうことから起り得べきあらゆる危險を冒して、私の年でそれをやりとげるためには、どれほど稀有の精神力が必要だったろうか。そんな勇氣は私の年齡では有り得ないし、また、あったにしてもそれが幸福な成功をおさめたとは一寸思われない。萬事はもはや撤回のできないほどに進んでしまっていたのである。そして、こちらの反抗が若し強かったら強いほど、人々は何とかしてそれに打克つことが自分たちの務めだと考えたであろう。

私を迷わせたこのような詭辯は、多くの人々が抱く詭辯と同じであって、時機が過ぎて力が用をなさなくなった時に、その力の不足を歎くのである。美德はわれわれの過失あってこそその價値がある。若しわれわれが常に賢明たらんことを望むならば、われわれが有德である必要はほとんどない。然るに容易に克ち得る性向には、われわれは無抵抗に引きずりこまれる。その危險を輕視できるような詰らない誘惑には負ける。知らず識らずのうちに危險な狀態に陷ってしまって、前ならば容易に免れ得たものが、今はもう驚くほどの英雄的努力なしには拔け出すことができないものである。そして、終には深淵にはまりこみ、「神よ、あなたはなぜ私をかくも弱き者に作り給うたのですか」と、神に言うのである。しかし、神は、われわれに頓着なく、われわれの良心に答えて、「お前を深淵から出られないほど弱く作ったのは、そこに陷らないほど十分に強く作っておいたからだ」と、言うのである。

私はカトリックになる決心をはっきり採ったわけではなく、その時機はまだ遠いと思って、この考えに慣れるだけの餘裕を取っていた。そして、そうしている間に、何か豫期しない出來事が起って、この難關から自分を救い出してくれるだろうと考えていた。できるだけの立派な防禦を整えて、時を稼ごうと決心した。やがて私の虛榮心は、そんな決心を考えなくてもいいようにしてくれた。そして、私を教育しようと思っている者たちが時々てこずっているのを見て取ってからは、相手を完全に閉口させるためには、大した決心を必要としなかった。私はこの計畫に滑稽なほどの熱意さえこめた。滑稽というのは、向うがこちらに働きかけている間に、こちらから向うに働きかけてやろう、相手を新教に歸依するように仕向けるには、向うを說得しさえすればいい、と私は無邪氣に考えていたからである。

從って、私というものは、知能の方面からも意志の方面からも、救護所の傳導師たちが豫期していたほど扱い易い者ではないことが分った。新教徒は一般に舊教徒より教養がある。それはその筈であって、前者の教義は討論を要求し、後者の

それは服從を要求するからである。カトリック教徒は與えられる決定を受け入れなければならない。新教徒は自ら決定することを學ばなければならない。そういうことは誰も知ってはいたが、しかし、私のような境遇、私のような年頃の者を相手にして、練達の士がこんな大困難を感じようとは豫想外であった。その上、私はまだ最初の聖體拜受もせず、それに關する教育も受けていなかった。そのこともまたみんな知っていた。しかし、その代りに、私がランベルシエ氏のところで十分な教育を受けていたこと、また、それに加えて、「教會及び帝國の歴史」[*1]の中から、そこの先生たちには非常に都合の悪い一つの玉手箱を掌中に握っていたことを、この人々は知っていなかった。この本は、まだ父親のもとにいた頃にほほとんど諳記していたが、その後はまるで忘れていた。しかし、議論が熱すると、それにつれて頭に浮んで來た。

脊は低いがなかなか立派な一人の老牧師が、一同を集めて、最初の討論會を開いた。この討論會は、私の教友たちにとっては、議論というよりむしろ教理問答であって、老牧師はみんなの反對意見に解決を與えるよりも、みんなを教えこむのが主だった。私はそうでなかった。自分の番になると、私は老牧師に一一ひっかかって行った。自分にできるだけの難問は一つとして容赦せず、相手に浴せかけた。このために討論會は他の出席者たちに取っては非常に長く、ひどく退屈なものとなった。老牧師は長口舌をふるい、かんかんになり、しどろもどろとなって、お終いには、自分にはフランス語がよく分らないと言って、逃げてしまった。そのあくる日には、私の不謹慎な反對論が學友たちを毒する恐れがあるといって、別の一室に、前よりも若い別の牧師と一緒に入れられた。その牧師は、能辯、つまり長たらしい文句を陳べるのが得意で、學者然といかにも自信たっぷりであった。しかし、私はそんな威壓的な風には大して屈しなかった。そして、どうせこれが日課だと思っていたから、十分の確信をもって返答をし、できるだけの全力を盡して、あちらこちらと攻撃を加えた。相手は聖アウグスチヌス、聖グレゴリオ、その他の神父をもって、こちらを打倒し得るものと思っていたが、私がそういう神父たちも、相手同様に輕々と手玉に取るのを見て、非常に驚いた。それは私がその人たちの本を讀んでいたからではなかった。相手の牧師とても恐らくそうだったろう。しかし、私は例のル・シュウールの著書から抜いたその人たちの言葉を澤山おぼえていた。そして、相手がその一句を引用すると、その引用句については議論をしないで、同じ神父の別の一句をもってこれに應じたのである。そして、これが度々相手をひどく當惑させたのであった。しかし、結局は牧師の方が私に勝った。それは二つの理由による。即ち、その一は相手の方が私より優位にあったこと、そして、私として

は、自分が、言わば相手の思いのままになるべき者であると感じていたから、とことんまでやっつけるのはよくないと、若いながらも、その點はよく辨えていたこと。それは、例のちびの老牧師が、私の博學と私自身に好意を持ってくれなかったことを見てとっていたからである。もう一つの理由は、この若い牧師には學問があったのに、私には少しもなかったこと。このために、相手は私にはついて行けない方法をその論法に用い、豫想しなかった反對論に押しまくられそうになると、それは本題から外れていると言って、議論を翌日に延ばした。また、時には、私の引用するものをみんなはねつけて、それはみな間違いだと主張し、本を探して來たらどうかと言い、そんな引用句があるなら見つけてごらんとひやかした。相手は、こんなことをしても大したことはあるまいと高をくくっていたし、借り物の博識では、本をめくることにもあまり馴れてはいず、引用句が確かにその中にあることを知っていたとしても、浩瀚な本の中からその一句だけを見つけ出せるほど、私が立派なラテン學者でないことも、相手は承知していた。新教の宣教師の不信心を非難しながら、御本人がそれを犯していたのではないか、そして、自分に不利な反論をのがれるために、時には、有りもしない文句をでっち上げたのではないか、と私は疑ってさえいる。

こうした詰らない議論が續き、討論をやり、祈禱を口ごもり、碌でもないことをやりながら、日を送っているうちに、私の身に一つの不快ないやらしい事件が起り、危く大變な迷惑を受けるところだった。

どんな下等な魂のものでも、どんな野蠻な心のものでも、何か情愛というものを持たないものはない。モール人だと自稱する例の二人のならず者のうちの一人が、私を可愛がるようになった。向うからすすんで近づいて來て、あけすけな滅茶苦茶な言葉で話をしたり、色々と細かい世話を燒いたり、時には食卓で自分の分を分けてくれたり、とりわけこちらには大變具合の悪い變な熱をこめて、度々接吻するのである。長い刀痕を飾った香料パンのような顔と、情愛がこもっているというより怒っているように見える輝いた目つきなぞに對しては、自然と何かぞっとしたけれど、私はその接吻を我慢しながら心の中で、「可哀そうに、この男はおれに大變熱烈な友情を抱いたのだ。はねつけてはいけなかろう」と、思った。相手は次第に前よりも猥らな態度をとるようになるし、時には變なことを言うようになったので、これはてっきり氣が狂ったのではないかと思いこんだ程だった。或る晩、この男は私のところへ來て、一緒に寢ようとした。私は寢臺が狹

*1　六頁參照。

いからと言って反對した。すると自分の寢臺へ來いと迫った。私はそれも斷わった。この男は實に不潔で、始終嚙み煙草のいやな臭いをぷんぷんさせているから、胸が悪くなるのであった。

あくる日のかなり朝はやく、私とその男は集會室にいた。男はまた例の愛撫をはじめたが、ひどく亂暴な動作をするので少しこわくなった。やがて、次第に、ひどくいやらしく馴々しい動作に移り、こちらの手を取って自分と同じことを私にさせようとした。私は叫び聲を上げ、烈しく身をふりもぎって、後ろへ飛びさがった。しかし、私にはそれが何のことか全くわけが分らなかったので、憤慨も立腹も面には現わさず、ただ精一杯な驚きと不快の樣子を示した。そのために相手は私をそのままにした。ところが、その男が激しく身を動かし、それが終ろうとした時に、何か粘々した白っぽいものが暖爐の方へ飛んで、床の上に落ちるのが見えたので、何だか胸がむかむかした。私は今まで覺えのないほど昂奮し、狼狽し、恐ろしくさえなり、今にも氣分が悪くなりそうになつて、露臺の上へ飛び出した。

私にはあの厭な男がどうしたのか理解できなかった。癲癇か、それとも他のもっと恐ろしい何かの狂氣に襲われたのだろうと思った。實際、冷靜な人の眼から見たら、あの淫らな不潔な動作や、この上もなく動物的な、色慾に燃えたあの恐ろしい顏よりも醜怪なものは他にないであろう。私はあんな樣子をする男をほかに見たことがない。それにしても、われわれが女の傍であれと同じような顏をして、女がそれをいやらしく思わないとすれば、女の眼というものはよほど何かに幻惑されているものに違いない。

私は何よりもまず大急ぎでこの出來事をみんなに話しに行った。監督の老尼僧は、默っていなさいと私に言った。しかし、この話が尼僧の心にひどい衝撃を與えたことが私に分ったし、口の中で「Cam maledet! brutta bestia![*1]」と、つぶやくのが聞えた。なぜ默っていなければならないのか、私にはそのわけが分らなかったので、口止めされているのに、相變らずお喋りをやめなかった。そのために、翌日になると、朝早く監督の一人がやって來て、神の家の名譽を傷つけ、何でもないことを大業に騒ぎ立てた罪を鳴らして、かなりひどい譴責を私に加えた。

監督は私の知らない色々なことを說明して聞かせながら、長たらしい譴責をやった。色々と說明して、私に事新らしくそのことを教えるつもりではなかった。監督としては、私が相手を拒んだのは、相手が自分をどうするつもりかは知っていたけれど、そうしたくなったからなのだ、と思いこんでいた。あれは淫樂として禁止されている行爲であろ、しかし、

その相手となる人物に別段侮辱を加える意志はないのであるし、その上、向うから可愛らしいと思われたということに左程腹を立てることもあるまい、と眞面目くさって言うのであった。監督はまた、自分も若い時分には同じくそういう名譽を受けたことがある、その時は不意を打たれて抵抗のしようもなかったが、そうされても大して辛いこともなかった、とあけすけに言った。そして、無遠慮を通り越して、ひどく露骨な言葉を使いはじめた。私が抵抗した原因は、苦痛を恐れたからだと向うは想像していたので、そんな心配は御無用だ、別に恐れる必要はない、と請合った。

この破廉恥な男が、このようなことを、自分自身のために喋るのならともかく、私のために喋るのだから、それを聽く私の驚きは大きくなった。實際のところ、監督は私の身のためを思うあまりに、色々と私に教えようと思っていたようだった。ごく當り前の話をするつもりでいたから、わざわざ二人だけになろうとさえしなかった。現に、第三者として一人の聖職者がそこにいたけれど、その男もまたそういう話には、監督以上に一向平氣であった。その當り前の樣子がひどく私を打ったので、これはきっと世間一般の習慣なのだ、自分には今までそれを教えられる機會がなかったのだ、と思いこむようになった。そのために、厭な氣持がしないではなかったが、腹も立てずに相手の言葉を聽いていたのである。この出來事、とりわけ私が見たことの印象は、いつまでも記憶の中に非常に強く刻みこまれ、それを考えるだけでも胸が悪くなった。あのことについては、深くは知らないままに、それについての嫌悪の氣持は、これを辯護した男にも及んで、その訓戒の悪結果を思い知らせてやろうという氣にならざるを得なかった。監督は私に愛情の乏しい視線を投げつけた。そして、それ以來というものは、何かにつけて、救護所の生活を不愉快に不愉快にと仕向けて來た。この目的は見事に達せられた。というのは、救護所から出るにはただ一つの道しかないことに氣づいていた私は、今までは努めてそこから遠ざかろうとしていただけに、今度は躍氣になってその道を取ろうとしたのである。

この出來事はその後の私を男色常習者の色々な企みから守ってくれた。そして、そういう評判の男たちを見ると、あの恐ろしいモール人の樣子と動作を思い出して、いつも非常に厭な氣分になり、それを隱すことができなかった。これに反して、女というものが、比較上から、私の心を甚しく占めるようになった。男性の罪科の償いとして、女性に對しては、わが身を捧げて優しい感情を抱かなければならないように思われた。そして、どんな醜い女でも、あの僞のアフリカ人を

*1 「何と呪われた！　いやらしいけだもの！」

思うと、私の眼の崇拜の的となった。

あの男については、どういうことに言いなしたのか、私は知らない。しかし、ロレンツァ尼僧を除いては、誰も以前より悪い目であの男を見るものがなかったように思われた。とは言っても、もう私に近づいても來なければ、話しかけようともしなくなった。八日ほど後に、あの男は嚴かな式で洗禮を受け、更生した魂の清淨を表わすために、頭から足の先まで白衣を纏った。その翌日、救護所を出て行った。その後は二度と會ったことがない。

一ヵ月後に私の順番が來た。困難な改宗の名譽を私の監督たちに與えるためには、それだけの時日が必要であった。あらゆる教理を私に何度も復習させて、漸く私を從順に立戻らせることに成功したのである。

とうとう、十分な教育を受け、十分に教師たちの思い通りに仕込まれた私は、聖ヨハネ中央教會へ行列を組んで連れて行かれ、そこで正式の誓絶を行い、二度目の洗禮は本當には受けなかったが、洗禮の形代だけを受けた。[註30] しかし、これは大體同じような儀式であるから、新教徒はキリスト教徒ではないように一般民衆に思いこませるのに役立っているわけである。私はこういう場合にお定まりの白の縁飾のついた灰色の長衣のようなものを着せられた。前後には二人の男が銅盤を捧げ、それを鍵で叩いた。すると、人々は、信心から、また新しい改宗者への心持として、その中へ應分の喜捨をした。要するに、この儀式を一般民衆は一層啓蒙的に、私には一層屈辱的にするために、カトリック教の虚飾は何一つ省かれなかったわけである。ただ、白衣だけは非常に役に立っただろうと思われるが、生憎なことに私はユダヤ人たる名譽を持たなかったために、あのモール人のように、白衣を貰うわけにいかなかった。

これだけでは濟まなかった。それから、宗教裁判所へ行って、異端の罪の赦罪を受け、アンリ四世がその大使のすすめで受けたと同じ儀式をやって、[註31] 公教會のふところに戻らなければならなかった。審問をする神父猊下の顔つきや態度は、この建物に入るとき私を襲った祕かな恐怖を消してくれるに適當なものではなかった。信仰・身分・家族などについて色色と質問をした後で、不意にお前の母は地獄に落ちているのではないかどうか、と訊いた。恐怖のために、憤怒の初動が抑えつけられた。私はただ、そうでないことを望みたい、神はきっと臨終にあたって母を照らし給うたにちがいないと思う、とだけ答えておいた。神父は默っていた。しかし、顔をしかめたところを見ると、私の言葉に全く同意したとは受け取れなかった。

何もかも濟んで、[註32] これで漸く自分の望み通りに何かの他位につけるのだと思っていると、喜捨で集まった小錢の二十フランと少しをくれて、門の外へ追い出された。善いキリスト教徒として暮らすように、聖寵に背かないように、と訓された。幸福でいるように、と祈ってくれた。それから私の後ろに扉が閉まった。すると、何もかも消えうせた。

こうして、私の大望は瞬時にして雲霧消散したわけである。そして、今まで手間をかけて踏んで來た利己的な道から殘ったものは、おれは背信者となったばかりか、うまうまと人にだまされた、という思い出だけだった。輝かしい幸福の計畫から、この上もない完全な悲境に顚落する自分の姿を見た時、そして、朝には住むべき宮殿の選擇に思案していたのに、夕には路傍に眠る身の上となった自分の姿を見た時、私の腦裡にどのような激變が行われるべきかは、容易に判斷がつく。この不幸はすべて自ら爲せる業だと自責すれば、己れの過失についての後悔の念はいよいよ激しくならねばならぬ。それだけに自暴自棄も深い。人々は、私がそのような自暴自棄に陷ったと思うかも知れない。そんなことは少しもなかった。私は生れて初めて二ヵ月以上もとじこめられていたのである。だから、最初に味わった氣持は、自由を取り戻したという氣持だった。長い奴隷狀態の後に、再び自分自身と自分の行爲を自由に支配できるようになった私は、豐富な資力を持ち、身分高い人々に滿ちた大都會の眞只中に、自分自身を見たのであった。そういう人々の知遇さえ得れば、自分の才能技倆を以てすれば忽ち優待されるに間違いなかった。その上、それをゆっくり待っている餘裕もあり、ポケットの二十フランは盡きることのない寶のようにも思われていた。この金は、誰にも斷わらずに勝手に使えるのである。こんな金持になったのは初めてだつた。失望したり、涙に暮れたりするどころではない。ただ希望を變更しただけにすぎず、また、自尊心も、このために失うところは少しもなかった。これほど自信と安心を覺えたこともなかった。もう幸運が成就したのだと思い、それが獨力で得られたのは大したものだと思った。

私が最初にしたのは、市中を歩き廻って、好奇心を滿足させることだった。それは自分の自由を一寸實施してみるだけのことであった。衞兵が勤務に就くのを見に行った。色々な兵器が頗る氣に入った。行列の後をついて歩いた。牧師たちの合唱が好きになった。王宮を見に行った。恐る恐る近くへ行ってみた。ところが他の人たちが入って行くのを見たので、私もその眞似をした。勝手に入らしてくれた。多分小さい包を抱えていたせいだったと思う。とにかく、王宮の中に入ったことで自分が非常に偉い人になったような氣がした。まるでその中に起居しているようなつもりになった。とうと

う、さんざん歩き廻った末に、すっかり疲れてしまった。腹も減った。陽氣も暑い。そこで或る牛乳屋へ入った。凝乳(ジュンボ)を出してくれた。そして何よりも大好物のあのすばらしいピエモンテの棒パン二片で、今までにない旨い食事を五六スーのお金ですることができた。

宿を探さなければならなかった。私はこちらの言うことが通じる位にはピエモンテ語を前から知っていたから、宿を見つけるのも困難ではなかった。そして、宿を選ぶにしても、すき好みよりも財布と相談するように氣をつかった。ポー街で、兵隊の細君が、勤め口のない奉公人なぞを一泊一スーで泊めてくれるという話を聞いた。その家へ行ってみると、粗末な寢床が一つ空いていたので、さっそくここへ落著いた。細君は若いのにもう五六人子供があったが、近頃結婚したばかりだという。母親も子供たちも泊り客も、みんな同室で寢た。この家にいた間じゅうずっとそうだった。それはそれとして、この細君は親切な女で、車挽きのようにわめき散らし、始終胸をはだけて、髪を振り亂していたが、心は優しく、世話好きで、私を可愛がってくれた。私のためになかなか役に立ってもくれた。

私は數日の間を獨立と好奇心の樂しみだけに耽って過した。市の内外をさまよい歩き、物珍らしいもの、目新しいものを探し廻り、見物して歩いた。眞立ったばかりで、首府を見たことのない青年に取っては、何もかも物珍らしく目新しかった。殊に私は非常に規帳面に參内して、毎朝きちんと王様のミサに參列した。王様やその侍臣と同じ禮拜堂の中にいる自分が立派なもののように見えた。しかし、その頃から萠しはじめていた音樂への情熱が、王宮の豪華よりも、私の精勤の原因となっていたのであった。王宮の豪華は、やがて見てしまえば、いつも同じものであるし、そう長い間人を打つものではない。當時、サルジニヤ王はヨーロッパ隨一の交響樂團を持っていた。ソミス、[*1]デジャルダン、ベズッチ兄弟なぞがそこでかわるがわる名聲を博していた。どんな詰らない樂器の演奏でも、調子が合ってさえいれば、嬉しくて夢中になる、そんな青年を惹きつけるには、これほど大したものは必要ではなかった。それに、私の目を驚かせた素晴らしさに對しては、ただ呆然と感歎するばかりで、美しいなどという氣は起らなかった。そういう王宮の華かさの中にあって、ただ氣にかかることと言えば、そこに自分の尊敬に値するような、また小説の種になるような、誰か若い姫君でもいないかということだけであった。

小説と言えば、これより少々華やかではない環境で、一つの小説を實地にやりかけたことがあった。これが成就できて

いたら、何千倍か甘い快樂を味わえたかも知れなかった。

ごく儉しく暮していたけれど、財布の中は氣のつかないうちに空になって來た。尤も、儉しくと言っても、それは用心からした儉約ではなく、むしろ好みが質素だったからである。このことは、今日、贅澤な食事の習慣がついていても、少しも變っていない。私は田舍風の食事よりも美味な御馳走を知らなかったし、今でも知らない。牛乳・卵・野菜・チーズ・黑パン・相當な葡萄酒、それだけあれば間違いなく大御馳走である。料理長や給仕がそのへんにいると、それを見るだけでも煩わしく、うんざりする。そんなことをしてくれなくても、足りない所は旺盛な食慾が補ってくれる。當時は、六スーか七スー出せば、後年六フランか七フランでした食事よりも遙かにおいしい食事ができた。だから、質素でいたくない氣にならなかったから、質素でいたまでのことであった。また、これを質素と呼ぶのもどうかと思う。なぜなら、私はそうしていて、できるだけの味覺を樂しませていたからである。梨・凝乳(ジュンボ)・チーズ・棒パン、それから、ナイフで削げるような濃いモンテフェラト產の粗葡萄酒の二三杯、これだけで最も幸福な美食家になれた。しかし、いくらそうしていても、二十フランの金には際限があった。これは日ましに痛感するところだった。そして、向う見ずな年頃ではあったが、將來への不安がやがて恐怖にまで昂じた。自分の描いた色々な空中樓閣の中から、わずかに殘ったものは、生きて行けるだけの職を見つける望みだけになった。それでさえ、實現は容易でなかった。以前の職のことを考えてみたが、何處かの親方の所へ行って働けるほどその職を十分に習い覺えていなかった。それに、トリノでは親方がそう澤山はいなかった。そこで、何かいい事があるまでは、店から店を歩いて、食器に頭文字や紋章を彫らして貰おうと決心した。向うの言いなりになって、安値で相手の氣を惹くつもりだった。この工夫も大して成功しなかった。何處へ行っても大抵は體よく追っ拂われた。また、やっと見つけた仕事も、ごく僅かなもので、二三度の食事代にも足りなかった。ところが、或る日、かなり朝早く、コントラ・ノヴァ通を歩いていると、或る店のガラス戸越しに、若い奥さんの姿が目についた。いかにも淑やかな、人をひきつけるような樣子なので、女性には內氣ではあったけれど、思い切って入って行って、仕事をさせてくれと頼んだ。奥さんは別に斷わりもせず、私に腰を掛けさせ、私の身の上話を聞き、大いに同情してくれて、しっかりねやりなさい、善いキリスト信者はあなたを見棄てるようなことはないでしょう、と言った。それから、私が入用だと言った色々

*1 イタリヤのヴァイオリニスト。サルジニヤ王室附交響樂團の樂長。

た道具を、近所の金銀細工屋へ借りにやっている間に、臺所へ行って、手ずから朝食を持って來てくれた。この滑り出しは良い辻占に見えた。その續きもこれを裏切らなかった。奥さんは私の仕事に滿足したようだったが、こちらが少し氣を許してから、色々なお喋りをすると、その方がもっと滿足らしかった。少し氣を許してから、というのは、奥さんは淑やかな様子はしていたけれど、派手に着飾っていたから、それが眩しくて初めは何となく氣おくれがしていたからである。しかし、その親切に滿ちた取りなし、同情的な口ぶり、優しくいたわるような態度は、やがて私をすっかり寛がせた。これはうまく行ったと思った。そう思ったから、なおうまく行ったわけだった。尤も、相手はイタリヤの女で、多少男の好き心を愛らないではいないほどの美人ではあったが、しかし、慎ましい女であったし、こちらはこちらで内氣なたちだったから、そう手取早く事が旨く運ぶのは難しかった。それに、この戀の冒險を最後までなしとげるためには、時間の餘裕もなかった。しかし、この奥さんの傍で過した短い時間のことは、それにも優る魅力をもって思い出す。そして、この上もなく甘く、同時にこの上もなく清純な戀のよろこびを、その出花の時に味わい得たのだ、と私は言うことができる。

ひどく人目につく褐色の髪の女だったが、その美しい顔には天性の善良さが表われていて、きびきびしたうちにも何か心を惹くものがあった。バジール夫人という名だった。年上で、相當な甚助の夫は、旅に出ている間は、女に好かれそうもないひどく陰氣くさい番頭に細君を監視させていた。番頭はそれでもそれ相當の自惚れはあったのだが、その自惚れを大抵不機嫌な顔を以て表明していた。笛を吹くのが割合に上手で、私はそれを聞くのが好きだったが、それでも番頭は私にその不機嫌を盛に當てつけた。この新エギストス[*1]は私がその女主人の家へ入るのを見るたびに、いつもぶつぶつ言った。私を小馬鹿にしてあしらったが、女主人はそのお返しに、この番頭を小馬鹿にしてあしらった。番頭を煩悶させるために、わざと見ている前で私を可愛がって樂しんだとさえ思われた。こういうお返しは大いに私のよろこびとするところだったが、しかし、奥さんと二人だけの時にそうされたら、もつとうれしかったろうと思われた。ところが、相手はそこまで深入りしなかった。いや、少くも、その場合は態度がちがった。私を若すぎると思ったのか、向うから持ちかけることを知らなかったのか、本氣で堅くしていようと思っていたのか、とにかく二人だけの時には、何となく控え目であった。寄せつけないというのではなかったが、何となくこちらが臆病になった。ヴァラン夫人に對して抱いたような、愛情深く同時に眞劍な敬意を、この奥さんには持たず、一層多くの畏怖と、遙かに少い馴々しさを感じたのであった。私は顫え

ながら當惑した。相手の顔を見ようともしなかったし、そばにいると呼吸もできなかった。それにも拘らず、そばを離れるのが死ぬより恐ろしかった。向うから氣づかれないで、こちらから見えるものは、何もかも貪るような眼で飽かず眺めた。着物の花模様、綺麗な足の先、手袋と袖の間に洩れて見える白くむっちりした腕、襟もとの縁飾とネッカチーフの間に時々見える露わな肌。一つところを見ると、他のところの感じがまた深くなった。眼に見えるもの、また眼の届かないものも、見よう見ようとするために、視力はぼんやりし、胸は迫り、次第に困難となって來る呼吸は、なかなか鎭めることも難しかった。そして、自分にできることと言えば、そっと音を立てずに溜息を洩らす、それも、二人が度々陷った沈默の最中には、ひどく工合の悪いものだった。幸いなことに、バジール夫人は仕事に氣を取られているから、それには氣がつかない、と私には思われた。それでも、時には、一種の共感から、向うの胸のあたりが頻に膨らむのを目にした。そんな危い光景を見ると、こちらは全くぼうとなった。そして、わくわくして、もうとても辛抱できそうにない氣持でいると、ふいに靜かな調子で何か言いかけた。そうすると、忽ち私はわれに返るのであった。

一つの言葉、一つの動作、また、ひどく思わせぶりな眼つきでさえ、二人の間に、少しも氣持を通じあうきっかけとならず、そんな風に一人ぼつねんとしている奥さんの姿を私は何度か見たものである。そういう狀態は、私にはひどく惱ましいものだったけれど、また無上の快樂でもあった。しかも、單純な私の心では、なぜ自分が惱ましいのか、そのわけを考えてみることもほとんどできなかった。このような二人だけの差向いは、向うも厭ではなかったらしかった。少くもその機會をかなり頻繁に作った。しかし、そういう機會を、向うがどう利用したか、私にどう利用させたかを考えてみれば、奥さんの方に深い意味があったわけではなかったことは確かである。

或る日、奥さんは番頭との愚にもつかない對談にくさくさして、二階の部屋に上ってしまった。私は店の奥にいたが、大急ぎで仕事を片づけ、あとについて二階へ行った。部屋は半開きになっていた。私は氣づかれないように入った。奥さんは部屋の扉と反對の方に顔を向け、窓のそばで編物をしていた。私が入ったのを見ることもできなかったし、表で荷車の音がしていたから、物音を聞きつける筈もなかった。いつもきちんと身なりをととのえていたが、その日は、飾り立てて何となく色っぽかった。身體つきも優美だった。頭を少し垂れて、頸筋の白いのが見えた。上品に結い上げた髪は花で飾

*1 ギリシヤ神話中の人物。アガメムノン王がトロヤ戰に從軍中、その不在に乘じて王妃クリテムネストラを誘惑して目的を達した。

られていた。満面に何とも言えない魅力が漂っていて、それをつくづく眺めるうに、私はわれを忘れた。部屋の入口のところへ倒れるように膝をつき、情熱をこめて両腕を奥さんの方へ差しのばした。音が聞える筈もないと確信し、見られようとも思わなかった。ところが、煖爐のところに鏡があって、それが私を裏切ったのである。そんな無我夢中の姿が向うにどんな作用を及ぼしたか知らない。こちらを見なかったし、聲もかけなかった。しかし、頭を半分ほどこちらに振向けると、指を一寸動かして、足もとの敷物を私に示した。ぶるぶるっとする。叫び聲を立てる。示された場所へ飛んで行く。それが同時だった。しかし、一寸信じて貰えないかも知れないと思うのは、そういう狀態になっても、私は敢てそれ以上の動作に出ようとしなかった。一言も口を利かず、女の方へ眼も上げなかった。その窮屈な姿勢で一寸相手の膝にもたれかかるどころか、相手の身體に一瞬間も觸れようとさえしなかつた。默つて、身動きもせず、と言って、平靜でいたわけでは勿論なかった。動搖・歡喜・感謝、對象のはっきりしない激しい慾望、自信のない若い心が相手の氣に障つては と怯えて抑えつけている激しい慾望、そういう私の心の中が、ありありと現われていた。

奥さんの方とて私よりも平靜だったわけでもなく、私ほど臆病でなかったわけでもなかった。私がそこにそうしているのを見て心を亂し、私をそこへ引き寄せたのに當惑し、恐らくよく考えもしないうちについ出てしまつたあの合圖の結果を見せつけられて、私を迎えるでもなく、それかと言ってはねつけるでもなかった。編物の上から眼を離そうとせず、足もとに私がいるのに氣がつかないような風をしようと努めていた。しかし、こちらはどんなに頭がぼうとなつていても、相手も同じ當惑を、恐らく同じ慾望を持っている、自分と同じく羞恥の念から我慢している、しかし、おれには、それにつけ入って羞恥を乘りこえる力がない、と判斷する餘裕はあった。私の考えでは、向うが五つも六つも年上なのだから、思いきったことは向うから仕掛けて來なければならない筈、それなのにこちらを促すようなことは何一つしないのだから、向うはそうされるのを望んでいないのだ。この考えは間違つていなかったと今日でも思っている。私のような初心な男には、勇氣を與えるばかりでなく、進んで教えてやる必要もあるということが分らないほど氣の利かない女ではなかった。

若しその場に邪魔が入らなかったら、この激しい默劇の結末がどうなったか、あの變てこな、しかし樂しい狀態に、いつまで私がじっとしていたか、それは見當がつかない。ところが、私がわくわくしている眞最中に、二人のいた部屋に接した臺所で、扉の開く音が聞えた。すると、ぎょっとしたバジール夫人は、身振りと一緒に、せき立てるような聲で、

「ロジナが來るわ。さア立って」と、言った。

私は急いで立上りながら、差し出された女の手を握った。そして、その手に燃えるような接吻を二つ押しあてたが、その二つ目の時には、相手の魅惑的な手がこちらの唇の方へ少し押しつけられたように感じた。生涯のうち、こんな甘美な瞬間を持ったことはなかった。しかし、一度失った機會はもう二度と立戻らなかった。そして、二人の若い日の戀はそれぎりとなった。

しかし、恐らくその故にこそ、あの愛すべき女性の面影が、極めて魅力に富んだ姿でいつまでもこの心の底に刻みつけられているのであろう。私が世の中を知り、女を知るにつれて、その面影は益々美しくさえなった。あの女にもう少しの經驗があつたならば、少年の心を搔き立てるのに、もっと異ったやりかたをしたに違いなかった。しかし、あの女は弱氣だったただけに、貞淑でもあったのである。知らず識らずのうちに、つい引きずられて、あんな氣持になったのであろう。どう見ても、あれはあの女の最初の浮氣であった。そして、恐らく私は、自分の羞恥を制するよりも、相手の羞恥を制するのに大變な骨が折れたと思う。そこまで深入りせず、女のそばにいるだけで、言うに言われぬ悅樂を味わったのである。女をわが物にした時に感ずるどんな氣持も、あの女の足もとで、その着衣に一指も觸れずに過したあの二分間の氣持に比べれば、問題にならない。まつたく、己が愛する貞淑な女から與えられる喜びに匹敵する喜びはない。そういう女の傍にいれば、あらゆるものが惠みとなる。一寸した指の合圖、こちらの口に輕く押しつけた手、それは私がバジール夫人から初めて受けた唯一の惠みである。そしてこのような些細な惠みでも、それを思い出すと、今でも私は心が高鳴る

その後の二日間、もう一度二人だけになる機會はないかと狙っていたが、駄目だった。旨い折が見つからなかったし、バジール夫人の方にも機會を作ってくれそうなそぶりが見えなかった。冷たいほどではないが、ふだんよりよほど控え目な態度さえ取っていた。眼のやり場に困ることを恐れて、私の眼を避けていたように思われるのである。例の憎らしい番頭は、今までよりひどく厚かましくなった。嘲弄的で、冷笑的にさえなった。私が御婦人方に縋って立身でもしたがっているようなことを言った。私は何か氣どられるようなことでもやったのではないかとびくびくした。そして、こちらではもう奥さんと意氣投合しているつもりだったから、それまでは大して内證にしておく必要もなかった好き心を、それからは祕密にしておきたいと思った。このために、自分の心を滿足させる機會を掴むのに前よりも一層愼重になった。そして、

確實な機會を、と思っていたばかりに、もう全く機會を見出すことがなかったのである。

これも亦私が決して治すことのできなかったロマネスクな奇癖の一つであった。そして、これが生來の内氣と結びついて、番頭の豫言を見事に覆したのである。私は餘りに眞面目に、敢て言えば餘りに完全に愛した。そのために、容易に幸福になり得なかったのである。凡そ熱情と言っても、私の熱情ほど激しく同時に純粹なものはなかった。私の愛ほど情味に滿ち、眞劍で、無私無慾な愛はなかった。愛する人の幸福のためなら、何千回でも自分の幸福を犧牲にしたであろう。愛する人の名譽は自分の生命よりも貴重であった。そして、あらゆる歡樂に代えても、その人の安息を一瞬間も擾したくないと思った。このために、自分のしようと思うことには非常に氣を配り、内密にし、また注意を拂ったために、却って何一つとして成功したためしがなかった。女性に對してあまり成功しなかったのも、あまりに女性を愛しすぎるところから來ていたのである。

さて笛吹きのエギストスに話を戻すが、奇妙なことにこの極道者は、益々我慢がならない厭な男になる一方に、段々と人の機嫌を取るようになった。女主人は私に目をかけるようになった日から、店で私を使おうと考えていた。私はどうやら算術ができた。奥さんは、私に帳面つけを教えるように番頭に持ち出した。ところが、この氣むずかしい男は、多分自分がお拂いばこにでもされると恐れたのか、この提案をなかなか聞き入れなかった。こうして、私は自分の影物の仕事が濟んでも、計算書や覺えを書きうつすとか、帳簿を清書するとか、イタリヤ語の取引狀をフランス語に直すとか、そんなことがせいぜいの仕事だった。ところが、不意に、番頭は一度持ち出されてはねつけた例の提案を、また取上げる氣になって、複式簿記を教えてやろう、バジールさんが歸って來た時、立派にお役に立つようにしておいてやろう、と言った。その調子や樣子の中には、何か空々しい、惡意のありそうな、皮肉なところがあったので、私にはどうにも信頼がおけなかった。バジール夫人は私の返答も待たず、番頭に向って、あなたの申出はこの子には大變有難いし、やがては運が向いて來てこの子も値打を現わす時がきっと來ると思う、こんなに頭の良い子がいつまでもただの番頭では勿體ないからね、と、耳の痛いことを言うのであった。

奥さんは前から何度か、私を何處か、ためになる所へ紹介してあげたいと言っていた。賢明な思慮をめぐらした結果、もう私を自分から引き離す時期が來たと感じていたのである。あの暗默の戀の表示が行われたのは木曜日のことだった。

日曜日には晩餐會を催し、私もその席にいたし、また一人の穩やかな顏つきをしたドミニカン宗派の修道僧も招かれた。私はその修道僧に引合わされた。僧は非常に優しく私に接して、私の改宗をよろこび、奥さんからこまごまと聞いたと見えて、私の身の上についても色々なことを言った。それから、手の甲で私の頰の上を二度ほど叩きながら、素直な人間になりなさい、しっかりやりなさい、一度私に會いにおいでなさい、ゆっくり話をしよう、と言ってくれた。誰もかれもこの僧に尊敬を拂っているところから、私はこの人は立派な僧だと判斷した。そして、バジール夫人に向って言う口調から、奥さんの懺悔聽問僧だということが分った。今でも憶えているが、親しさの中にも禮を失しないその態度には、奥さんに對する尊重と敬意の念さえ籠っていたのであって、當時の私には、それが今日ほど強く印象づけられなかった。若し私がもう少し利口であったら、懺悔聽問僧に尊敬されるほどの若い女性の心を、自分が動かし得たということを、どれほど嬉しく思ったことであったろう。

食卓は一同が皆著席できるほど大きくなかった。そこで一脚の小卓を持ち出し、それには例の番頭先生と私が樂しい差向いということになった。別卓にいても、のけ者にされたり、御馳走を食べそこなうようなことはなかった。私の小卓には澤山の御馳走の皿が廻されて來たが、それが番頭先生へというつもりではなかったことは確かであった。そこまでは萬事が旨く運んだ。御婦人たちは大變にはしやいでいたし、男たちも非常にちやほやしていた。バジール夫人も愛嬌たっぷりに主婦ぶりを發揮した。ところが、食事も酣な頃となって、表の戸口で車の停る音がする。誰かが上って來る。バジール氏である。金釦の緋色の服を着て入って來た時の樣子は今見るように目に浮ぶ、その時以來、私はこの緋色という色が嫌いになった。バジール氏は脊の高い美男子で、堂々たる恰幅だった。足音も高く入って來た樣子は、いかにも一同の不意をついたという工合であったが、そこにいた者はみなバジール氏の知己ばかりであった。奥さんはその頸に飛びつき、兩手を握って無闇に甘えるが、主人はそれに應えようとしない。一同に挨拶をする。食事が運ばれる、それを食べる。誰かが旅の話をしはじめた途端に、主人は小卓の方に眼を投げながら、そこにいる小僧は何者だ、と嚴しい口調で訊く。バジール夫人はごく氣輕にわけを話す。家で寢泊りするのかと訊く。いいえ、と言う。

「何がいいえだ」と主人はぞんざいな調子で言い返して、「晝間ずっと來ているなら、夜だっているわけだろう」

そこへ修道僧が口を出した。そして、バジール夫人を眞面目に眞劍に賞めた後で、言葉少なに私もほめてくれた。奥さ

んの奇特な慈悲を咎めるどころではない、あなたも進んでそれを助けなければならない、少しも不謹慎な埒を越えたところはないのだから、と言い添えた。主人は不機嫌な調子で言い返したものの、修道僧の前でもあるし、遠慮してその不機嫌の半分は隠していたが、私にすればそれだけで十分に、主人が私について何か知らされている、番頭がおせっかいなことをやったのだ、ということが感じられた。

一同が食卓を離れるや否や、番頭先生は主人の旨を含んで鼻高々と私のところへやって來た。そして、主人の言いつけだから、直ぐこの家を出て行ってくれ、二度と此處へ足踏みしないように、と言った。番頭は主人の口上に、できるだけ侮辱的な殘酷な調子を加味していた。私は何も言わずに出て行った。しかし、あんな優しい女性と別れるということよりも、あんな女性を亂暴な亭主の餌食に殘さなければならないのかと思って、胸をえぐられるようだった。細君の不貞を望まないのは夫としては尤もな次第であった。しかし、いかに貞淑であり育ちがいいと言っても、奥さんはイタリヤ女である。つまり、感じ易く、復讐心が強い女である。だから、そういう女に對して、亭主たるものが、自分の恐れる不祥事を却って招き寄せるような手段を採るのは、間違っていた、と私には思われるのである。

私の初戀物語の始末は以上のようであった。その後もその街を二三度通って、たえず心に未練の殘る女性の顔をもう一度拜みたいものだと顧ったが、奥さんの代りに、亭主か、あの見張役の番頭かの顔しか見えなかった。しかも、番頭は私の姿を認めると、店の物差を手にして、おいでおいでをするよりもっと意味深長な身振りをして見せた。そんなに警戒されていることが分ると、もう勇氣を失って、そこを通らなくなった。私はせめてあの人から取持って貰った例の修道僧に會いに行きたいと思った。生憎その人の名を知らなかった。修道院のまわりを、何度か歩きまわって、出會えるように努めたが、それも徒勞に終った。やがて、他の色々な出來事が、バジール夫人のなつかしい思い出を私から奪った。そして、間もなく全く忘れてしまったから、前と同じような單純で初心な自分に戻ってしまい、綺麗な女に引き寄せられる氣にさえならなくなった。

それはそれとして、バジール夫人の惠みによって、貧しい身の廻りも多少増えていた。尤もそれはごく質素なものであって、身を飾るよりも清潔が第一、立派に見せるよりも暑さ寒さに難儀しないようにと考える用心深い女としての心づかいからのものだった。ジュネーヴから持って來た服はまだ損んでもいず、着ることができた。バジール夫人はこれに帽

子と肌着の類を加えてくれただけだった。私はカフスを持っていなかった。非常にほしかったが、奥さんはくれようとしなかった。私にさっぱりした身なりだけさせておけば滿足だったのである。尤も、私が奥さんの前にいる限りは、そんな注意を向うからしてくれる必要はなかった。

あの終局があってから間もなく、前にも言ったように、私を可愛がってくれていた宿のおかみさんは、多分お前さんの口が見つかったらしい、或る身分の高い御婦人が會いたいと仰しゃっている、と言った。これを聞くと、私はいつもの癖で、これは上流社會の戀の冒險に飛びこむことになった、と思った。ところが、この戀の冒險は空想したほど輝かしいものではなかった。私のことを先方に話してくれた下男に連れられて、私はその貴婦人の家へ出かけて行った。色々と物を訊かれ、調べられた。氣に入らないところもなかったので、直ぐに使われることになった。尤もお氣に入りという資格ではなく、ただの下僕としてであった。他の使用人と同じ色の服を着せられた。たった一つ異ったところは、他の連中のには飾緒がついていたが、私のにはついていなかったことであった。そのお仕着せには袖飾がなったから、ほとんど普通の服のようだった。すべての私の大望が漸く行き著いた思いがけない結末が、この始末であった。

私の傭われた家のヴェルセリス伯爵夫人は、未亡人で子供もなかった。亡夫はピエモンテの人だった。夫人の方は、フランス語も上手に話したし、綺麗な發音でもあったので、ピエモンテの人とは考えられず、サヴォアの人だろうと始終思っていた。非常に上品な顔つきの、教養も高い中年の婦人であって、フランス文學が好きで、またなかなか詳しかった。手紙をよく書く人で、しかもいつもフランス語で書いた。夫人の手紙にはセヴィニェ夫人[*1]の書簡の持つ表現と雅致さえあった。或る手紙なぞはほとんど兩者の區別がつかないほどである。私の主な仕事は、夫人の口授する手紙を書くことであって、厭な仕事ではなかった。夫人は乳癌で、それがひどく痛むために、自分で筆を持つことができなかったのである。

ヴェルセリス夫人は極めて才知に富んでいたばかりでなく、高く強い精神を持っていた。私は夫人の最後の病氣に付添った。夫人が苦しむのも死ぬのも見たのであるが、夫人は一瞬時も弱氣を見せず、また、無理に自制しようとも努めず、女らしさから逸脱することもなかった。しかも、そういうところに哲學がある、なぞとは全く思ってもいなかった。哲學という言葉は當時まだ流行していなかったし、今日のような意味では、夫人はその言葉を知っていなかった。このような

*1 フランスの女流作家。その愛娘に與えた書簡によつて書簡文學なる一ジャンルを開拓した(一六二六年—一六九六年)。

強い性格は、時には冷酷に流れることもあった。他人に對しても自分自身に對しても、同じように心を動かさない人だといつも私には思われた。そして、不幸な人々に慈善をするにしても、本當の同情からというよりも、それが善い事だからする、といった工合だった。夫人のそばで過した三ヵ月の間、私はこのような無感動にいくらか接することがあった。行末の見込もあり、始終自分の目の前にもいる青年に對して愛情を持つとか、死の近いことを感じて、自分の亡き後はその青年が援助と支持を必要とするに違いないと思いやるとか、そうしたことは夫人としては當然のことであった。ところが、私が特別な配慮に値しないと思ったのか、それとも夫人を取卷く人々が自分たちのことしか夫人に考えさせないようにしたのか、とにかく夫人は私のためには何一つしてくれなかったのである。

しかし、私は非常によく憶えているが、夫人は私というものを知ろうとして、いくらかの好奇心を示したことがあった。時々色々な質問をした。ヴァラン夫人にあてて書いた手紙を見せたり、自分の氣持を話したりすると、夫人は大變よろこんだ。しかし、こちらに自分の氣持を示しもしないで、そういうやり方で私の感情を知ろうとしても、これは確かにまずい方法であった。私の心は、他人の心へ流れこむことが分ってさえいれば、いつでもよろこんでその方へ溢れ出す。ところが、私の返答に對して合槌も打たず、そうかと言って咎めるでもない、そんな冷たくそっけない質問の數々は、少しも信頼の念を起させなかった。こちらの饒舌が相手の氣に入っているのかいないのか全く見當もつかない時には、いつも氣がかりになった。そして、自分の思っていることを示すというよりも、自分の損にならない事ばかり言うように努めるのであった。後になって氣づいたのであるが、相手を知るためにこのようなそっけない質問の仕方をするのは、才知を鼻にかける婦人たちに共通した癖である。自分たちの感情を表面に現わさなければ、相手の心を深く洞察できるものだ、と考えているのである。そういうことをすれば、相手に氣持を表示する勇氣を失わさせる、ということには氣がつかない。人から質問を受ける者は、もうそれだけで警戒心を起しはじめるものである。こちらに本當に關心を持っていてくれるのではなく、ただ喋らせようとしているだけだ、と氣がつけば、嘘をつくか、默るか、或いは自身のことに益々用心深くなるかして、相手の好奇心の餌になるよりも、馬鹿と思われた方がまだしもいいと考える。要するに、自分の氣持を隱そうとするのは、他人の心を讀む方法としては常に下の下である。

ヴェルセリス夫人は、情愛とか憐憫とか厚意とかを感じさせるような言葉は決して口にしたことがなかった。夫人は私

に冷たく質問した。私は控え目に答えた。私の返答はひどく内氣なものだったから、夫人は詰らない答と思ったらしく、やがて退屈した。後には質問もしなくなったし、用事のほかは口も利かなくなった。夫人は本當の私を基としてよりも、自分で作り上げた私を基として私を判斷したのである。そして、私のうちに下僕しか見ていなかったから、私が他のものに見せようとしても、それはできなかった。

關心があってもそれを隱しておくという性根の悪いやり方に出あったのはそれ以來のことと思っていろが、私は一生の間このやり方に惱まされ、關心を祕めていながら表面とりすましているということには、自然と反感を抱くようになった。ヴェルセリス夫人には子供がなく、甥のラ・ロック伯爵を相續人にしていたから、伯はせっせと夫人の御機嫌とりにやった來た。そのほか、主な召使たちも、夫人の餘命がいくらもないことを知っていたので、なかなか拔目がなかった。このように、夫人の周圍には澤山の人がひしめいていたわけで、夫人が私のことを考える時間を持つのは困難であった。家の中を切りまわしていた人はロレンチ氏という如才のない人であったが、その細君がまたこれに優る大したやり手で、女主人の寵を恣にし、夫人の家では、雇女というよりも夫人の友達のような觀を呈していた。自分の姪でポンタル孃というのを夫人の小間使に入れていたが、この娘も隅に置けない利口者で、侍女を氣取り、叔母と一緒になって、女主人を虜にしていたから、夫人はこの二人の眼で物を見、二人の手で事を運ぶという有樣だった。私はこの三人の氣に入る幸福を持たなかった。三人の言うことには從ったが、その手足にはならなかった。われわれ共通の女主人に仕える以外に、夫人の下僕の下僕になる必要があろうとは思わなかった。その上、私は三人にとっては一種の不安心な人間だった。私が自分に相應した地位にいないことは向うにもよく分っていた。奥さんがそのことに氣づいて、私を適當な地位につければ、そのために自分たちの取り分が減るだろうと心配していたのである。こういう連中は、あまりに貪慾すぎて公平なぞということは忘れてしまい、他人に行く遺産はみんな自分たちの財産から奪い取られるように思っている。そこで、三人は一緒になって、私を夫人の眼から遠ざけた。夫人は手紙を書くことが好きだった。それが病中の夫人の氣晴らしだった。三人は夫人がそれを厭うように仕向け、醫者の口から、疲れるからと言い含めさせて、やめさせた。私ではお役が勤まらないという口實を構えて、私の代りに賤しい輪かきを二人、夫人の傍に雇いこんだ。こうして、何もかも旨くしてやられて、夫人が遺言書を作った時は、もう八日も前から私は夫人の部屋に入ったことがなかったのであった。尤も、それが濟んだ後で

は、前と同じように夫人の部屋に入ることができた。しかも、誰よりもまめまめしく仕えさえした。なぜなら、この氣の毒な夫人の苦痛の有樣が私の心を搔きむしったからである。苦痛をこらえている夫人の辛抱强さはこの上もなく尊く、頭の下る姿であった。そして、夫人の部屋にいて、夫人にも他の誰にも氣づかれずに、私は眞心からの涙を流したのであった。

夫人はとうとう亡くなった。私は夫人の息を引取るところを見た。夫人の一生は才識ある女性のそれであった。その死は賢者のそれであった。宗教上の義務を粗略にもせず衒いもせず勤め上げた清澄な魂、それによって夫人は私にカトリック教を好ましく思わせた、と言うことができる。夫人は生來眞面目な人だった。病氣の末期には、一種の快活さを持つようになった。それも、作りものとは考えられないむら氣のない快活さであって、これは痛ましい境遇に對して理智の與えた均重でしかなかった。夫人が床についたのは最後のたった二日間だけであって、床についていても誰とでも靜かに話をすることを止めなかった。とうとう、口も利かなくなり、すでに死苦と闘っていた最中に、夫人は大きなおならをした。「よかった」と、夫人は寢返りを打ちながら、「これが出れば、まだ死んではいません」と、言った。

これが夫人が口にした最後の言葉であった。

夫人は下々の召使たちには一年分の給金を遺していた。しかし、私は家人の名簿の中に入っていなかったから、何も貰わなかった。それでも、ラ・ロック伯爵の取りはからいで三十フランのお金と、着ていた新しい服を貰うようになった。ロレンチ氏は、その服まで取上げようとしたのであった。伯爵は私の勤め口を探してやるとさえ約束してくれて、會いに行くことも許してくれた。二三度出かけて行ったが、伯爵と話すことができなかった。直ぐむかっ腹を立てる性質だから、もう二度と行かなかった。こちらの悪かったことは後で分る。

ヴェルセリス夫人の家にいた時のことで、話すべきことをこれですっかり話してしまったのならいいのだが、そうはいかないのだ。外見上は私の狀態は同じままだったが、實は、この家を出る時の私は、入った時の私のようではなかった。永劫の罪の思い出と、堪えがたい苛責の重壓を擔って、この家を出たのである。四十年の後になっても、私の良心はなおその重荷を負い、その苛烈な思いは弱まるどころか、年をとるにつれて、益々激する。少年の過失がこれほどひどい結果を招こうとは誰に信じられようか。私の心がいつまでも休まらないのは、實にその結果のためなのである。私は一人の少女を、恐らく汚辱と窮乏の中に殺したのである。愛らしく、正直な、立派な、私なぞより間違いなく遙かに優れた一人の

少女を。

一家の瓦解にあたって、家内に混亂が起らず、多くの品物が紛失しないことはなかなか困難なことである、然るに、召使たちの忠誠とロレンチ夫婦の監視によって、財產目錄から缺けたものは何一つなかった。ただ一人ボンタル孃だけが、使い古した薔薇色と銀色の小さいリボンを一本失くした。もっと良い品物が他に澤山私の手の届くところにあった。ところが、そのリボンが欲しくなって、私はそれを盜んだのである。しかも、盜んだリボンを別に隱そうともしなかったので、間もなく探し出されてしまった。何處でそれを手に入れたかと訊かれた。私は困って口ごもり、とうとう、赫くなりながら、實はマリオンから貰ったのだ、と言った。マリオンというのは、モーリエンヌ生れ[*1]の娘で、ヴェルセリス夫人が、お客を食事に招くことをやめ、御自分も御馳走よりはおいしいスープを摘らなければならなくなった時に、前の料理女に暇を出して、新たに御自分の料理女にした少女であった。マリオンは器量がよかったばかりでなく、山國でなければ見られない色艶の生々した娘で、殊に遠慮がちなおとなしい樣子は、見る人に愛情を抱かせないではおかなかった。その上、氣立がよく、利口で、忠實なことこの上もなかった。だから、私がマリオンの名を言った時には、みんな意外な顏をした。私もこの少女に劣らずみんなから信用されていたから、二人のうちのどちらが本當に盜んだのか調べる必要がある、とみんなが判斷した。マリオンは呼び出された。大勢の人が集まり、その中にはラ・ロック伯爵の顏も見えた。マリオンが來る。リボンを見せる。私は厚顏にも相手に罪を着せる。少女は呆氣にとられ、默り、惡魔の心も和ぐような一瞥を私に投げる。私の殘忍な心はそれに抵抗する。やがてマリオンはきっぱりと、しかし怒りもせずに否定する。私に呼びかけ、どうか本心に戻ってくれ、あなたに何も惡いことをした覺えのない潔白な娘に恥をかかせないように、と私を諫める。すると、私は、人非人の厚かましさで、自分の言明を固守し、お前がおれにリボンをくれたのではないか、と面と向って言い張る。可哀そうにマリオンは泣きはじめ、ただこう言うだけである。

「まあ、ルソオさん。わたしはあなたを立派な人だと思っていたのに。わたしはあなたのために、こんな悲しい目に遭わされていますけれど、でも、あなたの立場にいなくてよかったと思いますわ」と。

これだけである。マリオンは、それから、しっかりと、しかも素直に辯解を續けたが、私に對しては些かも罵るような

*1 サヴォアの一地方で山國である。

ことはしなかった。こちらのきっぱりした口調に比べて、そのようなおとなしさは向うに不利だった。一方にそれほどの悪魔的な圖々しさが、他方にそれほどの天使のような柔和さがあろうとは、共に想像することができなかったからであった。一同は、はっきりどちらときめることはできなかったが、推測は私の方に有利だった。取込み中のために、眞相を深くきわめる餘裕はなかった。そして、ラ・ロック伯爵は、私たち二人に暇を出しながら、罪ある者の良心が罪なき者の仇を十分に討ってくれるだろう、と言っただけだった。この豫言は嘘ではなかった。これが事實となって現われないのは一日としてないのである。

私の誣告の犠牲者がその後どうなったかは知らない。しかし、こういうことのあった後のマリオンが、たやすく良い口を見つけることができたとはどうしても思われない。少女は名譽に對する殘酷な非難をどうしても負うことになったのである。その盗みは些細なことだった。しかし、盗みは盗みであった。しかも、なお悪いことには、この盗みは年若い少年を誘惑するために行われた。その上、嘘をつき强情を張ったというので、多くの悪德を重ねたこの少女を、いよいよ取り柄のない者にしてしまった。私がマリオンを陷れた最大の危險が、貧窮と世間からの冷遇だけだとは思わない。あの年頃で、潔白を瀆されたという自暴自棄の氣持が、あの少女をどんな道に導いただろうか。少女を不幸にしたに違いないという苛責だけでも堪えられないのに、更に自分より悪い者にしたという苛責が、どんなものであるか、察して頂きたいものである。

この痛切な思い出は、今でも時として私を惱ますことがある。そして、そのために心は非常にかき亂され、眠られぬ夜なぞ、あの哀れな少女が私のところへ來て、まるで昨日犯した罪でもあるように、その非を咎める樣を目にするのである。靜かな生活をしていた間は、それに惱まされることも少かった。しかし、風波の多い生活の最中に、自分は罪もないのに迫害されている者だと思う甘美な慰めを、あの思い出が私から奪い取ってしまう。これは何かの作の中で言ったことがあると思うが、苛責は得意にある時には眠っているが、失意の時には動き出す、ということを、つくづくと感じさせられるのである。それなのに、この告白を友人の胸に訴えて、心の重荷を卸す決心がどうしてもつかなかった。どんな親密な間柄も、未だこの告白を誰にもさせなかった。ヴァラン夫人にさえそうだった。私のなし得たのは、自分は恐ろしい事をして氣が咎めていると告白するだけで、それがどのような事かということは決して言わなかった。從って、この重荷は

今日まで私の良心の上にあって、少しも輕くならない儘だった。そして、この重荷から何とか脱しようという意慾が、この「懺悔録」を書く決心に大いに寄與していると言うことができる。

私は右の懺悔を有りのままに行った。そして、私がこの極悪非道な大罪を、ここに取り繕っているとは誰も思うものはないと確信する。しかし、自分の内心の狀態をさらけ出すと同時に、眞實に基いて、自己辯明をするのを恐れては、本書の目的を達したことにならないであろう。あの恐ろしい瞬間ぐらい私が悪意から遠ざかっていたことはなかったのである。しかも、實におかしな事であり、また眞實でもあるのだが、あの不幸な少女に罪を着せたのは、私の親愛の情が、その原因であったのである。あの少女のことがいっも頭の中にあった。私はふと頭に浮んだ最初のものに口實を見つけたのであった。自分が向うにしてやりたいと思っていたことを、向うがしたと言って、あの少女を誣いたわけである。自分の意志があの少女にリボンをやることだったから、向うが私にリボンをくれた、と言ったわけである、やがて少女が現われたのを見て、私の心はひどく痛んだ。しかし、多くの人がそこにいたことが、後悔の念よりも强かった。罰はあまり怖くなかった。恥かしさだけが恐ろしかった。しかも、それを死よりも、罪よりも、この世の何よりも、恐れた。地の底へもぐって、窒息してしまいたいほどだった。打克ち難い羞恥心が一切を抑えつけた。羞恥だけが厚顏を生んだ。そして、自分の罪が明かになりそうになればなる程、それを認める恐ろしさが、私を益々不敵な者にしたのである。私は、自分のいる前で泥棒だ、嘘つきだ、誣告者だと自分が公然と認められ、宣言される恐ろしさしか目に入らなかった。すっかり取りみだして、他の感情は何もなくなってしまった。若し靜かに反省させておいてくれたなら、必ず何もかも打明けてしまったであろう。若しラ・ロック氏が私だけを別に呼んで、「あの可哀そうな娘を傷つけてはいけない。君に罪があるのなら、私に打明けたらどうだ」とでも言ってくれたら、私は立ちどころにその足元に身を投げたであろう。これは全く私の確信しているところである。ところが、一同は、勇氣を與えるべき場合に、尻ごみさせることしかしなかったのである。私の年齡のことにも注意を拂うべきだった。私は漸く少年期を出たばかり、むしろまだ少年期にあった。少年期に於ける眞の邪心は、成年後に於けるより一層罪深いものである。しかし、單に弱氣というだけの事なら、罪はずっと輕い。私の過失は、畢竟するに、弱氣より他のものではなかった。從って、この思い出は、悪行そのものために私を苦しめるというよりも、それが惹起した筈の害悪のために、苦しめるのである。しかも、この思い出は、自分の犯しただ一つの悪行から殘

された恐ろしい印象のために、その後の生涯を通じ、凡そ罪に走りそうな如何なる行爲からも私を守ってくれたという利益さえ與えてくれたのであった。そして、虚言に對する私の嫌悪は、その大部分が、あんな悪辣な虚言を吐いたという後悔の念から來ていると思っている。若しこの罪が、私が敢て信じているように、償い得るものであるとすれば、それは、私の生涯の終りを蹂躙している多くの不幸によって償わるべきであり、苦境にあって方正と廉恥を通した四十年の年月によって償わるべきである。そして、あの哀れなマリオンにはその仇を討ってくれる者がこの世には澤山あるのだから、あの少女に對する私の侮辱が如何に大きかったとしても、私はその科を負ってあの世へ行くことをあまり恐れない。以上がこの事について私の言うべきことである。もう二度とこの事を話すのは許して頂きたいものである。

第三巻

（一七二八年――一七三一年）

ヴェルセリス夫人の家を、入った時とほとんど同じ狀態で出た私は、前のおかみさんのところへ歸り、そこで五六週間暮したが、その間、健康と青春と無聊とから、度々氣分がいらいらした。不安で、ぼんやりして、夢ばかり見た。泣いたり、溜息をついたり、何かはっきり分らないが、しかし、何か自分に足りない氣のする幸福を渴望したりした。こんな狀態は書き現わすこともできないし、大抵の人には想像もできない。なぜなら、慾望の陶醉の中に享樂の前味を與えてくれるあの苦しくもまた甘い生の充溢に對しては、大部分の人が前もってそれに備えているものだからである。燃え上った私の血は、たえず私の腦髓を、娘や女で滿たした。しかし、それを本當にはどう使うものか知らないで、空想のままに頭の中で變に使うだけで、それ以上のことはどうしていいか分らなかった。そして、このような頭の働きは、官能の働きを、いつまでもぎこちなくさせていて、そのぎこちなさから抜け出ることは敎えなかったから、却って仕合せであった。もう一度ゴトン孃のような少女と十五分間でも一緒にいられれば、生命を投げだしてもいいとさえ思った。しかし、今はもう子供の遊びで、自然とあんな事になる年ではなかった。悪の意識に伴って來る羞恥の念が年と共に生れて來ていた。そのために、生れつきの内氣は益々ひどくなり、終には手に負えないほどになった。そして、その頃に於ても、またその後にあっても、私は決して婦人に向って、こちらからみだらな申出をしたことはなかった。ただ、相手から持ちかけられた

ためにこちらが、言わば強いられて、したことはあったが、それ以外は、たとえ相手が用心深くもなく、承知するに決っていると分っていても、決してそういう申出をしたことはなかった。

いらいらした氣分は次第に昂じて、終には、慾望を滿足させることができないままに、ひどく突飛な動作をやって、劣情を煽り立てるようになった。薄暗い小徑とか人目につかない場所を探しに行って、女のそばでしてみたいと思う恰好をし、それを遠くから女たちの目に入るようにしたのである。女たちの見たものは猥褻なものではなかった。そんな事は自分でも思ってさえいなかった。ただ、滑稽なものだった。そういうものを見せつけて自ら快とするこの愚劣なよろこびは、ここに書き現わしようもないものである、相手から望み通りのあしらいを受けるためには、もう一歩進んだことをやりさえすればよかったし、また、こちらに圖々しく待っているだけの氣があったら、誰か思切りのいい女が、通りすがりに、そういう樂しみを與えてくれただろうことは疑いない。この馬鹿げた所業は、滑稽な、しかもそれだけに私には面白くない終局を持つことになった。

或る日、或る家の裏庭へ出かけて行って、おみこしを据えた。裏庭には井戸があって、その家の娘たちが度々水を汲みに來るのだった。この奥に一寸した斜面があり、そこから抜け穴が幾筋か穴倉に通じていた。この地下道を暗がりの中で測ってみて、長くて暗いのが分ると、この道は行きどまりになっていないから、若し不意に見つかったらこの中へ逃げこめば安全だ、と判斷した。これで安心した私は、井戸に來る娘たちに、例の誘惑的というよりむしろ笑うべき仕草をやって見せた。たしなみの深い娘たちは見て見ぬふりをした。他の娘たちは笑いはじめた。或る娘たちは侮辱されたと思って、さわぎ立てた。私は例の隱れ場へ逃げこんだ。追いかけて來た。思いもかけぬ男の聲が聞えて、私は膽を冷やした。迷ってもかまわないと思って、地下道の奥深く入った。物音・人聲・男の聲が依然として追跡して來た。暗いと思っていたのに、明りが見えた。びっくりして、なお奥へ進んだ。壁につき當った。行きどまりだ。觀念の眼を閉じなければならなくなった。忽ちのうちに追いつかれて、大きな男に捕まった。大きい口鬚、大きい帽子、大きいサーベルの男で、四五人の婆さんが、てんでに箒の柄を握って、その後についていた。婆さんの仲間に、告げ口をしたお轉婆娘の顏も見えた。きっとこちらの顏を見たかったのだろう。

サーベルを下げた男は、私の腕をつかんで、何をやったのだ、と荒々しく詰問した。固よりこちらは返事の準備はでき

ていなかった。しかし、私は氣を取り直し、この危機に臨んで懸命の努力を拂って、小説めいた窮策を頭から絞り出し、うまく成功した。私はその男に、この年齢とこの境遇を憐れんで下さい、自分は外國の名家に生れた子で、頭が少し變なのです、監禁されそうになったので、父の家を飛び出して來たのです、こんなことが世間に知れたら自分の身の破滅です、若し自分を放免してくれれば、多分いつかはその御恩に報いることができるでしょう、と、歎願するような調子で言った。まさかと思っていたが、この物語と私の樣子とが見事に奏効した。恐ろしい男は、すつかり感動して、一寸小言を言ったばかりで、それ以上の詰問をせず、おとなしく放免してくれた。例のお轉婆娘と、他の婆さんたちが私を見送った樣子から判斷して、自分があれほど恐れたあの男は自分には大いにためになったのであって、若し女連中だけだったら、こんなに手輕に難を免れることはできなかったであろう、と思った。女連中が何かぶつぶつ言っているのを耳にしたが、私はもう氣にもかけなかった。なぜなら、サーベルの男さえその仲間にいなければ、敏捷で元氣な私は、そんな棒きれや女どもから逃げ出すことはわけないと思つていたからである。

それから數日後に、近所の若い僧と一緒に町を歩いていると、例のサーベルの男にばったり出食わした。先方は私の顏を憶えていて、からかうような調子で、私の聲色を使いながら、

「僕は貴族です、僕は貴族です、が聞いて呆れらア。こちとらは馬鹿を見たぜ。だが、殿下には二度とあんな事をなさいませんように。願いますぜ」と、私に言った。

その男はそれ以上には何もつけ加えなかった。そして、私は頭を下げて、こそこそとその場を逃げたが、心の中では相手が控え目だったのを有難く思つた。思うにあの憎い婆さん連中は、男が輕々しくこちらを信用したので、男をやっつけたのだろう。いずれにせよ、あの男はピエモンテの人間にしては、人の好い男であった。私はあの男のことを思うにつけて、いつも感謝の念を覺えるのである。なぜなら、あの一件はいかにも滑稽だから、他の者にかかったら、お笑い草にするつもりだけでも、私にひどく恥をかかせたに違いなかったからである。この出來事は心配した程の結果にはならなかったが、それでも私はその後永くお行儀をよくするようになった。

ヴェルセリス夫人のところにいた間に、何人かの知り人ができた。ためになることもあろうかと、その後も交際を續けていた。その中でも、サヴォア人の僧でゲーム氏*1といって、メラレード伯爵の子息たちの家庭教師をしていた人には、時

々會いに行つた。まだ年が若くて、ほとんど世間に知られていないが、良識と誠實と聰明に滿ち、私の知った最も立派な人々のうちの一人であった。師のところへ惹かれて行った目的から見れば、この人は少しも自分の頼りにはならなかったし、自分に口を見つけてくれるほど十分な信用もなかった。しかし、師に親炙することによって、私はそれ以上の、生涯を通じて私を裨益した多くの利益を見出した。それは、健全な道德上の教訓とか、正しい理性から來る指針とかいうものだった。自分の趣味や思想がつぎつぎに移って行く順序を見ると、私は高尙すぎるか低俗すぎるか、アキレウス*2かテルシテスか、時には英雄となり、時には無頼漢となった。ゲーム氏は注意して私を居るべき場所に落著かせ、私に自身の姿の見えるようにしてくれた。それは容赦もなかったが、私を落膽させることもなかった。私の天性や才能を非常にほめて語った。ところが、邪魔者が現われかかって、その天性や才能が發揮できないようになりかかっているのが見える、とつけ加えて言った。師によると、そのために、私の天性や才能は幸運の階段を昇るための足がかりとなるよりも、幸運なぞ無くて濟ませる力として役立つことになろう、と。師は私が間違った觀念ばかりしか持っていなかったこの人生の、眞の姿を見せてくれた。思慮ある人が逆境にあって常に幸福を目がけ、そこに到達するために風向きに乘じて走ること、思慮なくして眞の幸福はなく、思慮はあらゆる境遇にも伴うものであること、なぞの理を說いてくれた。他人を支配する者は、支配される者より賢明でもなく、幸福でもないということを證明して、偉大を憧れる私の氣持を大いに冷ましてくれた。今でも屢屢記憶に浮んで來る師の言葉に、次のようなのがある。即ち、若し誰でも他のあらゆる人の心の中を讀むことができたら、上に昇ろうと思う人より下に降ろうと望む人の方が遙かに多いであろう、というのである。眞理に觸れた、誇張の少しもないこの省察は、生涯の間、私が靜かに自分の地位に安住しているために大いに役立った。師はまた、私の誇張癖が極端にのみ解釋していた誠實ということについて、初めて眞の觀念を與えてくれた。師の話を聞いていると、崇高な美德に熱中することは、社會ではあまり役立たないこと、あまり高い所へ飛び上るのは墜落するもとになること、細かい大義務をたえず十分に果して行くことは、英雄的な行いをするに劣らず力を要すること、名譽や幸福のためにも、そうした方が得策なこと、人々の賞讃を得るよりもその尊敬を受ける方が遙かに價値あることであること、なぞを感じたのであ

*1 ゲーム師は宗教教育を終つてトリノへ來り、約六年後にルソオと知り合つた。この頃は三十五六歳だつた（一六九二年―一七六一年）。

*2 ギリシヤ傳說上の英雄。テルシテスは同じくアキレウスと對照的な卑怯者。

つた。

人間の義務を定めるためには、その根本原理にまで遡らねばならなかった。その上、現在の私の境遇を生んだ今までの道は、話を自然と宗教の方へ導いた。既にお察しの通り、この誠實なゲーム氏こそ、少くもその大半は、「サヴォアの助祭」[*1]の本人である。ただ、師は用心してもっと控え目な口を利かなければならなかったから、或る點に關してはそれほど虚心坦懐に意見を述べなかった。しかし、それにしても、師の主義・物の考え方・意見などは全く同じであって、生國へ歸れと言った忠告まで、すべて後に私がそれを公にした通りであつた。そこで、誰にもその本旨の分る談話については、もうこれ以上話を擴げることをやめて、ただ私はこう言いたいのである。即ち、これらの思慮ある教訓は、最初こそ放果はなかったが、私の心中に美德と宗教の芽生えとなり、決して枯れることがなく、やがて實を結ぶためには、さらに優しい人の手の世話を待つばかりであった、と。

當時の私の改宗はあまり堅固なものではなかったけれど、それでも師の言葉にはひどく感動した。その談話は退屈に思うどころか、分り易く、簡單だったためと、とりわけその話の中に眞心がこもっているのが感じられて、好きになった。私は人なつこい性質で、しかも、人にひきつけられるのは、その人が自分にいい事をしてくれたからというよりも、いい事をしてくれようとしたからの方が多い。そして、この點に關しては、私の勘は殆んど私を欺いたことがない。こんなわけで、本當にゲーム氏に心醉してしまったのである。私は、言わば、師の二番弟子というところだった。この事は、折も折、丁度無聊のために惡德への坂を下りかけていた私を引きもどすという量るべからざる善をしてくれたのであった。

或る日、全く思いがけなく、ラ・ロック伯爵のところから迎えが來た、前に何度か行ったけれど、會って話をすることができなかつたから、もう厭になって、行かなくなっていたのである。伯爵は自分のことを忘れてしまったのだ、或いは、自分のことを惡く思っているのだ、と考えていた。それは間違いだった。私が、心からよろこんで伯爵の伯母の傍で義務を盡していた有様を、伯爵は一度ならず見て知っていた。その事を伯母にも話したことさえあったし、今、私自身がもうそんな事を憶えてもいないのに、私に向ってその話をした。伯爵は親切にもてなしてくれた。そして、いいかげんな約束をして糠よろこびはさせなかったが、實はかねて私のために口を探していたこと、それが旨く見つかったこと、私が何かに成れるような道を開いてくれたこと、あとは私の心掛け次第であること、私が入るようになったお邸は有力な名望

家であること、出世するためにはもう他に保護者なぞ必要がないこと、そして、最初は前のように普通の召使としての待遇だが、心掛や行狀から見てその地位の上にあるものと判斷されれば、いつまでも召使のままに据え置かれることは決してないこと、なぞという話だった。この話の最後のところは、初めのところから與えられた輝かしい希望を無殘にも碎いてしまった。「何だ。やっぱりまた下僕か」と、私はひどく無念に思って心に言ったが、その口惜しさもやがて自信の念に打消された。私は自分がそういう地位のためにできた人間だとは感じていなかったので、いつまでもそこに据え置かれることを心配しかなかつたのである。

伯爵は私をグーヴォン伯爵家へ連れて行つた。この人は女王の侍從長で、有名なソラール家の當主であった。この貴い老伯爵の威容は、その溫情のこもつた待遇を一層沁々と有難く思わせた。老伯爵は關心をもって私のことを尋ね、私は正直に答えた。また、ラ・ロック伯爵に向って、この子はいい顏立ちをしている、利口そうな顏だ、きっとそうにちがいないかろうが、それだけでは十分でない、他の點も見なければならぬ、と言った。それから、私の方に向いて、

「何事でも初めはつらいものだ。しかし、お前の仕事は大してつらいこともなかろう。よく人の言うことを聞いて、ここのみんなから可愛がられるように努めなさい。今のところ、それがお前のたった一つの仕事だよ。まあ、しっかりやりなさい。面倒は見て上げる」と、言った。

それから直ぐ、老伯爵は息子の嫁のブレーユ侯爵夫人のところへ行って私を紹介し、次いで、息子のグーヴォン師に紹介した。このお目見得は吉兆のように思われた。かねての經驗から、召使をとり立てるのにこんな大げさなことはしないものだということを、既に知っていたからである。果して、私は召使としての待遇を受けなかった。食事も他の召使とは別だったし、お仕着せも貰わなかった。だから、ファヴリア伯爵という輕率な若様が、私を馬車の後ろに立たせようとした時に、祖父の老伯爵は、私が誰の馬車の後ろに立つことも、邸の外では誰のお伴になることも固く禁じたのである。それでも、家の中では食卓の給仕とか、その他ほとんど召使のやる仕事をやった。しかし、それは特別に誰附きというのでなく、言わば隨意にやっていたわけである。幾通かの手紙の口述筆記をするとか、ファブリア伯爵の御用で繪を切抜くとか、そんな仕事以外は、一日中ほとんど自分の時間が自由に使えた。自分ではそうと氣づかなかったが、この試煉は確か

*1 「エミール」第四巻

に極めて危險なものだった。また、思いやりのある試煉でもなかった。というのは、このように非常に暇があるということは、暇がなければ忘れていられる色々な悪習に私を染ませることになるかも知れなかったからである。

しかし、この上もなく幸いなことに、そういうことは起らなかった。ゲーム師の訓話が強く私の心に刻みこまれていた。そして、その訓話に非常な興味を引かれていたために、時々邸を抜け出しては聞きに行った。そんな風に人目をさけて出て行く姿を見た人は、私が何處へ行くのか見當がつかなかっただろうと思う。私の行狀について師の與えた意見ほど良識のあるものはなかったであろう。私の勤めぶりは最初は實に目ざましいものだった。誰もかれも感心するほどの精勤ぶりであり、注意も行きとどき、熱心でもあった。ゲーム師は、そのように最初から熱中するのは、後に緩む恐れもあるし、そうなると人から目をつけられる恐れもあるから、適度にやるようにと賢明な注意をしてくれた。

「君の初めの勤めぶりが、後に色々と君に要求することの尺度になる。後でもっと仕事のできるように、今は自重しておくことだ。段々に熱がさめないように用心しなければ」と、師は言うのであった。

人々は私の細かい才能を試してみようともせず、天から與えられた才能だけしかないものと思っていたから、グーヴォン伯爵の言葉にも拘らず、引立てて使おうなぞとは考えつかないように見えた。色々な出來事が邪魔に入って、私はほとんど忘れられてしまった。グーヴォン伯爵の子息のブレーユ侯爵はその頃ウィーンの大使をしていた。宮廷に事變が突發し、それがこの一家にも響き、數週間は家中のみんなが動搖していたから、私のことなぞ考えている暇はほとんどなかった。しかし、その頃まで、私は少しも氣分を緩めなかった。ところが、或ることがあって、外部のことに氣が散らなくなったが、同時に勤めを少し怠るようになった。だから、そのことは私にとって、よかったとも悪かったとも言えるのである。

ブレーユ嬢はほとんど私と同じ位の年頃で、姿のいい、相當に美しく、非常に色が白く、髪も非常に濃かった。そして、褐色の髪の娘に似ずブロンドの女の持つあの柔和な樣子が顏にあった。そうした柔和な樣子には、今までも私の心はいつも參ってしまうのであった。若い女性には非常によく映る宮廷服が、ブレーユ嬢の美しい容姿を目立たせ、胸や肩の線を露わに見せ、その頃着ていた喪服は、色艶を一層輝かしくしていた。そういう事に目をとめるのは、召使のなすべきことではない、と言うかもしれない。固より不都合なことであったろう。だが、それに目がとまったのだから仕方がない

し、また、私だけがそうだったわけでもなかった。給仕頭や召使も、食事の時なぞには、私がひどく氣を悪くするほどの不躾な言葉で、ブレーユ嬢のことを話すのであった。しかし、私は本當に戀をするほど頭がのぼせ上ってはいなかった。我を忘れることはなかった。自分の立場を踏み外さなかった。そして、私の慾情でさえ放縱な行いをしなかった。ブレーユ嬢の姿を見たり、才氣や良識や躾のよさのよく察せられる言葉を耳にしたりするのが好きだった。私の野心は、嬢の御用を勤める樂しみ以上には出なかったから、自分の權限を越えることはなかった。食事の時には、この自分の權限を何とか役立てようと機會を狙っていた。お附の召使が一寸でもブレーユ嬢の椅子のそばから離れると、私はすぐそこへ行って立った。さもない時は、眞正面のところに立っていた。何か言いつけようとしているのではないかと眼色をうかがい、皿を代える時を狙っていた。ブレーユ嬢が何かを命じてくれるとか、私の方を見てくれるとか、たゞ一言でも言葉をかけてくれるとかするならば、私はどんな事でもしたであろう。ところが、さっぱりである。無念なことに私は、ブレーユ嬢にとっては無に等しかった。私がそこにいることすら氣づいていなかった。ところが、食事の時に時々言葉をかけてくれていた嬢の兄が、何か面白くないことを私に言いかけて來たので、私はその返事にひどく上品な氣の利いたことを言った。すると、ブレーユ嬢はそれに注意を惹かれて、私の方をちらりと見た。この一瞥はごく短かったが、それでも私をぼうとさせずにはおかなかった。その翌日、二度目の一瞥を得る機會が到來し、私はそれを旨く利用した。その日は、大晩餐會が催されて、給仕頭が佩刀し着帽して給仕するのを初めて見て、私は喫驚した。たまたま話はソラール家の銘句のことになった。綴織の壁布の上に、家紋と一緒に出ているもので、Tel fiert qui ne tue pas. というのであった。ピエモンテの人は普通フランス語には堪能ではなかったから、誰かが、この銘句には綴りの誤りがあるように思い、fiert という字には語尾の t は不必要だ、と言った。

グーヴォン老伯爵が答えようとした。ところが、ふと私の方を見た老伯爵は、私が何か言いたそうにして口もとで笑っているのを見て取って、私に話すように命じた。そこで私は、自分はこの t が餘計なものだとは思わない、fiert というのは、尊大なとか威嚇的な、とかいう意味の ferus という言葉から來たのではなく、打つとか傷つけるとかいう動詞 ferit から來たのである、故にこの銘句の意味は、威嚇して、ではなく、「打って殺さず」の意味だと思われる、と言った。

一座の人々は私の顏を眺め、また互に顏を見合わせて何とも言わなかった。こんなに驚いたことは今までになかったの

である。しかし、それ以上に私が氣を好くしたのは、ブレーユ嬢の顔に満足の色がはっきり見てとれたことであった。このひどくつんとした人が、少くもこの前の視線にも劣らぬ第二の視線を私に投げてくれたのであった。それから、その眼をお祖父さまの方へ向け、何かもどかしげな樣子で、お祖父さまが私にしなければならない賞め言葉を待っている樣子だった。老伯爵は、果して、いかにも満足そうに、行き届いた賞め言葉を私にしてくれたので、満座の人々は擧ってこれに和したのである。この瞬間はごく短かったが、しかし、どの點から言ってもえも言われぬ瞬間だった。それは、事物がその順當な位置に戻され、暴虐な運命によって埋れていた才能が、初めて顯わされるというあの餘りにも稀な瞬間の一つであった。數分後には、ブレーユ嬢は更に私の上に眼を上げ、恥かしそうな、また優しい聲で、飲み物を持って來るように、と言った。私がさっそくその通りにした事は御想像の通りである。ところが、嬢に近づくにつれて、私はひどく顛えだし、コップに水を一杯いれすぎたために、その水を少しばかり皿の上に、それからブレーユ嬢の上にまで零してしまった。嬢の兄は、うかつにも、どうしてそんなに顛えている、と訊いた。この質問は私を落著かせることには役立たなかった。ブレーユ嬢は顔を眞赤に染めた。

話はこれで終りである。バジール夫人との戀、またその後の生涯に於ける戀も同樣、私がいつも芽出たい結末を持たなかったことは、これでもお分りのことと思う。私はブレーユ夫人の控えの間に行って、戀心を燃やしたけれど、無駄な事だった。令嬢からはもう全く目をつけられるようなことはなかった。出るにしても入るにしても、私の方を少しも見ず、私もまた嬢の方には敢て眼を注ごうとしなかった。その上、私の馬鹿でへまなことは呆れるばかりで、或る日なぞ、ブレーユ嬢が通りすがりに手袋を落したことがあるが、接吻を浴せたいほどに思っているその手袋めがけて飛んで行くどころか、私はその場を動こうともしなかった。そして、その手袋は、踏み殺してもやりたいほどに思っている下等な他の召使の奴に拾われてしまったのである。自分がブレーユ夫人のお氣に入る幸福を持っていないことに氣づいた時に、私の臆病はいよいよひどくなった。夫人は私に何も命令しなかったばかりか、私が仕えるのを決して受けつけなかった。そして、二度ばかり、[*1] 私が控えの間にいるのを見て、夫人はひどくそっけない調子で、あんた、何かすることはないの、と訊いたことがあった。このなつかしい控えの間は諦めなければならなかった。最初はそこが名殘おしかった。しかし、色々と氣の紛れることが邪魔に入って、やがてもうそのことを考えなくなった。

ブレーユ夫人から蔑にされたことは、夫人の舅の好意によって慰められるところがあった。老伯爵はようやく私の存在に氣づいたのであった。前に話したあの晩餐會の夜、老伯爵は私と半時間ばかり話をして、ひどく満足に思ったようだった。私もまたうれしかった。この親切な老人は才知のある人だったが、ヴェルセリス夫人ほどではなかった。しかし、情愛の點では夫人よりも優れていたし、私もずっと可愛がられた。老伯爵は、かねて私に好意を持っていてくれる息子のグーヴォン師に親しむがよい、その好意を利用すれば、私のためにもなるし、將來の見通しのために缺けているものを得させてもくれるであろう、と言った。翌朝になると、早速グーヴォン師のところへ飛んで行った。師は私を召使のようには待遇しなかった。煖爐の傍の席に腰を掛けさせ、非常に優しい調子で色々なことを訊いたが、その結果、私の教育は間口ばかり廣くて、一つも物になっていないことを師は見て取った。殊に、ラテン語がまるで駄目なのを見て、もう少し私を教育しようと企てた。毎朝私が師のところへ行くことに相談をきめ、さっそく翌日から實行した。このように、自分の境遇より高くまた同時に低いという、私の生涯の中にはこれからもよくあるあの奇妙な成り行きによって、この時も、私は同じ家の中で、弟子でもあり、召使でもあったわけである。私は人に仕える身分でありながら、王子の師傅にしか成らないほどの名門の人を、自分の師と仰いだのであった。

グーヴォン師はこの家の次男で、將來は司教になるよう一家から定められていた。そのために、名家の子弟には珍らしく學識も深かった。シエナ大學へ送られ、ここに數年間留學し、そこからクリュスカンティスム[*2]をかなり多量に持って歸っていた。從って師のトリノに於ける存在は、嘗てダンジョー師[*3]のパリに於ける存在とほとんど同じであった。神學を嫌った師は文學に身を投じた。これは、イタリヤでは司教の職につくような人にはざらにあることである。師は多くの詩人の作を讀み、ラテン語やイタリヤ語の詩をかなり上手に作った。一口に言えば、師は、私の趣味を養い、頭の中に亂雜に詰めこんでいるものを整理するために必要な趣味を持っていたわけである。しかし、私の饒舌のために師が私の知識を買いかぶったためか、或いは、初歩ラテン語は退屈でたまらないと思ったものか、師はいきなりひどく程度の高いところ

＊1　異本。「二度ばかり、令嬢と一緒に通りがかりに、私が控えの間に……」
＊2　「國語純化運動」。イタリヤ人は、アカデミー・デラ・クリュスカによって採用された語以外を用いない主義の者を、この名で呼んだ。
＊3　ルヰ十四世の遊蕩係だつた学者。フランス語の改革に盡力した（一六四三年―一七二三年）。

へ私を持って行った。そして、ファエドルス[*1]の寓話のいくつかを譯させたかと思うと、すぐにウェルギリウス[*2]の中へ投げこんだから、私にはほとんど何も分らなかった。後にも分る通り、私は度々ラテン語の勉強をやり直すが、結局どうしても物にならないように運命づけられていたのである。とにかく、それでも私はかなり熱心に勉強した。そして、師の方でも、今思い出しても心を打たれるほど親身になって、色々と面倒を見てくれた。午前中の大部分は師と一緒にいて、自分の勉強と師の用事とに過した。用事と言っても師の身の廻りの用ではなかった。師はそんな用事を私がするのを決して許さなかった。ただ、口授を受けて物を書くとか、筆寫をするとかの用事だけだった。そして、祕書のようなこの仕事は、弟子としての役目よりずっと自分の爲になった。このために純粋なイタリヤ語の勉強ができたばかりでなく、文學への趣味も養われ、ラ・トリビューの貸本屋では得られなかった良書の鑑別力もいくらか培われた。この事は、後に一人立ちになって勉強をはじめるようになった時、非常に役に立ったのであった。

この時期は、私の生涯のうちで、夢のような計畫を去って、最も合理的に立身出世の希望に專心し得た時期であった。師は私に頗る満足し、誰に向ってもその事を言った。そして、師の嚴父老伯爵も特に目をかけてくれた。ファブリア侯爵から聞いたところによると、老伯爵は私のことを王のお耳にも入れたとのことであった。ブレーユ夫人でさえも、私を蔑んだようなあの様子をすっかり去ってしまっていた。要するに、私は他の召使たちの大いなる羨望のうちに、この一家の寵兒となったのである。召使たちは、私が御主人様の令息から教育を受けるという光榮に浴しているのを見て、いずれは私が自分たちと同列の人間ではなくなるだろうと感じていた。

これは後になって漸く考え合せたことであるが、その頃一家の人々が不用意に洩らした言葉の端々から、私についてどんな嘱望が抱かれていたかをできるだけ判斷してみると、ソラール家は外交畑に打って出て、將來は恐らく大臣にも成る道を拓こうという考えから、この一家に專屬し、後にその信任を得、一家のために盡瘁してくれる才能と技倆ある人物を一人豫め養成しておきたいらしかったのである。グーヴォン伯爵のこの計畫は高尚な、明敏な、遠大なものであって、義に厚く、先見の明のある大貴族にはまことに相應しい目論見であった。しかし、當時の私がその全貌を見渡せなかったことは別としても、これは私の頭には餘りに分別臭い目論見だったし、また餘りに長年月の忍從を要するものであった。私の愚な野心は戀の冒險を通してでしか幸運を求めなかった。そして、これには全く女性というものが見えないのだか

ら、こんな出世の道はまだろくって、骨も折れるし、詰らないことのように思われた。女性が入っていないだけに、このような出世の道は、一層立派であり確實である、と思わなければならなかったのに。女性の庇護を受けなければならないような才幹は、私が嘱望されていたような才幹とはとても比べものにならなかったのに。

すべては順調に進んだ。私はあらゆる人の尊敬を得た。ほとんどその尊敬をひっさらったと言っていいぐらいだった。試煉の時代は過ぎていた。そして、一家の中では、誰からも最も有望な青年と目されていた。今でこそ處を得ていないが、やがては、と期待されていた。ところが、その處は人間によって定められた適處ではなかった。そして、私は非常に異った道を經て、そこに到達することになる。ここで私は自分に固有の特殊な性格の一つに觸れる。これには反省を加えなくとも、ただ讀者に示すだけで十分である。

トリノには私のような新改宗者は澤山いたけれど、私はその連中は好きでなく、誰にも會って見たいと思ったことはなかった。しかし、改宗者でないジュネーヴの人には幾人か會っていた。その中にも、ミュサール氏[註23]という、「口曲り」という綽名の微細畫家は、私の遠縁の人であった。このミュサール氏は私がグーヴォン伯爵家にいることを嗅ぎつけて、同じジュネーヴの男で、私の徒弟時代の友達であったバークルというのを連れて、會いに來た。このバークルという男は、非常に面白くて快活で、おどけた滑稽ばかり言うのだが、年が年だからそのおどけにも罪がない。私は忽ちバークルに心醉してしまった。それも、もうこの男のそばを離れられないほどの心醉ぶりだった。バークルは間もなくジュネーヴへ歸るために出發することになっていた。何という損失だろう。その損失の大きさは今からでも分るような氣がした。せめて殘された時間を十二分に利用しようと、私はもうバークルから離れなかった。というより、向うの方が私を離さなかった。なぜなら、最初のうちは、暇も貰わずに邸を出て、バークルと一日すごすほど私の頭は狂っていなかったからである。ところが、やがて、この男がすっかり私に憑り移っているのを見た家人は、その出入を禁じてしまった。すると私はすっかり熱を上げて、わが友バークル以外のものは何もかも忘れて、グーヴォン師のところへも、老伯爵のところへも顔出しをしなくなった。私の姿は邸の中に見られなくなった。

＊1　古代ローマの寓話作者（前三〇年頃―後四四年頃）。
＊2　古代ローマ最大の詩人（前七〇年―前一九年）。本書二一頁＊1參照。

何度も小言を言われたが、馬の耳に念佛だった。暇を出すと言っておどかされた。この威嚇が私の身の破滅となった。つまり、このために、バークル一人で發たせなくてもいいわけだ、という知慧が私についたのである。そうなると、二人で旅をすることより他の樂しみも、運命も、幸福も考えられなくなった。そして、この旅の、言うに言われぬ幸福だけしか目に映らなかった。おまけに、この旅の向うにはヴァラン夫人の姿もほの見えた。尤も、ずうっと遠くの果てにであった。なぜなら、私はジュネーヴへ眞直ぐ歸ろうとは、少しも考えていなかったからである。山や牧場や森や小川や村なぞが次から次へと新しい魅力を加えて、とめどなく、絶えず目に見えた。この樂しい行程には私の全生涯が蔓延されてもかまわないと思われた。こちらへ來る時のあの同じ旅が、どんなに樂しかったか思い出された。今度はお伴の旅ではないという魅力に加えて、同じ年、同じ趣味の、呑氣な友達と、氣兼ねも義務も拘束もなく、歩きたい時に歩き、休みたい時に休むという旅の魅力があるのだから、一體どんなことになるだろう。そういう幸運を犠牲にして、實現のほどもあやふやな、まだるっこしく難かしい野心の計畫に縛られているなぞとは、まったく馬鹿げたことに違いない。そんな計畫が、たとえいつかは實現したと假定しても、その華々しさは、若い時分の本當のよろこびと、自由の十五分間に比べれば、問題にならないのである。

こういう利口な空想に滿たされた私の立派な振舞の結果は、やがてとうとう邸から追い出される破目にまでなった。尤も、追い出されるまでには色々と紆餘曲折を經た。ある日の夕方、邸へ歸って來ると、給仕頭が伯爵のお言いつけで私に暇が出たと言った。それこそ正しく望むところであった。というのは、私は自分の振舞の無茶なことを我にもあらず感じていて、なおこれに自己辯解のために不當と忘恩を加えていたからである。そして、そうすれば、非を家人の方に向け、自分は止むを得ず決心をしたという辯解が立つと思っていた。ファブリア伯爵の方からは、明朝、出て行く前に話があるから一寸來い、という傳言があった。そして、私の頭がどうかしているから、その言いつけを守らないかも知れないことは誰にも分っていたから、給仕頭は、そこへ行ってからでないと、私の受取るべき金を渡さないことにした。その金は確かに不勞所得であった。なぜなら、私を召使なみに扱いたくないというので、給金はきめてなかったのである。

ファブリア伯爵はまだ若くて呑氣な人であったが、その時はこの上もなく理に合った、また、この上もなく情に滿ちたと言ってもいいほどのお說教をした。伯父の配慮や祖父の意向を親切に沁々と話してくれた。最後に、私が自分の身の破

滅になるようなことをやって、どんな大きい犠牲を拂っているかをまざまざと描いて見せた末に、私を誘惑したあの不良少年ともう會わなければ、私のために調停の勞を取ろうと言い出した。

ファブリア伯爵が自分だけの考えからそういうことを言ったのでないことは、はつきりしていたから、私はいかに向う見ずな馬鹿者だったにせよ、わが老伯爵の厚意は身に沁みて感じ、大いに動かされた。しかし、あの樂しい旅の事は、餘りに強く頭の中に刻みこまれていた。何物もその魅力に比肩し得るものはなかった。全く分別を失っていたのである。そこで私は益々頑固になり、強硬になり、傲慢不遜の態度となつて、横柄な口調で、暇を出されたから受けたのだ、今さら取返しはつかない、これから自分の身の上にどんな事が起ろうと、同じ家から二度と追い出されるような目には遭いたくないと決心している、と答えた。するとこの若者は、かっと怒って、私を思いざま罵り、肩を押して部屋から突き出し、ばたんと扉を閉めた。私の方は、まるで一大勝利でも獲得したように、意氣揚々と出て行った。そして、またそんなもめ事をするのは厭なので、グーヴォン師にその厚意のお禮の言葉も述べず、恩知らずにも、そのまま家を飛び出したのである。

この場合の私の亂心ぶりがどの程度のものだったかを辨えるためには、私の心が、どんな詰らない事にも、どれぐらい熱狂するか、そして、心を惹く對象が時としてどんなに空しいものであっても、私の心がどのような力で、その對象の空想の中に溺れ切ってしまうかを識って貰わなければならないであろう。最も奇妙な、最も子供っぽい、最も狂氣じみた企(注24)てが、これはいいと思う自分の考えに媚び、それに沒頭しても大丈夫なように思わせて來るのである。十九歳近くにもなって、空の硝子瓶一つを元にして、今後の生計が立てられるなぞと考える者があるだろうか。まあ、聽いて頂こう。

數週間前に、私はグーヴォン師から一つの見事な小型のエロン噴水器*1を貰って、これに夢中になっていた。この噴水器を弄りまわしたり、旅の話をしたりしているうちに、利口者のバークルと私とは、噴水器を旅の役に立てることができる、噴水器で旅の足を伸ばすことができる、と考えた。そもそもエロン噴水器に優る珍奇なものが、此の世に實在するだろうか。この原則を土臺として、われわれは幸運の殿堂を築き上げたのである。二人は行き着く先の村々で、村人をこの

*1 エロンという古代のギリシヤの理學者が發見したと傳えられる理論によって作られた一種の噴水器で、水壓と氣壓を巧みに應用し、硝子瓶と硝子管とにより、小噴水を生ぜしめる。

噴水器のまわりに集める。すると、食事や御馳走はいくらでも降って湧いて來る。一體食糧なぞというものは、それを收穫する人たちに取ってはロハである。だから收穫者が旅人に食糧を十分に振舞わないのは、向うに惡意があるからだ、と思いこんでいるだけに、食事や御馳走はいくらでも貰えると思っている。二人の肺臓の空氣と、噴水器の水を元手にしさえすれば、ピエモンテでもサヴォアでもフランスでも、世界中何處へ行っても、飯の食い外れはないという考えだから、到る處に宴會や婚禮ばかりがあるように想像していた。二人は果てのない旅の計畫を立てた。そして、まずコースを北へとったが、それは、いずれは何處かへ足を停めなければならないと豫想したというよりも、むしろアルプス越えをする樂しみのためだったのである。

（一七三一年――一七三二年）

自分の保護者も、先生も、勉强も、ほとんど確定していた幸運の希望と期待をも、惜しげもなく振り棄て、本當の放浪兒の生活をはじめようと乘り出したのは、右のような計畫にもとづいていたのだった。首都よ、さらば。宮廷よ、野心よ、虚榮よ、戀よ、美しい女よ、前年中あんなに希望を繫いでいたあらゆる戀の大冒險よ、さらば。私は噴水器とわが友バークルと一緒に出發する。財布は輕いが、心はよろこびにあふれている。輝かしい前途の計畫に突然の見切りをつけて、この放浪の幸福を樂しむことしか考えていなかった。

しかし、私はこの突飛な旅を、ほとんど豫期の通りの愉快さでやった。尤も、その經過は全く豫期の通りとは言えなかった。というのは、例の噴水器は、旅籠のおかみさんや女中さんなぞを暫くの間は面白がらせたけれど、それでも其處を出る時ばやはり支拂をしなければならなかったからである。しかし、そんな事はほとんど苦にならなかった。お金が缺乏しはじめて來るまでは、この奥の手を使おうと思っていなかったのである。ところが、ふとした事から、その面倒もなくなった。ブラマンの近くで噴水器が壞れてしまったのである。丁度いい工合だった。二人とも口には出さなかったが、そろそろ噴水器を持て餘していたからである。この災難のために二人は前よりもずっと快活になった。そして、服や靴がいたむことを忘れていたり、噴水器を見世物にすればそれで新しく服や靴が買えると考えていたりした自分たちの迂闊さを大いに笑った。旅立った時と同じ調子で愉快に旅を續けた。しかし、財布の中は盡きかかって來るし、どうしても目的地

298814

をきめなければならなくなって、その目的地まで道を少々眞直ぐに取ることにした。

シャンベリー*1まで來て私は考えた。考えたと言っても、今までやって來た馬鹿なことを思い返したというのではない。私ほど過去のことをさっぱりと早く思い切るものはないからである。考えたというのは、ヴァラン夫人の家で私をどんな風に迎えるだろうかと考えたのである。私は夫人の家を本當の自分の生家のように思いこんでいた。夫人には自分がグーヴォン伯爵家へ入ったことも知らせておいてある。だから私がどんな地位にいたかを知っていた。そして、そのお祝いを言ってよこした時にも、邸の人々の厚意に報いるために私がどんな工合にしなければならないかということについての分別ある教訓もしてくれた。自分の過失でぶちこわしをしない限りは、私の幸運は確立されたも同じものだと夫人は考えていた。そこへ私が歸って行けば、何と言うだろう。閉め出しを食わされるなぞということは頭にも浮ばなかった。しかし、夫人を悲しませるのではあるまいかと心配した。夫人の叱責もこわかった。私にはみじめな境遇より、その方がよほどつらいのである。何もかも默って辛抱し、夫人の心を休めるためにはどんな事でもしよう、と心にきめた。この世には夫人一人しか目に映らなかった。夫人の御機嫌をそこねて生きて行けようなぞとは思いもつかなかった。

一番心配なのは旅の相棒のことだった。夫人に餘計なお荷物を持って行きたくもなかったし、そうかと言ってたやすく厄介拂いもできそうになかった。最後の日には、バークルによそよそしくして、こうした別れの下準備をした。この變り者は私の氣持を察した。ふざけた男だが馬鹿ではなかった。きっと私の變心に心を痛めるだろうと思っていたが、それは間違いだった。わが友バークルはどんな事にも心を痛めなかった。アヌシーへ入って、市へ一歩足を踏み入れるや否や、バークルは、「さあ、君の家へ着いたぜ」と言い、私を抱き、さよならを言うと、くるりと向うを向いて、やがて見えなくなった。その後、バークルのことは一度も耳にしない。二人の交際と友情は、前後およそ六週間ほど續いた。しかし、その結果は私の生きる限りは續くであろう。

ヴァラン夫人の家に近づいて行く時の私の心は、どんなにときめいたことだったろう。足はぶるぶる顫え、眼は霞がかかったようだった。何も見えず、何も聞えなかった。誰を見分けることもできなかったであろう。何度か足を停め、呼吸を整え、氣を取り戻さなければならなかった。私がそんなに取り亂したのは、必要な援助を得られないかも知れないと心

*1 サヴォアの首都、アヌシーの南方凡そ三十キロ。

配したためだったのであろうか。私の年頃で、餓死の恐れがそれほどの不安を與えるものだったろうか。否、否。私は誇りと眞實をもって言う。生涯のどんな時期にも、私は利に雀躍し、貧に悲嘆したことは決してなかった、と。屢々家もなく、パンもなく、不規則な、變轉に富む生涯を送って來たが、私は常に富貴と貧窮を同じ眼で見ていた。必要に迫られれば、他の人と同じように乞食をしたり、泥棒をしたかも知れないが、そういう破目に落ちても、それを苦にするようなことはなかったであろう。生涯に私ほど呻吟し、私ほど涙を流したものはあるまい。しかし、貧乏だとか、貧乏になりそうだとか心配して、溜息をついたり、涙をこぼしたりしたことは一度もない。さんざん運命に弄ばれた私の心は、運命に左右されないものしか眞の幸福・眞の不幸と認めないようになっていた。そして、私が自分を人間の中の最も不幸なものと感じたのは、自分が何不足なく暮していた頃のことであったのである。

私の姿がヴァラン夫人の眼に映るや否や、夫人の様子は私を安心させた。その最初の聲の響に、私は思わず身を顫わせた。足元へ驅け寄り、無上の强いよろこびに無我夢中となって、夫人の手に口を押しつけた。その時、向うで私の消息を知っていたかどうかは今でも分らないが、その顏には驚いた様子もあまり見えなかったし、悲しみなぞは少しも見えなかった。

「可哀そうに」と、優しい調子で、「やっぱり歸って來たのね。まだ年がいかないんだから、あんな旅は無理だとは思っていたのよ。でも、心配したほどの事もなくってよかったわ」と、言った。

それから、私に一部始終のことを話させた。これは餘り長くはかからなかった。そして、いくつかのくだりは省略したけれども、他のところは別に避けもせず、言譯もせず、極めて有りのままに物語った。

私の泊るところが問題となった。夫人は小間使の意見をきいた。その相談の間は私は呼吸もできなかった。しかし、この家で寢ることになったと聞いた時、私はじっとしていることができない程だった。私の部屋ときめられたところに自分の小さい荷物が持って行かれるのを見た時は、サン・プルーがヴォルマール夫人の家の車庫に自分の馬車が藏われるのを見た時と、ほとんど同じ氣持だった。*1 それに加えて、これが一時の情けではないと知って、私はなおよろこんだ。ある時、私がほかの事に氣を取られていると思った夫人が、こんなことを言っているのを耳にしたこともあった。

「世間の人が何と言ったって構わない。神様があの子をわたしのところへお返しになったんだもの。もう見棄てたりなんかしない決心だわ」と。

このようにして、私はとうとう夫人の家に住みついた。しかし、この定住はまだ私の生涯の幸福な日日の始まったあの定住ではなく、それを準備するに役立ったものだった。われわれをして本當に自己を樂しませてくれるあの心情の感受性というものは、自然の作るものであり、また恐らくは身體組織の生むものであるかも知れないが、しかし、これを發展させるための環境もまた必要である。そのような偶發的な原因がなければ、生れつきどんなに感受性に惠まれた者でも、何も感じないだろうし、自己の存在を認識することなく死んでしまうであろう。それまでの私は、そのような人間だったし、また、若し私がヴァラン夫人を知らなかったら、そして、たとえ知っても、夫人の傍に永くいて、その感化によって優しい愛情の習慣を受けなかったならば、恐らくいつまでもそのような人間であったであろう。私は敢て言うが、戀愛の感情しか知らない人は、人生にある最も甘美な感情を知らないのである。私はこの別個の感情を一つ知っている。それは、時には戀愛と結合していることもあるが、多くは戀愛とは全く別のものであり、戀愛ほど恐らく激しくないかも知れないが、その代り千層倍も快い感情である。それはまた單なる友情でもない。友情より一層肉感的でもあるし、情愛も深い。また同性の誰かに働きかけるものとも思えない。少くも私は友人としてなら誰にも劣らなかったが、その私ですら、どの友達に對してもこの感情を覺えたことは決してなかった。その正體ははっきりしていないが、後になれば段々はっきりして來ることだろう。感情というものは、その結果によってでしか、よく描き現わせないものだからである。

夫人は古い家に住んでいた。しかし、相當に廣くて、美しい豫備の一室があった。これは客間に使っていたものだったが、私はそこへ起居することになった。前に話したことがあるが、二人が初めて會ったあの小徑に面し、流れと庭園の向うには田園がひらけていた。この景色は若い居住者には無關心でいられないものだった。窓の前に綠が見えるのは、ボセー以來初めてのことだった。今までは始終壁に眼かくしをされて、眼の前には屋根や灰色の市街しかなかった。この新しい景色がどんなに沁々と甘美だったことだろう。感動し易い私の性質がこのために益々强められた。この美しい風景もまた優しい女主人の恩惠の一つと思われた。私だけのためにわざわざこの風景をそこに展げて見せてくれているように思われた。私はそういう風景の中で、靜かに夫人の傍に身を置いたのである。花や綠に包まれた夫人の姿を到る處に見た。夫

*1 ルソオの書簡體小說「新エロイーズ」中の人物。二人は相愛の仲であつたが、身分の相違から結婚できず、互に戀愛を胸に秘めている。

人の魅力と春の魅力が私の眼には一つに見えた。それまで押しつけられていた心は、この廣々とした所で伸々と展がり、この果樹園の中では私の溜息も一層自由に吐き出されるのであった。

ヴァラン夫人の家では、トリノで見たような豪奢は見られなかった。しかし、そこには清潔と落著きと、虚飾の結びつかない淳朴な豐さがあった。銀食器はほとんどなく、磁器は全くなかった。勝手元には季節の鳥獸の肉もなく、酒庫には外國産の葡萄酒もなかった。しかし、勝手元にも酒庫にも、人々をもてなすだけのものは十分にあったし、陶器の茶碗では上等のコーヒーをいれてくれた。訪ねて來る者は誰でも夫人と一緒に食事に誘われるか、家で御馳走になった。勞働者でも走り使でも旅の者でも、飲むか食うかせずに出て行く者はいなかった。召使はメルスレという名のフリブール生れの一寸綺麗な小間使と、後で問題となって來るクロード・アネという夫人と同郷の下僕、それから一人の料理女と、滅多にないが夫人が人を訪問する時の常雇の轎舁が二人。これは年金二千リーヴルの收入にはなかなかの大世帶である。しかし、土地が非常に肥え、通貨が少い土地であるから、僅かな收入でもよく節約すれば十分にやって行けた筈だった。ところが不幸にして、節約ということは夫人の身についた德ではなかった。借りたり返したりしていた。お金は杼のように出たり入ったりした。それでどうやら濟んでいた。

夫人の家政のそういうやり方は私には丁度お誂えむきだった。よろこんでそれに乘じたと言ってもいい。ただ、私の苦手は、非常に長い間食卓に坐っていなければならないことだった。夫人はポタージュや他の料理の出ばなの匂いが大嫌いだった。その匂いのために、ほとんど氣を失って倒れそうになることすらあった。そして、この厭な氣持は長いこと續いた。少しずつ氣分がよくなって話しはじめるが、まだ食べない。やっと半時間もすると、漸く最初の一口を食べてみる。私だったら、その間に三度も食事ができたろう。夫人が漸く食べはじめた頃には、こちらの食事はとうに終っていた。私はおつき合いにもう一度やる。このように、二人前の食事をしたが、別に身體にさわることもなかった。要するに、自分の味わっている幸福には、それを維持するための心配が少しも混っていなかっただけに、夫人の傍で感ずる甘美な幸福感に、心ゆくまで浸っていることができたのである。夫人のやっている事業については、まだ親しく打明けられるほどの仲ではなかったから、いつもこの調子で行ける狀態にあるのだ、と想像していた。後になっても、家の中には相變らず何不足ない快適さが見出されたが、その頃は夫人の實狀はもうよく分っていたし、その快適さは年金の前借によるも

のであると知っていたから、前ほど平氣でそれを味わっていることができかなった。先々のことを考えると、いつも快樂が減殺された。將來のことを見通しても、そのために損失ばかり招いた。その損失を避けられたためしがないのである。

最初の日から、二人の間にはこの上もない甘く親密な關係が成り立った。それは夫人の一生を通じて續いたと同じ程度の親密さだった。「坊や」というのが私の名で、「ママさん」というのが夫人の名だった。そして二人はいつまでも「坊や」「ママさん」であった。年月がたって、二人の間にほとんどその隔てが消えてしまった後でも、やはりそのままだった。この二つの呼び名は、二人の口調、無雜作な態度、とりわけ二人の心の關係を實によく言い現わしていると思う。夫人は私にとって最も情愛の深い母親であって、決して自分の快樂を求めず、私の幸福のみを常に念じてくれた。そして、夫人への私の愛著の中には肉感が入ったことは入ったけれど、それは愛著の性質を變えるものではなく、それをただ一層微妙なものにし、若く美しいママさんを持っているという喜悅に私を醉わせるためであった。そして、私はこのようなママさんを愛撫するのが言いようもなく樂しかったのである。私は文字通りの意味で愛撫すると言う。なぜなら、夫人は母親としての接吻と、最も優しい愛撫を私に惜しもうなぞとは決して思ったことがなかったし、私はまたそれを貪ろうと考えたことが決してなかったからである。それでも、最後にはそれと異った關係になったではないか、と言われるかも知れない。それはそうだ。しかし、待って頂きたい。一度に全部は話せない。

二人が初めて會った時の一瞥は、夫人が私に感じさせた唯一つの眞に情熱的な瞬間であった。しかも、この瞬間ですら、なお驚きから來たものであった。私の無遠慮な視線は夫人の襟布の下の方まで探りに行くことはなかった。そこにはむっちりした膨らみがよく隱されないで、こちらの眼を惹かずにはおかなかったのである。夫人の傍にいても、我を忘れることもなく、劣情を起すこともなかった。何か分らないものを樂しんで、うっとりとした平靜の中にいた。そうしていれば、一瞬間も退屈せずに、一生でも、永遠ですらも、過ごしたことであろう。話の繼穗を見つけなければならないのが責苦のように思われるあの無味乾燥な會話、夫人はそうしたものを感じさせなかったただ一人の人だった。二人差し向いの時は、談話というよりむしろ盡きることのないお喋りだった。誰か邪魔を入れてくれなければ決して終らないものだった。口を利かせる捉を作るどころか、默らせる捉を作る必要があるぐらいであった。夫人は色々と計畫を思いめぐらした

*1 ジュネーヴ湖の北東部にある州の名で、首都もフリブールという。

末に、いつも、ぼんやりと夢想に落ちた。そうなると、いつまでも夢想に耽らせておく。默って、その顏を見つめている。その時の私は人間の中でも最も幸福な人間であった。それに、私には奇妙な癖があった。二人きりになってどうしようということもないのに、むやみに差し向いになりたがった。この差し向いの樂しみが段々に昂じて、誰か邪魔者が入って來るとひどく怒るようになった。男とか女とかが問題ではない、とにかく誰かがやって來ると、私は夫人の傍に第三者として留まっている辛抱ができないので、口小言を言いながらそこを出て行った。控えの間に行って、まだかまだかと時刻を數え、なかなか歸らない訪問客を千度も呪い、自分にはお客なぞより話したいことがほど山あるのに、お客がどうしてそんなに澤山の用談があるのか、わけが分らなかった。

夫人に會わない時に、はじめて夫人への愛著の强さを感じた。會えば、ただ滿足しているだけだった。夫人のいない時の私の不安は苦しい程になった。どうしても一緒でないと生きて行けないと思うと、胸が迫って、時には涙さえ流すことがあった。これはいつまでも憶えていることだが、或る大祭日のこと、夫人が晩禱のおつとめをしていた間、私は郊外へ散步に出たことがあった。私の心は夫人の面影に滿たされ、これから先の日も夫人の傍で過ごしたいという慾望で一杯だった。しかし、私とて馬鹿ではないから、今のところはそれが叶いそうもなく、今味わっているこの幸福はあまり永いことはあるまい、と感じていた。そう考えると、私の夢想には物悲しい影がさした。しかし、物悲しいと言っても、少しも暗いところはなく、何か樂觀的な希望のようなものがそれを和らげていた。いつも妙に私の心を搖り動かすあの鐘の響、小鳥の歌聲、美しい日の光、靜かな景色、そのあたりに二人で一緒に住んだらと思う點々と散在する田舍家、そのようなものが、强く優しく悲しく感動的な印象となって胸を打った。私の心が、どんな幸福でも好きなだけのものを我物とし、その幸福を、肉の悅びなぞ考えずに、言い知れぬ歡喜の中に味わう、そうした樂しい時、樂しい生活の中に、夢のようにわが身が運び去られる心持だった。この時ほど、力强くまた幻想を抱いて、未來の中に突進したことは嘗てなかったように憶えている。そして、この夢想が實現された時、あとから思い起して最も驚いたのは、色々な事が空想したそっくりそのまま見出されたことであった。[*1] 人間の白晝夢が豫言的な幻想に似ているとすれば、これなぞは正にそれであった。ただ、異っていたのは、空想の上の時間的な長さだけだった。というのは、空想の上では、日も、年も、全生涯も、變らぬ平穩のうちに過ぎて行ったのに、實際には、それがただ一瞬間しか續かなかったからである。あゝ、私の最も恒久

な幸福は夢の中にあったのだ。その夢もほとんど完成しようとした瞬間に忽ち眼が覺めてしまったのである。

私はあの親しいママさんの目の前にいなくなると、その面影を追って色々と氣狂いじみたことをやった。そのことに一細かく立入ったら、いつまでたっても際限はない。私の寢臺にもとはママさんが寢たのだと空想しては、何度そこに接吻したことだったろう。部屋のカーテンやそのほかの家具類が、ママさんのものであり、その美しい手に觸れたものだと考えては、何度それに接吻したことだったろう。床板でさえも、この上をママさんが步いたのだと思うと、そこにひれ伏して、何度それに接吻したことだったろう。時には、ママさんの前にいる時でさえ、この上もなく狂暴な戀情でなければ思いつかないような突飛な行いを、思わずしてしまうことがあった。或る日、食事の時に、ママさんが一きれ口へ入れそうにした途端、私は、そこに髮の毛が、と叫んだ。ママさんが皿に吐き出すと、私はあわててそれを取って、嚥みこんでしまった。一言で言えば、私と、灼熱の戀に惱む男との間には、たゞ一つ、しかも本質的な差異があるだけであった。そして、その差異が、私の狀態をほとんど常識では判斷のできないものにしていたのである。

イタリヤから歸って來た時の私は、イタリヤへ行った時の私と全く同じだったとは言えなかったが、私の年頃の者だったら誰でも變って來るようには變っていなかった。純潔は持って歸らなかったが、童貞は持って歸った。私は年齡の進んだことを感じていた。まだ安定しない體質も、終にはっきりと形を現わして來た。そして、ごく無意識なその最初の發出は私の健康についての警戒を示していた。この事は、それまで私が純潔な生活をして來たことを、何よりもよく現わしてくれるのである。やがて落著きを取戻した私は、私と同じ氣質の青年たちが、その健康や精力や時としては生命さえも犧牲にして、多くの不品行から遁れるために用いるあの不自然な危險な補助手段を知った。羞恥と臆病に好都合なこの惡習は、强烈な想像力をもっている者にはより一層の魅力があった。それは、言わば、思うままに、どんな異性をも自由にできるという、また、心を惹く美人なら誰でもその承諾を得る必要なしに自分の快樂の具に供し得るという魅力である。この痛々しい便法に誘われた私は、自然が私のうちに作り上げ、私自身も時間をかけて仕上げた立派な體格を、自ら壞そうと努めたわけであった。こういう傾向に加えて、美しい女性の家に泊って心の底にその面影を愛撫しながら、晝間は絕えずその女性の姿を眺め、夜はその女性を思わせる色々な物に取りまかれ、また、自分の前には、その女性が寢ていたこ

*1 二四九頁參照

とを知っている寢臺に、自分が寢たりしたという、その時の私の場所的な立場も考え合せてほしい。何と多くの刺戟だろう。これを想像してくれる讀者は、すでに私が半分は死んだもののように考えるだろうと思う。ところが、事實は全くその反對であった。私を破滅させるべきものが、正に私を救ったのである。少くもその時だけは。ヴァラン夫人の傍で暮すという魅力、毎日をそこで送りたいという熱烈な慾望に醉っていたから、夫人がいてもいなくても、常に夫人のうちに優しい母、親しい姉、なつかしい友を見て、その他のものは何も見なかった。いつも夫人をそのように見、同じように見、他のものは決して見なかった。いつも心にまざまざと浮んでいるその面影は、他のものに場所を讓らなかった。私にとって夫人はこの世の唯一人の女性であった。そして、夫人が私に抱かせた極度に優しい感情は、私の肉感が他の者に向って目覺める餘裕を與えなかったし、夫人とその同性から私を守ってくれたのであった。一言で言えば、夫人を愛していたればこそ私には分別があったのである。上手に說明できないが、右のような事實に基いて、私の夫人に對する愛著がどのようなものであったか察して頂きたいと思う。私として言い得ることは、これまでのことが非常に異常に思われるならば、これから先の事は更に異常に見えるだろう、ということだけである。

私は自分の最も好きでない仕事にたずさわりながら、この世で最も樂しく時を過ごした。その仕事というのは、企畫書の作製、覺書の整理、處方の轉寫とか、また、藥草を選り分けたり、藥種を碎いたり、蒸溜器を操作したりする仕事だった。そういう仕事の合間には、旅の人だの乞食だの、その他あらゆる種類の訪問者がいやというほどやって來た。兵隊・藥屋・僧會員・美しい貴婦人・役僧なぞを一度に應待しなければならなかった。私はこのいまいましい混雜を罵ったり、不平を言ったり、呪ったりした。どんな事でも面白がる夫人の方では、私が怒るのがおかしくて、涙の出るほど笑う。私も自分が笑いをこらえられないから、そのためになお腹が立つと、それがまたおかしいと言って夫人は一層笑うのであった。私が不平を言い言い樂しんでいるこの短い時間は、やはり樂しいものだった。そして、こんな喧嘩の最中に誰かまたうるさい客がやって來たりすると、夫人はさっそくそれを種に、意地惡くもその客の訪問を長引かして、毆ってもやりたいような眼つきを私の方にちらちら投げながら、私をからかうのであった。私はお客への憚りから無理にも遠慮して、心の底ではそんなことをしてさぞ滑稽だとは自分でも分っているのに、憑かれたような眼つきを夫人の方へ投げると、向うはそれを見てふき出すのを我慢するのに大骨折であった。

そういうことは、それ自體は別に面白くもなかったが、自分に取って樂しくてたまらない暮し方の一部をなすという意味で、やはり面白かった。私のまわりに行われていた事、私のさせられていた事、それは一つとして自分の好みに合うものではなかったが、しかし、すべて私の心持には合っていた。醫學が嫌いで、そのために馬鹿なことばかりやって、始終物笑いの種になった。それさえなかったら、私は醫學が好きになっていたかも知れない。醫術がこんな結果を生んだなぞということは、恐らくこれが初めてだろうと思われる。醫書は匂いで分るなぞと私は言って得意だったが、愉快なことに、それで間違ったことは滅多になかった。夫人は私に大嫌いな藥を舐めさせた。逃げても、拒んでも駄目だった。いくら抵抗しても、いくら顏をしかめても、いくら頑張って齒をくいしばっても、藥を塗ったあの美しい指が自分の口に近づくのを見ると、しまいには口をあけて吸わないわけにいかなくなった。僅かな人數の一家のものが同じ部屋に集って、みんなできゃっきゃっ笑いながら驅けたり叫んだりしているのを他の人が聞くと、何か滑稽芝居でもしているようで、まさか練藥や不老長壽の藥を作っているのだとは思わなかったであろう。

しかし、私の時間はこのようなたずらばかりでみんな過してしまったわけではなかった。部屋には何册かの本があった。「スペクタトゥル」[註25]、ブーフェンドルフ[*1]、サン・テーヴルモン[*2]、「ラ・アンリアッド」[*3]なぞであった。以前ほどの讀書熱はなくなってはいたが、それでも暇な時にはこれらの本を少しずつ讀んだ。とりわけ「スペクタトゥル」は非常に氣に入って、またためにもなった。グーヴォン師から、讀書はそんなに貪ってしないで、もっと反省をもってするようにと教わっていたから、そのために讀書が前よりも役に立った。語法や、優雅な成句法について考える習慣がつき、自分の方言と純粹なフランス語とを識別する練習もした。例えば、私もそうだが、一般にジュネーヴの人の犯している綴の誤りを、次のような「ラ・アンリアッド」の二行の韻文によって改めることができた。

Soit qu'un ancien respect pour le sang de leurs maîtres [註26]
Parlât encor pour lui dans le cœur de ces traîtres.

*1 ドイツの政論家(一六三二年——一六九四年)。
*2 フランスの文藝家・思想家(一六一〇年—一七〇三年)。
*3 ヴォルテールの敍事詩。アンリ四世を主人公として宗教戰爭を題材としている。

このparlatという言葉に氣がついて、接續法の三人稱にはtが必要なことを教わった。それまでは直說法の完了形のように parla と書き、また發音もそうしていたのであった。

時には自分の讀んだもののことをママさんに話すこともあり、時にはまたママさんの傍で讀むこともあった。これが非常に樂しかった。私は上手に讀む練習をした。これもまたためになった。夫人には文藝の才能があったことは前にも述べた。當時はママさんの全盛時代だった。多くの文學者が御機嫌うかがいにやって來て、氣のきいた作品の鑑賞法を教えたりした。夫人は、強いて言えば、少々新教徒的な趣味があった。ベイル[*1]のことばかり話題にのぼせ、ずっと前にフランスで死んだサン・テーヴルモンを非常に崇拜していた。しかし、そう言ったからといって、夫人が良い文學を知らなかった、その話ができなかった、というのではない。夫人は洗煉された社會で育った人であった。そして、ごく若い頃サヴォアに來て、この國の貴族と樂しい交際をしているうちに、ヴォー州のあの厭味な調子を忘れてしまった。ヴォー州の女たちは、才といえばすぐ社交上の才の意味に考え、警句をもって話すことしか知らないのである。

夫人は宮廷のことはほんの通りすがりに見ただけであったが、すばやい一瞥で十分にその樣子を呑みこんでしまった。宮廷の知人はいつまでも持ち續けていた。それで、祕かな嫉妬や、夫人の行狀・借財についての噂なぞにも拘らず、決して年金を失うことはなかった。實世間の經驗もあり、その經驗を生かすだけの熟慮の才もあった。だから、夫人が好んで採上げた話題は、經驗ということについてであったし、また、それが私のような妄想的な頭を持ったものには最も必要な教育の一種であったことには間違いなかった。二人は一緒にラ・ブリュイエール[*2]を讀んだ。ラ・ブリュイエールは、ラ・ローシュフーコー[*3]より夫人の氣に入っていた。ラ・ローシュフーコーのものは、人間を有りのままに見ることを好まない青春時代の者に取って、特に悲觀的で陰鬱だったからである。夫人が道德談をはじめると、時には話がとんでもない所へ飛んで行って、とりとめがなくなった。しかし、私は時々夫人の口や手に接吻しながら、それを辛抱していた。そうしていれば、長談議も退屈ではなかった。

このような生活は、永續するためには餘りに甘美すぎた。私はそれを感じていた。そして、この生活が終るのを見なければならないという不安が、この生活の樂しみを妨げるただ一つのものであった。ママさんは、ふざけている間にも、私のことを研究し、觀察し、色々と質問したりして、私の幸運のために、あらずもがなの種々の計畫を立てた。幸いなこと

には、私の傾向や趣味や、僅かばかりの才能を識るだけが全部ではなかった。それを役立てる機會を見つけるか、生み出すかしなければならなかった。ところが、こういうことは、とても一日でできる業ではなかったのである。のみならず、氣の毒にもママさんは私の値打を買い被っていたから、いざそれを活用するについても、方法の選擇が益々難かしくなって、時機を失することになった。結局、ママさんが私を高く買っていたお蔭で、私は自分の好きなようにやっていたのである。しかし、それもやがてそうはいかなくなった。そして、そうなるともう平穩な生活にもおさらばだった。夫人の親戚で、オーボンヌ[*4]という人が訪ねて來た。非常に才知のある、なかなかのやり手で、夫人同樣に計畫を立てることが巧みだが、決して損をしたことがない。一種の山師であった。近頃、フルーリー樞機相[*5]に、巧く仕組んだ富籤の案を申請してみたが、取上げて貰えなかった。今度はそれをトリノの宮廷に持ち出したが、これが採用されて、實施に移された。オーボンヌ氏は、しばらくアヌシーに足を停めているうちに、地方官の夫人といい仲になった。この夫人は愛嬌が非常によくて、私の好みにぴったり合い、ママさんの家で私がよろこんで會ったたった一人の女性であった。オーボンヌ氏は私を見た。ママさんは私のことを話した。オーボンヌ氏は私をよく調べた上で、何に適するかを考え、物になりそうだったら就職の口も探してやろう、と引受けた。

ヴァラン夫人は、前もって私に旨を含めるようなことはせず、お使いに事よせて、續けざまに二三日、朝のうちにオーボンヌ氏のところへ私を遣った。氏は旨く持ちかけて色々と私に喋らせ、打ちとけた態度になり、できるだけ私を氣樂にしておいてから、馬鹿話やそのほかあらゆる題目について話しかけた。こちらを觀察している樣子は少しも見せない。少しも氣取ったところがない。冗談を言いながら、心おきなく話をしていたいといった風だった。私はすっかり丸められてしまったのであった。オーボンヌ氏の觀察の結果はこうだった。見かけや利發そうな顏つきから有望そうに見えるが、實

*1 ピエール・ベイル。フランスの評論家で、その思想は十八世紀の革新的哲學の先驅をなす(一六四九年—一七〇四年)。
*2 七頁*7を參照。
*3 フランスのモラリストで、「箴言集」によって人間の本性に鋭い解剖を加えた(一六一三年—一六八〇年)。
*4 ポール・ベルナール・ドーボンヌという。ニヨンの公民で、初めスイス衛兵としてプロシャに仕え、後にベルヌ民軍の隊長となったと傳えられる。
*5 ルイ十四世・十五世に仕え、政治上・外交上に絕大な勢力をふるった。

は、全然無能ではないが、少くもあまり頭のいい、物の分った少年ではない。知識もほとんど身についていない。一口に言えば、すべての點に非常に足りないところがある。將來、村の司祭にでも成るという名譽が、せいぜいこの子の望み得る最高の幸運であろう。これが私についてオーボンヌ氏がヴァラン夫人に報告したところだった。私がこんな風な判定を受けたのは、これで二度目か三度目であった。また、これが最後でもなかった。つまり、マスロン氏の判定[*1]が屢々裏書きされたわけだった。

このような判定を受ける原因は多く私の性格から來るのである。從って、ここではそれについての說明をしておかなければならない。というのは、私がそんな判定に心から屈服し得ないこと、マスロン、オーボンヌ、その他多くの輩が何と言おうと、できるだけ公平に考えても、それを言葉通りに受取れないことは誰にも察して頂けると思うからである。

ほとんど結合し得ない二つのものが、どういう風にしてか自分にも分らないが、私のうちに結びついている。非常に激し易い氣質、强烈な熱情と緩慢に生れるぎこちない思想、それも必ず時がすぎて後に現われて來るもの。私の心情と精神は同一人に屬していないもののように思える。感情は稻妻より速く心を滿たす。ところが、それは光明を與える代りに、私を燒き、眩惑させるのである。あらゆるものを感ずるが、何ものも眼に見えない。感情は激するが、頭は痴呆である。冷靜にならなければ物が考えられない。それにも拘らず、待ってさえ貰えれば、かなり正確な勘も働き、洞察力や、細かな機智さえ出て來るのだから不思議である。ゆっくりすれば見事な卽興詩も作る。しかし、咄嗟の場合には何一つ氣の利いたことは言えも、できもしない。イスパニヤ人がそういう將棋の差し方をするそうだが、郵便を使うのだったら、私だって實に美しい會話でもできるだろう。サヴォア公が、歸國の途中で、後ろを振りかえりながら、「絞め殺すぞ、パリの商人め」と叫んだという逸話[註27]を讀んだ時、私は「これは、おれだ」と言ったのである。

このように感じることの活潑さに結びついた考えることの緩慢さは、會話の時ばかりではなく、一人でいる時でも、仕事をしている時でもそうである。思想が頭の中でまとまるまでは一寸、やそっとの難澁さではない。思想は頭の中を鈍くぐるぐると廻り、やがて醱酵して心を動かし、熱し、動悸を打たせる。そして、そういう激情の中では、何物もはっきり見えず、ただの一語も書くことができない。じっと待っていなければならない。その大きい運動が徐々に治まり、その渾沌が晴れ渡る。一つ一つのものがその位置に戻る。しかし、ごくゆっくりと、しかも、長く混亂した動搖の後でである。

諸君はイタリヤでオペラを見たことはないだろうか。場面の變る時、あの大舞臺いっぱいに不愉快な混雜が起る。それがかなり長い間つづく。舞臺裝置もみんなごっちゃになり、何處もかしこも見ていられないほどの大さわぎ。まるで何もかもひっくりかえってしまうかと思われるばかり。それが、次第に整って來て、足りないものは一つもなくなる。あの長い大混亂のあとに、目を驚かす美しい光景が現出するのを見て、まったく喫驚するのである。私が物を書こうとする時、頭の中で行われることが、ほとんどこれと同じことである。まずゆっくりとかまえた上で、頭の中に描き出されたことを美しく表現できれば、私の右に出るほどの作者はあまりいないと思うのである。

私が物を書く時に見出す極度の困難は右のようなことから來る。消したり、書きなぐったり、前後したり、ほとんど判讀もむずかしい私の原稿は、拂った苦心を證明している。どんな原稿でも、印刷にかけるまでには、必ず四度か五度書き直さなければならなかった。ペンを手にして、卓子と紙の前に向うと、決して何もできないのである。岩の間や森の中を散步している時、夜、寢床に入って眠れぬ時、頭の中で物を書く。しかも、全く言語の記憶に缺けて、一生の間、六行の詩も諳記できなかった男のことであるから、その遲いことは想像できよう。私の書いた文章の中でも、それを紙に移せるようになるまでに、頭の中で五晩も六晩もひねくり廻したというものもある。このために、例えば手紙のような、割合に氣輕な調子で書く方がいいものよりも、勞力を要する作物の方に私は成功するわけである。實際、輕い調子のものは、どうしてもうまい工合に行かないで、そういう仕事は私にはなかなか苦しいのである。つまらないことを書く手紙でも、數時間の疲勞に値しないものは一つもないし、思いつくままに書き流そうと思えば、どう書き出していいか、どう結んでいいかも分らない。私の手紙は長ったらしく、要領を得ないお喋りになってしまう。讀んだところで、何が何だか分らない。

思想を發表するのが、なかなか骨が折れるばかりではない。相手の思想を受け入れるのにも、大いに骨が折れる。私は人間を研究した。自分では相當立派な觀察者だと信じている。それなのに、自分が現在見ているものは、何一つ正しく見られない。正しく見られるものは、思い出すものだけである。つまり、追憶の中にしか頭が働かないのである。人の言うこと、人のすること、目の前で行われること、それらについては、まるで感じがない。何一つ洞察できない。私の注意を

*1　二八頁參照。

惹くのはただ外觀のみである。ところが、やがてそれが思い出されて來る。場所・時・言葉の調子・眼つき・身振り・環境なぞ、一つ一つ思い出す。何一つ洩らさない。すると、人のしたこと、言ったこと、すべてに關聯して、その時、その人の考えていたことを見出す。滅多に思い違いすることはない。

自分だけを相手にしてさえ、自分の精神がどうにもならないのであるから、旨く話をするためには色々なことを同時にしかも卽座に考えなければならない會話の時には、どんなことになるか察して頂けると思う。少くもその一つは必ず忘れるに違いないような色々な禮儀作法のことを考えただけで、全く臆病になってしまう。社交の集會なぞで、どうして人があんなに喋れるのか、私には理解がつかないほどである。一口ごとに、そこにいる人々みんなに眼をくばらなければならないだろうし、全部の人の性質を知り、身の上をわきまえていて、誰一人にも、差しさわりのあるようなことを言わない確信がなくてはならないだろう。この點では、社交界で生活している人々には大きな利がある。默っていなければならないことをよく心得ているから、それだけに自分の言うことには確信がある。それでさえ、ややもするとうっかりぼろを出すことがあるのである。況んや、雲の上から落ちて來たような人間である。一分間でも無難に話すことなぞ、不可能に近い。二人だけの差し向いとなると、更にたちの悪い不都合が生じる。つまり、たえず口を利いていなければならない必要があるわけである。話しかけられれば、答えないわけにいかない。相手が默っていれば、こちらで話の繼穗を見つけなければならない。この堪えがたい拘束だけでも、私は社交が厭になる。卽座に、また、たえず喋るという義務ほど恐るべき束縛は他にない。このことは、私がどんな屈從に對しても極度の嫌惡を持っていることから來るのかどうか、それは知らない。しかし、どうしても口を利かなくてはならないようにされたら、私が必ずへまな事を言うにきまっていることに間違いはないのである。

最も致命的なのは、言うことがない時には默っていればいいものを、その時に限って、まるで急いで負債でも返すつもりで、躍氣になって喋ろうとする。意味もない言葉を早口にあせって喋る。全然意味がなければ、まだしも仕合せと言うべきである。自分の無能を隱そう、それに打勝とうとして、却って無能をさらけ出さないことは滅多にない。その實例を述べれば數え切れないが、その中の一つをここに取り上げて見よう。それは若い時分のことではなく、すでに社交界に數年も生活して、當り前なら場馴れもしているし、調子も呑みこんでいなければならない筈の頃のことである。或る晚、私

は二人の貴婦人[*1]と一人の紳士、その人の名は言ってもいい、實はゴントー公爵だが、その三人にかこまれていた。部屋には他に誰もいなかった。四人の間に交される會話、尤もそのうちの三人は、私の陪席なぞ必要としていなかったことは確かであるが、その會話に私も何か口を入れようと氣をつかっていた。その家の女主人が阿片劑を持って來させた。毎日二回、胃のために服用することになっていたのである。もう一人の貴婦人は、相手が顏をしかめるのを見て、笑いながら、

「トロンシャン先生[*2]の阿片劑ですか」と、訊いた。

「さあ、どうですか」と、相手も同じ調子で答えた。

「そんな藥は勿體ないですよ」と、才人ルソオはいかにも氣取って言い添えたのである。

みんなは呆氣にとられた。誰も口を利かないし、誰も笑わなかった。そして、直ぐに話は他の方へ移って行った。ほかの婦人との對談ならば、失言も座興だけで濟んだかも知れなかったが、どこででも多少は人の口にのぼるほどの氣受けのいい人で、しかも、私が決して氣を惡くさせるつもりなぞなかった婦人に向っては、この失言はひどいものだった。そして、その場に居合せた二人の男女は、ふき出すのをこらえるのに非常に苦勞したことと思う。何も言うことがないのに喋ろうとすると、こんな飛んでもない氣の利いたことを言ってしまうのである。このことだけは、なかなか忘れられないだろうと思う。というのは、これはそれ自身記憶に殘るようなものであるばかりでなく、その後、このことを何かにつけてすぐ思い出させるような結果を生んで[*3]、それが念頭をはなれないからである。

私は馬鹿ではないのに、度々人から馬鹿と思われ、殊に正しい判斷のできる人にさえそう思われているわけは、以上のことで十分に了解して頂けると思う。それに、まだ悪いことには、顏つきや眼つきを見ると、いかにも有望らしく見えるから、その期待が裏切られるとなると、馬鹿さ加減が他人には一層目立つわけである。右の話は特別な場合に起ったものであるが、それは後に續く事柄に對して無益ではない。つまり、それには、世間から私が異常な行爲をすると思われたり、私が持っていない非社交的な性質が私にあると言われたりする事への鍵が含まれているからである。私とて人並に社

※1 リュクサンブール夫人とミルボア夫人のこと。この事は第十卷に出る。
※2 テオドール・トロンシャンと言って當代の名醫。この人のことについては、第八卷・第十卷に出て來る。
※3 後にリュクサンブール夫人の不興を買ったことを言う。第十卷に詳しい。

交を好まないわけではない。ただ、社交界に顔を出すと、自分の不利を招くばかりではなく、本當の私と全く別人のように思われることを私は確信している。物を書いて、自分の身を隱す決心をしたのは、私としては丁度相應しい事であった。顔を出していたら、私というものの價値は誰にも分って貰えなかったろうし、價値があることすら考えなかったであろう。デュパン夫人[*1]は才知のある人であり、私は夫人の邸に數年間生活したのであるが、それにも拘らず、右のようなことが夫人にも見られる。夫人は當時から何度もそういうことを私に言ったものだった。尤も、それでも例外はいくらか有る。その事には後に觸れよう。

私の能力の程度もこのように定められたから、あとは自分の二度目の天職を果すことだけが問題であった。ただ、困ったことに、私は學問をしていなかったし、新教の教師になるためにはラテン語の素養も十分でなかった。ヴァラン夫人は私をしばらく神學校に入れて、教育を受けさせたらどうかと思いついた。夫人はそのことを校長に話した。校長はグロ先生といって、聖ラザール派傳道會の牧師であった。人の好さそうな、半分目っかちの、小柄な、痩せた、ごま鹽頭の人で、この派の牧師の中では、私の知っているうちでは最も才知があり、また最も學者ぶらない人であった。實際、そう言っても決して過言ではない。

校長先生は時々ママさんの所へ來た。ママさんは、もてなしたり、甘えてみたり、からかったりして、時にはコルセットの紐を締めて貰ったりするが、グロ先生はこの仕事をむしろよろこんで引受けた。校長先生がこの職務を果している間、ママさんは部屋をあちこち動きまわって、あれをしたりこれをしたりした。先生は紐に引っぱられ、ぶつぶつ言いながら後をついてまわり、「まア、奥さん。じっとして、じっとして」と、そのたびに言うのであった。一寸繪になる題材であった。

グロ先生はママさんの計畫に心から同意した。非常に僅少な寄宿費で滿足し、私の教育を引受けてくれた。あとは司祭の承認だけが問題だったが、司祭はこれを許したばかりでなく、寄宿費まで拂ってくれることになった。また、後で試驗をして、豫想通りの成績を取るまでは、俗人の服のままでいてもいいと許してくれた。

何という變化だろう。だが私はこれに從わねばならなかった。刑場に引かれる氣持で神學校へ行った。神學校とは、何と厭な處だろう。とりわけ優しい女性の家から來た者にとっては！　私はママさんに賴んで借りたたった一册の本を持って

て行った。この本が私には非常な力となった。どんな種類の本が、一寸推察がつかないだろうと思う。それは、實は一册の音樂書だったのである。ママさんが培ってくれた色々な才能の中で、音樂も忘れられてはいなかった。ママさんは聲量があり、歌も相當に歌い、クラヴサンも一寸は彈けた。私に歌の稽古をつけるのが好きだった。稽古といっても初めからやらなければならなかった。私は讃美歌さえ碌に歌えなかったのである。女の人から受けた八回か十回の稽古、それもひどく間をおいてやったのであるから、音譜で歌が歌えるようになるどころか、音樂記號の四分の一もまだ覺えていなかった。しかし、私はこの藝術に非常な熱を持っていたから、自分一人で練習してみようと思ったのである。私が持って來た本は、しかもごく平易なものというわけではなかった。クレランボー[*2]のカンタータ集だった。移調も歷時も知らずに、「アルフェウスとアレッツーサ」のカンタータの第一宣敍調と第一アリアとを間違いなく讀んで歌えるようになった、と言えば、私の勉强と根氣强さがどんなものであったか察して頂けると思う。尤も、このアリアは非常に正しく拍子が切ってあるから、その調子を合わせるには歌詞の音節の通りに歌うだけでいいのである。

神學校には厭な牧師がいて、これが私を受持って、ラテン語を教えようとしたから、私はラテン語が大嫌いになった。縮れていない眞直ぐな黑い髪は脂じみ、パン菓子のような顔、水牛のような聲、梟のような眼、髭の代りに猪のような毛を生やしていた。にやにやと人を馬鹿にしたように笑う。手足を人形のように動かす。この牧師のいやな名前は忘れてしまったが、恐ろしくてしかもでれっとしたような顔つきは今だに憶えている。そして、これを思い出すたびに、身ぶるいがする。今でも、ありありと目に浮ぶが、廊下なぞで出會うと、垢じみた角帽をいかにも樣子ぶって差出しながら、部屋へ入れと合圖をするが、その部屋は私に取っては土牢よりもなお恐ろしいところだった。宮廷司祭の教え子に、このような先生とは、何たる對照であろう。よろしく御察しを願いたい。

若しこの怪物の意のままにでは二ヵ月もそうしていたら、私の頭はとてもそのままではいられなかったろうと思われる。ところが、善良なグロ先生は、私が悲しそうにして、食事も進まず、段々に痩せて行くのに氣がついて、この悲しみの原因を察知した。それなら別に難かしいことではなかった。先生は私を野獸の毒牙から引き離し、今度はこの上もなく優しい

*1　ルソオの庇護者。詳しいことは第七卷以後に屢々出て來る。
*2　オルガン奏者・作曲家として當時フランスで有名だった（一六七六年―一七四九年）。

人の手に託したが、これは更に著しい對照であった。その人は、ガーティエ先生というフォーシニー生れの若い僧で、[*1] 神學の勉强中であったが、グロ先生への好意と、また人情からだと思うが、自分の勉强の時間をさいて、私の勉强の指導をしてくれることになった。私はガーティエ先生の顏つきほどしみじみした顏を見たことがない。頭は金髪で、髭は赤味を帶びていた。生れた地方の人によくある態度で、鈍重な顏つきの下にみんな非常な才知を隱している。しかし、この人の眞の特徵は、感じ易く、情愛深く、人なつこい心であった。大きい青い眼の中には、柔和と愛情と哀愁がうち混り、そのために、會えば必ず惹きつけられずにいなかった。この悲しそうな青年の眼つき、聲つきから推すと、この人は自分の運命を豫知し、不幸に生れついたことを感じていたようであった。

ガーティエ先生の性格はその顏つきと矛盾していなかった。忍耐と好意に滿ち、教えるというより一緒に勉强するように見えた。そんなにしてくれなくても、私は造作なくこの人が好きになった。この人の前任者がたやすくそうさせたのであった。しかし、ガーティエ先生が私のために多くの時間をさき、師弟とも熱心に勉强し、先生の指導もよろしきを得たに拘らず、私は勉强は非常によくやりながらほとんど進歩しなかった。私が相當の理解力を有しながら、父やランベルシエ先生を除いて、他の先生方につくと何一つ覺えられなかったというのは、實に奇妙なことである。後で分るように、私はその後僅かばかり知識も向上したが、それはすべて獨學で得たものであった。どんな種類の束縛にも、すぐいらいらする私の精神は、その時その時の規則に服從ができない。覺えられないかも知れないという心配だけで、もう注意を拂うことが妨げられてしまう。話をしてくれる人をじれったがらせるのではないかと恐れて、分ったような顏をしてしまう。すると、相手はどんどん進む。こちらにはさっぱり分らない。私の精神は自分の步調で步こうとする。他人の步調に屈することができないのである。

僧職授任の時が來た。ガーティエ先生は助祭となって鄕里に歸った。私は先生のために、心からの愛情と愛著と感謝を捧げた。私は先生のために色々な祈願をしたが、これは自分のためにした祈願よりも叶えられることが少かった。數年後に、先生が或る教區の助祭をしている時に、或る娘に子供を生ませたということを知った。あんなに情愛の深い心の人だったから、その娘は先生が生涯に戀したただ一人の女性であったろう。しかし、監督の非常に嚴格な教區では、これは恐るべき醜聞となった。牧師は結婚した女でなければ子を生ましてはならぬ、という立派な規則がある。この便法を踏まな

かったというので、先生は投獄され、非難され、追放された。その後、元通りになれたかどうか知らない。しかし、先生の不運への同情は、深く私の心に刻まれ、それが『エミール』を書いているときに、心に浮んで來た。そして、ガーティエ先生とゲーム氏とを一緒にして、この二人の立派な牧師から、サヴォア人助祭の原型を作ったのである。私はこの模造品がモデルの名譽を毀損していないと自負している。

私が神學校にいた間に、オーボンヌ氏は餘儀ないことでアヌシーを去らなければならなくなった。例の地方官[*2]が、自分の妻にオーボンヌ氏が戀をしかけているのを怪しからんと思いだしたからだった。そのやり口は、いわゆる「園丁の犬」[*3]と同じだった。というのは、コルヴェッチ夫人は人好きのする女性だったのに、コルヴェッチ氏は夫人とどうしても旨く行かなかったからである。イタリヤ趣味の女には用がないといって、ひどく虐待するので、ついには別れ話になった。このコルヴェッチ氏というのは、實に下劣な男で、土龍のように腹黑く、梟のように陰險で、あまり人を苦しめた結果、仕舞には自分から追われる身になった男である。プロヴァンスの人間は、歌を書いて敵に復讐をすると言われるが、オーボンヌ氏は喜劇を書いて自分の敵に仕返しをした。氏はその劇をヴァラン夫人に送って來て、私も見せて貰った。この劇はひどく私の氣に入って、自分も一つ劇を書いて見よう、この劇の作者が言ったように、自分が實際に馬鹿かどうか試してみよう、という氣が起った。しかし、「自分に戀する男」[註8]を書いてこの計畫を實行に移したのは、シャンベリーへ行ってからのことであった。從って、この劇の序文で、これを十八歲の時に書いた、と言っているのは、數年の嘘があるわけである。

かれこれこの頃のことと思うが、一つの出來事があった。それ自身は大して重要なことではなかったが、私にはあとで影響があり、忘れた時分に世間で騷ぎたてた。私は每週一回外出の許可を得ていた。それをどう使ったか玆に言うまでもない。或る日曜日、ママさんの家に來ていると、隣の聖フランシス派の建物から出火した。その建物には竈があって、乾いた薪がぎっしりと詰まっていた。またたく間に一面の火となった。ママさんの家も危くなって、風に吹きつけられる

*1 サヴォアの一地方で邊鄙な山地。

*2 その名をラザール・コルヴェッチという。ジュネーヴ地方の司法・警察・財政の主事、徵稅及び鹽稅の副主事をしていた。

*3 「園丁の犬は自分でキャベツを食べもしないのに、他人にはこれを食わさない」という古諺がある。

火焔を浴びた。急いで引越しをはじめ、庭に家財道具を運び出した。庭は私の古なじみの窓の正面で、前に話した例の小川の向うにあった。私はすっかりあわてて、他の場合だったら、とても持上げられないような大きな石臼をはじめ、手あたり次第の品物を見境もなく窓から投げ出した。誰かが引きとめなかったら、大きい鏡まで同様に投げ出すつもりでいた。その日、ママさんに會いに來ていた司教さんも、ぼんやりしているわけにいかなくなった。ママさんを庭に連れ出したかと思うと、その邊にいた人たちも一緒に祈禱をはじめた。私は一寸遲れて行ってみると、みんなが跪いているので、それに倣った。司教さんの祈禱の間に風が變った。しかも、突然に、旨い工合に風が變ったのであって、そのために、家にかぶさって、窓から吹き込もうとしていた火焔は、中庭の反對側に向き、家には全く被害がなかったのであった。それから二年後、このベルネー師が亡くなつた時、生前の教友であった聖アントワーヌ教團の人たちが、師を聖者として祀るために役立つような材料を集めはじめた。私はブーデ師に頼まれて、それらの材料の中に、右に述べた事が事實であるという證明を加え入れた。[*1] それはそれでよかったのであるが、よくないのは、この事實を奇蹟としたことだった。私は司教が祈禱しているのを見た。また、その祈禱の間に、風が變った。しかも、非常に好都合に變ったのも見た。これだけのことを言い、これだけのことを證言すればよかったのである。ところが、祈禱したことと風が變ったことのうち、一方が他の原因であった、とするのは私の證言すべき事ではなかった。なぜなら、そんなことは私には分らないからである。然るに、當時心からのカトリック教徒だった私の頭の中を今思い出せるだけ思い出して見ると、私は固くそう信仰していたのであった。人間の心には極めて自然な、不思議を好む氣持、あの有德な司教への尊敬、又、恐らく自分自身が奇蹟に寄與したという祕かな誇り、そんなものが一緒になって私の心を誘ったのである。そして、若しあの奇蹟が最も熱心な祈禱の結果であったとするならば、私も一部それに與って力があった、ということは間違いないところである。

それから三十年以上も經って、私が「山よりの書」[*1]を公刊した時、フレロン氏はどこでどうしたのか分らないが、とにかく右の證明を掘り出して來て、自分の册子の中にこれを利用した。その發見はまことに上乘なものであったことは認めなければならないし、その機に應じたやり方は、私自身も大いにこれを面白いと思った。

私はどんな境遇にいてもその落伍者になるように運命づけられていた。ガーティエ師は私の進歩についてできるだけ不利でない報告をしてくれたけれども、勉强相當の進歩をしていないことは誰にも分ったから、人々にはこれ以上私に學問

を續けさせる元氣も出なかった。そこで、司教も、校長も落膽して、私を牧師にも成れない人間として、ヴァラン夫人のもとへ送り歸した。尤も、氣立てはよくて、惡い性質の子ではない、と言ってくれた。このために、私について色々と多くの不利な臆斷があったにも拘らず、夫人は私を見棄てなかったのであった。

私は非常に役に立った例の音樂の本を持って、意氣揚々と夫人の家に引上げて來た。「アルフェウスとアレッーサ」のアリアは、神學校で私の覺えたほとんどすべてのものであった。この藝術に對する私の著しい趣味を見て、夫人は私を音樂家にしようという氣になった。折もよし、夫人の家では、少くも週に一回の音樂會があって、この小音樂會の指揮をやっていた大教會の樂長は、始終夫人のところへ出入りしていた。パリの人で、ル・メートル氏という名であった。[*3] 相當な作曲家で、非常に元氣で、非常に快活、まだ若くて、風采も立派、才知はそれほどでもないが、その代り非常に親切な人だった。ママさんはこの人に私を紹介してくれた。私はル・メートル氏に惹きつけられた。向うも私を嫌いではなかった。寄宿料の話が出て、相談もまとまった。簡單に言えば、私はル・メートル氏の家に入り、そこで愉快に冬を過したのである。教會の合唱隊の塾はママさんの家から二十歩も離れていないところにあって、直ぐに歸れたし、また始終ママさんのところで夕食を一緒にしたりしたので、なおさら愉快な冬となった。

音樂家や合唱隊の子供たちがいて、いつも歌ったりはしゃいだりしていた音樂塾の生活が、聖ラザール派の神父たちのいる神學校の生活より私の氣に入ったことはお察しの通りである。しかし、この生活は、一層自由だからと言っても、やはり平凡であり、規律もあった。私は生れつき自主を好み、これを濫用しない性質であった。丸六カ月の間というものは、ママさんの家か教會へ行く以外にはただの一度も外出しなかった。そして、外出したいという氣にもならなかった。この期間は、この上もなく平穩に暮した時期の一つであって、今でもそれを樂しく思い出すのである。私は色々な境遇に落ちたが、その中でも特にきわ立って幸福だったと感じる境遇があって、それを思い出すと今でも自分がそんな境遇にいるように、沁々とした氣分になる。時とか場所とか人物とかを思い起すばかりか、まわりにあったあらゆる物、氣溫・匂

*1 「ジュネーヴの司教故ベルネー師の傳記製作に當り一七四二年四月十九日ブーデ師に手交せる覺書」。
*2 この邊のいきさつについては、第十二卷を參照のこと。
*3 ジャック・ルイ・ニコロというのが本名。徵稅官の息子で當時二十八歳であった。

い・色・そこでなければ感じられない或る局部的な印象なぞまで、ありありと思い出して、わが身が再び其處へ運ばれる心地がするのである。例えば、音樂塾で繰返し繰返し教わったこと、合唱隊で歌ったもの、そこでしたこと、僧會員たちの美しく氣高い着衣、牧師たちの式服、詠歌隊の僧袍、樂師たちの顔つき、コントラ・バスを彈いたびっこの老大工、ヴァイオリンを彈いた金髪の小柄な學僧、ル・メートル氏が劍を脱して、平服の上に羽織ったぼろぼろの法衣、合唱席へ行く時にそのぼろの上に重ねた綺麗な薄い白袈裟、ル・メートル氏が特に私のために作ってくれた一寸した獨奏曲を吹くために、小さい口つきの笛を持って壇上のオーケストラの席へ出かけて行く時の私の誇らかな氣持、あとからわれわれを待っていたおいしい食事、食事をする時のあの旺盛な食慾、そのようなものがみな一緒になって、ありありと描き出され、思い出の中に、現實と同じく、或いは現實以上に、何度となく私を魅了し去るのである。短長格で進んで行く「聖き星空(コンデイトール・アルメ)の造り主」の或るアリアには、いつまでも深い愛情を抱いて失わなかったが、それは、降臨節の或る日曜日の夜明け前に、この教會の習わしに從って、大教會堂の石段の上でこの讃美歌が歌われているのを、寢床の中で聞いたことがあったからである。ママさんの小間使のメルスレ孃は、少し音樂を知っていた。「アフェルテ」という短い聖歌を、ル・メートル氏がメルスレと一緒に歌わせたことも、それをママさんがいかにも樂しそうに聽いていたことも、決して忘れないであろう。合唱隊の子供たちがさんざんにからかって、とうとう怒らしてしまったあの人の好いペリーヌという下女のことまでも。とにかく、すべて幸福で無邪氣だったあの頃の思い出は、今も度々甦って、私をうっとりとさせ、また悲しませるのである。

私は少しも人から非難を受けるようなことがなく、アヌシーで一年近くも暮した。誰もかれも私に滿足していた。トリノを出てからの私は少しも馬鹿なことをせず、また、ママさんの眼のとどく所にいる限りは決してそんなことができなかった。ママさんは私を導いた。しかも、常に善い方へ私を導いた。ママさんへの愛著は私の唯一の情熱となっていた。そして、これが狂的な情熱でなかったことの證據には、私の心情が理性を形作っていたのである。ただ一つの感情が、私のあらゆる精神作用を言わば吸收してしまって、ずいぶん努力を拂ったにも拘らず、何一つ、音樂でさえも、よく覺えられなくしてしまったことは事實である。しかし、それは私が悪いのでは少しもない。誠意も十分にあったし、熱心さもあった。ところが、氣が散って、夢を見て、溜息をついていたのである。そんな事で何ができよう。私の運命に關しては、自

分としてできることに何一つ手落はなかったのである。とは言え、私がまた馬鹿なことをしでかすためには、誰かが一寸來て唆かしさえすればよかった。その相手が現われたのである。偶然が事を運んだ。そして、次に見るように、一寸した氣の迷いから、私はその偶然を利用したのである。

二月の、非常に寒い或る晩のこと、みんなで煖爐を圍んでいると、街路に面した戸を誰かが叩く音がした。ペリーヌは手燭を持ち、下へ降りて、戸をあける。一人の青年が入り、ペリーヌの案内で上って來て、氣樂な調子で自己紹介をすると、ル・メートル氏に向って、ひどく氣の利いた簡單な挨拶をしてから、自分はフランスの音樂家だが、お金に詰り、世渡りのために、止むなく方々の教區に行って音樂の仕事をさせて貰っている、と言った。このフランスの音樂家という言葉に、人の好いル・メートルの心が躍った。自分の祖國と藝術とを熱烈に愛していたのである。ル・メートルは若い旅人をもてなし、宿も提供した。相手は宿に困っていたらしく、大して遠慮もせずにその厚意を受けた。この青年が煖爐で身體をあたため、夕食を待ちながら喋っているのを、私は傍からつくづくと觀察した。身體つきはずんぐりしているが、肩幅は廣い。別に畸形というのではないが、何處となく身體つきが不恰好であった。言わば背中の曲っていないせむしのようで、それに少しびっこでもあったようである。黒い服は古いというより着古したというべきもので、所々にぼろが垂れ下っていた。非常に物はいいが非常に汚れているシャツ、飾り總のついた立派なカフス、二本も足が入りそうなゲートル、雪除けの小さい帽子を小脇にかいこんでいる。こんな滑稽な風體の中にも、しかし、何かこの青年の態度に矛盾しない上品なところがあった。顔つきは纖細でいや味がない。すらすらとよく喋るが、慎ましいところは全然ない。どこを見ても、教育のある放蕩者の青年ということがはっきり分る。乞食のように乞食をしては歩かないが、氣まぐれにほっつき歩いているのである。その話によると、名をヴァンテュール・ド・ヴィルヌーヴといい、パリから來て、途中で道に迷ったのだという。そして、音樂家という身分のことを少し忘れて、自分はグルノーブルの高等法院にいる親戚を訪ねて行くのだ、とつけ加えた。

夕食の間、みんなで音樂の話をした。ヴァンテュールは話が上手だった。あらゆる偉大な樂界の名手・名作・男優・女優・美女・大貴族なぞ、知らないものはなかった。人の話すことは、みんな實地に知っているらしかった。しかし、何か或る話題がはじまると、すぐにみんなを笑わせるような猥らがましいことを言って、話を混ぜかえし、何の話をはじめた

のか忘れさせてしまうのである。それは土曜日のことだった。あくる日には、大教會堂で音樂があった。ル・メートル氏はヴァンテュールに歌って貰えないだろうかと申出る。

「承知しましたとも」

何部を歌うのかと訊くと、

「コントラ・テノールです」

それからまた他の話をはじめた。會堂へ行く前に、一度前もって見ておくようにと受持のパートを差出すと、それには眼もくれなかった。この空威張りはル・メートルを驚ろかせた。

「今に見ていてごらん」と、ル・メートルは私の耳もとで、「譜を一つも知つちゃいないから」と、言った。

「僕もそれが心配なんです」と、私も答えた。

私は非常に心配して二人のあとについて行った。音樂がはじまると、ひどい勢で動悸が打ちはじめた。それほどヴァンテュールに心が惹かれていたのである。

しかし、すぐに胸をなでおろした。ヴァンテュールはその二節の獨唱部を想像し得る限りの正確さと情熱をもって歌った。しかも、非常に美しい聲であった。私はこんなに快い驚きを感じたことがなかった。ミサの後で、ヴァンテュールは、僧會員や樂師たちからこの上もない讃辭を受けた。ヴァンテュールはそれに冗談まじりの答を返したが、常に品位を失わなかった。ル・メートル氏は心をこめて青年を抱擁した。私も同じようにした。私がすっかりよろこんでいるのを見て、ヴァンテュールもうれしそうだった。

どう考えても單なる田舍者にすぎなかった例のバークル君にすっかり惚れこんでしまった私が、今度は、教育もあり、才能もあり、才知もあり、世馴れていて、愛すべき道樂者としても世間に通るヴァンテュール氏に惚れこんでしまっただろうとは、誰にも察しのつくところだろうと思う。正にその通りのことになったのである。そして、私の立場にある青年だったら、誰でも必ずそうなったろうと考える。況んや人の價値を感ずるだけの立派な勘を持ち、それに心を惹かれるだけの良い趣味を持っている者ならば、一層容易にそうなったであろう。まったく、ヴァンテュールはそういう價値を持っていたし、殊に、あれぐらいの年齡では滅多にないことであるが、自分の長所を他人に見せつけようとしないという美點

を具えていた。なるほど、ヴァンテュールは知りもしないことを色々と自慢したりしたことはある。しかし、知っていることと、それも相當に數多くあったが、それについては何も言わなかったのである。ヴァンテュールはそれを實地に見せる機會を待ちうけていた。機會が到來すると、あせらずにそれに乘じた。すると、これが最大の効果を上げたのである。何を話すにしても、餘韻を殘して、あとを言わないから、いつになったらみんなぶちまけてくれるのか、それが分らない。話をすると、剽輕で、ふざけて、種が盡きず、實に人を惹きつける。いつもにこにこしているが、決して聲を立てて笑わない。この上もなく野卑なことを、この上もなく上品な調子で喋って、そのまま通してしまう。どんなに愼ましい女たちでも、よくそんな話を我慢して聞いたものだと、自分ながら驚くぐらいである。ずいぶん失禮な、と腹を立てる氣になるが、それも駄目で、腹を立てるだけの力がどうしても出て來ない。ヴァンテュールには玄人女しか用がなくて、立派な女性に戀される艶福を持つ柄ではなかったようであるが、そういう艶福に惠まれた人々の社會に無限の樂しみを與える柄にできていたわけであった。あれほど立派な才能を持っていた上に、そういう才能に理解も趣味もある國にいたのであるから、音樂家の狹い世界だけに長い間とどまっているのは、むつかしいことであった。

ヴァンテュール氏に対する私の心醉は、尤もな理由もあったし、バークル君への心醉に比べて一層强烈であり永續もしたけれど、その結果に於てはあれほど突飛なものとはならなかった。ヴァンテュール氏の顏を見ること、聲を聞くことが好きだった。この人のすることは何でもすばらしいように思えた。この人の言うことは何でも神のお告のように考えられた。しかし、いくら惚れこんだと言っても、この人とは離れられないというほどにはならなかった。そういう行き過ぎを豫防してくれる立派な人が、私の手近にあったからである。その上、ヴァンテュールの處世訓は、御本人には非常にぴったりするが、自分には役立つものでないと感じていた。そんな事を言うと相手に笑われると思って、話さなかったけれど、私には、その正體は分らないが、何か別の種類の快樂が必要であった。ところで、私はこのようなヴァンテュールへの愛著を、自分を支配していた他の愛著と結合したいものと思った。この人のことをママさんに有頂天になって話した。ル・メートルもママさんにとても賞めて話した。ママさんは、それなら一度お連れしたら、と承知した。ところが、この會見は全く成功しなかった。ヴァンテュールはママさんを氣取った人だと言うし、ママさんの方ではヴァンテュールを道樂者だと思った。そして、ママさんは私がそんな悪い人と知合いになることを心配して、もう二度と自分のところへあん

な人を連れて來ないように、と言ったばかりか、あんな若者とつき合っていると、どんな危險な目に遭うか知れない、と嚴しく誡めたので、その後は、私もあまり深入りしまいと用心するようになった。そして、私の身持の上からも、考え方の上からも非常に仕合せだったことには、間もなく二人は別れることになったのである。

ル・メートル氏はそうした藝術家に有り勝な嗜好を持っていた。酒好きだったのである。尤も、食事の時は控えているのだが、部屋で仕事をするときは、どうしても飲まないわけにいかなかった。女中もそれをよく心得ていて、先生が作曲のために紙を準備したり、セロを手にしたりすると、忽ち酒瓶と杯とが現われた。そして、瓶は次々とお代りが出た。決して醉いつぶれることはなかったが、ほとんど常に酒氣を帶びていた。そして、これは全くこの人の瑕であった。というのは、ル・メートルはしんはまったく善良な人で、ママさんなぞは「小猫さん」という名でしかこの人を呼ばなかったほど快活な人だったからである。不幸なことには、ル・メートル氏は自己の才能に溺れ、非常に仕事をやり、また非常に飲んだ。それが健康にもさわり、やがて氣分にも影響した。時々邪推深くなったり、すぐ腹を立てることがあった。粗暴なことはできないし、誰にも逆らうことのできない性質だから、合唱隊の子供たちにすら惡態をつくようなことは決してしなかった。その代り、人から逆らわれるのも厭だった。それはもっともな事であった。ただ、惡いことにル・メートル氏はあまり氣が利かないので、口先と本心との區別がつかなかった。だから、何でもないことにむかっ腹を立てた。

もとのジュネーヴ僧會は、昔は多くの王侯や司教が入會するのを誇りとしたものであるが、他國へ逃れ移ってからは、以前の光彩を失い、その誇りだけを維持していた。しかし、ここに入會を許されるためには、やはり貴族かソルボンヌ[*1]の博士かでなければならなかった。そして、個人の功績から來る誇りに次いで許さるべき誇りがあるとすれば、それは家柄から來る誇りである。のみならず、給金を出して俗人を雇っている牧師というものは、かなり權柄づくに雇人を待遇するものである。僧會員たちが氣の毒なル・メートルを待遇するにも、度々そういうところがあった。中にも、ヴィトンヌ師という教會歌手は、ごく粹な人だったが、貴族を鼻にかけすぎて、ル・メートル氏に對してはいつもその才能に相當するだけの敬意を拂わなかった。ル・メートル氏の方でも、そのような輕侮をなかなか忍んでいられなかった。その年、聖週間に、恒例によって司教が僧會員を招いて正饗會を催した。ル・メートル氏もいつもそこへ招かれることになっていた。この席で、二人の間に、いつもより烈しい爭いがあった。教會歌手はル・メートル先生に何か不當なことをやり、暴言を吐

いたから、先生も默ってはいなかった。先生はその場で、あくる晩逃走する決心を固めて、ヴァラン夫人のところへお別れに來た。夫人は言葉を盡してル・メートル氏の氣を鎭めようとしたが、どうしても思い留まらせることができなかった。自分を一番必要とする復活祭の祭日に、あの暴君たちを困らせて腹いせをしてやるのだという樂しみを、ル・メートル先生はなかなか捨てきれなかったのである。ところが、先生自身が困ったのは、樂譜のことであった。持って行ってしまいたいが、なかなか容易でなかった。相當に大きな、非常に重い箱にいっぱい入っていたから、抱えて行くわけにいかなかったのである。

ママさんは、私がその立場にいてもしただろうし、またするだろうようなことをした。先生を引き留めようと、さんざん無益な努力を拂ったあとで、どうしても出て行く固い決心をしているのを見て取ると、ママさんは、自分にできる事だったら、どんな事をやっても先生に助力しようと心に決めたのである。ママさんは、そうすべきであった、と私は敢て言おう。ル・メートルはママさんに盡すために身を捧げてきたのである。自分の藝術に關することにせよ、自分の仕事に關することにせよ、ル・メートルは全くママさんの命のままであった。そして、その命令に從う先生の心がまえは、さらに先生の從順に新たな價値を與えていたのである。從って、ママさんとしてはこの三四年以來何かにつけてこまごまと盡して貰ったお友達へのお禮返しを、この危急の場合に、一ぺんに濟ませてしまうにすぎなかった。しかし、このような務めを果すのに、これが自分の義務だと考えなければならない氣持ではなかった。ママさんは私を呼びよせて、せめてリヨン[*2]までもル・メートル氏にお伴をして行くように、御用のある限りいつまでも先生のお傍についているように、と命じた。後にママさんが打明けた所によると、この處置には、私をヴァンテュール氏から引離したいという氣持が大いに働いていたのだという。箱の輸送については、忠實な召使であったクロード・アネに相談した。アネの意見では、アヌシーで駄馬を雇ったりすれば必ず見つかるに違いないから、夜になって箱を少し離れた地點まで運び出し、何處かの村で驢馬を借りて、セイセル[*3]まで箱を輸送する、セイセルはフランス領だから、もう危險はなかろう、という。それがよかろう、と

*1 十三世紀にパリに創立された古い學院で、スコラ神學研究の中心地であった。
*2 フランス中部の大都市。アヌシーより西へ五〇キロばかり。
*3 ローヌ河を距てたフランス領のアン縣の縣境附近にある小村で、アヌシーから西へ二十キロばかり。此處からリヨン行の驛馬車が出た。現今は綜合大學になっている。

いうことになった。われわれはその夜、七時に出發した。ママさんは、私の費用にとかこつけて、氣の毒な「小猫さん」の貧しい財布を、餘分に膨らませたが、それはル・メートルにとって無用のお金ではなかった。クロード・アネと園丁と私とが力を合せて、例の箱を一番近い村まで、どうにかこうにか運び、そこで驢馬と交代した。そして、その夜われわれはセイセルまで行った。

前にも既に話したと思うが、私には全く本來の自分とは似ても似つかなくなる時があって、まるで別人のよう、全く別の性質の人間に思われる時があった。その一例が、これからお分りになることと思う。セイセルの司祭のレイドレ師[*1]は、聖ピエール派の僧會員で、從ってル・メートル氏とは舊知の間柄であった。だから、何よりもレイドレ師には隱れて行かなければならなかった。ところが、私の意見はその反對で、レイドレ師のところへ出かけて行き、僧會の承諾を受けて來たような顔をして、何か口實をもうけ、一夜の宿を求めよう、というのである。この思いつきは、相手を馬鹿にした小氣味のいい腹いせになるので、ル・メートル氏も大いに面白がった。そこで、二人は圖々しくレイドレ師の家へ行った。師は大いに歡待してくれた。ル・メートルは師に向って、自分は司教の依頼でベレーまで[*2]行き、復活祭の日に音樂の指揮をする、日ならず歸って來るつもりにしている、と言った。私はこの出鱈目に尾鰭をつけて、いかにも本當らしい嘘を並べたてたから、レイドレ師は私をいい青年だと思いこんで、打解けて可愛がってくれた。二人は御馳走を食べ、氣持よく寢た。レイドレ師は、どうやってわれわれをもてなしていいか分らない、といった樣子だった。そして、われわれは歸りにはもっと永く滯在すると約束して、この上もない親しい友達のように別れた。二人だけになるのを待ちかねて、二人はどっと吹き出した。そして、實を言うと、今でもそのことを考えると、吹き出したくなるのである。こんな旨く行った惡戲はほかに一寸考えられないからである。この惡戲は道中ずっと二人を面白がらせた筈であったが、生憎なことに、相變らず酒をくらって管ばかり卷いていたル・メートル氏は、道中二三回、變な發作に襲われたのであった。その發作は、癲癇によく似た發作で、この人の持病になっていた。この發作が起ると、私は恐ろしくて途方に暮れた。そして、やがて、できれば何とかして逃げだしたいものだ、と思うようになった。

われわれはレイドレ師に言ったように、ベレーへ行って復活祭の祝日を過した。[*3] 別に待たれていたわけではなかったが、樂長の家に招かれて、みんなから非常な歡迎を受けた。ル・メートル氏はその藝術については人から尊敬を受け、ま

た受けるだけの腕もあった。ベレーの樂長は自分の傑作を色々と披露して、この立派な批評家の稱揚を得ようと努めた。というのは、ル・メートル先生は音樂に精通していたばかりでなく、公平であり、人を妬んだりお世辭を言ったりしない人だったからである。先生は田舍の樂長たちよりも遙かに優秀な人だった。そしてこの事はその連中自身もよく感じていたから、ル・メートル氏を自分たちの同僚というより先輩として見ていたのであった。

ベレーで四五日の間、非常に樂しく日を送ってから、また出發して、道を續けたが、今話したようなことより他には何の變ったこともなかった。リヨンへ著くと、ノートル・ダーム・ド・ピティエへ宿をとった。例の箱は、又別の嘘をついて、わが善良なる保護者たるレイドレ師の世話で、ローヌ河を船で運ぶことになっていたから、それが著くまで、ル・メートル氏は知人を訪ねて行った。その中には、後に出て來る聖フランシス派のカトン師とか、[*4]リヨン伯ドルタン師[*5]なぞがあった。この二人は、共にル・メートル先生を歡迎したが、しかし、すぐ後に見るように、實は先生を裏切ったのであった。レイドレ師のところが、ル・メートル先生の幸福の見納めだったわけである。

リヨンへ著いて二日後、宿からあまり遠くない小さい街を通っていると、急にル・メートル先生は例の發作に襲われた。今度のはずいぶんひどくて、私はすっかり恐ろしくなった。私は大聲を上げ、救いを求めると、人々に宿の名を告げて、そこへ運んで行ってくれるように賴んだ。やがて、街のまん中で泡を吹きながら氣を失って倒れている男のまわりに、人が集って、がやがやっている間に、この男は唯一人賴みとする友に置きざりを食ったのである。私は誰もこちらのことを考えていない隙をとらえ、町角を曲ると、忽ち姿を消した。あゝ、これで漸く私は第三の告白を終ることができた。このような告白がまだ澤山殘っているとすれば、私はやりかけたこの仕事をもうやめてしまうであろうが。

今まで述べて來たすべてのことは、私の生活したその場その場に幾らかその痕跡を殘している。ところが、次の卷で述べようとすることは、ほとんど全く知られていない。それは、私の生涯で最も出鱈目をやった時代であったが、それでも、

＊1　ルイ・エマニュエル・レイドレ師と言って、一七二九年から一七四二年まで十三年間セイセルの司祭だった。
＊2　セイセルと同じアン縣にある司教區で、セイセルの南三十キロばかり。
＊3　一七三〇年四月九日のこと。
＊4　第五卷に出て來る。
＊5　フランソワ・ド・グリュエル・ド・ドルタン師という。一七〇六年にアヌシーに生れたと傳えられる。

左程の悪い結果にならなかったのは仕合せであった。私の頭は、見知らぬ樂器の音調に乘せられて、すっかり調子を狂わされてしまったのである。しかし、それは自然に元の調子に戻った。そして、その時に、初めて私は自分の馬鹿をやめた。或いは、少くも、自分の天性に最も適合した馬鹿をやった。私の青年時代のこの時期のことは、最も記憶が曖昧である。その追憶をまざまざと跡づけるに足るほどに關心を惹くことはほとんど何も起らなかった。そして、あれほど往きつ戻りつし、次から次へと移り變ったのであるから、時や場所をいくらか取りちがえずにいることは難かしい。思い出のよすがとなる材料もなければ記念物もなく、全く記憶だけをたよりに書くのである。生涯のうちには、たった今起ったことのように生々しい色々な事件もあるが、わずかに殘った追憶と同じ位に曖昧な記述の助けをかりてでしか滿たし得ない間隙や空隙もある。從って、時には色々な間違いを犯すこともあったろうし、自分につい一層確實な資料を得るまでは、これからもまだ些事に關しては間違いを犯すこともあり得よう。しかし、本題に關して眞に重要な事柄については、正確であり、忠實であることを確信している。私は何事につけても、そうありたいと常に努めようと思っているから、その點は信用していて頂きたいものである。

私はル・メートル先生を見棄てるや否や、すぐに決心をきめた。そして、アヌシーへ向って引返したのである。われわれがアヌシーを出發した時の原因が原因だったし、またあんなに内密にしていたのだから、旨く退去できるかどうかということは、私の重大關心事であった。そして、そんな心配に氣を取られていたから、數日の間は、後髪を引かれる思いも、紛らされていた。ところが、もう大丈夫と分って安心すると、一番強い感情が再びもり返して來た。何を見ても樂しくないし、何を見ても心を惹かれない。ママさんの傍に歸りたい望みより他には何もなくなった。ママさんへの愛著の深さと眞實さとが、私の心から、すべての空想的な計畫、愚かしい野心を、根こそぎ奪ってしまった。ママさんの傍で暮す幸福より他の幸福は目に入らなくなった。そして、一足進むごとに、その幸福から遠ざかる感じがしていた。だから、歸れるようになるや否や、すぐに歸路についたのである。この歸り道は全く駈け足で、心も上の空だったから、ほかの旅のことはどんな旅でも樂しく憶えているのに、この旅のことだけは少しも記憶にない。リヨンを出發したことと、アヌシーへ著いたことより他には、何一つの憶えていないのである。しかも、アヌシーへ著いた時のことが、どうして私の記憶から消え去ることがあるだろう。著いてみると、ヴァラン夫人の姿はもう見えなかった。パリへ行ってしまっていたので

ある。[註29]

夫人のこの旅行の祕密は、後になってもどうしても分らなかった。若し無理に聞き出そうとしたら、きっと言ってくれただろうと思う。しかし、どんな人間でも、私ほど自分の友の祕密を知りたがらない者はないであろう。ただ現在のことだけに占められてる私の心は、現在をもって心の全部を隅々まで滿たしている。そして、今後の自分の唯一の樂しみとなる過去の快樂のことは別として、過ぎ去ったものすべてを容れる餘地は、私の心には殘っていない。ママさんが洩らした僅かな言葉から、そうではないかと思いあたるのは、サルジニヤ王の讓位[*1]によって、トリノに起った革命さわぎで、ママさんは自分のことが忘れられるのではないかと心配した。そしてオーボンヌ氏の策動を味方に、フランス宮廷から同じような恩典を得ようと望んだらしいのである。フランス宮廷には色々と重大な事件が起って、紛れる關係から、今ほど不愉快な監視を受けなくて濟むので、その方がいい、と、ママさんは度々私に言っていた。若しこれが本當だったら、ママさんが再びここへ歸って來た時に、誰も悪い顏をせず、少しも途切れずに相變らず年金を貰っていたということは、非常に驚くべきことである。多くの人々は、ヴァラン夫人が、當時フランス宮廷に用があって自分でどうしても出かけなければならなかった司教から頼まれて、何か祕密の任務を帶びて行ったのだ、とか、誰かもっと有力な人に頼まれて行ったのだから、歸って來てから仕合せな身分になれたのだ、とか思いこんでいた。若しそうだとすれば、この使者の役目はうまい人選だったし、まだ若く美しい夫人は、交際を旨くやってのけるに必要なあらゆる才能を具えていた、ということは確實である。

第四卷

（一七三一年――一七三二年）

歸ってみるとママさんはいない。私の驚きと悲しみを察して頂きたい。この時、初めて、ル・メートル先生を不實にも置きざりにした後悔の念が湧き起った。殊に、その後、先生の身の上に起った不幸を知るにつけて、この念は益々激しいものとなった。先生の全財産が入っていた例の樂譜箱、あれほどの苦勞をして持出した貴重な箱は、リヨンに著くと同時

*1 ヴィットリオ・アメデオ二世の讓位は一七三〇年九月三日。

に、ドルタン伯爵の手で押收されてしまったのである。伯爵は僧會からの手紙で、この荷物をこっそり取上げてしまうように前から通知を受けていたのであった。ル・メートル先生は自分の財産・商賣道具・一生の勞作を請求したが容れられなかった。箱の所有權については、少くも訴訟沙汰にしてもよいものだった。しかし、そうしたことは全くなかった。事件は强者の掟によって、たちどころに裁定を下され、氣の毒にもル・メートル先生は、このようにして、自分の才能の成果・青年時代の作物・老後の資源となるべきものを失ったのであった。

私の受けた打擊といったら、全くひどいものだった。しかし、私はどんな大きな悲しみからもあまり影響を受けない年頃にあった。そして、やがて色々な氣休めをでっち上げた。ヴァラン夫人の行先は分らなかったし、先方も私の歸ったことを知らなかったけれど、私は近いうちに夫人の消息が知れるだろうとあてにしていた。また例の置きざりの一件についても、色々考えてみると、それほど罪の深いものではないと考えた。私は、ル・メートル先生が逃亡する時には、そのお役にも立った。これが、私にできる唯一の仕事だった。たとえ先生と一緒にフランスに留まっていたところで、あの病氣を治すことも、あの箱を救うこともできなかっただろうし、先生のためになることは何もしないで、ただ徒に入費を增させるにすぎなかっただろう。その時の私は、右のように考えていたのである。今日の私の考え方はこれと異る。卑劣な行爲がわれわれを苦しめるのは、それが行われた直後ではなく、長い後に、そのことを思い出す時である。なぜなら、そうした記憶は決して消えることがないからである。

ママさんからの消息を得るために採るべき唯一の決心は、消息を待っていることより他になかった。パリに行って何處を探そうか。旅行をするにも、どうしてできようか。ママさんの居所を遲かれ早かれ知るためには、アヌシーほど確實な處はなかった。そこで、アヌシーへ留った。しかし、私の行動はあまり立派でなかった。前に私を保護してくれ、將來もそうしてくれるかも知れない司教のところを訪ねて行かなかったのである。

私を守ってくれるママさんがもう司教の傍にいなかったし、また、ル・メートル先生と二人で逃亡したことについて責を受けるのを恐れたからだった。神學校へもまるで足ぶみしなかった。グロ師がもういなかったからである。知合いの人には誰も會わなかった。ただ、例の地方官夫人には會ってみたいような氣がしたが、思いきってそうもできなかった。そんなことより、まだ悪いことをやった。それは、ヴァンテュールにまた會ったことである。この人のことは、あんなに熱

中していたのに、逃亡以來ほとんど考えたことがなかった。ところが、再會してみると、ヴァンテュールは名聲を上げてアヌシーじゅうで持てはやされていた。貴婦人たちから引っぱり凧だった。この成功をみて私の頭はすっかり狂った。もうヴァンテュールのことしか目に入らず、このためにほとんどヴァラン夫人のことも忘れた。もっと自由にこの人の指導を受けられるように、同居させて貰いたいと申し入れた。ヴァンテュールは承諾した。下宿は靴屋の家だったが、ここの主人は愉快な道化た男で、女房を呼ぶのに方言を使って、いつも「お多福」としか呼ばなかった。女房はまたこの名に相應しい女でもあった。夫婦は始終喧嘩口論の絶え間がなかったが、ヴァンテュールはそれをなだめる樣なふりをして、いつもその反對ばかりやろうと心掛けていた。ヴァンテュールは夫婦に、冷靜な口調で、プロヴァンス訛りの抑揚をつけて、最大の效果を發揮するような言葉を言いかけた。これはまったく抱腹絶倒の場面だった。午前中はこんな風にして氣のつかないうちに過ぎた。二時か三時に一寸腹ごしらえをした。それからヴァンテュールはその交際仲間のところへ出かけて行き、そこで夕食を食べた。私は一人で散步に出かけ、この人が大した偉物であることを考えたり、この人の稀有の才能を敬服したり羨んだり、そのような幸福な生活に導いてくれない忌々しい自分の運命の星を呪ったりした。あゝ、何と私は分らずやだったろう。若し私がもう少し愚でなく、自分の生活をもっとよく樂しむことを知っていたら、私の生活の方が百層倍も樂しかったことだろう。

ヴァラン夫人はアネだけをお伴につれて行っていた。前に話した小間使のメルスレは殘してあった。メルスレはまだ女主人の家の一部屋を占めていた。この女は私より少し年上で、美人ではないが、人好きのする娘だった。フリブールの生れで、[*1]悪氣がなく氣立がよかったが、時々女主人に逆らうことがあった。これが私の知っているこの娘の唯一の缺點だった。私はかなり繁々とメルスレに會いに行った。古い馴染でもあり、この娘に會うとあの戀しい人のことを思い出した。そのためにメルスレが好きになった。メルスレには何人か友達があった。その中でも、ジュネーヴ生れのジロー孃[*2]と

*1 アンヌ・マリー・メルスレはフリブール生れではなく、フランシュ・コンテで一七一〇年頃生れた。後に家族と共にフリブールに移り、この町で結婚して、一七八三年に死んでいる。

*2 エステル・ジローもルソオと同じ新改宗者だった。七〇二一年にジュネーヴに生れ、一七二七年にアヌシーでカトリクに改宗し、一七七四年に死んだ。

いうのが、罪なことだが、私を好きになろうと思いついた。ジローは始終メルスレをつついて、私を自分の家へ連れて來させようとした。私はメルスレが好きだったし、ジローの家には他にも會いたい若い女がいたので、平氣で連れて行かれた。ジローは盛に御機嫌をとったが、こちらがジローを嫌うことと言ったらお話にならなかった。こちらの顏に、赤黑い頰紅をなすりつけた黑い干からびた鼻面を近寄せてくると、唾でもはきかけてやりたい氣がした。しかし、私は辛抱した。こんなことさえなければ、娘たちの仲間にいるのは非常に樂しかった。それに、娘たちはジローにお世辭をするのか、或いは私にするのか、先を爭ってちやほやした。私はそこに友情しか見なかった。後になって考えてみると、こちらの思惑一つでそこに友情以上のものを見ることもできたのである。しかし、それに氣がつかなかった。そんなことを考えもしなかった。

その上、お針っ子とか小間使とか商人の娘なぞというものにはあまり心を惹かれなかった。私には令孃がほしかったのである。誰にも夢はある。私の夢はいつもそれだった。この點では、ホラティウス[*1]とは考えが異っているわけである。しかし、私の心を惹くものは決して地位とか階級とかいう虛飾ではない[*2]。前のような娘たちと比べて、一層初々しい顏色、美しい手、優雅な服飾、全身にみなぎる纖細で清潔な感じ、立居振舞、口の利き方なぞのすぐれた趣味、上等で仕立のいい服、可愛らしい靴、リボン、レース、上手に整えた髪、そういうものさえあれば、少しぐらい美人でなくても、この方がいつも好ましい。この好みがひどく可笑しいとは自分でも思っている。しかし、私の氣持が否應なしにこんな好みをさせるのである。

さて、右のような旨いことが目の前にぶら下って來た。しかも、これを利用しようとしまいと、私の心持一つだったのである。若い頃の樂しかった時のことをあれこれと思い起すことが、私は何と好きなのだろう。その頃は本當に嬉しかった。そういう時は短く、しかも滅多になかったが、實に容易に味わえたのであった。それを思い出すだけで、元氣を引立て、餘生の倦怠を支えるに必要な清純な快感が、胸に甦って來る。

或る朝、曉の光がひどく美しく思われたので、あわてて服を着かえ、日の出を見ようと、大急ぎで郊外へ出かけた。私はこのよろこびを心ゆくまで味わった。それは聖ヨハネ祭の次の週のことだった[*3]。豪奢に飾り立てた大地は草と花で蔽われていた。もう囀り納めの鶯は、今を盛りと囀って樂しんでいるように見えた。小鳥という小鳥はみな春の別れの曲を合

唱し、美しい夏の日の出を歌っていた。このような美しい日は、今の私の年齢になっては、もう見ることはできないし、今日私の住んでいるこの陰鬱な土地[*4]では決して見ることのないものである。

私は知らぬ間に市から遠ざかっていた。暑氣が加わった。小川に沿った小さい谷間の樹蔭の下をぶらぶら歩いた。後ろに馬の足音と娘の聲が聞える。何か當惑している樣な聲だが、それでも樂しそうに笑っている。振向いて見る。私の名を呼んでいる。近寄ってみると、知合いの二人の娘、グラフェンリード孃とガレー孃だ。二人は乘馬があまり上手でないので、小川を渡るのに馬をどう御していいか分らないでいる。グラフェンリード孃[*5]は非常に人好きのするベルヌ生れの娘で、その年頃にありがちな何か馬鹿なことをやって國を追われ、ヴァラン夫人の眞似をした。私は夫人の家でこの女に時時會つたことがあった。グラフェンリード孃は、しかし、夫人のように年金を受けてはいなかったから、ガレー孃にすがりついて、思わぬ仕合せにありついた。ガレー孃[*6]は、この女と仲良しになり、母親に賴みこんで何とか身の振り方のきまるまで自分のお友達にしておいて貰った。ガレー孃は年も一つ若く、美人でもあった。何處となく弱々しそうな、纖美なところがあった。ひどく愛くるしく、また容姿も整っていた。娘ざかりの證據である。二人とも非常に情愛がこまやかで、戀人でもできて結びつきを壞さない限りは、互の優しい性質はいつまでもその結びつきを保っているばかりだった。二人は私に向って、これからガレー夫人の所有する古い城のトゥヌへ行くところだが、二人だけではどうにも馬を渡らせることができないから、どうぞ手を借して貰いたい、と言うのであった。私は馬に鞭をくれようとした。ところが娘たちは、私が馬に蹴られ、自分たちが跳ね落されることを恐れた。そこで別の手段を採った。ガレー孃の馬の轡を持ち、それを後に牽きながら、膝まで水につかって小川を渡った。こうすると、もう一頭の馬はわけなくついて來た。これが濟むと、私

*1 紀元前一世紀のローマ帝政初期の詩人で、晩年は閑靜な莊園に引きこもって詩作に戯った。
*2 異本。「私の心を惹くものは決して虛飾ではなく、逸樂である」
*3 ルソオの生涯のこの記念すべき日は、一七三〇年七月一日のことであった、とされている。聖ヨハネ祭は六月二十四日。カトリックではヨハネの誕生日として祝する。
*4 ルソオはこの稿をイギリスのウットンで執筆した。
*5 ルソオより一つ年下、やはり新改宗者であつた。一七四八年、三十五歳で死んでいる。
*6 クローディーヌ・ガレーと言つて、ルソオより二歳ほど年長。後にサヴォアの議員と結婚して一七八一年に死んだ。

は二人に挨拶し、頓馬な顔をしてその場を去ろうとした。二人は何か低い聲で話し合っていたが、やがてグラフェンリード孃が私に向って、

「いけませんわ、いけませんわ」と、言い、「そんなにしてお逃げになるなんて。あなたは私たちのために、お濡れになったんですもの。乾かして上げることを考えるのは當り前じゃありませんか。すみませんけれど、私たちと御一緒に來て下さいな。あなたは私たちの虜よ」

私は胸がどきどきした。ガレー孃の顔を見た。すると、私のびっくりした顔つきを笑いながら、

「そうよ、そうよ」と、言い添えて、「捕虜だわ。あなた。この人の後ろにお乘りなさいな。あなたをいじめて上げたいんです」

「だって、お孃さん、僕はまだあなたのお母様にお目にかかったことがありません。僕が行ったりなんかすると、何とおっしゃるでしょう」

「この方のお母様はね」と、グラフェンリード孃がまた言った、「トゥヌにはいらっしゃらないんですよ。私たちだけなんです。夕方には歸るんですから、あなたも御一緒に歸りましょう」

この言葉は電氣よりも速く私に作用を及ぼした。私はグラフェンリード孃の馬に飛び乘りながら、よろこびのために身體が顫えた。そして、落ちないように相手の胴體に抱きつくと、心臓がひどくどきどきして、向うにもそれが分った。心臓がどきどきするわ、落ちそうでこわくて、と言った。それは、私の姿勢から言って、本當かどうかさわってごらんなさい、と誘っているようなものだった。私には思いきってそうもできなかった。そして、道中ずっと、私の兩腕は帶のようにグラフェンリード孃の腰に卷きついていた。しっかりと卷きついていたことはいたが、腕の位置は少しも動かさなかった。これを讀む女性の中には私の頰を叩いてやりたいと思う人もあるだろう。それも無理はない。

遠乘の面白さと娘たちのお喋りが私の口も輕くして、夕方まで、三人一緒にいた間じゅう、一瞬間も口を噤んでいなかった。二人は私をひどく氣樂にしてくれたので、私の舌は眼と同じほどに物を言った。尤も、舌の言うことと眼の言うこととは同じではなかったが。ただ、二人のうちのどちらか一人と差し向いになった時には、ほんの暫の間だったが、言葉のやりとりが滯った。しかし、席を外した一人はすぐに歸って來たので、そのような滯りをわざわざ消そうとするほどの

餘裕はなかった。

トゥヌに著き、十分に服を乾かしてから、みんなで朝食を食べた、それから、晝食の準備という大事な仕事にかからねばならなかった。二人のお孃さんはお料理をしながら、小作人の子供たちに接吻した。そして、氣の毒にもお勝手の下働をさせられていた私は、齒がみをしながらそれを眺めているばかりだった。食糧は市から送り屆けてあった。そして、旨い晝食、とりわけ砂糖菓子を拵える材料はたっぷりあった。ところが、生憎なことに葡萄酒を忘れていた。葡萄酒なぞはあまり飲まない娘のことだから、忘れたのも無理はなかった。しかしこちらはすっかり落膽した。酒の力を借りれば、少しは大膽になれるつもりでいたからである、娘たちもやはりがっかりした。恐らく私と同じ理由だったろうと思うが、そうだと信じているわけではない。二人の生々と魅力に富んだ快活さは無邪氣そのものだったし、それに、娘二人で一人の私をどうしようもなかったではないか。娘たちは近所に人をやって方々で葡萄酒を探させた。どこへ行っても手に入らなかった。この邊の人はそれほど質素だったし、また貧しかったのである。二人は私に氣の毒がるので、私は、そんなに心配して貰わなくてもいい、私を醉わせるにはお酒の必要はない位だ、と言った。これは、その日私が思い切って二人に言った唯一のお世辭であった。しかし、二人のお轉婆娘はこのお世辭を本當の事としか思わなかったろうと思う。

一同は小作人の家の臺所で晝食を食べた。二人の女友達は細長い食卓の兩側の腰掛にそれぞれ腰を下ろし、お客様の私は二人に挾まれて三脚臺の上に席を占めた。何という晝食だったろう。何という魅力に滿ちた思い出だろう。こんなに僅少な費用でこれほど清く眞實な快樂を味わい得るのに、どうして他の快樂なぞ求める氣になれるだろうか。パリの小粹な家あたりの夕食も決してこの食事の足元へも寄れなかった。その陽氣さとか甘い樂しみとかのことばかり言うのではない。肉感についても言っているのである。

晝食後に一つ節約をやった。朝食の殘りのコーヒーを飲まずに、持って來た菓子やクリームと一緒におやつに殘すことにした。そして、食慾をよく整えておくために、果樹園に出かけて、櫻ん坊の枝なりを束にして投げてやると、今度は下から枝ごしに種を投げてよこした。一度ガレー孃が前掛を差出し、頭を引込めて、丁度うまい所へ姿を出したので、こちらはうまく見當をつけて、束を胸の中へ投げこんでやった。そのおかしかった事といったら。私は心の中で、こう言った。「おれの唇が櫻ん坊だといいんだがなア。どんなによろこん

で投げつけてやることか」と。

この上もなく自由に、また終始この上もなく禮儀正しく、このようにふざけ遊んで一日は過ぎた。思わせぶりな言葉とかきわどい冗談なぞ、ただの一つも口にしなかった。しかも、このような禮儀正しさは、無理にそうしたわけでは全然なく、自然にそうなったのである。われわれは心の命ずるままに從ったのである。そして、私の控え目（或る人は私の愚鈍と言うかも知れない）だったことは非常なものであって、たった一度ガレー孃の手に接吻したことが、思わず知らずやったこの上もない不躾なことのように考えられるほどだった。この一寸した恩惠を、さも大層なことのようにしたのは、その時の情勢によ たわけである。つまり、私はガレー孃と二人だけでいて、呼吸もろくろくできなかった。向うは眼を伏せていた。私の口は、言葉を言う代りに、相手の手に吸いついてやろうと考えた。その手に接吻すると、ガレー孃はそっと手を引込めたが、別に怒ったような風もせずにこちらの顔をじっと見た、その時、私は何と口を利けたものか、今では分らない。そこへガレー孃の友が入って來た。その時はその娘がひどく醜く見えた。

やがて二人は夜にならないうちに市へ歸らねばならないことを思い出した。日のあるうちに歸り著けるだけの時間しか殘っていなかった。そこで、來た時と同じ割振りで、大急ぎで出發した。若し私が思い切って言い出せば、この割振りを變えることもできたであろう。ガレー孃の眼つきがひどく私の心を動かしていたからである。しかし、私は何も思い切って言わなか た。また、そういうことは向うから申出ることでもなか た。途中でわれわれは一日がすぎてしま て詰らないと言 た。しかし、一日が短か たことを嘆くどころか、色々な樂しみによって一日を滿たし、それを長びかす祕法を心得ていたことに氣がついたのであった。

私は娘たちにつかまったとほとんど同じ場所あたりで二人に別れた。どんなに名殘おしく別れたことだったろう。どんな樂しみをもって再會を約したことだったろう。一緒に過した十二時間はわれわれに取っては數世紀の親交の價値があった。その日の甘い思い出はあの愛すべき娘たちには何の負擔ともならなかった。われわれ三人の間を支配していたあの情愛のこもった結合は、一層强烈な快樂ほどの値打があり、しかも、そういう快樂と共にあり得ないものだった。われわれは祕密もなく、羞恥もなく愛し合った。そして、いつまでもそのように愛し合いたいと思っていた。身持の清淨潔白ということには、そうでないものに劣らぬそれ獨特の快樂がある。なぜなら、その快樂は途絶えることがなく、また繼續して

働くからである。私の場合にしても、あの樂しい日の思い出は、生涯に味わった如何なる悦樂の思い出よりも、心を動かし、魅惑し、心に甦って來るのである。あの二人の美しい娘に、自分が何を求めていたのかはよく分らないが、とにかくあの二人は非常に私の心を惹いたのであった。しかし、たとえ私がそのいずれかを自由に處置できる身であったとしても、私の心は二人に分けられただろう、とまでは言わない。少しばかり一方に傾いていた感じがしていたからである。グラフェンリード孃を戀人として持っても、幸福になれたかも知れないが、しかし、この方はどちらかと言えば、親しい友として一層愛したことと思う。いずれにせよ、二人と別れる時には、二人のうちのどちらもいなければ、もう生きて行けない氣がしていた。もう一生二人には會えない、われわれの一日限りの戀もそれで終りだ、とは誰に思えただろうか。

これを讀む人々は、私の艶物語が大げさな前置をさんざん竝べ立てた後で、手に接吻するだけで終ってしまったのを見て笑わざるを得ないだろうと思う。讀者諸君よ、思い違えてはいけない。私は、手を接吻することで終ったこの戀の中に、少くも手を接吻することではじまる諸君の戀の中より以上の快樂を恐らく持ったのである。

前日非常に遲く床についたヴァンテュールは、私が歸ってから間もなく歸って來た。その時ばかりは、ヴァンテュールの顏を見ても、普段ほどのよろこびを感じなかった。そして、その一日をどうして過ごしたかを言わないようにした。あのお孃さんたちはヴァンテュールをあまり敬っていないような口振りだった。しかも、私がそんな惡い人とつき合っているのを面白くなく思っていたらしかった。このことが私の心にヴァンテュールの不利を釀したわけだった。その上、あの二人から私の氣を外らすものは、私にとって不快なものでしかなかった。ところが、やがてヴァンテュールは私の境遇のことを話しはじめたので、この男のことも自分のことも頭に浮べないわけにいかなくなった。私の立場は危機に直面していて、とてもこのまま長續きはできない。出費は非常に少くしているけれど、僅かばかりの貯金は使い盡してしまった。もう財源はない。ママさんからの消息もない。これから自分がどうなるのかも分らない。そして、ガレー孃の友達たちのが乞食にならざるを得ないと考えると、私は胸もはりさける思いがした。

ヴァンテュールは、かねて私のことは裁判所長[*1]に話してある、明日私をそこへ午餐に連れて行くと言った。所長は私の世話を知合いに頼むことのできる人で、面識になっておけば爲になる、才知もあり學問もあって、非常に交際上手、才能

*1 ジャン・バティスト・シモンという名で、ルソオより二十歳ほど年長、一七四八年に死んだ。

があり、またその才能を愛している人でもある、とも言った。それから、例によって、この上もなく眞面目なことにこの上もなく輕薄な話をまぜながら、その頃上演されていたムーレ[*1]作の或るオペラのアリアに合せた面白い對句の歌詞を見せてくれた。この對句はシモン氏（これが裁判所長殿の名であった）に大變氣に入って、同じ調の返歌を自分でも一つ作りたいと思っておられるほどである。所長はヴァンテュールにも一つ作ったらどうかと言っている。そして、ヴァンテュールは物好きにも私にも一つ作らせようと思いつき、明日は「滑稽物語」の擔架のように[*2]、對句が幾つも出合うようにしようではないか、と言った。

その夜は眠れぬままに、私はどうやらこの對句を作り上げた。初めて作ったものとしては相當なもの、むしろ優秀なもの、或いは、少くも、その前日だったらそれほどの感興をもっては作られなかったものであった。その主題は、私の氣分がすでに熟していた非常に情緒の深い情景のうちに展開しているのであった。朝になって、ヴァンテュールにその對句を見せると、これは面白いと言って、自分の方はできたともできないとも言わずに、私のをポケットへ入れてしまった。二人はシモン氏の午餐會に出かけ、大いに歡待された。話も愉快だった。讀書から利益を得ていたこの二人の才人の間の會話は、愉快でないわけはなかった。私は自分の役目を守って、じっと聽くだけで、默っていた。二人とも對句のことは口に出さなかった。私も口にしなかった。そして、私の知る限りでは、私の對句は問題にならなかったようであった。

シモン氏は私の態度に滿足したように見えた。この會見で氏が私について著眼したのはほとんどそれだけだった。すでにヴァラン夫人の家で何度か會っていたが、その時は私に大して注意を拂っていなかった。從って、私がシモン氏の知遇を得たのはこの午餐會以後のことであったが、しかし、知遇を得ようとした目的から言えば、これは何の役にも立たなかった。尤も、後になって他に色々と利するところがあったから、この人のことはいつも樂しく思い出すわけである。

シモン氏の風采の話をしないといけないと思う。何しろ、司法官という身分と、自ら誇っていた才知から考えると、私がこの話をしなければ、とても想像もつかない風采だったからである。裁判所長シモン氏は確かに脊の高さが二呎もなかった。細くて相當に長い眞直ぐな脚は、若し垂直に立っていたら、この人の脊を高くしたことだったろうが、生憎と大きく開いたコンパスのように斜にふんばっていた。胴體は短いばかりでなく、ほっそりとして、どう考えても一寸想像のつかないほど小さかった。裸になったらばったのように見えたにちがいない。頭は普通の大きさで、顔つきは立派で品があ

り、綺麗な眼をしていたから、發育の不十分な四肢に、首だけ別物を持って來て接木をしたようだった。この人は飾身具で無駄な金を費わなくても濟んだであろう。なぜなら、あの大きな假髪一つが、頭から足までを完全に包んでいたからである。

シモン氏は二通りの全く異った聲を持っていた。それは話の間にも絶えず入りまじり、最初は非常に快いが、やがては極めて不快な對照を呈した。一方は壯重な、よく通る聲で、敢て言えば頭から出る聲だった。もう一方は明るい、かん高い鋭い聲で、胴から出る聲だった。ひどく氣取って話す時とか、ひどく落著いて話す時とか、呼吸を計っている時とかには、いつも太い方の聲で口を利くことができた。ところが、少しでも急きこんだり、調子に力が入って來ると、忽ち音調は鍵のきしるような音になった。そしてなかなか元の低い調子が取り戻せないのである。

右に描いたのはわざわざ滑稽めかしたのでは少しもないが、このような風采をしているシモン氏は、なかなかの粋人であり、艶っぽい話をするのがお得意であって、身じまいを氣にすることと言ったら、おしゃれの域に達していた。自分の弱點を見せまいとして、朝のうちは、わざわざ寢床に入ったままで人に面接した。つまり、枕の上に立派な頭が乗っかっているのを見れば、誰だって立派なのは頭だけだと思うものはあるまいからである。このために、時々とんでもない事件を起すことがあった。アヌシーでは今日でもそうした事件を憶えていると私は思っている。

或る朝、シモン氏が寢床に入って、というより寢臺の上にいて、出訴人を待っていた。バラ色のリボンで作った大きな二つの飾總のついた白い上等なナイト・キャップを被っていた。一人の百姓がやって來て扉を叩く。女中は留守だった。裁判長殿は、また扉を叩くのを聞いて、「入りなさい」と叫ぶ。すると、その聲は少し強く出しすぎたために、例のかん高い聲になった。男は入って來る。そして、何處から女の聲がしたのかときょろきょろする。そして、寢床の中に婦人の用いるような角頭巾と蝶飾を認めたので、奥様にお詫の百萬遍を述べ立てながら出て行こうとする。シモン氏は腹を立てるが、腹を立てれば立てるほど聲はかん高くなるばかり。百姓は益々相手は女だと思いこみ、恥を搔かされたと考えたか

*1　フランスの作曲家（一六八二年―一七三八年）。

*2　スカロンという十七世紀の作家に「滑稽物語」という非常に人氣を博した作がある。この小説の中に、病人を乘せた四輪の擔架が宿屋の前で落ち合う話がある。

ら、シモン氏に向って罵り返し、お前は淫賣だろう、裁判長さんもこんな女をひっぱりこんで、世間樣へしめしのつかないことをなさる、と言った。裁判長殿はすっかりのぼせ上り、獲物と言っては溲瓶のほかはなかったので、それを取上げ、可哀そうに男の頭をめがけて投げつけようとした。そこへ丁度女中が歸って來たのである。

この小人さんは、肉體の方は自然から惠まれなかったが、そのうめ合せに精神の方は惠まれていた。生れつき豐な才知があるのに、これをなお飾ることに心を用いた。人の言うところでは、なかなか立派な司法官であったが、自分ではこの職を好んでいなかった。そこで、文學に沒頭して成功したのである。殊に、文學のたしなみがあるという輝かしい外觀、つまり人との交際・婦人との交渉なぞに快味を與える花ともいうべきものを身につけていた。色々な「逸話集」とか、それに類似のものに出ている細かい事項を一々よく諳記していた。それを面白可笑しく、またいかにも意味ありげに話して、詰らないことにも値打をつけるのが巧みだった。六十年も前に起ったことを、つい前の日の話のように話すのである。音樂の心得もあって、例の男聲で心持よく歌った。要するに、シモン氏は司法官にしては多くの立派な才藝を身につけていた人であった。アヌシーの貴婦人たちの御機嫌を取結ぶことを怠らないので、貴婦人仲間では流行っ子になっていて、まるで小猿のように引廻された。自分にはいろいろと艶福があるなぞと眞面目くさって言うものだから、貴婦人たちはそれを非常に面白がった。エパニイ夫人とかいう人が言ったのだが、あの人に女の人の膝のあたりに接吻ができたら、それこそこの上もない本望でしょうよ、と。

シモン氏はためになる本のことを知っていたし、それを好んで口にしたから、話は面白いというばかりでなく、大いに學問になった。後に、私が勉强を好むようになった折、この人の知識を渉獵し、非常に得るところがあった。その頃私はシャンベリーにいたが、そこからわざわざシモン氏に會いに行ったものである。氏は私の負けじ魂をほめ、大に激勵し、讀書について良い忠告をしてくれたから、そのために屢々利益を得た。不幸にも、あのひどく纖弱な肉體の中には甚だしく敏感な魂が宿っていた。數年後、何か不幸な事件があって、この人はそれを苦に病んで亡くなった。氣の毒な事だった。シモン氏は脊こそ低かったが、まことに善良な人だった。初めは笑われても、終りには愛される人だった。その生涯は私の一生とは餘り關係はないとはいうものの、この人から有益な教訓を受けたのであるから、その謝恩の意味からも、ここに短い追想を捧げてしかるべきものと思ったのである。

漸く自由になると、私はすぐにガレー孃の住んでいる街へ驅けつけた。誰かが出入りするのが見えるか、せめて何處かの窓ぐらい開くだろうと心に樂しんでいたのである。何事もない。猫一匹出て來なかった。私がそこにいた間じゅう、家はまるで住む人のないように閉ったままだった。街路は狹く、人通りもなく、人一人でも目についた。時々誰かが通りかかって、近所の家へ出たり入ったりした。私は自分の姿にひどく氣が咎めた。どうしてそんな所にいるのかが誰にも見すかされるような氣がした。そして、そう考えると居ても立ってもいられない心持になった。なぜなら、私はいつも自分の快樂よりも、愛する人の名譽と安息とを大切に思っていたからである。

とうとう、そんなイスパニヤの戀人を氣取るのにも倦き、その上ギターを持っているわけでもないから、今度はグラフェンリード孃へ手紙を書く決心をした。實はこの娘のお友達の方へ書きたかったのだが、思いきってそうすることができなかった。それに、グラフェンリード孃は私がガレー孃と知合いになるきっかけを作ってくれた人であり、私とは一層親しくしていたのだから、まずこの人からはじめるのが好都合だった。手紙を書いてしまうと、これをジロー孃のところへ持っていった。前に二人と別れる時、そういう手筈にきめておいたからである。この智慧を授けたのは娘たちの方だった。ジロー孃は室内裝飾業をやっていて、時々ガレー夫人の家で働くこともあったので、そこのお出入を許されていたのである。しかし、この文使いはあまり適任ではないようだった。けれども、これに異議を唱えたら、代りの人を申し出てはくれまいという心配があった。そればかりでなく、私はジローが人のために働くような女でないということも口には言えなかった。この女が、自分だってあの令孃たちと同じ女だ、なぞと自分で自惚れているかと思うと、屈辱を感じた。とにかくこんな取次ぎでも全然ないよりはいいと思った。だから、思いきって、それにたよったわけだった。

ジローは一言きいただけで察しをつけた。尤も、察しをつけるのも大して難かしいことではなかった。若い娘のところへ持って行く手紙が自分で口は利かなかったけれど、私の當惑した愚な樣子を見ただけで、こちらの胸中は相手に直ぐ分ったのである。こんなお使いはこの女にはあまり愉快な仕事でなかったことは誰にも察しられる。しかし、ジローはこの役目を引受け、しかも、忠實に實行してくれた。あくる朝、ジローのうちに驅けつけてみると、先方からの返事があった。私はその手紙を持って戸外へ行き、心ゆくまで讀み、心ゆくまで接吻しようと、どんなに氣をあせったことだろう。こんなことは言う必要もないことだが、言わなくてならないのは、ジローの採った決心である。その決心には、こちらの

豫期していなかったほどの細かい心づかいと節度があった。つまり、年齢は三十七歳、兎のような眼、薄汚れた鼻、かん高い聲、黑い肌をしているこの女には、優美さに滿ち、花の盛りの二人の若い令孃には到底太刀打のできないことを知るだけの頭はあった。そして、この二人の令孃を裏切ることも、その役に立つことも好まなかったから、二人のために私を取り持つぐらいなら、むしろ何處かへ私をやってしまった方がいいと思ったのであった。

一七三二年。

メルスレは女主人からの消息が全然ないので、しばらく前から、フリブールへ歸ろうかと思っていた。それをはつきり決心させたのがジローだった。それだけではない。更に進んで、お父さんの家まで誰かに連れて行って貰った方がいいと智慧をつけて、私をすすめたのである。メルスレもやはり私を憎からず思っていたから、この思いつきを實行に移すのは大變樂しみだと考えた。二人はその日のうちに、この事をもうきまったこととのように私に話した。私はこの處置に別に不服なところもなかったから、承諾した。旅行もせいぜい一週間ぐらいのことと考えていたのである。そうは考えていなかったジローは萬事の手筈をきめた。私は自分の財制狀態を打明けなければならなかった。それは向うで心得てくれた。メルスレが私の費用を受持つことになった。そして一方の出費を他方で補うために、こちらから賴んで、小荷物は先へ送り、二人はぶらぶら徒歩で行くことにきめて貰った。

私はこんなに多くの娘たちに自分を戀させて、何とも氣が咎める。しかし、このような戀愛からは、自慢するほどの旨い汁も吸わなかったのだから、懸念なしに本當のことが言えると思うのである。ジローよりも年が若く、すれていないメルスレは、ジローのようにあんなにひどく私の機嫌を取ることはしなかったが、それでも、私の口調や訛音を眞似たり、こちらの言葉を鸚鵡返しに言ったり、こちらが向うにしてやるべき世話を向うから私にしてくれたりした。そして、ごく臆病なメルスレは、いつも二人が同じ部屋に寢られるようにひどく氣を遣った。二十歳の青年と二十五歳の娘との二人旅が、それだけで濟むというのは、滅多にないことである。

ところが、この時はそれで濟んだ。私はひどく初心だったから、メルスレは嫌いではなかったけれど、その旅行中ずっと、色っぽい誘惑は固よりのこと、それに關聯する考えが頭に浮んだことは一度もなかった。そして、たとえそういう考

えが浮んでも、私はそれをどうして實行していいか分らないほどの阿呆だった。若い娘と男が、どのようにして同衾する に至るものか、その理窟が想像できなかった。そういう恐ろしい手筈を準備するには、何百年もの歳月が必要なように思っていた。氣の毒に、若しメルスレが私の旅費を拂ってその代りに何か代償を貰うつもりでいたのなら、それは大きな當て外れだったわけである。こうして、二人は、アヌシーを出發した時と全く同じに、フリブールへ著いたのであった。

ジュネーヴを通る時には、誰にも會いに行かなかったが、橋の上へ來ると氣分が惡くなりそうになった。私はこの幸福な都市の城壁を眺めるたびに、また、その中に入るたびに、過度の感動から來る一種の放心を覺えないことはなかった。自由の高貴な心象(イマージュ)が心を高めると同時に、平等・團結・品性の美なぞの心象(イマージュ)もまた涙のこぼれるほど私を感激させ、一切のこれらの幸福を失ったことに強い悔恨を感じさせるのだった。何という間違いをしていたものだろう。だが、何という自然な間違いだったろう。私はそうしたものを自分の心の中に持っていたればこそ、自分の祖國にそうしたものがあると考えていたのであった。

ニョンを通らなくてはならなかつた。なつかしい父に會わずに通りすぎてしまえるだろうか。若しそんなことができたら、私は悔恨のために死んでしまったことだろう。私はメルスレを旅宿へ殘して、思いきって父に會いに行った。あゝ、父を恐れていたとは何という間違いだったろう、私が著くと、父の心はみちみちた父性の愛にうち展いた。[註30] 二人は抱き合って、どんなに涙を流したことだったろう。父は初め私が歸って來たのだと思った。私は今までの身の上を語り、自分の決心を告げた。父は私の決心に輕く反對した。これからどんな危い目に遭うかも知れないと說き、馬鹿なことは早く切上げた方が利口だと言った。しかし、無理に私を引きとめようとする氣はまるでなかった。そして、それには父として無理もなかった點があったと思っている。私を引きもどすために、父として爲し得るだけのことを盡さなかったことは確かである。それは、一たん踏み出した以上、とても私が後へは引かないと判斷したためか、或いは、私ぐらいの年頃の者をどう處置していいか分らず、當惑してしまったのか、どちらか私には分明しない。後になって知ったことだが、父は私の道連の娘について、事實とは非常にかけちがった、甚だ不當な、しかしまあ無理からぬ考えを抱いていたのであった。繼母は善い人で、少しばかりわざとらしく優しさを衒う人だったが、夕食に私を引きとめたいような風をして見せた。私は留まらなかったが、歸途にはもう少し長く足をとめるつもりにしていると言った。そして、船便で送らせておいて少し荷厄

介になっていた自分の小荷物を二人に預けた。翌朝、早く私は出發した。父に會ったこと、思いきって子としての義務を果したことを私はうれしく思った。

二人は無事にフリブールへ著いた。旅の終り頃には、メルスレの熱も少しさめて來た。著いてしまうと、もう冷淡な樣子しか見せなくなった。それに、メルスレの父親は、大して豐な暮し向きでもなかったので、私を大して歡待もしなかった。私は旅籠屋へ泊りに行った。翌日、メルスレのところを訪ねて行った。晝食に招んでくれたので、私は承知した。一同は涙もこぼさずに別れた。私は夕方になって自分の安宿に戻った。そして、到著した日の翌々日、再び出發した。何處へ行くというあてもなかった。

この話もまた、幸福な日々を送るために必要なだけのものを神から與えられた私の生涯の中の一つの場合であった。メルスレは非常に氣立てのいい娘で、華やかでもなく美しくもなく、と言って醜くもなかった。おっとりとして、すこぶる分別に富み、たまにはむかっ腹を立てることもあったが、それもせいぜい泣くぐらいのことで、あとで大荒れになるようなことは決してなかった。メルスレは實際に私を好いていた。私はわけなくこの娘と結婚できたろう。そして、父親の職を繼ぐこともできたであろう。[*1] 私の音樂趣味はその職を好きにならせたであろう。私は、フリブールというあまり美しくはないが、善良な人々の澤山いる小都市に身を落著けたであろう。そうなれば、大きい歡樂は疑いもなく失ってしまうであろうが、息を引取るまで平和のうちに生活できたであろう。そして、この取引に躊躇すべきでなかったことを、私は誰よりもよく知っている筈である。

私はニョンへではなく ローザンヌへ引返した。ローザンヌから最も廣々と見渡せるあの美しい湖水を心ゆくまで眺めたいと思ったのである。私が心の中に色々なことを思いきめる動機の大部分は、それほどしっかりしたものではなかった。遠い思慮などというものは、私を動かすほど十分な力を滅多に持つものではなかった。未來のことはどうなるか分らないから、長い努力を要する計畫はいつも僞りの餌のように思われた。希望を抱いて重荷にならなければ、私とて人なみに希望に耽溺する。しかし、長い間辛抱していなければならないのなら、もう厭になる。手の屆くところにある快樂なら、どんな小さいものでも、天國の快樂よりも、心を強く惹く。尤も、必ず苦痛の伴う快樂はこの限りではない。そんなものは私の心を惹かない。なぜなら、私は純粹な愉樂しか好まないし、必ず後悔することが分っていれば、純粹な愉樂な

ぞ有り得ないからである。

私は何處でもかまわない、何處かに行き著く必要があった。しかも、近ければ近いほどよかった。というのは、道に迷って夕方ムードン[*2]へ著いた私は、そこで僅かに殘った金のうち十クロイツェルを殘して全部費ってしまい、そのあくる日は、その十クロイツェルも晝食代に消えてなくなっていたからである。そして、その日の夕方は、ローザンヌの近くの或る寒村に著き、或る旅籠屋に入ったが、その時は宿錢は一文もなく、これから先どうなることか自分にも分らなかった。私はひどく空腹だった。それでも、いかにも確りした樣子をして、支拂には事を缺かないと言わんばかりに、夕食を註文した。何も考えずに寢床へ入って、安らかに眠った。そして、翌朝、朝飯を濟ませ、亭主に計算して貰ってから、七バッツにのぼる勘定の代りに、自分の胴着を抵當に置いて行こうとした。親切な亭主はそれを斷わって、自分は神樣のお惠みで今日まで人樣の身の皮を剝ぐようなことはしなかった。たった七バッツをその手初めにはしたくない。胴着はとっておきなさい。拂える時に拂って貰えればそれでいい、と言った。私はこの厚意に心を打たれた。しかし、その時は、當然そうあるべきよりも、また、後に思いだして實際に心を打たれたよりも、感銘のしかたが少かった。その後直ぐに、或る確かな人に託して、お禮と共にその金を返却した。しかし、十五年後に、私がイタリヤに歸った時、再びローザンヌを通過したが、まことに殘念なことには、あの旅籠屋の名も亭主の名も忘れてしまっていた。憶えていたら、必ず會いに行っただろう。そして、あの善行を亭主に思い出させ、その善行が決して的はずれなものでなかったことを證明して見せることができたら、私は本當のよろこびを味わえたであろう。あの立派な男の單純で地味な慈悲は、それ以上に重大かも知れないがもっと虛榮の心から行われた奉仕に比べれば、遙かに感謝に値するものと私には思われたのである。

ローザンヌに近づくにつれて、自分の陷っている情ない有樣を思い、何とかしてこのみじめな樣子を繼母に見せずに急場を切抜けたいものだと、その方法を思いめぐらした。こうして、徒歩で遍歷している自分の姿を、アヌシーへ著いた時の私の友ヴァンテュールの姿と比較してみた。そうしてみると、私の心はにわかに元氣づき、自分にあの男ほどの才氣や才能がないとは考えず、知りもしない音樂を教え、行ったこともないパリの人間だと言って、ローザンヌで小ヴァンテ

*1 メルスレの父はオルガン奏者であった。

*2 フリブールとローザンヌの中間にある町。

ュールになってやろうと思いついた。このような立派な計畫は立てたものの、ここには私に仕事のできるような教會音樂塾もなく、また、自分としてはその道の專門家の間にもぐりこむ氣もなかったので、まず手初めに、安くて居心地のいい宿でもないものかと訊いてみた。すると、ペロテという男の家で下宿をするということを教わった。この男は世界中で一番親切な人間だと自負していたから、私を大いに優遇した。私は豫め考えておいた一寸した法螺を吹いた。ペロテは私のことを世間に言いふらして、お弟子を作るように骨を折ってみようと約束した。お金は儲かった時だけ請求しよう、と言った。下宿料は五エキューだった。割合に安いが、私には大變だった。ペロテは初めのうちは半賄にしたらどうかと奬めた。晝はスープだけで他に何もないが、夕食には御馳走があった。私はそれを承諾した。この親切者のペロテは本當に心の底から私にこのような色々な便宜を計ってくれ、ためになることなら何一つ厭がらなかった。

私の若い頃にはこれほど多くの善人があったのに、年を取ってからは、なぜこんなに少くなってしまったのであろうか。善人の筋が絶えてしまったのだろうか。そうではない。今日、私が善人を求める必要のある階級は、當時私が善人を見出したと同じ階級ではないのである。一般民衆のうちには、大げさな激情というようなものは時をおいて稀に物を言うのであって、自然の感情の方がはるかに屢々耳に訴える。ところが、それより上の階級にあっては、自然の感情は完全に壓殺され、感情の假面の下に物を言うのは、利己心若くは虚榮心にすぎないのである。

ローザンヌから父のところへ手紙を出すと、父は私の小荷物を送り屆け、有難い訓戒をしてくれた。この訓戒をもっとよく役立てるべきであった。既に前にも述べたように、私は時々得體の知れない逆上に取りつかれて、そういう時は、私がもう私でなくなってしまうのである。次に述べるのもまた最も著しい實例の一である。當時の私の頭がどの程度に狂っていたか、どの程度に私が言わばヴァンテュール化されていたかを理解するためには、どんなに多くの突飛な事を次から次へと重ねたかを見るだけで十分である。私はアリア一つ讀めもしないで歌の先生になった。讀めないというのは、ル・メートルと共にすごした六カ月は私のためにはなったけれど、それで十分ではなかったからである。そればかりでなく、私は先生について學んだ。これが何よりも悪いことだった。ジュネーヴ生れのパリ人、新教國の中の舊教徒であった私は、信教や祖國と同じように名前も變更しなければならないと思った。私はいつもできるだけ自分の偉大な模範に近づいた。模範の名はヴアンテュール・ド・ヴィルヌーヴといった。そこで私はRousseau（ルソオ）の綴りを變えてVaussore（ヴォソール）とし、ヴ

ォソール・ド・ヴィルヌーヴと稱した。ヴァンテュールは口にこそ出さなかったが、作曲ができた。私は、作曲はできなかったが、できるように誰にも吹聽したし、どんな詰らない俗曲の譜も取ることができないのに、作曲家氣取りでいた。そればかりではない。法律の教授で、音樂が好きで自宅でよく音樂會を開いていたトレートラン氏という人に紹介された私は、自分の腕前の見本を見せてやろうと思って、氏の音樂會のために一曲の作曲にとりかかった。この圖々しさは、作曲のことは何もかも心得ているという顏であった。この立派な仕事のために、私は辛抱强くも十五日ばかり勉强を續け、淸書したり、音部を分けたり、またまるで和聲の大傑作でもあるかのように自信たっぷりに音部の割つけをやったりした。最後に、とても人には信じられないだろうが、まったくの話であるが、この崇高な作品に尤もらしい勿體をつけようと、その最後に、當時流行していた或る美しいミニュエットの曲をくっつけた。このミニュネットは誰でもまだ憶えていると思うが、當時有名だった次のような歌詞に合して作られていたものだった。

Quel caprice!　（何て浮氣な）
Quelle injustice!　（何て非道な）
Quoi ! ta Clarice　（あのクラリスが）
Trahirait tes feux ! etc.（お前の情を裏切るとは）

ヴァンテュールはこの曲を他の卑猥な歌詞で歌った低音部と一緒に私に教えたことがあって、私はその歌詞をたよりに、この曲を憶えていた。だから、私は自分の作曲の最後に、このミニュエットとその低音部とを加え、歌詞の方は省略した。しかも、まるで月の世界の人間を相手に口でも利くように、この曲は自分が作ったのだときっぱり言い切ったものである。

私の曲を演奏するために人々が集る。私はその一人一人に、速度の種類や、演奏に際しての氣分や、各音部の反覆法などを說明する。大變な忙しさであった。一同は五六分間のあいだ調子を合す。この五六分は私にとっては五六世紀にも思われるのであった。いよいよ、準備がととのった。私は綺麗な卷紙をもち、立派な譜見臺の上を五六回叩いて、「用意」の合圖をする。一同は默る。私はいかにも嚴かに拍子を取りはじめる。演奏がはじまる……いや、フランス歌劇始まって以來、誰もこんな調子外れの音樂を耳にしたものはなかったろう。私の謂うところの腕前について、人々は何と考えていたかは

知らないが、皆が豫期していたらしく思われたよりも一層その實際は悪かった。樂師たちは笑いで息が詰まりそうだった。聽衆は眼を大きく見開き、耳の方は塞いでしまいたい心持だったろう。だが、耳は塞ぐわけにはいかなかった。意地の悪い樂師たちは、面白半分に、つんぼの鼓膜も張り裂けよとばかり鳴らし立てた。私は大滴の汗をぽたぽた流したが、それでも逃げだすわけにも立往生をするわけにもいかないので、辛抱强くそのまま續けた。その上、情ないことには、近くの聽衆の中で互の耳もとに、というより私の耳もとに、囁く聲が聞えて來るのである。「これは堪らん」とか、「何という氣違い音樂だ」とか「何てひどい騒ぎだ」とか。哀れなジャン・ジャックよ、このむごたらしい瞬間に、お前は、他日フランス國王とその侍臣のすべてを前にして自作の音樂が驚異と歡賞の囁を呼び起すことを、また、お前の周圍のあらゆる棧敷席の最も美しい婦人たちが「何とうっとりする音でしょう！　何とすばらしい音樂でしょう！　あの歌はどれもみな胸の奥に響いて來る！」と小聲で言い合うことを、その時は夢にも豫期しなかったのであった。[*1]

ところが、一同の人々を上機嫌にさせたものは例のミニュエットであった。その幾節かを演奏しはじめると、忽ち方々から爆笑がわき上るのが聞えた。歌曲についての私の大した趣味をみんなが慶び、このミニュエットは間違いなく私の評判を高めるだろう、私の歌は何處ででも歌われるだけの價値がある、とみんなで保證した。その時の私の苦悶をここに述べたり、私が當然その苦悶に値したことをここに自白したりする必要はないであろう。

翌日、その時の樂師の一人であったリュトールというのが訪ねて來た。人の好い男とて、私の成功を祝福するようなことはしなかった。私はわれながら馬鹿なことをやったと深く感じ、恥かしさ、後悔、自分の落ちこんだ絶望的な立場にさいなまれ、自分の心をひどい苦しみの中に押しこめておくこともできなかったので、リュトールに心を打明けないではいられなかった。そして、思いきり泣いた。自分の無知を相手に告白するだけでは滿足できず、必ず祕密を守ってくれるように頼んでおいてから、何もかも言ってしまった。リュトールは祕密を守ると約束した。そして、その守り方は誰にも察しられる通りの守り方だった。その日の夕方には、もう私の正體がローザンヌじゅうに知られてしまった。しかも、不思議なことには、誰一人としてそれを知っているそぶりを示さなかった。あの善良なペロテですらそうだった。ペロテは、こんなことがあっても、私を下宿させて食わせることを厭がらなかった。

私はそのまま日を送ったが、しかし、實に悲しい生活だった。あんな初舞臺のあとでは、ローザンヌの滯在も大して愉

快なものではなくなった。弟子もあまり詰めかけなかった。女弟子は一人もなく、市の者は誰も來なかった。弟子は全部で二三人のみっともないトイチ人だけで、私の無知と好一對の阿呆ばかりであった。この連中は私を死ぬほど退屈がらせ、私の手にかかっては、碌なヘボ音樂家にもなれなかった。出稽古に行く家がたった一軒あったが、そこの意地悪娘は私が一つも讀めないような樂譜を澤山見せてから、こうして歌うのだと言わんばかりに、この先生の前でそれを歌って聞かせるという根性の悪いことをやった。私は一寸した曲でも、初めて見たのではなかなか讀みきれない程度だった。だから前に話したあの輝かしい音樂會ででも、自分で作曲し、自分が現に見ているその曲が旨く演奏されているかどうかを知るために、その演奏に一寸の間でもついて行くことができなかった。

多くの屈辱の中にあって、二人の美しい女友達から時々受取る消息の中に、非常に甘い慰めを得た。私はいつも異性のうちに大きい慰藉の力を見出していた。優しい人が同情していてくれると感ずることほど今の不人氣の中の自分の悲しみを和らげてくれるものはなかった。しかし、この文通も間もなく止んでしまって、二度と繕が戻らなかった。それも、こちらが悪かった。住所が變っても、その宛先を先方に通知することを怠ったのである。そして、絶えず自分のことだけしか考えていなければならない境遇にあったから、やがて二人のことも全く忘れてしまった。

なつかしいママさんのことも、永い間口にしなかったが、ママさんのことも忘れてしまったのだろう、と考えたら、それは大變な間違いである。私はママさんのことを考えたり、ママさんにまた會いたいと思ったりすることを、片時も忘れたことはなかった。それも自分の衣食の必要からばかりでなく、心の要求からであった。ママさんへの愛著が、いかに强く、いかに情愛の深いものとは言っても、そのために他の女性を愛する妨げとはならなかった。尤も、その愛し方は同じではなかった。あらゆる女性は等しくその魅力によって私の愛情をかち得たが、ママさん以外の女性については、私の愛情はその魅力だけに繫っているのであって、魅力が失われれば愛情もなくなってしまった。ところが、ママさんの場合は、どんなにお婆さんになっても、醜くなっても、そのために私の愛情が薄くなることはなかった。私の心は初めママさんの美しさだけに對して拂っていた敬意を、そのままそっくりママさんの人となりに移していた。そしてママさんがどんな變化を受けようと、それが常にママさんである限りは、私の感情は變化することがなかった。私はママさんに恩義のあ

*1　ルソオの作「村の占者」は二十年後の一七五二年にフォンテーヌブローに上演され大好評を博した。第八卷に詳しい。

ることはよく知っている。しかし、實を言うと、そのことは考えていなかった。私のために、どんなことをしてくれても、してくれなくても、結局それは同じことだったろう。義理とか利害とか方便とかからママさんを愛していたのではない。ママさんを愛するように生れついて來たのだから、愛していたのである。誰かほかの女性と戀をしたような場合には、正直なところ氣分が外れて、ママさんのことも前ほど度々は考えなくなった。しかし、ママさんのことを頭に浮べればいつも同じように樂しくなつた。繼をしているときもいない時も、ママさんのことで頭が一杯になると、ママさんと離れていればこの世に決して自分にとっての眞の幸福はあり得ないと感ずるのであった。

こんなに永い間、ママさんからの消息が全く得られなかったけれど、自分はもうあの人を全く失ってしまったのだ、とも、自分は忘れられてしまったのだ、とも思わなかった。私はこう思った。「自分がぶらぶらしていることが今にママさんに知れれば、何とかたよりをくれるだろう。また會える。きっと會える」と。それまでは、ママさんの國に住み、ママさんの通った街の中を、ママさんの昔住んだ家々の前を通ることは、私にとっては一つの樂しみであった。それも、しかし、みな當推量でやったことだった。というのは、ママさんのことを人に訊いたり、よほどの必要のない限りこの人の名を口にしたりすることが、私にはなかなかできないというのが、私の愚な奇癖の一つであったからである。ママさんの名を口に出すと、この人から受ける自分の氣持をみんなさらけ出してしまう、自分の口が心の祕密をあばいてしまう、ママさんに迷惑をかける、そんな氣がしたのであった。今から考えてみると誰かがママさんのことを悪く言うのではあるまいかというような恐れも、そこに混っていた氣さえする。ママさんの世渡りの仕方については、ひどい評判が立っていたし、その品行のこともいくらか噂にのぼっていたからである。自分の聞きたいと思うことは世間で言ってくれないだろうと恐れていたから、それならむしろ何も言って貰わない方がよかったのである。

弟子がどん詰めかけるわけでもなし、また、ママさんの故郷の町はローザンヌから四里ほどしか離れていなかったので、二三日ほどそこへ遠足に出かけた。その二三日の間は、この上もなく甘美な感激が私を離れなかった。ジュネーヴ湖と、その湖畔の美しい眺望は、いつも私の眼に說明のできない一種特別な魅惑を與えた。それは、ただ風景の美しさのみに基くものでなく、私を沁々と感動させるもっと心を惹く何ものかから來る魅惑だった。ヴォー州に身を近づけるたびに、私はいつも複雜な感銘を受ける。それは、その土地に生を享けたヴアラン夫人の思い出、その土地に生活した父の思

い出、その土地で初めて私の心を目ざませたヴュルソン孃の思い出、少年時代にしたその土地の樂しい旅行の思い出なぞ、それから、恐らくそのようなものよりもさらに祕かなまた強い何か他の原因なぞから成った感銘である。[*1] 私のもとを逃げて行くが、しかしそのために私が生れて來たあの甘い幸福な生活。それを求める烈しい慾望が私の空想を燃え立たせる時、それをいつも落著かせるのは、美しい田野にかこまれた、あの湖水に近い、ヴォー州である。私にはあの湖畔の果樹園が絶對に必要なのであって、他の果樹園では駄目である。信頼のできる友、愛すべき女性、一頭の牝牛、一艘のボート、それだけあればよい。これだけのものが得られた時でなければ、私はこの地上で完全な幸福を享けることにはならない。このような架空の幸福を求める目的だけで、その土地に何度か出かけて行った自分の單純さがおかしい位である。そこに行ってみて、自分の求めていたものとは全く異る性質を持った住民、殊に女たちを見出して、私はいつも意外な氣がした。どれほどそれが不調和に思われたことだろう。この土地と、その到る處に見られる住民とは、相互のために作られたものとは決して思われなかった。

このヴヴェーへの旅行中、私は美しい湖畔に沿いながら、この上もない甘い哀愁にひたった。心は熱に浮かされたように、數知れぬ至福を求めて躍った。私は小兒のように涙ぐみ、歎息し、泣いた。心ゆくまで泣こうと足をとどめ、大きい岩に腰を下ろし、涙が水面に落ちるのを眺めて心を樂しませたことも何度だったろう。

ヴヴェーに行って、ラ・クレに泊った。二日ほどは誰にも逢わず、そこに留っていたが、その間に私はこの町に一種の愛情を覺えるようになった。この愛情は後の私のあらゆる旅行についてまわり、終には私の小說の主人公たちをこの町に住ませるようにしたのであった。趣味もあり感じ易くもある人々に向って、私はこう言いたいのである。「ヴヴェーに行って、その地方を見物して、景色をよく見て、湖上に遊んでごらんなさい。そうして、自然がこの美しい土地をジュリーのような、クレールのような、サン・プルーのような人々のために作ったのでないかどうか考えてみて下さい。しかし、そういう人々をそこに求めてはいけません[*2]よ」と。私の話へ戻ろう。

私はカトリック教徒だったし、またカトリック教徒を氣取ってもいたから、何の不思議も懸念もなく自分の信奉する宗

*1 これらの思い出はすべて「新エロイーズ」の中に見出される。
*2 「新エロイーズ」の主人公たちのことを言う。第十一卷參照。

教に從っていた。日曜日は、天氣さえよければ、ローザンヌから二里ばかりのアサンヘミサに行った。いつも大抵は他のカトリック教徒たち、その中でも名は忘れたがパリっ子の或る刺繍屋さんと一緒に、この遠出をやった。この刺繍屋は私のようなパリっ子ではなく、本當のパリっ子、生え抜きのパリっ子であって、しかも、シャンパァニュ生れの人間のように人の好い男だった。生れ故郷を非常に愛していたから、私が同郷の出身だということを疑おうとしなかった。疑ってしまえば一緒に郷里の話をする機會を失うことになると恐れていたからである。裁判所次長のクルーザ氏のところにも、パリ生れの園丁がいたが、この男はあまり人好きのする方ではなく、郷里の名譽は、人がその出身でもない癖にその出身らしい顔をすることによって大いに傷けられていると、考えていた。そして、必ず馬脚を見露わしてやるぞといわんばかりの樣子で、色々なことを問いかけ、そのあとで意地悪そうににやにや笑った。或る時、マルシェ・ヌフの名物は何だ、と訊いて來た。お察しの通り、私はすっかり閉口した。今なら、二十年もパリに住んでいるのだから、市のことは何でも知っている筈である。しかし、今日でも、そんな質問をされたら、返答をするのに、その時に劣らない困惑を感ずるに違いないし、その困惑を見て、私がパリなんかには一度も行ったことがないのだと人は結論するかも知れない。このように、人というものは、眞實に直面した時でも、何と過った論據に基づきがちのものであろう。

ローザンヌにどれぐらい留っていたかは正確に言うことができない。この町については、度々頭に浮ぶほどな思い出を得ていないのである。ただ、憶えているのは、ローザンヌでは生活の糧が得られないのでヌシャテルへ行ったこと、その地で冬を過ごした[*1]ことだけである。ヌシャテルでは前よりも巧く行った。弟子もできたし、例の善良なペロテ君に借りを返せるだけのものも手に入った。ペロテ君にはまだ相當の債務があったのに、向うからは正直にも私の小荷物を送り屆けてくれたりした。

音樂を教えながら、知らず識らずのうちに自分の勉強になった。生活はかなり樂しかった。分別のある人だったら、これで十分滿足していただろうと思う。ところが、落著きのない私の心は他のものを私に求めた。日曜日とか、そのほか身體の空いている日には、近郊の野や森に行き、例のようにほっつき歩き、夢想し、歎息した。そして、一度町を出てしまうと、夕方でないと決して町へは戻らなかった。或る日、ブードリー[*2]へ行った時、午食のためにある旅籠屋へ入った。見ると、髯を長く生やし、ギリシャ風の紫色の服に毛皮の帽子を被った男がいて、その身なりと言い風采と言い、いかにも上

品に見えた。その人は、ほとんど意味が聞きとれないが、どちらかといえばイタリヤ語に一番近いような方言を使っていたから、言うことがよく相手に通じなかった。しかし、私にはその人の言葉がほとんど全部分ったし、また、分ったのは私だけであった。亭主や土地の人には手眞似で意志を通じるばかりだった。私は二こと三ことイタリヤ語で話しかけてみた。すると、向うは完全に意味を了解した。その人は立ち上って、いかにもうれしくてたまらぬというように私を抱擁した。二人はすぐに心安くなって、この時以後私はその人の通辯となったわけである。その人の食事は上等だったが、私のは普通以下であった。一緒に食事をしないかと誘われたので、私はあまり遠慮しなかった。酒を飲みかわし、互に舌足らずのお喋りをしているうちに、すっかり懇意になり、食事の濟んだ頃には、もう二人とも互に離れられないほどの仲になっていた。話によると、その人はギリシャ教の主教、エルサレムの僧院長で、聖墓再建のためにヨーロッパじゅうに喜捨を求めて歩く任務を帶びているとのことであった。ロシヤ女皇と皇帝の立派な特許狀を見せてくれたし、ほかにも澤山の各國主權者の特免證を所持していた。今までに集めた喜捨だけで相當に滿足していたが、ドイツ語・ラテン語・フランス語が全然分らないので、ドイツでは大變な苦勞をしたし、ギリシャ語・トルコ語・フランク訛語だけが使えるだけだったから、そのために今入りこんだ地方でも大した成果が擧げられなかった。そこで、私に向って、自分の書記兼通辯になって隨行してくれないかと言いだした。私は紫色の服を近頃買ったばかりだったし、それはこの新しい地位にそれほど不似合でもなかったが、それでも、いかにも私の身なりは貧しかったので、相手は私を抱きこむのは難かしくないと思った。そして、その見込は外れなかった。忽ち相談は纏まった。私の方からは何も要求しなかったが、先方は色々なことを約束した。保證も擔保も馴染もあったわけではないが、私は相手の指圖に身を委せ、その翌日は、さつそくエルサレムへ向けて旅立ったのである。

二人はまずフリブール州を廻ったが、ここでは大したこともなかった。主教という嚴めしい肩書の手前、乞食の眞似をしたり、個人に喜捨を求めたりすることはできなかった。われわれは上院に主教の委任狀を提出して、小額の寄附金を得た。フリブール州からベルヌへ行った。當時は高等旅館だったフォーコンという宿へ泊った。ここには上流の客がいた。

*1 一七三〇年から翌年にかけての冬を指す。ヌシャテルはローザンヌの北方五〇キロ、同名の湖水の北端にある町である。

*2 ヌシャテルより湖水沿いに十キロほど南西にある小さい町。

食堂の會食者も多く、食事も上等だった。私は久しく粗食に甘んじていたから、どうしても榮養を恢復しなければならなかった。機會到來とばかり、さつそくこれを利用した。僧院長猊下は上流社會の人であり、御馳走好きで、快活で、話の通じる人に取ってはなかなかの話上手でもあり、相當の知識にも缺けるところがなく、そのギリシャ的學殖を如才なく振りまわした。或る日、食後の胡桃を割ろうとして指をひどく切った。そして、血がたらたらと流れ出す指を一座の人々に見せて笑いながら、Mirate, signori; questo è sangue pelasgo[*1] と、言った。

ベルヌでは私の役目は主教にとって無益ではなく、自分で心配していたほどへまなこともやらなかった。私は自分のために人々とは度々長い交渉が必要だったし、主教の資格についての調査も一日の仕事ではなかった。政府の主だった人々とは度々長い交渉が必要だったし、主教の資格についての調査も一日の仕事ではなかった。政府の主だった人々とは度々長い交渉が必要だったし、主教の資格についての調査も一日の仕事ではなかった。漸くのことで一切が片附き、主教は上院の面接を許可された。私は通辯として主教に從って上院に入ると、話すように言われた。私はそんなことは全然豫期もしていなかった。すでに議員たちとは長いこと交渉をしたのであるから、その後でまた何にも話さなかったように一同の人々に一席辯じなければならないということは、全く頭になかったのである。私のあわてたことを御想像ねがいたい。私のような恥がしがりやに取っては、公衆の面前、それもベルヌの上院なぞというところで喋る、しかも、一分間も準備をする時間がなくまったく即席に喋るなぞということは、それこそ呆然自失すべきことだった。ところが私は少しも怯まなかった。まず僧院長の使命を簡單明瞭に陳述し、僧院長がわざわざ遍歴して醵金を求めたに對し、應分の喜捨をした諸國の王侯たちの信仰心を賞揚した。それから、競爭心を起させて上院の諸公の信仰心をも刺戟しながら、諸公の平素の慈悲心に期待するところが少くない旨を述べ、續いて、この善業は宗派の別なくあらゆるキリスト教徒にとっては等しく善業の一であることを極力論證しながら、最後に、これに進んで贊助する人々に對し神の恩寵を約束して言葉を結んだ。この演說が成果を收めたとは言わないけれど、しかし、大いに傾聽されたことには間違いはなく、また、接見が終って出る時に、僧院長がひどく過分な供物を受け、加えて隨行の書記の才知についても多くの讚辭を受けたことも確かである。私としてはこの讚辭を通辯するまことに愉快な役目があったわけだが、それを言葉通りに僧院長へ傳えることは敢てしなかった。私が公に、しかも主權者の前で喋ったのは一生を通じてこの時だけだった。そして、また恐らく、大膽に上手に喋ったのもこの時だけと思う。同じ人間の氣質の中で、何という相違であろう。三年ほど前、舊友ロガン氏を

イヴェルダンへ訪ねて行った折[*2]、前にその町の圖書館へ寄附した幾册かの書籍の禮に、町の委員が私のところへ來たことがあった。一體スキス人はなかなかの冗辯家である。私は委員諸君の長談議に惱まされた。そして、これに返答しなければならないと思った。ところが、ひどく返事に窮し、頭はしどろもどろになったために、とうとう立往生をしてしまって、人から笑われたのであった。生れつきはひどく臆病ではあるが、しかし、若い時分の私は時にはひどく大膽になることがあった。年を取ってからは、決してそんなことがなくなった。世間を見れば見るほど、その調子に自分を合わして行くことが益々できなくなって來たのである。

二人はベルヌを發ってソルール[*3]へ行った。僧院長の計畫は、ドイツへ引返し、ハンガリヤ又はポーランドを經て歸國するというのであって、ずいぶん長い道中をすることになっていた。しかし、その長い道中のあいだ、財布は減るより增える方が多かったから、迂回することは敢て恐れなかったのである。私としては、徒歩でも乘馬でも、どちらも樂しみだったから、一生涯じゅうこのように旅行していることが何よりであった。しかし、そんなに遠方までは行けない運命になっていた。

ソルールへ著いて最初にやったことは、フランス大使へ挨拶に行くことだった。ところが、わが主教猊下に取っては不仕合せにも、この大使はボナック侯爵[*4]であって、かつてトルコ王宮のフランスの使節だったことがあったから、聖墓に關することは何事も知り拔いている筈だった。僧院長は十五分ばかり接見された。大使はフランク訛語が分るし、イタリヤ語は少くも私よりはよく話せるから、私は同席を許されなかった。やがて、わがギリシャ人が出て來たから、私はそれに隨行しようと思ったら、呼びとめられた。今度は私の番だったのである。私はパリの生れと觸れこんでいたから、パリ人として大使閣下の管轄下にあったわけである。閣下は私の身分を尋ね、眞實を言うようにと誡した。私は眞實を言うと誓約して、格別に接見されるように願った。これは聽きとどけられた。大使は私を私室に連れて行き、扉をかたく閉めた。

*1 「どうぞ、みなさん。これがペラスゴ人の血ですよ」の意。ペラスゴ人というのは、紀元前三千年頃にギリシャ地方に侵入した民族と傳えられ、ギリシャ人の祖とされる。

*2 この條については第十一卷參照。

*3 ベルヌの北方三十キロ、ソルール州の首都。

*4 ジャン・ルイ・デュソン・ボナック侯爵はスエーデン、コンスタンチノープル等の大使を歷任し、後一七八八年パリで歿した人である。

私はそこで大使の足元に身を投げ、誓約を果した。何も誓約していなかったとしても、やはり言うだけのことは言ったと思う。なぜなら、私はいつでも心の中を相手にさらけ出さずにいられない性質だから、ともすれば心に思うことが口に出るのである。そして、自分のことは前に樂師のリュトールに洗いざらい打明けたこともあったし、今さらボナック侯爵に隱し立てする氣もなかった。侯爵は私の手短な身の上話とそれを物語った率直な心を見て大いに滿足し、手を取って夫人の部屋へ連れて行った。そして、私の身の上を簡單に話しながら、夫人に引合わせてくれた。ボナック夫人は私を親切にもてなし、あのギリシャ人の坊さんなぞと一緒に行ってはいけません、と言った。こうして、私は身の振り方が分るまでは館内に留まるようにきめられた。しかし、僧院長には愛著を抱いていたので、一度お別れを言いに行きたいと思った。これは許されなかった。僧院長には使をやって私が抑留されたことを知らせた。すると、十五分ばかりたつと、さっそく私の小荷物が送り屆けられて來た。大使館書記官ラ・マルティニエール氏が色々と私の面倒を見ることになった。私の居室と決められたところへ案内しながら、氏は私に向つて、

「この部屋には、ル・リュック伯爵の時分に、君と同じ名前の或る有名な人がいたのです。[*1] 何かにつけてその人の代りとなり、いつかは初代ルソオ、二代目ルソオと呼ばれるようになるのも、君の心掛一つですよ」と、言った。

その人と同じような人間になるとは、その頃はとても望めもしなかったが、しかし、そうなるためには他日どれほどの代償を拂わなければならないかを豫見できたら、あまりうれしい氣はしなかったであろう。

ラ・マルティニエール氏の言つたことが好奇心を起させた。私は自分の占めている部屋の元の主の著わした書物を讀んだ。そして、前に人からほめられたことがあって、自分には詩才があると思いこんでいたから、ボナック夫人を讃えた歌謠詩を試作してみた。この詩才は永續きしなかった。私は時々思い出したように詰らない詩を書いた。それは優雅な語位轉換法に習熟し、散文を上手に書くことを學ぶためには良い練習となるものだが、私はフランス詩の中に、これに全然沒頭しきるほど十分の魅力を見出すことは曾てなかったのである。[*2]

ラ・マルティニエール氏は私の文章を見たいと思って、前に大使に話した細かい身の上話を筆で書いてみるようにと要求した。私は長い書簡體の文章を書いた。永い間ボナック侯爵の隨員をしていて、後にクールティユ氏が大使の時ラ・マルティニエール氏の後任となったマリアンヌ氏という人が、この書簡を保存しているということを私は聞き知っている。

そこでマルゼルブ氏[*3]に頼んで、その書簡[*4]の寫しを一通手に入れるよう努めて貰っている。若しこれが同氏からでも、また他の人々からでも私の手に入ったら、この「懺悔錄」の附錄となる筈の文集の中に入れるつもりでいる。

私が持ちはじめた經驗は、次第に持前の夢のような物の考え方を抑制するようになった。そして、例えばボナック夫人に戀心を感ずるというようなことはもうしなくなったばかりでなく、夫人の良人の家にいては大した出世の道もひらけないだろうと直ぐに感じたのであった。ラ・マルティニエール氏は嚴然と控え、マリアンヌ氏は言わばその後任者であるから、どんなに旨く行ってもせいぜい書記官補ぐらいの望みしかなかった。書記官補では大して有難くもなかった。そこで、人から希望を訊かれると、どうしてもパリへ行ってみたいという望みを相手に見せた。大使はこの考えをよろこんだ。大使としては少くも私を厄介ばらいできるからだった。通譯官メルヴェイユー氏は、自分の知人で、フランス王室に仕えているスイス兵の大佐ゴダール氏というのが、その甥でごく若くて軍務に服している人のお附きの者を誰か探している、それには私が適任だろうと思う、と言った。こんな一寸輕率なような思いつきから、私の出發がきめられた。しかも、私は、旅をする、しかも目的地はパリだということで、心の底から大よろこびであった。幾通かの紹介狀と非常に親切な訓戒を添えた百フランの旅費を貰って、いよいよ旅に上ることになった。

この旅行は十五日ばかりかかった。この十五日は私の生涯の幸福な時期として數えることができるものである。若く、壯健で、十分の金と、多くの希望を抱き、徒歩で、しかもただ一人で旅行をするのである。私の氣質にまだ十分馴染まない人だったら、こんなことを有難く思うのを見て、びっくりするかも知れない。しかし、私の旅の道連れは甘い幻想だった。そして、そういう時ほど、私の熱っぽい空想力がすばらしい幻想を生む時はなかったのである。馬車の中で人から空席をすすめられるとか、途中で人から話しかけられるとかすると、歩きながら建てていた幸運の殿堂が崩壞するのが見えて、私はいやな顏をする。今度の旅の時は、ひどく勇ましいことを考えていた。自分は軍人のお附きになろうとしてい

*1 ジャン・バティスト・ルソオ（一六七一年―一七四一年）のことを言う。ジャン・バティストは抒情詩人として有名であったが、一七一二年頃事件でパリを追放され、ソルールに逃れて時のフランス大使ル・リュック伯爵に庇護されたことがある。

*2 異本。「そして、これに沒頭すれば、多分私は成功したであろう」

*3 後年ルソオの庇護者となった人。詳しいことは第十卷以後に出て來る。

*4 異本。「同氏の知っておられるその書簡の寫し……」

る。私自身も軍人になろうとしていたのである。というのは、私はまず幼年學校へ入るように手筈がきめられていたからである。私にはもう立派な白い前立をつけ、軍服を着た自分の姿が見えていた。この氣高い考えに胸は膨らんだ。私は幾何學と築城術を嚙つていた。私には技師の叔父があった。いくらか親讓りの職とも言えた。近眼は少し差支えるが、それでも困るほどのことではなかった。沈著と大膽を發揮すればこの缺點は補えるつもりであった。ションベルヒ元帥[*1]が非常な近眼ということを何處かで讀んだことがあった。ルソオ元帥が近眼でいけない理窟はない筈だった。私はこういう馬鹿なことを考えてのぼせ上り、眼に見るものと言ったら、軍隊とか城砦とか保籃とか砲列とかばかり。自分は砲火砲煙の眞只中で雙眼鏡を片手に平然と下知を下しているのであった。ところが、氣持のいい野原に差しかかったり、森や流れを眼にすると、この心に觸れるような眺めは、私に後悔の溜息を洩らさせるのであった。私は名譽につつまれていながら、自分の心はそういうけばけばしいもののために作られてはいないと感じていた。そして、やがて、いつの間にか、軍職を永久に見限つた私は、なつかしい牧歌の間に自分自身を再び見出すのであった。

パリに到著して、この都市について抱いていた考えがどんなに裏切られたことだったろう。外觀の裝飾・市街の美・整然と竝んだ家屋の均齊なぞは、前にトリノで見たことがあったから、パリではそれより他のものを私は求めていた。大きくて同時にまた美しくもある都會、壯麗な街路や、大理石と黃金ずくめの宮殿なぞしか見られない、この上もなく堂々とした外觀の都會を、心に描いていた。サン・マルソー町から入ってみると、穢くて惡臭のする狹い街路や、怪しげな煤けた家屋や、不潔と貧窮のたたずまいや、乞食・車夫・繕いものをしている女、煎藥や古帽子を呼賣りしている女なぞを見たばかりだった。こうしたものは、すべて最初ひどく私の心を打ち、それがために、後にパリで眞に華麗なものを色々と見たけれども、それとてこの時の第一印象を打ち破ることができず、またこの首都に住むことについての祕かな嫌惡の情が、それ以來常に私の心に殘ったほどであった。後に私がこの都會で生活したすべての期間は、ここから離れて生活できる身分になれるだけの資力を得るためにのみ用いられたと言うことができるのである。過度の想像力というものは、人の誇張する以上の誇張を行い、人から言われる以上のものを見るものであるが、その結果は右のような有樣である。パリのことをさんざんに自慢された私は、パリを古代のバビロンのように想像していた。そのバビロンですら、若し實際に見たら、心に描いたその姿から、恐らく相當に割引すべきものを見出したことだったろう。これと同じことが、パリに著いた翌日

に急いで見物に行ったオペラ座でも起った。また、これと同じことが、その後、ヴェルサイユでも起った。更にその後、海を見た時にもあった。そして、これと同じことは、人から餘り大げさに前觸れされたものを見るたびに、必ず私には起るであろう。なぜなら、豐麗ということにかけては、私の想像を凌ぐことは、人間にも、自然そのものにすら、不可能であるからである。

紹介狀を貰った相手の人々の待遇ぶりから、私は自分の幸福が確立したと考えた。一番よく推薦して貰っていたのに、一番可愛がってくれなかったのは、シュルベック氏[*2]であって、この人は官を退いてバニュー[*3]に瞑想の生活を送っていたが、何度か訪ねて行ったのに、水一杯出してくれたことがなかった。通譯官の義妹のメルヴェイユー夫人と近衞士官だったその甥からは、もっとよく待遇された。この母子は私を歡迎してくれたばかりでなく、食事にも招いてくれたので、私はパリ滯在中は屢々そこによばれて助かったものである。メルヴェイユー夫人は昔は美人だったように見えた。髮は漆黑の美しさで、昔風に兩方のこめかみのところへ垂らしていた。夫人には容貌の美しさと共には滅びない或るもの、つまり非常に快い才知がまだ殘っていた。夫人の方も私の才を知り、私のためになることなら何でもしてくれた。しかし、誰にも夫人に加勢をしてくれるものがなかった。そして、みんなが私に非常な關心を持っているように見えたその正體が、やがて見えて來たのであった。しかしながら、フランス人の善いところは善いところとして認めなければならない。フランス人は世間で言うほど、むやみに誓約を振りまわすものではない。そして、フランス人のする誓約は、ほとんど常に誠實なものであるが、しかし、さも人に關心を抱くような風をする。そして、それが言葉以上に人を欺くことになる。スイス人の大雜把なお世辭には馬鹿者しか騙されないが、フランス人のやり方は、それより單純なだけに、ずっと人の心を惹くのである。この人たちは樂しく人をびっくりさせようと思って、してくれるつもりのことをわざと口で言わないでいるのだ、とこちらで信じてしまう。更に言うならば、フランス人はその公言するところに少しも僞りはない。生れつき世話好きで人情深く、親切であって、何と言っても、他のどの國民よりも信實である。しかし、輕跳で移り氣である。人に示す

*1 ドイツ系のフランス人で、その父と共に勇將としてフランス史上に有名な人物。(一五七五年―一六三二年)
*2 ユジェーヌ・ピエール・ド・シュルベックは軍人で、旅團長、近衞スイス聯隊長等を歷任した。(一六七八年―一七四一年)
*3 パリから七キロばかりのところにある町。

だけの眞心は實際に持っている。しかし、その眞心はふっと現われて、ふっと消える。人と話しているときは、その人のことで心が一杯になっているが、その人がいなくなると忘れてしまう。フランス人の心の中では何物も永續きしない。あらゆるものが刹那の業である。

だから、私はひどくよろこばされ、あまり惠まれなかったわけである。ゴダール大佐の甥のところに遣られたが、この大佐という人は、恐ろしく下等なしわん坊の年寄で、大金持でありながら、私の窮迫しているのを見て、此奴、ただで使ってやろうと思った。本當の家庭教師というより、無給の下僕のようなものとして私を自分の甥につけておくつもりだ、と言った。絶えず甥につきっきりで、そのために兵役は免除されるが、候補生の手當、つまり兵卒の手當で生活しなければならない。それに、制服を支給することもなかなか承知しそうもなかった。兵隊服で我慢しろと言わぬばかりである。メルヴェイユー夫人は、大佐のこんな言い立てに憤慨して、そんな事なら承知しない方がいいと言った。夫人の子息も同じ意見だった。何か他の口を探してくれたが、何も見つからなかった。そのうちに段々と苦しくなって來た。旅費として使った百フランの殘りも心細くなった。幸いにも、大使から少しばかりの金を屆けて來たので、それで大變に助かった。そして、今から考えると、その時もう少し辛抱していれば大使から見棄てられることはなかったのである。ところが、氣を揉んだり、待ちぼうけたり、人に歎願したりすることは、私にはとてもできないことだった。もう厭氣がさし、何處へも出て行かなかったから、萬事がお仕舞になった。私はママさんのことは忘れていなかった。しかし、どうやって探し出せるだろうか。何處を探せばいいのだろう。メルヴェイユー夫人は、私の身の上を知って、一緒に探してくれたが、長い間、徒勞だった。そのうちに、とうとう、ヴァラン夫人は二ヵ月以上も前に再びパリを去ったが、サヴォアへ行ったのか、トリノへ行ったのかも分らない、或る人々の噂ではスイスへ歸ったとも言っている、と私に教えてくれた。それだけ分れば、直ぐにママさんの後を追う決心がついた。ママさんが何處にいようと、パリで探すより田舎で探す方がずっと樂だと確信したからである。

出發前に、自分の新しい詩才を發揮してゴダール大佐へあてた一篇の書簡詩を書いたが、この中で大佐をさんざんに罵倒してやった。このいたずら書をメルヴェイユー夫人に見せると、夫人は私を咎める立場にあったのに、それとは反對に、ゴダール大佐が嫌いらしかった子息と一緒になって、この惡口雜言を大いに笑った。實際、大佐は誰にも人好きのしない

人だったのである。私は自分の詩を大佐に送ってやりたい氣がしていた。夫人と子息は私をけしかけた。そこで大佐にあてて小包を作った。當時パリには市内郵便局がなかったので、この小包はポケットに入れておいた。そしてオーセール[*1]を通った時に、そこから大佐に送った。大佐の姿を辛辣明細に描きだしたあの讃辭を讀んで、大佐がどんな澁面を作ったかと考えてみると、今でも時々笑いだしてしまう。その讃辭の冒頭は、こんな工合であった。

Tu croyais, vieux penard, qu'une folle manie (汝老猾、ひそかに思えらく、われ愚かなれば、)
Délever ton neveu m'inspirerait l'envie (汝が甥を教うる念を起さんものを、と。)

この小篇は實のところあまり上手ではないが、しかし、味わいもないわけではなく、諷詩の才も現われている。とにかく、これは私のペンから生れた唯一の諷刺的作物である。私はこのような才を誇るためには、餘りに人を憎めない心を持っている。しかし、若し私にもっと好戰的な氣質があったら、こちらを攻擊して來る相手は滅多に多くの味方を持てないであろう。これは、時々私が自衛のために物した論戰的作物を見れば、誰にも分ると信じている。

私が記憶を失ってしまった生涯の細かいことについて、最も殘念に考えるのは、旅日記を書いておかなかったことである。ただ一人、徒歩でやった色々な旅の最中ほど、多く考え、多く生存し、多く生活し、敢て言うならば、多く自分自身であった時はなかったのである。歩くということは思想を活氣づけ搔き立てる何物かを持っている。一個處にじっとしていると、ほとんど考えることができない。精神を動かすためには肉體が動いていなければならない。田舍の景色・快い眺望の連續・大氣・旺盛な食慾・歩きながら得られる健康・旅宿の自由・自分の從屬性を感じ、自分の境遇を思い出させる一切のものから遠ざかること、このようなものはすべて私の魂を解放し、私に一層大膽な思考を與え、言わば萬有の無限の中に私を投じて、伸々と心安く、思いのままにそれらを結合し、選擇し、我が物とさせてくれるのである。私は大自然全體を自由にする。心は對象から對象へとさまよいつつ、心に媚びる對象に合體し、同化し、魅惑的な心象(イマージュ)に圍繞され、甘美な感情に醉い痴れる。これを固定させておくために、心の中にその樣を描いて樂しむとすれば、どれほど生氣ある筆致を・どれほど鮮麗な色彩を・どれほど力强い表現を、私はそれらに與えるであろう。晩年の作ではあるが、私の著作の中にそういうものがすべて見出せる、と人は言う。あゝ、若しも私の幼少時代の作品を・旅の間に成つた作品を・構成だけ

*1 パリとリヨンとのほとんど中間にある都市。パリより一六〇キロあまり。

をして決して書かなかった作品を、人が見たならば、何と言うだろうか。……なぜそれを書かないのか、と人は言うかも知れない。それでは、なぜ書かなくてはいけないのだ、と私は答えるであろう。自分が樂しんだということを他人に言って聞かせるために、なぜその樂しみの現實の魅力を自分から棄ててしまわなければならないのか。自分が天空を翔っている間は、讀者とか公衆とか、或いは地上なぞというものが、私に何の關わりがあるだろうか。それに、第一、紙やペンを持つて歩いただろうか。そんなことを考えていたら、何も心に浮んでは來なかったであろう。思想が湧くだろうなぞと前から分るものではない。思想はこちらの氣の向いた時に湧くのではなく、先方の氣の向く時に湧いて來るのである。全然湧かないか、湧けば雲のように湧く。その數と力で私を壓倒してしまう。日に十册書いても十分ではあるまい。それを書き取る餘裕が何處にあろう。宿へ著けば、旨い食事のことしか考えなかった。出發すれば、面白い旅のことしか考えなかった。新しい天國が戸口で待っているような氣がしていた。それを探しに行くことしか考えなかったのである。

この時の歸り道ほど右のようなことを沁々と感じたことはなかった。パリに來る時は、これからパリでどうしようかということに關連した物思いだけに限られていた。これから入ろうとしている職業の方へ心は飛び、相當の誇りをもってそのことを考えめぐらしていた。ところが、その職業は自分の心の望んでいたものではなかった。そして、現實の人々は想像の人々を傷つけた。ゴダール大佐とその甥は私のような主人公の脇役は旨くつとめられなかった。幸いなことに、今の私はそのような障碍からすべて解き放たれていた。心の向くままに想像の國に深入りができた。つまり、私の前にはもう想像の國しか殘されていなかったのである。このようにして私は想像の國に我を失い、そのため實際にも何度となく途中で道を失った。それでも、眞直ぐに歩いて行くのは非常に厭だった。というのは、リヨンへ行けばどうしても天空から地上へ戻らなければならないことが分っていたので、いつまでもリヨンへ著きたくない氣がしていたからである。

とりわけ或る日のこと、とてもすばらしいと思った或る場所を、もっと近くに行って見たいものだと、わざわざ道を戻ったところが、そこがすっかり氣に入って、方々を歩き廻ったものだから、とうとうすっかり道に迷ってしまったことがあった。何時間も無駄に行ったり來たりした末に、疲れて、飢渇で死にそうになった私は、あまり見かけはよくなかったが一軒の百姓家に入りこんだ。近所にはその家だけしか眼に入らなかったのである。ジュネーヴやスイスのように、不自由のない住民なら誰でも親切に人を泊めてもくれることができると私は考えていた。私はそこの百姓にお金は拂うから

食事をさせてくれと賴んだ。百姓は、これだけしか家にはないと言って、クリームを採った殘りの牛乳と粗末な大麥のパンとを出した。私は大よろこびでその牛乳を飲み、そのパンを屑も殘らず平げた。しかし、それだけでは、すっかり疲れ切った男の氣力を恢復するには十分でなかった。百姓はこちらをじろじろ見ていたが、私の食慾の本當のところから私の身の上も本當だと判斷した。百姓は、すぐに、私が正直で立派な若者[註1]で、自分を裏切りに來たものでないことがよく分った、と言ってから、臺所の隅の小さい揚蓋を開けて降りて行ったかと思うと、やがて、純良な小麥粉で作った旨そうなパンと、切りかけではあったが涎の垂れそうなハムと、一瓶の葡萄酒をもって、歸って來た。この葡萄酒の瓶を見た時には、他の何よりも私の心は躍った。その上、相當に厚いオムレツまで添えてくれたので、私は徒歩旅行者でない者では決して知ることのない食事をしたのであった。さて、お金を拂う段になると、百姓はまた不安と恐怖にとらわれた。お金はいらないと言って、何か異常に困惑げな樣子で金を押し戻した。そして、面白いことには、私には相手が何をそんなに恐れているのか、想像がつかなかった。とうとう百姓は身體を顫わしながら、お役人とか收稅吏とかいう言葉を口にした。その言葉で初めて分ったが、百姓は御用金がこわさに酒を隱し、人頭稅がこわさにパンを隱したのであつて、人から飢死でもしそうだと思われていないと一生うだつが上らないのであった。そういうことについては、私は全く思いもつかなかったから、百姓の言葉は强い印象となって殘り、決して心から消えなかった。これが、不幸な人民の受けている苛政に對し、また人民の壓制者たちに對し、その後私の心の中に發達した止どめない憎惡心の芽生えとなったのであった。その男は、何不自由なかったが、己れの額に汗して得たパンを敢て食べようとしなかったし、また、己れの周圍を支配していたと同じ困窮を裝わないでは、己れの破滅を避けることができなかったのである。私はその男の家を出ながら、哀れを催すと共に憤激し、自然が暴虐な收稅吏の餌にするためにのみその天惠を惜しみなく振りまいているこの美しい地方の運命を慨いたのであった。

この旅行の間、私の身に起ったことで、はっきり殘っている思い出はこれだけである。もう一つ、リヨンへ近づきながら、リニヨン河の河畔を見に行くためにもう少し道を延ばしたい氣になったことも思い出す。[*1]というのは、父と一緒に讀んだ小說の中で、「アストレ」のことはいまだに忘れられず、これが最も屢々心に甦って來た小說であったからである。

*1 オノレ・デュルフェ（一五六八年―一六二五年）の書いた戀愛小說で、フォレ地方を流れるリニヨン河の附近がこの小說の舞臺となっている。

私はフォレへ行く道を尋ねた。そして、宿の女主人と雑談をしているうちに、フォレ地方は労働者のいい稼ぎ場になっていて、鍛工場が澤山あり、上等の鐵器が澤山できる、というようなことを知った。この讃め言葉は私の小説的な好奇心を鎮めてしまった。そして、鍛冶屋の仲間にディアーヌやシルヴァンドルのような人物[*1]を求めに行くのは無理なことだと判斷した。あんなことを言って私を勵ましてくれた親切な女主人は、私のことを錠前屋の若い衆とでも思っていたに違いなかった。

私は全然目的なしにリヨンへ行ったわけではなかった。リヨンへ著くと、シャトレ孃に會いにシャゾットへ行った。シャトレ孃はヴァラン夫人の知人で、前に私がル・メートル氏とリヨンへ來た時、この人に宛てた夫人の紹介狀を貰っていたのである。だから、前からの知合いというわけだった。シャトレ孃から教えられたところによると、ヴァラン夫人は確かにリヨンを通ったが、夫人がピエモンテまで足を延ばしたかどうかは分らない。夫人自身もリヨンを發つ時にはサヴォアに足を留めるか留めないかもきめていなかった、とのことであった。シャトレ孃は、また、若しお望みなら、手紙で聞き合せて上げてもいい、一番いい分別は、リヨンにいて夫人の消息を待つことだ、と言ってくれた。私はこの申し出を受け入れた。しかし、シャトレ孃に向って、自分は返事を急いでいる、財布の中も心細くなっているので永い間待っているわけにいかない、とは思い切って言えなかった。私がそう言えなかったのは、先方のもてなしが悪かったからではない。それどころか、シャトレ孃は私を非常に可愛がってくれた。そして、こちらを全く平等なものとして扱ってくれたために、自分の實情を見られるのが辛く、上流仲間という役割から、哀れな乞食の役割に顛落する勇氣がなくなってしまったからである。

この卷に記したことは、すべてそのつながりが、かなりはっきりしているように思う。しかし、その同じ頃に、もう一度リヨンへ旅をしたのを思い出すような氣がする。その場所ははっきり言うことができないが、その時はもうよほどひどく窮迫していた頃だった。一寸話しにくいが、或る小事件があって、どうしてもそれを忘れることができない。或る夕方、ひどく貧しい夕食の後に、ベルクールへ行って腰を下ろし、今の苦境をどうして切抜けたものかと考えこんでいると、頭巾を被った一人の男が、私の傍へ來て腰をかけた。その男は、リヨンで「薄琥珀織職（タフタッチエ）」と呼んでいる絹布織工のような風采だった。男は私に言葉をかけた。私は答えた。十五分間ばかり話しているかいないうちに、相手は相變らず靜か

な調子で、語調も變えずに、一緒に遊ぼうじゃないかと言い出した。その遊びがどんな遊びなのか、私は說明を待っていた。ところが、相手はそれ以上何も言わずに、いきなりその見本を私に示したのである。二人はほとんど觸れ合うばかりにして坐っていた。そして、まだ夜はそれほど暗くなっていなかったので、男がこれからどんなことをしようとしているかが見えないほどではなかった。男は私の身體をどうしようという氣はなかった。少くも、そういう意志を示すものは何もなかった。それに、場所もそれには都合がよくなかった。相手は、前に言ったように、自分で遊ぼう、私にも遊ばせよう、それぞれ自分で樂しもう、ということしか考えていなかったのである。そして、それはその男にはごく當り前のことのように思われていたらしく、私がそうは思わないとは想像さえもしていなかった。私はこの破廉恥にすっかり怯えて、返事もせず、あわてて立上ると、後をも見ずに逃げだした。このあさましい男が、後から追いかけて來るような氣がしたのである。私はすっかり狼狽して、サン・ドミニック街を通って宿へ歸る道をとらず、河岸の方へ驅けだし、木橋を渡りきってやっと足を停めた。何か罪を犯して來たようにぶるぶる顫えた。私にもそういう惡癖があった。この思い出はその惡癖を永い間治していてくれた。

今度の旅でも、これとほとんど同じ種類の事件があって、前よりも危い目に遭った。お金がいよいよ盡きそうになって來たので、私は僅かな殘金を儉約した。食事も宿では段々とらなくなった。そして、やがて、全然やめてしまった。下等な飯屋へ行けば、五スーか六スーで、宿で二十五スーも出すと同じぐらい滿腹できたからである。宿で食事をしないから、寢るだけに行くのは工合が惡かった。といっても、借金が澤山あったというわけではない。宿の女主人に何も儲けさせずに、ただ部屋だけ占領しているというのが恥かしかったのである。いい季節だった。ひどくむしむしする或る夕方、廣場で野宿しようと決心した。そして、そこのベンチに、早くから座をかまえていると、通りかかった一人の僧侶が、横になっている私の姿を見て、近寄って來て、泊るところがないのか、と訊いた。事情を打明けると、ひどく同情したらしく見えた。僧は私の傍へ腰をかけ、二人は話し合った。なかなか話が上手だった。その話を聞いていると、この世で一番いい人のように思えて來た。私が好意を抱きはじめたのを見てとった僧は、自分は廣いところに泊っているわけではない。ただ一部屋だけだが、あんたがこんな風に廣場で寢るのはどうしても見るに忍びない、泊るところを探すのももう時間が

*1 「アストレ」の中の人物。

晩いから、今夜だけは自分の寢臺を半分貸すことにしよう、と言った。私はその申出を受けた。自分のためになる友達が一人できそうだ、ともう考えていたのである。二人は出かけた。僧は火打石を打った。部屋は狹いが小綺麗に見えた。僧はひどく鄭重に私を迎え入れた。硝子瓶から火酒に浸した櫻桃を出した。二人でそれを二粒ずつ食べた。それから寢ることになった。

その男も例の救護所のユダヤ人[*1]と同じ嗜癖を持っていたが、あれほど亂暴にそれを發揮しはしなかった。私が承知していると思って、無理をすると却って刎ねつけられるとでも心配したものか、或いは實際にその下心にそれほどの自信がなかったものか、とにかくそのことを露骨には言い出そうとせず、こちらを不安がらせずに挑發しようとした。私は前のときよりも心得があったから、すぐに相手の腹が讀めた。そして思わずぞっとした。この家がどんな家か、相手がどんな人間かも分らない私は、騷ぎ立てでもして、生命に別條でもあってはと心配した。そこで、向うの氣持が分らないようなふりをした。しかし、相手の愛撫がとても煩さくてたまらない、もうこれ以上は我慢ができないという決然とした態度を示したので、相手はとうとう仕方なく手を引かなければならなかった。そこで私はできるだけ穩やかに、また、はきはきと僧に話しかけた。そして、何も氣のつかなかったように見せながら、昔、これこれの出來事があったので、ついあなたに對してもびくびくしたのだと言譯をした。その、昔の出來事を話す時には、さも厭で恐ろしくてたまらないというような言葉を使って話したので、相手もそのために自分でも氣色が悪くなったらしく、もうあの穢らわしい所業を全くやめてしまったほどだった。殘りの夜は靜かに過ごした。僧は色々と非常に有益なまた分別のある話をしてくれた。ずいぶん下劣な男ではあったが、見どころのない男ではなかったことは確かである。

朝になると、僧は不滿な樣子を見せようとはせず、朝食の話をして、一寸別嬪の宿の娘の一人に、持って來てくれるように頼んだ。娘はそんな暇がないと言った。今度はその妹娘に話しかけたが、返事もしなかった。それでも二人は待っていた。いくら待つても朝食は來なかった。とうとう娘たちの部屋へ行ってみた。二人は僧をひどく愛想のない樣子で遇した。私はもっとひどい待遇を受けた。姉娘は振りかえりざまに、高い踵で私の爪先をいやというほど踏みつけた。丁度肉刺ができて痛くてたまらないので、靴のそのところを切拔いておいてあったのである。妹娘は私が腰をかけようとした椅子を後ろから來て急に拔き取った。おふくろは窓から水を捨てる時に、こちらの顏にとばしりを引っかけた。何處へ身を

置いても、何か探すのだと言っては私を押しのけた。生れてから、こんなひどい目に遭ったことはなかった。人を見下げたような、揶揄うような眼つきの中には、何か隱された怒りがあったが、愚な私には何で怒っているのか分らなかった。私はびっくりし、呆氣にとられ、みんな憑きものでもしているのではないかと考えかけると、本當に恐ろしくなった。僧は見ざる聞かざるの風を裝っていたが、いよいよ朝食にありつける望みがないと見極めをつけて、出て行く決心をした。私はこの三人の夜叉どもから遁げだすのは大いに望むところだったので、急いで僧の後に從った。僧は歩きながら、珈琲店へ行って朝飯にしようと言いだした。私はひどく腹が空いてはいたが、この申出を斷わると、僧の方もあまり固執はしなかった。そして、そこから三つ目か四つ目の街角で二人は別れた。私はあの呪いの家に關係のある一切のものが視野を去ったのでうれしく、僧は僧で、もうその家が容易にそれと認められないほど遠くへ私を連れて來たことを、ひどくよろこんでいたらしかった。パリででも、ほかのどんな都市ででも、この二つの事件に似たようなことは私の身に決して起らなかったから、私にはリョンの人に對してはあまり有利でない印象が殘されてしまった。そして、ヨーロッパじゅうで最も嫌惡すべき腐敗が支配しているところとして、常にこの都市を見て來たのである。

この都市で自分が窮迫の極に押しつめられたという思い出も、また與って、この都市の記憶を快く呼び起すことにならないわけである。若し私が他の人のようであったら、つまり、人から物を借りたり、宿屋に借金をこしらえるだけの腕があったら、容易に難場を切拔けることができたであろう。ところが、そういうことは不得手でもあったし大嫌いでもあった。そして、この不得手と大嫌いがどの程度のものだったかを想像して貰うためには、ほとんど全生涯を不如意のうちに過ごし、屢々その日のパンに事缺くことがあった私ではあるが、ただの一度でも、借金取から催促されてその場で返金しなかったことがなかった、ということを知って貰うだけで十分である。私はやかましく催促されるお金はどうしても借りることができなかった。そして、人に物を借りるよりも、苦痛を忍んでいる方がましだ、といつも考えていた。

苦痛を忍ぶと言えば、止むを得ず街路で夜明かしをしなければならないというのも、間違いなく苦痛を忍ぶことである。そして、リョンでは何度もそういう目に遭った。僅に殘った幾スーかのお金は、宿賃よりもパンを買う方に使いたかった。睡眠不足で死ぬよりも、飢えて死ぬ方の危險が何と言っても多かったからである。そして、驚くべきことには、こ

*1　本書六五頁以下參照。

んなみじめな境遇にあっても、私は少しも不安でもなく、悲しくもなかった。將來のことについて、些かも懸念を持たなかった。野宿をし、地面やベンチの上に身を横たえて、薔薇の褥にいるように靜かに夢を貪りながら、シャトレ嬢が受取る筈の返事を待っていたのである。市外に出て、ロース河だったかソーヌ河だったか、いずれとも憶えていないが、その河沿いの道ですごしたすばらしい一夜のことは今でもよく記憶している。向う側の道は、臺地のように高まった花園に縁どられていた。日中は非常に暑かった。夕方はえも言われぬ快さだった。夜露が萎れた草を潤おしていた。風の少しもない物靜かな夜だった。大氣は寒いほどではなく爽凉としていた。陽は沈んだが、そのあとに、紅色の靄を空に殘し、その反映が川の水を薔薇色に染めていた。臺地の樹には夜鶯が群がって、互に鳴き交していた。私は身も心もあげてすべてそうしたものの音樂にひたり切り、これをたった一人で樂しむことをただ殘念に思って少しばかり歎息しながら、一種の恍惚のうちにそぞろ歩いた。甘い夢想に我を忘れ、疲れたことにも氣がつかず、暗い夜の中をずいぶん遠くまで散歩の足を延ばした。やがて私は疲れたことに氣がついた。臺地の塀にできていた、凹んだ所というか非常口というか、私はそういう所の板張りの上に快く横たわった。この寢臺の天蓋は樹木の梢でできていた。丁度眞上のところに一羽の夜鶯がいた。私はその歌聲を聞きながら眠った。眠りは甘かった。目覺めは更に甘かった。もう日が高かった。眼が開くと、水と綠とすばらしい景色が見えた。立ち上って、身體の埃を拂った。空腹が襲った。まだ殘っていた二枚の銀貨で旨い朝飯を食べようと決心して、元氣よく市の方への道を歩いた。私はひどく上機嫌で、道々ずっと歌を歌いながら歩いたほどだった。そして、今でも憶えているが、バティスタン[*1]の歌謠曲で「トメリーの沐浴」というのを諳記していて、これを歌ったのである。神よ、願わくばこの善きバティスタンと、その善き歌謠曲にみ惠みを垂れ給わんことを。私はこの曲のお蔭で、豫期以上の旨い朝食と、全く豫期もしなかった晝食にありついたのである。いい御機嫌で歩きながら歌っていると、後ろに誰かの氣配がする。振向いて見る。一人の還俗僧が私の後をつけて、面白そうに歌聲を聽いていたらしかった。僧は近づき、挨拶し、音樂ができるのかと訊く。私は、相當に、という意味をこめて、「少しは」と答える。僧は質問を續ける。私は少しばかり身の上を話す。樂譜を寫したことはないかと訊かれる。「何度も」と答える。これは本當だった。音樂を學ぶ最良の方法は樂譜を寫すことだった。

「それじゃ一緒に來てくれたまえ」と、僧は私に言った。「二三日君を雇ってみよう。その間、部屋から出てさえくれな

ければ、少しも不自由はかけないつもりだ」と。

私は大よろこびで承諾し、僧に從った。

この還俗僧はロリション氏と言った。音樂が好きで、できるし、友人たちと小音樂會をやって、歌った。そこまでは罪もないし、適度でもあったが、やがてこの趣味が昂じ、明瞭に常軌を逸した道樂となって、いくらか人目をはばからなければならなくなった。私は狹い一室に導かれ、そこに起居することになったが、室内には僧が寫した樂譜が澤山あった。僧は他に筆寫する譜を私に渡し、中にも、私の歌った例の歌謠曲は、數日後に自分が歌うことにしていると言って、それを寫すように命じた。私は三四日の間、食事の時以外はずっと樂譜を寫してばかりいた。食事と言えば、一生のうちでこの時ほど腹を空かせ、また十分に食事を給されたことはなかった。僧は私の食事を自分で臺所から運んでくれた。普段の食事がこれと同じとすれば、勝手元は豐であったに違いなかった。生涯のうちで、この時ほど食べることの樂しかったことはなかった。そして、このような御馳走は丁度いい折に降って湧いたものだと言わなければならない。というのは、私はまるで材木のように干からびていたからである。仕事の方も食事とほとんど同じほど眞面目にやった。というと、少し言いすぎになるかも知れない。實を言うと勤勉の割には正確でなかったのである。しばらく後で、街でロリション氏に逢ったら、私の寫した樂譜には、抜けたところや重複したところや前後したところが多くて、とても演奏ができなかった、と教えてくれた。後に私が樂譜筆寫を自分の生業に選んだのは最も不適當だったと言わなければならない。というのは、私の樂譜が綺麗でなかったとか、寫し方がひどくはっきりしなかったとかいうのではなく、長い仕事に倦んで、ひどく頭がぼんやりしてしまい、そのために譜を書くよりも消す方に時間がかかったからであり、また、最大の注意をこめて各音部を對照してかからないと、常に演奏のできないようなものになってしまったからである。それ故、旨くやろうとすると、とても拙くなり、速くやろうとすると、後戻りをする始末だった。それでも、ロリション氏は最後まで私を優遇し、いよいよ暇の出た時には一エキューのお金さえくれた。私はお金まで貰う値打はほとんどなかったが、このためにすっかりまた運が向いて來た。というのは、それから數日後に、シャンベリーにいたママさんから音信と、向うまで行くための旅費とを受取り、私は有頂天になって出かけることになったからである。その後も、私の財政狀態は屢々非常に窮迫を告

*1 ジャン・バティスト・ステュックのこと。フィレンツェ生れの作曲家で一七五五年七十五歳でパリに歿した。

げたことはあったが、しかし、斷食しなければならない程のことは一度もなかった。私はこの時期を、特に神の恩寵を感謝する心で誌す。生涯のうち貧困と饑餓を感じたのは、この時期が最後となった。

私はなお七八日ほどリョンに留まって、ママさんがシャトレ孃に頼んだ用件を待っていた。その間、前よりも頻繁にシャトレ孃に會いに行った。孃と一緒にママさんの噂をするのが樂しみだったし、自分の境遇に痛ましい反省を加えて、そのために人に境遇を隱しておかなければならないというようなことで、氣の散ることも前ほどなくなったからである。シャトレ孃は若くもなかったし、美しくもなかったが、しとやかさがないわけではなかった。親しみ易く氣さくであって、氣轉が利くのでその親密さに一層の値打が加わった。孃には觀察的倫理學の趣味があって、それが人間研究にまで擴げられた。私がそれと同じ趣味を持つようになったのは、元はと言えば孃から來たのであった。孃はル・サージュ[*1]の小説、とりわけ「ジル・ブラス」が好きだった。私にその話をして、本も貸してくれた。私はこれを面白く讀んだ。しかし、こういう種類のものを讀むほど私はまだ成熟していなかった。感情の大げさな小説が必要だったのである。このように、私は樂しくまた有益にシャトレ孃の家で時を過ごした。立派な女性との興味深くまた思慮のある談話は、書籍の物識りぶった哲學なぞより、青年を教化するに一層適當したものであることは確かである。私はまたシャゾットで他の寄宿生やその女友達たちとも知合いになったが、その中にも、セール孃という十四歳になる少女がいた。この少女には、當時大して注意しなかったが、八九年後になって、熱烈に戀するようになった。[*2]それも道理、この少女は非常に魅力のある娘だったのである。

間もなくなつかしいママさんに再會できるという期待で頭が一杯になっていた私は、あまり空想を逞しくすることをしなくなった。自分を待っている現實の幸福が、幻想の中に幸福を求める必要をなくしてくれたのである。ママさんを再び見出すだけではなく、ママさんの傍で、ママさんの力で、樂しい境遇をも再び見出すわけだった。というのは、向うからの知らせによると、ママさんは、私のために或る仕事を見つけてくれていたのであった。その仕事は私に適するらしくママさんは考えていたし、また私をママさんから遠ざけるようなものでもなかった。その仕事は一體何だろうかと、それを察知するために色々と推測を逞しくした。しかし、本當のことが分るためには、實際に占でもしなければならなかったであろう。私には道中不自由しないほどの金があった。シャトレ孃は馬で行った方がいいと言った。私はこれに同意できな

かった。私の言う方に道理があった。なぜなら、馬なぞに乘っていたら、生涯での最後の徒歩旅行の快味を失うことになっただろうからである。最後の徒歩旅行と言うわけは、後にモティエに滯在中、[*3]近郊を度々遠足したのは、徒歩旅行と名づけることができないからである。

實に奇妙なことであるが、私の境遇が最も快くない時でないと、私の想像は快く熱しないし、また、反對に、私の周圍のすべてが悅ばしそうにしている時は、私の想像は最も悅ばしそうにしないのである。私の頭はたちが惡くて事物に追隨することができない。物を飾ることを知らず、創造することを望むのである。現實の對象は、私の頭には、せいぜいそのあるがままに描かれるにすぎない。架空の對象だけを飾るのである。春を描きたいと思えば、冬にいなくてはならない。美しい景色を描出したいと思えば、壁の中にいることが必要である。そして、若しバスティーユの獄に繫がれれば、そこで自由の姿を描き出して見せるだろうとは、何度も私の言った通りである。リョンを發つ時の私は、快い未來のことしか見なかった。パリを立つ時の不滿足な氣持と全く正反對であった。また、それが當然でもあったわけである。ところが、この旅行中には、前の旅行の時、始終つきまとったあの甘い夢想が少しも得られなかった。心は朗かだったが、それだけのことであった。これから再會しようとするあの優れた女性のもとへ近づくにつれて、私の心は躍った。ママさんの傍で暮らすよろこびを前もって味わったが、陶醉するほどではなかった。それは前からずっと豫期していたことで、別に新しく降ってわいたような氣はしなかったのである。これから自分のする仕事が、何か非常に不安なことのように、氣になって仕方がなかった。頭の中は平靜で安穩であって、天空を翔るような恍惚としたところはなかった。色々な事物が私の眼を惹いた。方々の景色に注意を拂った。樹や家や流れを注目した。道の角に來ると思案した。道に迷うことが心配だった。そして一度も迷わなかった。これを一言で言えば、私はもう天上界にはいなかったのである。自分の居る場所か、自分の行く場所に居たのであって、決してそれより遠くへは出なかったのである。

旅の話をはじめると、本當に旅をしていた時と同じようになってしまう。つまり、行き著くことができないのであ

*1 フランスの小説家。その作「ジル・ブラス」は傳奇小説の形の下に當時の社會の狀態を活寫して諷刺したもの。
*2 第七卷參照。
*3 第十二卷參照。

る。なつかしいママさんの傍へ近づくにつれて、心はよろこびに躍ったけれど、そのために足を速めることはなかった。心のままに歩き、好きな時に止まった。放浪生活、それこそ私に必要なものである。美しい日に、美しい國を、急がずあせらずに徒歩で道中する。しかも、行き著く先には、樂しい目的が待っている、これが、あらゆる生活樣式の中で、最も私の好みに合致したものである。それに、私の美しい國という意味は、すでにお分りの通りである。どんなに美しくても、平野の國は私の眼には美しく見えなかった。急流・岩石・樅の樹・鬱蒼とした森・山嶽・上り下りの凸凹道・兩側にある恐ろしい斷崖絶壁、そんなものが私には必要である。シャンベリーへ近づきながら、私はこのような樂しみを持ち、その魅力を餘すところなく味わった。「梯子峠」という名の切立った山から遠くないところにあるシャイユという場所で、岩を切り開いた街道の足下に、見るも物凄い淵があって、そこに幾萬年を費して岩を浸蝕したと思われる急流が流れこんで、水泡を立てている。道の緣には危險のないように手すりができている。このために、私は底の方を眺めて、心のままに目まいを感ずることができた。こんな、嶮岨な場所が好きだというのは、こういう所で頭がくらくらするのが氣持がいいからなのである。そして、自分の身が安全でさえあれば、こういう目まいは大好きなのである。手すりにしっかり凭れて、鼻をつき出し、何時間もそうしていながら、時々水泡と青い水を見下ろした。轟轟たる水の響は、脚下二百メートルのところで、岩から岩へ、叢から叢へと飛び交う鴉や猛禽の叫びを通して、私の耳に聞えて來た。傾斜に割合と凸凹のない、叢もあまり繁っていないところへ石を轉がしてみるつもりで、遠くの方まで行き、持てるだけ大きい石を運んで來て、手すりの上に積み上げた。それから、一つずつ投げ下ろして、絶壁の底へ著くまでに、石が轉がり、跳ね上がり、千千に碎け飛ぶ有樣を眺めて面白がった。

シャンベリーにもっと近いところで、これとは逆の似たような光景を見た。道は、これまでに見たこともない美しい爆布の眞下を通っている。[*1] 山はひどい絶壁で、そのために水は宙に浮き、弓形に遠くの方へ落下しているから、時には身體を濡らさずに岩と瀧の間を通り抜けることができる。しかし、うまく調子をとらないと、まんまと當てが外れる。私の場合がそうだった。というのは、水は非常に高いところから落ちて來るので、途中で分れて飛沫になって落ちる。それで、この霧にあまり近づきすぎると、初めは濡れていることに氣がつかないで、忍ち全身ずぶ濡れになってしまうからである。

とうとう私は著く。ママさんに再會する。ママさんは一人ではなかった。私が入って行くと經理主事[*2]がママさんの家に

來ていた。ママさんは何も言わずに私の手を取って、誰の心も打ち開かせるあの淑かな樣子で主事に私を紹介した。

「かねてお話申上げましたのが、この子でございます。どうぞお役に立つ間は、お引廻し下さいますよう。そうお願いできますれば、もうこの子について、わたしとして心配なことがなくなります」

それから、私に向つて、

「あなたは王樣にお仕えすることになったのよ。主事樣のお蔭なんですから、よくお禮を申上げなさい」と、言つた。

私は全く何やらわけが分らず、無言のまま眼を大きく見開くだけだった。やがて間もなく、野心が湧いて私の氣は移り、今にも主事にでもなるような心持になった。私の幸運は、この最初の時に想像したより遙かに派手なものとはならなかった。しかし、今のところ、生活するためにはそれで十分であったし、私に取ってはそれで澤山だった。その時の事情は次のようなことであった。

ヴィットリオ・アメデオ王は近頃の數度の戰爭の結果と、父祖から受けた舊所領の位置とから、いつかはこれを失うものと判斷して、領地を搾取し盡すことしか考えなかった。王が所領の貴族に人頭稅を課す決心をしたのは數年前のことだったが、いよいよ實際に課稅するに當って、それを一層公平に配分するため、全國にわたる土地臺帳の作製を命じた。この仕事は父王の代に始められ、その子の代に完了した。この事業に雇われた人員は、二三百名で、その半ばは實測技手と呼んでいた測量係で、あとの半分は書記と呼んでいた事務員とから成っていた。そして、ママさんはこの書記の中へ私を入れて貰ったのであった。この地位は大して金にはならなかったけれど、こういう土地では十分に暮して行けるだけの收入はあった。ただ、惡いことには、臨時の仕事であった。しかし、このために、他の仕事を見つけたり期待したりする手がかりはできた。そこで、ママさんが私のために主事の特別の庇護を求め、この仕事が終った時に何かもっと安定した地位に移れるようにしてくれたのは、先見の明があったわけである。

到著後、日ならずして私は職務についた。この仕事には別段難かしいところはなかった。そして、間もなく馴れてしまった。このようにして、ジュネーヴを出奔してからの放浪と狂愚と忍苦との四五年の後に、私は自分のパンを初めて正當

*1 クーズ川の裏見の瀧をいう。
*2 ドン・アントアヌ・プティッティというサヴォア國の經理主事。

な手段で得はじめたのである。

こうした私の幼年期の長々しい物語は、ひどく他愛のないことのように思われたであろう。私はそれを恐縮に思っている。或る點では生れつき大人のようであった私も、他の多くの點では永い間子供のままだったし、また現在も子供である。私は一人の大人物を公衆に見せるとは約束しなかった。あるがままの自分を描く、と約束したのである。一般に、事物そのものは、その思い出人してからの私を識るためには、幼年期の私をよく識っていることが必要である。そして、成ほど私に感銘を與えないし、また、私の思想はすべて心象(イマージュ)としてあるものであるから、頭に刻まれた最初の印象はいつまでも殘っていて、その後から加えられた印象によって消されるというよりも、それらと結合されてしまっている。或る一つの感情と思想の繼續があって、後から加わって來る繼續を修正するから、彼我を判別するためには、その最初の繼續を識らなくてはならない。私は到る處でこれらの第一原因を十分に展開して見せて、結果の連鎖を悟って貰おうと努めているのである。私は讀者の眼に何とかして自分の心を透明にして見せることができればいいと思っている。そして、このために、自分の心を、あらゆる見地から讀者に示し、あらゆる光に照らし出し、讀者の心づかぬ一寸した動きもないようにしようと努めている。そうすれば、私の心の動きを產み出す原理について、讀者自ら批判を下すことができるのである。

若し私が結果だけを採り上げて、「これが私の性格だ」と讀者に言ったならば、讀者は、私が讀者を欺いているとは思わないかも知れないが、少くも私が私自身を欺いている、と思うであろう。だが、自分の身に起ったこと、自分のしたこと、考えたこと、感じたこと、そうしたものを一つ殘らず率直に讀者に語るならば、私は、故意にそうしようとしても、この方法ではなかなか容限り、讀者を誤りに引きずりこむことはできないのである。また、故意にそうしようとしても、この方法ではなかなか容易にできることではない。それらの要素を集め、それがどんなものを組成するかを決定するのは讀者の役目である。割り出された結果は讀者の作ったものでなければならぬ。そして、その時、讀者が誤ったとしても、一切の過誤は讀者の爲せる業である。從って、この目的のためには、私の記述が忠實であるだけでは十分ではなく、同時に正確でなければならない。事實の輕重を判斷するのは私の仕事ではない。私としては事實をすべて言い、それを選ぶ勞は讀者に委せなくてはならない。私は今まで勇を振ってこの點に意を注いだ。そして、今後もこれを怠らないであろう。しかし、中期の記憶は、初期のそれよりも常に精彩を缺く。私はまず初期の記憶をできるだけ十分に活用した。若し中期の記憶がそれと同じ力で

甦って來れば、氣短かな讀者は恐らく退屈するであろうが、私としては、自分の仕事に不滿を感じないであろう。私はこの企圖にただ一つの危惧しか持っていない。それは言い過ぎはしまいか、とか、虛僞を言いはしまいか、とかいう心配ではない。一切を言わないのではないか、眞實を默しているのではないか、という心がかりだけである。

第五卷

(一七三二年(?)——一七三六年)

前に述べたように、私がシャンベリーに著いて、國王の御用で土地臺帳作製の仕事に雇われたのは、一七三二年の事だったように思われる。二十歲を越して、二十一歲に近い頃であった。精神方面は年齡相應に發達していたが、判斷力はまだそうなっていなかった。だから、處世の術を學ぶためには、私が身を託した人の監督指導を非常に必要とした。というのは、數年の經驗もなお私の夢のような幻想を根元的に治癒するに至っていなかったし、自分の蒙ったあらゆる災厄にも拘らず、まるでその教訓を苦勞して獲得したのではなかったように、世間のことも人間のことも全く識っていなかったからである。

私は自分の家、つまりママさんの家に寢泊りした。しかし、そこにはアヌシーの私の部屋の面影は見出せなかった。庭も小川も風景もなかった。家も薄暗くて陰氣だった。そして、私の部屋は家中で一番薄暗く陰氣だった。見晴らしの代りに塀、街路の代りに露地、風通しや、日當りも悪く、狹苦しくて、蟋蟀と鼠と腐った床板があるばかり。これでは氣持のいい住居とは言えなかった。しかし、私はママさんの家に、そして、ママさんの傍にいるのだった。絶えず役所に出ているか、ママさんの部屋にいたから、自分の部屋の汚さにも氣がつかず、またそんなことを考える暇もなかった。ママさんがわざわざシャンベリーに居を構えて、こんな厭な家に住んだことはおかしく思えるだろう。ところが、この事自體が、ママさんの世渡り上手の一例であって、これについては一言しなければならない。その頃は度々革命騷ぎのあった揚句でもあり、王宮内ではまだ混雜している最中でもあったので、ママさんは今は王宮へ顏を出す時期ではないと感じていたから、トリノへ行くのは、實は氣が進まなかった。しかし、色々な事情で、どうしても其處へ顏を出さないわけにいかなかった。忘れられたり、見棄てられたりする心配があったのである。殊に、財務官のサン・ローラン伯爵が好意を抱いてい

ないことをママさんはよく知っていた。この人はシャンベリーに家を一軒もっていたが、古くて、建附が悪く、場所もよくないので、いつも空家になっていた。ママさんはこの家を借りて、居を構えたわけである。[註32] これは、トリノへ行くことよりも利き目があった。ママさんの年金は削減されなかった。そして、それ以來、サン・ローラン伯爵はいつもママさんの味方となったのである。

ママさんの一家はほとんど前と變っていなかった。忠實なクロード・アネは相變らず一緒だった。アネは、前にも言ったことがあると思うが、ムートリュー[*1]の百姓であった。幼い時分にスイス茶を作るためにジュラ山中で藥草摘みをしていたのを、ママさんが召使の中に藥草のことの分る者があるのは便利だと考えて、製藥の仕事に使うつもりで召抱えたのである。アネは植物の研究にひどく凝り、ママさんはその趣味に力を添えたので、やがて本物の植物學者となってしまった。若し若死をしなかったなら、實直な人間として恥かしからぬ名を殘したように、この學問にもきっと名を揚げたことと思われる。アネは眞面目で、嚴格でさえあり、年齡も上だったから、私に取って言わば先生格となって、馬鹿をする私をずいぶん救ってくれた。つまり、アネは私を斷然と抑えていて、その前では馬鹿なことができなかったからである。アネはまた女主人をも抑えていた。ママさんはアネの思慮深いこと、正直なこと、自分に對して侵すべからざる愛著を抱いていることをよく知っていて、その愛著には十分に報いていた。アネは何と言ってもまことに稀代の人物で、こういう人間としては今までに見た唯一人の男である。緩慢で、沈著で、思慮が深く、行動は愼重で、素振りは冷靜で、言葉づかいは簡潔で鹿爪らしいが、それでいて激烈な熱情を内に抱いていた。その熱情をおもてに表わすことはないが、心はそれに燒き盡されていて、一生にただ一度だけ、そのために狂態を演じた。自ら毒を仰ぐという恐ろしい狂態だった。この出來事は、私が著いてから間もなく起り、そのために初めて、私はこの青年と女主人との間の密接な關係を知ったのである。というのは、若しママさんの方から言ってくれなかったら、私はいつまでもそれを怪しまなかったろうからである。愛著と熱意と忠實とがこのような褒賞を贏ち得るものとすれば、確かにアネは當然それを受けるべきものであった。そして、アネがその褒賞に相應しいものであったことは、それを濫用しなかったことで證明されるのである。二人はたまに喧嘩をすることはあったが、いつも無事に納まった。ところが、無事に納まらない喧嘩が起ったのである。それは女主人がアネに、怒りにまかせて、我慢のならない侮辱的な言葉を吐いたからだった。アネの念頭には絶望しかなくなった。そして、

たまたま有り合せた阿片劑の小瓶が目についたので、それを飲んで、もう永久に眼を覺まさないつもりで、靜かに床についた。ヴァラン夫人は心配して自分でもいらいらしながら、家の中を歩き廻っていると、幸いに空の小瓶を見つけて、あとのことは察しがついた。アネを助けに飛んで行く時に、大聲を立てたので私も行ってみた。夫人は私に萬事を打明け、手助けをしてくれと頼んだ。そして、非常に骨を折って、漸くアネに阿片を吐かせることができた。この有樣を見て、私は、夫人から聞いて知るまでは二人の關係を少しも怪しまなかった自分の迂闊さに我ながら感心した。尤も、アネは非常に用心深かったので、私よりよく眼の見える人でもきっと考え違いをしただろうと思う。二人の仲直りは傍で見る私ですら心を打たれるほどのものだった。そして、この時以後、私はアネに對して尊敬の上にも尊敬を重ね、言わばその弟子となったが、これは私にとって前より都合の悪いことではなかった。

とは言うものの、誰かがママさんと、私以上の親密さで暮らしていると知るのは辛いことであった。自分もそういう身分になりたいとは思わなかったが、ママさんが他人に占領されているのを見るのは苦痛だった。これは自然なことであった。ところが、私はママさんを横取りした男を憎むことはしないで、ママさんに抱いていた愛著がその男にまで擴がって行く氣が本當にしたのである。私は何よりもママさんの仕合せを望んでいた。そして、ママさんは仕合せであるためにはその男を必要としていたのだから、その男も仕合せであることを私は望んだわけである。アネの方では、女主人の仕事上の目論見に完全に加わっていて、女主人が選んだ友に心からの友情を注いだ。自分の地位として當然持ってもいい權威を私に振りまわすようなことはせず、私に勝る判斷力から來る權威を自然に具えていた。私としてはアネが否とすることは、思いきって行えなかったし、アネは悪いことしか否としなかった。このようにして、われわれは皆を幸福にし、死のみが破壞できる結合の中に生活したのである。この愛すべき女性の性格が優れたものであったという證據の一つは、この人を愛する者同志がみな互に愛し合った、ということである。嫉妬とか敵視とかいうことですら、夫人から受ける感情が支配的であったから、それに席を讓るのであった。そして、夫人を取卷く人々のうちで、互に相手を傷つけようとする人は今までに一人も見たことがなかった。この書を讀む人は、この讃辭のところで一寸讀むのを待って頂きたい。そし

*1 アネは一七〇六年にモントルー（ヴォー州の町）に生れ、ヴァラン夫人と同じく一七二六年カトリックに改宗した。夫人との關係はすでに著く夫人がヴヴェーに住んでいた頃から交情があった、と言われている。

て、よく考えてみて、若しこれと同じ讃辭を呈し得る婦人が他に見つかるならば、自分の生涯の安息のために、その婦人に愛著し給え。たとえ[*1]それが最も下等な娼婦であっても。

シャンベリーへ歸ってから、一七四一年にパリへ出發するまでの八九年の時期は、ここに始まる。この時期の私の生活は甘美でもあり平凡でもあったから、特に話すほどの出來事もない。しかし、このような單調な生活こそ、打ちつづいた動搖のために固定を妨げられていた自分の性格を作り上げるため、私が最も必要としていたものだった。この貴重な時期に、雜駁で脈絡のなかった私の教育は、堅實さを加え、私を待ち受けていた暴風雨[*2]に遭っても終始變らぬものに私をしてくれたのである。この進歩は、ほとんど記憶に足るほどの出來事に飾られることなく、目立たず緩慢なものであったが、しかし、これを辿って詳述するだけの價値はある。

初めのうち、私は自分の仕事にしか氣を取られなかった。役所の束縛が他のことを考えさせなかった。僅かな餘暇は優しいママさんの傍で過ぎた。そして、讀書の時間さえなかったから、その氣も起らなかった。しかし、仕事にもそろそろ慣れて來て、精神を煩わすことが少くなると、何となく落著いていられなくなって、讀書がまた必要となった。そして、若し別の趣味が邪魔に入って、この讀書慾を他へ轉じさせてくれなかったら、親方の家にいた時分のように、讀書に耽ることが難かしいために却っていつも刺戟を受け、最後には書物狂になってしまったことであろう。

われわれのやる計算にはひどく高等な算術は必要でなかったが、時には困るような算術があった。この困難を克服するために、算術書を買った。そして、よく覺えた。よく覺えたのは、獨學でやったからだった。實用算術は精密にやろうと思うと、案外に深遠なものである。非常に長い計算があったりして、立派な技手が時には迷うようなことも眼にした。勘考も實地に結びつけると觀念がはっきりする。そして、觀念がはっきりすれば、簡便な方法が發見できる。その發見は自尊心をよろこばせ、その正確さは精神を滿足させるから、それ自身は仕甲斐のない仕事でも樂しくすることができる。私はこの仕事にひどく熱中して、終には算術で解ける問題で自分の困るものは一つもなくなったほどになった。そして、昔覺えたことも日に日に記憶から消えて行く今日になっても、この素養だけは、三十年も中絶していたのに、なおその一部は頭の中に殘っているのである。數日前、ダヴェンポートへ旅行した折に、宿へ著いて、そこの子供たちの算術の勉强を見てやったが、その時非常に込み入った運算を間違いなくやってのけて、我ながら大いに愉快を感じた次第である。數字

を書いて行くうちに、自分があの幸福な時分に立ち戻って、シャンベリーにいるような氣がした。ずいぶん昔のことを思い出したものである。

技手たちの作る地圖の水彩が、私にまた圖畫の趣味を與えた。繪具を買いこんで、花や風景を描きはじめた。この藝術は私の好みにまことにぴったりしていたが、殘念なことにあまり才能の方はなかったようである。私は鉛筆や畫筆を取りながら、少しも外へ出ずに何ヵ月でも過ごすことができたであろう。この仕事に餘り夢中になりすぎたので、傍の人々は無理にもそれから私を引き離さなければならなくなった。私はどんな趣味でも、それに耽りはじめると、いつもこうなる。段々に昂じて、最後には道樂となり、やがて沒頭している樂しみのほかには眼に入るものがなくなってしまう。年を取っても、この缺點は改まらなかった。減じさえしなかった。そして、これを書いている現在でも、私は老耄している癖に、碌に分りもしない或る無益な研究[*3]に夢中になっている。こんな研究は、若い頃に耽った人でも、私がはじめようとするこの年頃には、廢めざるを得なくなる研究である。

丁度その頃は、この研究にまことに好都合だった。機會には惠まれていたし、この機會を利用しようという氣持もいくらか有った。新しい藥草類を持って歸って來る時の、アネの滿足そうな眼の色を見て、私も二三度一緒に採集に出かけようとしたことがあった。若し一度でもその時一緒に行っていたら、きっとそれが面白くなって、恐らく今日私は偉い植物學者に成っていただろうと思う。というのは、私の天成の趣味に植物の研究ほどよく適合したものはこの世になく、最近の十年間、田舍で送った生活は、目的や進歩こそないけれど、不斷の植物採集に他ならないからである。しかし、當時は、植物學というようなことは全く頭になかったから、むしろ一種の輕蔑と嫌惡をこれに抱いていたのであった。私[*4]は植物學をただ藥劑師のする研究としか思っていなかった。ママさんは、植物學が好きだったが、これを他の用途に用いなかった。普通の植物しか求めていなかったのは、藥劑にするためだったからである。このように、植物學も解剖學も、私の

＊1　「たとえ……」以下は削除されている異本がある。
＊2　後年に遭遇した迫害を言う。
＊3　植物學のこと。
＊4　異本。「私は、すべての無學者がそう思うように、植物學をただ藥劑師のする研究としか思っていなかった」。

頭の中ではただ醫學という名の下に混同されていたから、私に取っては一日中面白い冗談を言う種になるだけのものだった。そして、このために時々横っ面を張られるのが落ちだった。それにこれと異った餘りに反對すぎるほどの一つの趣味が、次第に增大して來て、やがて、他の一切の趣味を吸收してしまった。音樂のことである。私は確かにこの藝術のために生れて來たにちがいないのであった。というのは、子供の頃から音樂が好きになりはじめたし、一生を通じてどんな時代にも音樂だけはいつも變らず愛していた唯一のものだからである。ただ、不思議なことには、そのために生れついている筈のこの藝術が、ひどく學ぶに骨が折れ、ひどく進歩が緩慢だったことであって、一生かかって實地練習した後でも、初見の本を正確に歌えるまでにはどうしてもなれなかった。とりわけ、その頃、音樂の研究を樂しくしてくれたのは、これがママさんと一緒にできたからだった。ママさんと私とは、趣味が非常に異っていたから、音樂が私のよろこんで利用できるただ一つのわれわれの一致點だった。向うでもそれが厭ではなかった。私はその頃ほとんどママさんと同じ位で、二三回やれば一曲が讀みこなせる程度だった。時には、竈のまわりでママさんが忙しそうにしているのを見て、

「ママさん、ここにすばらしい二重唱がありますよ。その藥を焦げつかしてしまうような奴が」

と、私が言うと、

「あら、いけないわ。藥を焦げつかしちまったら、あんたに飲ましてやるから」と、ママさんが言った。

私は言い爭いながら、ママさんをクラヴサンのところまで引きずって來た。二人は我を忘れた。杜松子(ねずのみ)かにがよもぎのエキスは煮つまってまっ黑になった。ママさんはそれを私の顏になすりつけた。こんなことが樂しくて仕方がなかった。

これで分るように、私には餘暇があまりなかったのに、することはいくらでもあったわけである。ところが、さらに又一つ樂しみが現われて、ほかの樂しみに取って代った。

われわれは息の詰まる土牢のような家に住んでいたから、時には廣々としたところに行って新鮮な空氣を吸う必要があった。そこで、アネは、ママさんのために、郊外に庭園を一つ借り、そこに色々な樹木を植えつけた。この庭園にはお約束通りの設備のある小綺麗な亭が一つついていて、そこに寢臺までも持ちこんだ。われわれは度々其處へ行き、私は時には泊ることもあった。いつとはなしに私はこの小さい隱れ家が大好きになり、本を少しと、版畫類を澤山持ちこんだ。暇を見てはその亭を飾り、ママさんが散歩に來る時に何か快い驚きを準備しようとした。ママさんのことで頭を一杯にしよ

う、ママさんのことをもっと樂しく思いに描こうと、私はママさんのもとを離れて其處へ行ったわけである。これもやはり氣まぐれの一つであって、辯解や說明はしないが、事實がそうだったから此處に告白する次第である。茲で思い出すのは、リュクサンブール夫人が、或る時、愛人に手紙を書きたいばかりに、その愛人のもとを離れたという男のことを、嘲りながら私に話したことである。その時、私は夫人に向って、自分もその男のようなことをしたかも知れない、と言ったが、實は、私も時々そんなことをしました、と附け加えて言えないこともなかったのである。しかし、私は、ママさんの傍にいて、更に深くママさんを愛するためにそのもとを遠ざかる、という必要は少しも感じたことはなかった。なぜなら、ママさんと差し向いの時には、自分一人でいると同じほど心安くしていられたからである。そして、こういうことは、男女に拘らず、私がどんなに愛著を抱いていても、ママさん以外の人の前では決してなかったことである。ところが、ママさんは大ていの時は人々に取卷かれていて、しかもその人々というのがあまり私と合わない人々だったから、癪にもさわるし、退屈にもなって、自分の隱れ家へ追い立てられてしまうわけだった。隱れ家に居さえすれば、邪魔者たちに後を追いかけられる心配もなく、好きなようにママさんを所有していることができた。

このように、仕事と快樂と勉强との間に生活を三分して、この上もない甘美な安息を貪っていた間に、ヨーロッパの方は、私のように平穩無事ではなかった。その頃、フランスと皇帝との間には宣戰が布告された。[*1] サルヂニヤ王もこの紛爭に參加し、フランス軍はミラノ領に侵入するためピエモンテに續々と入って來た。その一縱隊がシャンベリーを通過した。その中のシャンパァニュ聯隊の長はラ・トリムイユ公爵で、私はこの人に紹介された。公爵は色々なことを約束したが、その後は決して私のことを思い出してくれなかった。われわれの例の庭園は丁度軍隊が入って來る郊外の高臺にあったから、私は軍隊の通るのを見に行く樂しみをふんだんに味わった。そして、この戰爭の勝敗が自分に大變な關係でもあるかのように、夢中になって戰勝を祈った。その時までは、まだ國家社會の出來事のことなぞ考えてみようとも思わなかったが、それからは、生れて初めて新聞を讀むようになった。しかし、非常なフランス贔屓だったから、一寸でもフランス軍が有利だと、よろこびのあまり胸を轟かせ、少し不利だと、それが自分の身に降りかかって來たことのように、すっかりしょげてしまった。このような狂氣沙汰が一時的なものであったら、こんなことはわざわざ話さなかったであろうが、ど

*1　一七三三年十月十四日ポーランドの王位繼承問題に關してフランスはオーストリヤ、ロシヤの二國と戰端を開いた。

ういうものか、これが深く私の心に根を下ろしてしまったから、後にパリに出て、自ら反專制主義者とか高潔な共和主義者とか名乘った時、私は、自分が卑屈と思ったこの同じ國民に對し、また、自分が非難を裝ったこの政府に對し、我にもあらず祕かな贔屓の念を感じたのであった。面白いことには、自分の主義にひどく逆行したこのような心境を恥かしく思った私は、誰にもそれを打明けようとせず、フランス軍の敗北を嘲っていたが、心の中ではフランス軍以上に血涙をしぼっていたのである。私は、自分を厚遇し、自分の讃美する國民のうちに生活しながら、その國民を輕侮する風を裝うている唯一人の男である。最後に、このような心境は、私からすれば非常に無私なものであり、强力・確固・不屈なものであったから、私が王國を出奔した後でも、政府や官憲や作家たちが我先に私に向って喰ってかかるようになってからでも、或いは、不法と迫害によって私を壓倒することが一世の流行となった後でも、私はこの奇妙な心境を改めることができなかったほどである。私はフランス人からどんなに虐待されようと、自分にかまわずフランス人を愛している。註33

私はこのような贔屓の原因を長い間求めたが、それはその贔屓を生んだ機會の中にしか見出すことはできなかった。文學に對する嗜好が增大するにつれて、フランスの書物、その書物の著者、その著者の生國に心が惹きつけられた。私の眼前にフランス軍が行進していたその時にも、私は丁度ブラントームの「名將傳*1」を讀んでいた。私の頭は、クリソンとか、バイヤールとか、ロートレックとか、コリニーとか、モンモランシーとか、ラ・トリムイユとかいうような人のことで一杯になっていた。そして、このような人々の子孫を、その功業や武勇までも繼承している者かのように敬慕した。通って行く聯隊の一つ一つを見て、昔、ピエモンテで多大の戰功を擧げたあの有名な黑旗隊*2を再び見るような心地がした。つまり、書物から得た觀念を、眼に見るものに當てはめたのである。從って、絕えずこの同じ國民の手になったものばかり讀んでいたから、この國民に對する愛情が培われ、終には何物にも負けない盲目的な熱情にまでなってしまった。私は、後に各地を旅行して、このような感情が私だけに特有なものではないこと、それは何處の國へ行っても、讀書を好み文學を研究する國民の一部には多少とも作用して、フランス人の不遜な態度が抱かせる一般的な憎惡の念を割引いていることに注目する機會を持った。フランスの小說はフランス人よりも他國の女性を惹きつける。フランス劇の傑作は青年子女をしてフランスの劇場を愛させる。パリ劇場の高名は外國の群集を引き寄せ、心醉させて歸國させる。要するに、フランス文學の優秀な趣味は、それを持つすべての人の心を征服してしまう。そして、近頃終ったあの不幸な戰爭*3に於ても、

フランスの作家や哲學者たちが、軍人によって曇らされたフランスの名の光榮を維持しているのを、私は見たのである。だから、私は熱烈なフランス人だった。そして、このために私はすっかりニュース狂になった。彌次馬の連中と廣場へ行って、郵便脚夫の到著するのを待った。そして、お伽噺の驢馬よりも馬鹿な私は、どういう御主人樣の荷鞍を背負うことになるのかを知りたくて氣を揉んだ。というのは、當時の人の噂では、サヴォアはミラノと交換になって、われわれはフランス領に入るとのことだったからである。しかし、私が氣を揉んだのも、あながち理由のないことでもなかった。若し今度の戰爭が聯合軍に不利になると、ママさんの年金が非常に危くなるからだった。しかし、私はわが親愛なる友軍を全く信賴し切っていた。そして、今度こそ、この信賴は、ベロイー氏*4の奇襲があったにも拘らず、思いもかけなかったサルジニヤ王のお蔭で裏切られなかったのである。

イタリヤで戰爭をしている最中に、フランスでは歌を歌っていた。ラモー*5の歌劇が評判になりはじめ、難解のために讀者を寄せつけなかったその音樂理論の著述も人の注意を惹くようになった。私は偶然にラモーの「和聲論」のことを耳にして、その本を手に入れるまでは片時も心が休まらなかった。もう一つ偶然なことに、私は病氣になった。病氣は炎症だった。激烈で短かかったが、豫後は長かった。そして、やっと一カ月後でなければ外出できるようにならなかった。この間に例の「和聲論」を卒讀しまた耽讀した。しかし、この本はひどく冗長・繁雜・無秩序であったから、これを研究し整頓するためには相當な時間が必要なように感じられた。そこで勉强を一時中止して、樂譜で眼を娛しませることにした。私が練習したペルニエ*6の歌謠曲は、心を離れることがなかった。その中の四曲か五曲は譜記してしまった。とりわけ「眠

＊1　史上に有名な名將の傳記を書いたのが「名將傳」であるが、史實は甚だ正確でない。ただ描寫や表現に傑れていて一般に愛讀された。ブラントームはルソオより百年ほど前の人。

＊2　ルイ十二世の時代に組織された「黑旗隊」と稱する部隊は、ピエモンテやパヴィヤで偉勳を樹てたことがある。この頃から百年ほど昔のこと。

＊3　ルソオがこの稿を書いていた頃に終った七年戰爭（一七五六年―一七六三年）を言う。

＊4　ルイ十四世の下で幾多の武勳を樹てた將軍で、イタリヤの役に勇名をはせた。

＊5　フランスの有名な作曲家で後にルソオとの交渉ができるようになる。「和聲論」は一七二二年に公刊された。一七三三年以後、その作品は主としてパリのオペラ座に上演、好評を續けた。（一六八三年―一七六四年）。

＊6　「歌謠曲集」七卷をもって有名な作曲家（一六六四年―一七三四年）。

れる愛の神」の歌謠曲(カンタータ)は、その後再び眼にすることはなかったが、今でもほとんど全曲を憶えている。クレランボーの非常に美しい歌謠曲(カンタータ)の「蜂に刺された愛の神」も、その時分に習ったものだが、これも同様である。

これに加えて、オストの谿谷地方[*1]からパレ師という若いオルガン奏者が來て、益々私の熱を煽った。この人は立派な音樂家で、善い人で、クラヴサンで非常に上手に伴奏を彈いた。私はこの人と知合って、直ぐに離れられなくなった。パレ師はイタリヤの偉いオルガン奏者の坊さんの弟子であった。師は自分の音樂原理の話をしてくれた。私はそれをラモーのと比較してみた。頭の中は伴奏や和絃や和聲のことで一杯だった。こういうことに耳を馴らす必要があった。そこでママさんに、毎月小音樂會を催したらと言い出した。ママさんは贊成した。そうなると、私はもうその音樂會のことにばかりに氣を取られて、夜も晝もほかのことは考えなかった。また、氣ばかりではなく、本當にも忙しかった。樂譜や會員や樂器を集めたり、音部を分けたり、その他非常に忙しかった。ママさんは歌った。前にも話したし、これからも話に出て來る神父のカトン師も歌った。ローシュという舞踏教師とその息子はヴァイオリンを彈いた。土地臺帳作製の仕事に働いていたピエモンテの音樂家のカナヴァスというのは、後にパリへ行って結婚したが、これがセロを彈いた。パレ師はクラヴサンで伴奏した。私は例の棒切れが忘れられず、音樂の指揮をする名譽を擔った。これがどんなに樂しいことだったか、お察しを願いたい。トレートラン氏の家でやったとそっくり同じようではなかったにしても、大體それに似たようなものだった。

ヴァラン夫人は新しく改宗した人であり、いわゆる王様のお情で生きている人であったから、この小音樂會は、信心ぶった連中の眉をひそめさせた。しかし、これは眞面目な多くの人々に取っては、まことに愉快な娯しみであった。この場合、その筆頭に誰を擧げるかは、一寸想像がつくまいと思うが、實はそれは或る修道僧であった。修道僧ではあるが、なかなか立派な、また愛すべき人であって、この人の不運な身の上は後にひどく私の心を痛め、その思い出は私の若い頃の回想に結びついて、今もなおなつかしいのである。それは、聖フランス派の神父カトン師のことであって、前にドルタン伯爵と一緒になって、あの氣の毒な「小猫さん」の樂譜をリヨンで押收させた人である。この事は師の生涯で最も立派な行いとは言えない。師はソルボンヌの出身だった。[*2] 長いことパリの最も上流の社會に生活し、とりわけ當時のサルジニヤ大使アントルモン侯爵[*3]に巧みに取入っていた。脊の高い、恰幅のいい人で、丸顔で、額が狹く、黑い髪は無雜作に鬢のと

ところで少さく輪になっていた。風采は氣高く開放的で同時に控え目で、態度は單純で立派で、修道僧らしい僞善めいた、或いは厚顏な樣子もなく、社交人でありながら、それらしい無作法な應待ぶりもしなかった。僧衣を恥とせず、自己を重んじ、常に正しい人々と交わってその處を得ているという紳士たるの確信を持っていた。カトン師は博士になるほどの深い學識はなか　たが、社交人としては學識の多い方だった。そして、その才能を強いて示そうとせず、適時適切に表わしたから、人からは實力以上に買いかぶられた。社交界の生活を永い間して來ていたから、堅苦しい學問よりも、軟かい藝能の方を好んでいた。才知があって、詩を作り、話術に長け、歌はなお上手、美しい聲を持ち、オルガンとクラヴサンが彈けた。これほどの才藝はなくても、この人は元來が持てはやされるべき人であって、またその通り人々から持てはやされた。とは言　ても、そのために自分の仕事を怠ることはしなかったから、非常に嫉妬深い競爭者があったにも拘らず、その管區の事務係卽ちいわゆるその道の重鎭に選出されるに至ったのである。

この神父カトン師はアントルモン侯爵のところでママさんと知合いになった。師はわれわれの音樂會のことを耳にして、仲間に入りたがった。そして、仲間に入って、會を盛大にしてくれた。師と私は音樂への趣味を與にしたので、やがて懇意になった。この趣味は二人には共に烈しい熱情となっていたのである。ただ、ちがう點は、師の方は眞の音樂家であり、私はヘボ音樂家にすぎない、ということだけだった。われわれはカナヴァスやパレ師と一緒にカトン師の部屋に音樂をやりに行った。そして、祭日などには時として師のオルガンで音樂をやった。度々師のささやかな午餐にも招かれた。師は、修道僧にしては珍らしく氣前がよく、派手で、また野卑にわたらない程度に好色的なところがあった。音樂會の日には、ママさんのところで夕食をした。この夕食はひどく賑やかで愉快だった。一同でよもやまの話をした。二重唱も歌った。私はのんびりした。機智を働かせたり、洒落を言ったりした。カトン師は人を惹きつけ、ママさんは素敵だった。パレ師は牛のような聲をしていて、みんなのなぶり者になった。樂しき靑春期の甘き瞬間よ、なんじ去り行きて、いくばくの時や經つ。

*1　イタリヤ領。アルプスの山麓地帶。
*2　一七三四年にはシャンベリー修道院の院長であった。
*3　サヴォアの會計部長の職にあった（一六六一年―一七四一年）。

この氣の毒な神父カトン師については、もはや話す折もあるまいから、ここで簡單にその痛ましい物語を結んでおく。他の修道僧たちは、師が立派な人であり、少しも道樂な坊さんらしくない典雅な身持であるのを、嫉妬というよりむしろ憤慨し、師が自分たちと同じように人から憎まれないという理由で、師を憎みはじめたのである。主だった者たちが反對の徒黨を結び、師の地位を羨みながら、それまでは師の顏も正面から見られなかった小修道士どもを煽動した。師はさんざんの侮辱を加えられ、免職させられ、質素ながら風雅に雜作をととのえた居室までも取上げられた。それから、私の知らない何處かへ追放されてしまった。要するに、このような卑劣漢どもがあまりにひどい侮辱をもって師を壓倒したために、師の高潔で、正義を誇る魂はそれに抗することができなかったのである。そして、師は最も愛すべき社交界にこの上もないよろこびを齎した後に、何處かの土窖か窄獄の奥の卑しい粗末な寢床の上で、師を識る限りのあらゆる立派な人々に惜しまれ、歎かれつつ、悲しみのうちに死んだ。そして、その人々は、師の缺點としては、師が修道僧であったということしか認めていなかったのである。

こういう樂しい生活を續けているうちに、私は間もなくすっかり音樂の虜となって、もう他のことが考えられなくなった。役所へ出かけるのも厭々であった。仕事に縛られたり精を出したりすることが、我慢のならない苦痛となり、終には仕事をすっかりやめて、全く音樂に沒頭したいと考えるようになった。こんな氣違沙汰が反對されずに通るわけのないことはお察しの通りである。定收入のあるまともな地位を棄てて、不安定な弟子を追いかけ廻すなぞということは、ママさんをよろこばすためには餘りに非常識な決心だった。たとえ將來の進歩が自分の考えているように洋々たるものであると假定したところで、一生音樂家の身分に身を墮すというのは、自分の大望をひどく内輪に限ってしまうことだった。ママさんは大袈裟な計畫ばかり立てる人だったから、私のことについては、もう例のオーボンヌの言葉など全く信用せず、私が詰らない藝ごとに本氣で夢中になっているのを見て心を痛めた。そして「歌や踊りじゃ出世にならぬ」という、パリではあまり通用しないが、そういう俗諺を度々私に繰返して聞かせた。しかし、ママさんは一方で、私がどうにも抵抗のできない嗜好に引きずられているのを見てとっていた。私の音樂好きは音樂狂にまでなった。そして仕事もまるでうわの空であったから、そのために解雇される恐れがあった。解雇されるぐらいなら、此方から暇を貰った方がずっとよかった。そこで、私はまたママさんに訴えて、この仕事は永續きしそうもない、生活するためには何か腕に職を持っていなければ

ならない、人の保護に身を委ねたり、旨く行くかどうか分らない新しい仕事を試みて徒に修業の時期を逸し、パンを得る力もえられないようなことになるよりも、自分の趣味にも適い、ママさんも選んでくれた腕の職を、實地の練習で物にする方がずっと確實である、というようなことを言った。とうとう、相手が滿足するまでの條理を盡して、というより、さんざんにしつっこく言ったり甘えたりした揚句に、ママさんの承諾を强奪した。そこで私は早速土地調査局長のコッチェルリ氏のところへ、何かこの上もない立派な仕事でもしたように、大威張りで出かけて行き、お禮を述べた。こうして、私は理由も原因も口實もなく、自分の職を、二年足らず前に得た時と同じほどの、或いはそれ以上のよろこびをもって、自らすすんで去ったのである。

この行動は、ひどく無分別ではあったが、その地方では一種の尊敬を私に惹きつけ、それが役に立った。或る人々は私に何か力でもあるかのように推量した。また、或る人々は、私が全く音樂に沒頭したのを見て、拂った犧牲で才能を判斷し、この藝術にそれほどの情熱を持っているのなら、きっとすばらしい才能のある人だろう、と思いこんだ。盲人の國で片眼の者が王樣になる。あたりに碌なものがいなかったから、私は立派な先生で通ったのである。その上、いくらか歌の方の素養もないわけでもなし、加えて年齡や風采にも助けられて、私はやがて書記の俸給を償うに足る以上の女弟子を持つようになった。

生活の愉樂のために、このように極端から極端へ急に移れるものでないことは、確かである。土地調査の役所では、この上もなく不愉快な仕事に、それ以上に不愉快な人間たちと一緒に一日八時間身體を縛られる。櫛もろくに使わない不潔な者が大部分を占めているそういう田舍者の息や汗の惡臭のする陰氣な事務室の中に閉じこめられている。そして、注意と臭氣と束縛と倦怠のために、時には目まいがするほど、やりきれない氣分になる。これに反して、今や私は突如として上流社交界の人となり、最も立派な家庭に出入して、持てはやされることとなったのである。とこへ行っても、しとやかな、愛撫するような取りなし、お祭りさわぎ。おめかしをした可愛らしいお孃さんたちが待っていて、ちやほやと迎えてくれる。眼に見るものは綺麗なものばかり。鼻にかぐものは薔薇やオレンジの花の匂いばかり。歌い、喋り、笑い、樂しむ。そこを出るのも、よそで同じようなことをしに行くためにすぎない。こういう利益が同じなら、どちらを選ぼうと迷うことのないのは言うまでもない。だから、私は自分の選擇を非常に滿足して、かつてこれを悔いたことはなかった。